1969年6月20日第三種郵便物認可・2026年4月1日発行・毎月1回1日発行・第58巻第5号

MUSIC MAGAZINE

4
2026
APRIL

特集 歴史を変えた2ビュー・アルバム100

サンダーキャット

映画『ストリート・キングダム　自分の音を鳴らせ。』

テキサスのシンガー・ソングライター30選

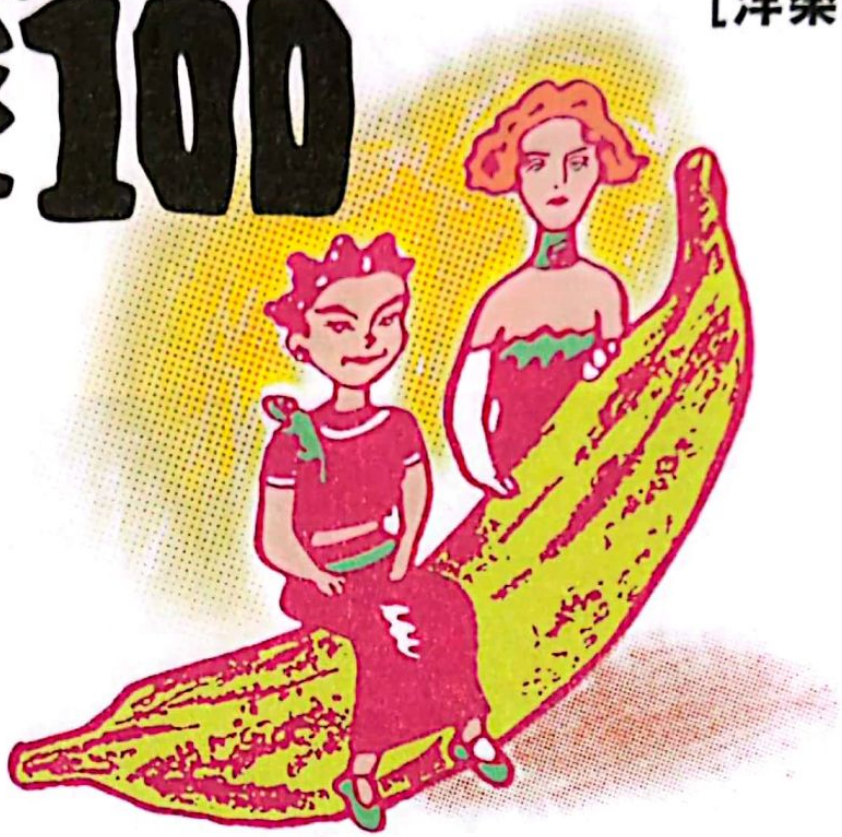
Beastie Boys, Elvis Costello, D'Angelo, Billie Eilish, King Crimson, Elvis Presley, Patti Smith, Kanye West

CamScannerでスキャン

特集

歴史を変えたデビューアルバム ベスト100

[洋楽編]



音楽史に刻まれた数多のムーヴメントは〝最初の一枚〟から
始まった。本特集では歴代のデビュー・アルバムに着目。
本誌の筆者38名が「歴史を変えた」という観点から投票し、
世界のポップ・ミュージックを更新した100枚を選出した。
時代が動いたその瞬間を、あらためて振り返りたい。

選・文＝赤尾美香、天井潤之介、石川真男、大石始、大鷹俊一、小野島大、風間一慶、木津毅、栗本斉、小林祥晴、小松香里、小山守、坂本哲哉、佐藤英輔、柴崎祐二、島岡奈央、清水祐也、高久大輝、高橋健太郎、つやちゃん、土佐有明、萩原健太、長谷川町蔵、早坂英貴、林剛、原雅明、松永良平、宗像明将、村尾泰郎、安田謙一、湯浅学、油納将志、和田信一郎、渡辺亨、伊賀丈晃、久保太郎、矢川俊介、渡辺裕也

※洋楽アーティスト／バンド／グループにとっての〝デビュー作〟とされる作品を対象としました。
※38名の選者が1位から25位まで順位付けしたリストを編集部で集計し、それを元に選出しました。
※各筆者のリストは58〜67ページに掲載しています。

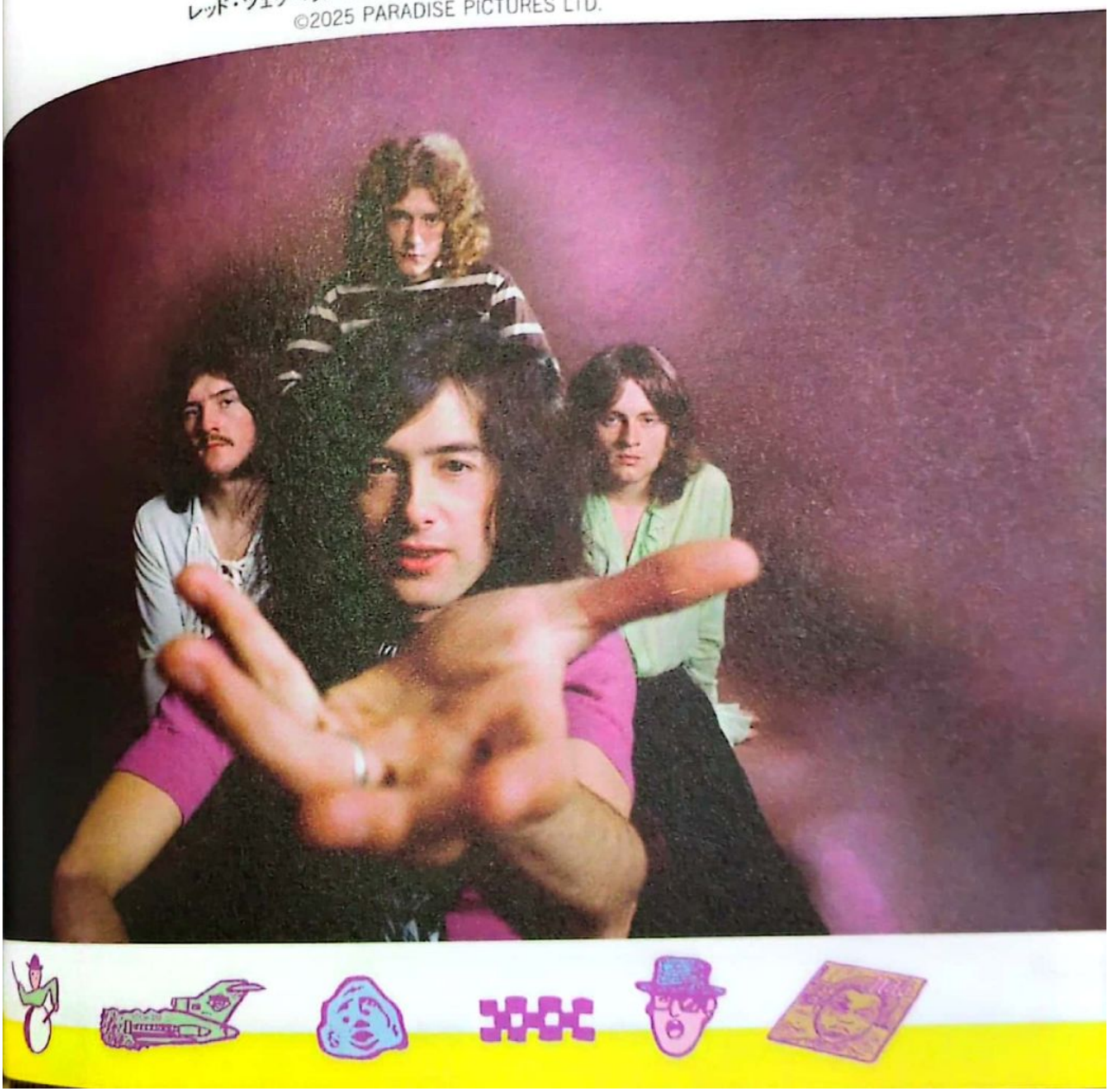
イラストレイション＝伊達努（67ページまで）

CamScannerでスキャン

音楽の流れを変えた“最初の一撃”

100枚のデビュー作が示すポップ・ミュージックの転換点

渡辺裕也



レッド・ツェッペリン（映画『レッド・ツェッペリン：ビカミング』から）
©2025 PARADISE PICTURES LTD.

CamScannerでスキャン

今回のランキングが捉えているのは、時代の転換期だ。または、変化の機運。あるいは、革命の狼煙。では、誰がポップ・ミュージックの歴史を変えてきたのだろうか。思い出してみてほしい。ロックンロール誕生から現在までに起きた数々のムーヴメント。その発火点にいたのは、いつだって無鉄砲な若者だった。

まだ何者でもない彼ら／彼女らが初めて世に放った1枚のアルバム。そこには完成された様式ではなく、未整理な衝動や拙い実験、そして荒削りなアイデアが詰め込まれている。その1枚が時代の空気と共鳴したとき、音楽は一気に新しい方向へと舵を切る。ロックンロール、ソウル、サイケデリア、パンク、ヒップホップ、電子音楽――ジャンルや年代を問わず、歴史を振り返れば、大きなうねりの始まりにはいつも、そんなデビュー作が存在していた。しかもそれは、特定の国や文化圏に限った話でもない。時代ごとに異なる場所で、異なる言語で、異なる怒りや喜びを抱えた若者たちが、同じように世界を塗り替えてきた。そうしたアーティストに共通していたのは、既成の文法を知らないことではなく、それを必要としなかったことだ。

本特集「歴史を変えたデビュー・アルバム100」は、そうした瞬間に焦点を当てている。ここで重要なのは、単に完成度の高い名盤を並べたランキングではないということ。ここに選ばれたのは、その後の音楽の流れを変えてしまった〝最初の一撃〟だ。完成度の高さ以上に問われているのは、その作品が時代の空気を変える気配を感じさせたか、という点である。それは必ずしも音楽的な革新だけを意味しない。既存のスタイルであっても、時代の感覚と結びついたとき、その1枚は決定的な意味を持つのだ。

もちろん、歴史とは常に複数の可能性が交差する場所でもある。あるアーティストのデビュー作が選ばれたということは、別の誰かがここに入らなかったということでもある。選ばれなかったアーティストに着目してみるのも面白いかもしれない。いずれにせよ、次のページから始まるランキングは、年代／ジャンル別の選盤とも、オールタイム・ベストとも違う、少し不思議な並びになっているはずだ。そこにはポップ・ミュージックの歴史が直線的に進んできたわけではないこと、時に思いがけない場所から新しい流れが生まれてきたことが浮かび上がってくるだろう。

そうした瞬間をそれぞれ記録しているのが、ここに並んだ100枚のアルバムだ。ページをめくりながら、それぞれの時代の空気を想像してみてほしい。現在では当たり前に聞こえる音も、当時は驚きや戸惑いとともに受け止められていたはずだ。あるものは革命として、あるものはスキャンダルとして、そしてあるものは単なる流行として。しかし結果的に、それらは確実に歴史の流れを変えてきた。

そして、このランキングはすでに完結した過去の話ではない。今もどこかの街で、まだ無名のアーティストが最初の1枚を録音している。かつてのパンクがそうであったように、ヒップホップがそうであったように、その音が時代と化学反応を起こす瞬間は、誰にも予告なく訪れる。歴史を変えたデビュー作を振り返ることは、次の〝最初の一撃〟がどこから来るのかを想像する行為でもある。このランキングを眺めながら、未来の1枚に思いを馳せてみるのもいいだろう。

順位だけではなく、本誌執筆陣によるレヴューもぜひ楽しんでほしい。それぞれのアルバムが、なぜ〝歴史を変えたデビュー作〟なのか。そこにはきっと、音楽が時代と出会う瞬間のスリルが詰まっているはずだ。

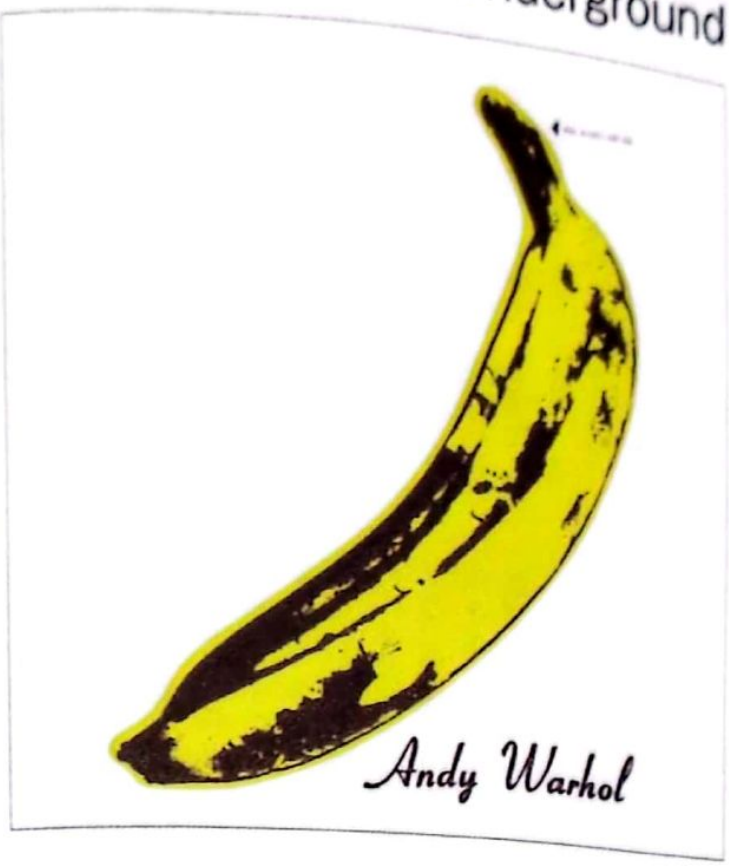
CamScannerでスキャン

1

The Velvet Underground & Nico

The Velvet Underground

1966
Verve



永遠に古びない。なぜ？　60年代後半のロックは、サイケデリアや愛、解放、理想主義といった語彙を強く帯びていた。そこへ、本作は、ニューヨークの路上の感触――ドラッグ、セックス・ワーク、依存、暴力、孤独、都市の冷たさ――を持ち込む。それも過度にドラマチックな演出ではなく、乾いた視線によって。ロックを〝夢〟から〝現実〟へ引き戻した最初の歴史的転換であり、以後のパンクやオルタナティヴが社会の底面や裏側を扱えるようになった背景には、この語彙の拡張がある。しかも、それらを届ける形式もまた革新的だった。ノイズ、ドローン、ミニマルな反復、単純なコード進行の執拗な持続。美しいメロディと耳に残る反復がありながら、同時に騒音や不協和の質感が共存するという異質な設計は、ロックの快い音の範囲を更新していき、簡潔さと破壊を核とするパンク、冷たさと反復を特徴とするポスト・パンク、轟音と恍惚のシューゲイズ、甘さと歪みを併せ持つノイズ・ポップへと多くの系譜に枝分かれしていった。どうしても間接的に繋がってしまうほどの、祖型としての包括性がここにはあるのだ。

さらに文化的な位置取りも重要で、アンディ・ウォーホルのファクトリー周辺と結びついた彼らは、ロックをアート／前衛／ファッションの文脈へと接続する。音楽を含む総体、いまの言葉で言えば〝美学〟を重視する発想と近しく、アルバムのアートワーク、演じる空間が生み出すムード、語られるナラティヴ、そこに集う人々の気配まで含めて作品が形づくられるという、音楽を21世紀型の総合芸術として捉える感覚の原点がここにある。現在のインディ～オルタナティヴに見られる、DAW以降のプラグインや空間系処理、歪みの設計によって楽曲を組み立てる制作方法のみならず、SNS以後の写真やショート動画、タイポグラフィ、ファッション、言葉遣いまで含めて「ひとつの感触」を提示し、そこからコミュニティが生まれていくという態度――そのプロトタイプがすでにここに見えるのだ。商業的成功とは別の回路から文化が更新されるモデルを示したのも大きく、強い影響を受けた少数のクリエイターが次の世代を生み、その連鎖がさらに広がっていくという波及の仕方それ自体によって非・メインストリームな文化回路を作った。インディ精神の原型でありながら、のちのインターネット以後の拡散モデルにも近い。ゆえに、本作は永遠に古びないのだ。半世紀以上を経た現在でもなお〝生きている〟、奇跡の、どうしようもなく奇跡的なデビュー作。（つや）

CamScannerでスキャン

Music From Big Pink

The Band

1968／Capitol

2

よりサイケに、ハードに、プログレッシヴに…。誰もが〝外〟へ向かって必死に拡散しようとしていた68年、対照的に自らの〝内〟を見据え、ルーツへ立ち返ろうとしたザ・バンドの傑作だ。もともと60年代初頭、ロニー・ホーキンスのバンド、ザ・ホークスとして結集した5人。65〜66年、ボブ・ディランのツアーをバックアップしたことでもおなじみだけに、ザ・バンドへと改名して放った本作を〝デビュー作〟と呼ぶべきかどうか微妙だが。少なくとも彼らが独り立ちして制作したフル・アルバムはこれが初。世の動向から隔絶された魔法の街、ウッドストックの民家〝ビッグ・ピンク〟の地下室で培ったその音楽性は、まるで誰もいない田舎の礼拝堂から聞こえてくるような土臭い音だった。

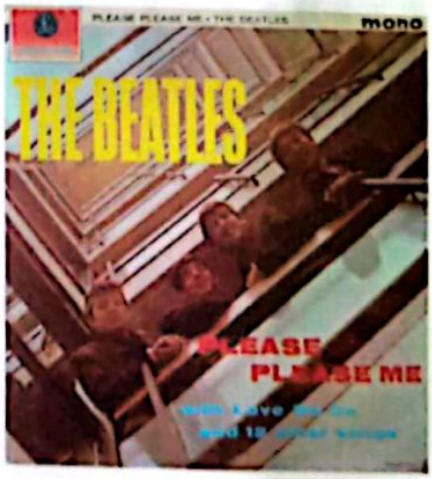
カントリーとブルースの要素が札みをあげて交錯するレヴォン・ヘルム、リック・ダンコ、リチャード・マニュエル、三人三様の歌声。南部系チキン・ピッキングの伝統を〝数学的〟に継承したロビー・ロバートソンのギター。荘厳かつアヴァンギャルドに炸裂するガース・ハドソンのオルガン。エリック・クラプトンは本作を聞いてクリームの解散を決意。ジョージ・ハリスンは「自分たちの音楽が急に空虚に思えた」と語った。時代に逆行することで時代を塗り替えた恐るべき一枚だ。（萩原）

Please Please Me

The Beatles

1963／Parlophone

3



ウーン、3位とは微妙。個人的にはこのアルバムがすべての原点だと思っている。1963年2月11日にEMIのアビー・ロード第2スタジオで朝10時から夜11時までの約10時間、10曲録音。さすがに今回の全100枚でもそんなものはないはず。これはプロデューサーのジョージ・マーティンがリヴァプールのキャヴァーン・クラブでのプレイを見て、スタジオ・ライヴ風に録った方が良いと考えた結果だが、デビュー・シングル「ラヴ・ミー・ドゥー」がマイナー・ヒット。続くセカンドの「プリーズ・プリーズ・ミー」が大ヒットした結果、少しでも早くアルバムが求められていた背景もある。

もちろんまだこのバンドが歴史を書き換えるなんて思いもしなかった頃の決定だったが、結果的に初期のバンドのエネルギーやテンションをとらえるには最適であり、こうして奇跡が積み上げられていった。多彩な彼らのセットリストから慎重にピックアップされたカヴァーが10曲中5曲、リンゴが歌う「ボーイズ」だけはワン・テイクだが他は昼食も取らずテイクを重ね、ベストを求める様子が熱く、最後にジョン・レノンが喉もちぎれよとばかりに絶唱する「ツイスト・アンド・シャウト」で締めくくるが、それは新しい音楽の時代の扉が開く瞬間でもあった。いま聞いても胸が熱くなる。（大鷹）

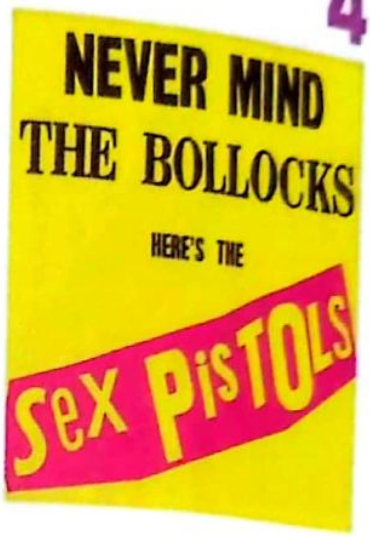
CamScannerでスキャン

Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols

The Sex Pistols

1977 / Virgin

4



セックス・ピストルズがリリースしたオリジナル・アルバムは後にも先にもこれ1枚だけ。そのたった1枚のアルバムが、ロック史に永遠に消えぬ傷跡を残した。今回のランキングを見渡しても、そんな例はほかにない。それだけ本作のインパクトは強烈だったし、その後の影響力も甚大だった。ぼく自身も、音楽観が変わり、耳が変わり、その後の人生も変わってしまった。そんな連中が世界中に掃いて捨てるほどいたからこそ、ピストルズは、パンクは、ポップ・ミュージック史上に残る革命となったのだった。

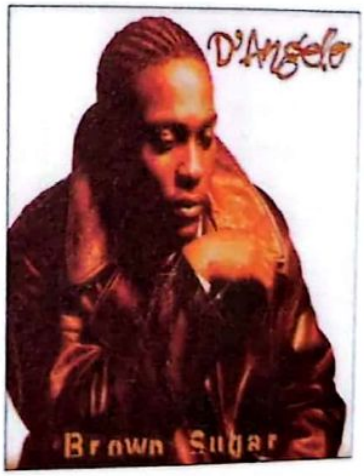
本作を最初に聴いた時に感じたのは、速くてシンプルなビートとノイズ、そしてカオス。その喧噪の音に時代のざわめきを感じ、なにかとんでもないことが起こりつつある、という直感があった。とはいえ、いま本作を聴いたところで、多くの人は〝ポップなロックンロール〟という以上の感想は持てないかもしれない。あえて言えば〝パンクの衝撃〟はレコード盤の中には存在しない。それは『勝手にしやがれ』(邦題)を聴いて人生を変えられたぼく自身の中にこそ、存在している。ポップ・ミュージックとは、それを生んだ社会・時代・民族の文化的集積の発現であり、華だ。本作の真価は音だけではなく、本作に凝縮された歴史と文化の総体にこそある。(小野島)

Brown Sugar

D'Angelo

1995
EMI

5



"Brown Sugar"は、ディアンジェロが4トラックのMTRで制作したデモを元に、スタジオでほとんどの楽器を演奏し、ボブ・パワー、アリ・シャヒード・ムハマド、ラファエル・サディークと共に完成させたものだ。当時のR&Bの世界では異色なやり方だったが、ベッドルームからビートを生み出したヒップホップのプロデューサーたちの影響も色濃く窺えた。ソウルフルな音楽のイメージにはそぐわないような、アップ・テンポな躍動感を排除したクールなバック・トラックと、その上で唯一感情的なものを伝えるディアンジェロのファルセット・ヴォイスとの鮮やかなコントラストが生まれた。ア・トライブ・コールド・クエスト"Low End Theory"で極端にブーストされたベース・サウンドを作ったボブ・パワーをエンジニアに選んだのも、従来のソウルやR&B、ファンクに回帰する退路を断って、新たなブラック・ミュージックを作るという強い意志があってのことだった。ヴィンテージのアナログ楽器や機材の使用から、キックのパターンのズレまで、ディアンジェロはサウンドの細部に徹底的に拘った。それゆえ、"Brown Sugar"はこれまでにない陰影のある音楽となり、ネオ・ソウルの潮流を生み、ヒップホップやジャズとの新たな結びつきへと広がった。(原)

CamScannerでスキャン

6 Are You Experienced?

The Jimi Hendrix Experience

1967 / Track

ジミヘンについては言い尽くされた感はあるが、思いつくだけでも「ロックのサウンド・デザイン」「多義的で比喩的なロック詩の書き方」「ギター・ヒーローという存在像」と現在までその影響は絶大。BB・キング、マディ・ウォーターズ、バディ・ガイらのブルースやカーティス・メイフィールドなどのR&Bに根ざしたギターに、フィードバックや極端な歪み、オクターヴ上のエフェクト、逆回転テープといった「本来はノイズだった音」を意識的に組み込み、エレキ・ギターの音色と役割の許容範囲を一気に拡張した。加えてボブ・ディランから派生した歌詞世界や語り口、ザ・フーなど当時のUKロックの爆音美学を3〜4分のポップ・ソングの枠内でやってのける。ハード・ロック、ヘヴィ・メタル、ジャズ・ロック、ファンク、オルタナから現代R&Bのギタリストにまで参照され続ける「基準点」であり、デビュー作でありながら以後半世紀の物差しになった。（早坂）

7 Led Zeppelin I

Led Zeppelin

1969

Atlantic

ああ、ロックが発散のユース・ミュージックであることを高らかに宣言する金字塔的作品なり。ジミー・ペイジ主導でヤードバーズ・ビヨンドとして結成、英国ブルース・バンドの最進化形を鮮やかに表わした作品だ。米国黒人音楽を根に置く白人ロックには、ツェッペリン登場以前と以後という境界線が生まれたと思う。その一方、フォークやインド音楽などの柔／異属性要素の咀嚼も決まり、LPフォーマットの利を介して切れ目なしに曲がクロスしていくようなつなぎの妙も、前線にいる者の創意を伝える。後のヘヴィ・ロックの先鞭もつけるような、吹っ切れた重さやも難なく配置。その鮮烈な聞き味には脱帽するほかなく、捨て曲なしでいまだ聞く者を揺さぶる。やはり、超弩級のデビュー・アルバムというしかない。今、これと同内容の作品が新人により発表されたら、ぼくは大騒ぎしちゃい、もう一度きっちりロックという器と対峙しなきゃ、と思うのではないか。（佐藤）

8 Blue Lines

Massive Attack

1991

Wild Bunch / Virgin

英ブリストルのサウンドシステムだったワイルド・バンチを前身とするマッシヴ・アタックの登場は、いわゆるトリップ・ホップの先駆けというだけに止まらず、レイヴ以降のクラブ・ミュージックの流れに決定的な影響を及ぼした。ソウル、ファンク、レゲエ、ハウス、クラシック、ヒップホップ、映画音楽、サイケデリックなど多様な音楽性をディープでダビーで憂鬱な音響で複合し、前例のない画期的なサウンド・スタイルを提示した。トレイシー・ソーンが自伝で、初めて彼らのデモ音源を聞いた時の感想を記しているが、「始まりもなければ終わりもない」「間延びしたすっからかんの音楽」に戸惑ううち、「ここで何か新しいことが起こりつつある」と気づくくだりは、即効性の衝撃ではなくじわじわと浸透し、いつのまにか景色を変えていった本作のありようをよく表わしている。これが後のダブステップなど、ベース・ミュージックの動きへと繋がっていく。（小野島）

CamScannerでスキャン

James Blake
2011
Atlas / A&M

2010年代のポピュラー音楽を代表する決定的名作。ピアノ弾き語りを軸としたソウル・ミュージックにダブステップなどの変則ビートを絡める音響表現は、仄暗く風通しの良い中高域とサブベース（一般的なベースのオクターヴ下）による猛烈な低音の対比が絶品で、本作以降の音楽全般の〝ヘヴィさの基準〟を塗り替えてしまった感さえある（メタルやハードコアにも間接的に影響を与えた）。一方で、楽曲の骨格部分の構造も滋味深く、ゴスペルやフォークを独自の感覚で再構築したようなソングライティングは、スティーヴィー・ワンダーやジョニ・ミッチェル、またはディアンジェロやブリアルなどの系譜に連なりつつ、確かに固有の屈託を練り上げている。これはザ・エックス・エックスやボン・イヴェールなどにも通ずる在り方で、そうした面においても10年代以降の音楽の流れに大きな影響を与えているのでは。伝統と革新の狭間で葛藤しないアルバム。（松田）

10 In The Court Of The Crimson King
King Crimson
1969／Island

「ザ・ビートルズ『アビー・ロード』をチャート1位から引きずり下ろした」という〝都市伝説〟で知られるデビュー作だが、そうしたハイプを超越するほど意義のある作品だ。本作の最も評価すべき点は、デビュー作ながら圧倒的な完成度を誇っていることだろう。その後の作品は決してバンドの進化を示すものではなく、本作のヴァリエーションに過ぎない。そもそもプログレッシヴ・ロックとは、ロック外の様式や価値観を再利用して〝新たなロック〟を構築したもので、決して歴史を断ち切るような斬新さを特徴とするものではない。クラシックやジャズや現代音楽、そして古典・現代アートなどが参照された本作も、形式だけを見れば、それまでにない革新的なものを提示しているわけではないが、従来のロックを凌駕する凶暴性や抒情性がとてつもなく高い次元で結実しており、偉業のプログレ・バンドに課せられた極めて高いハードルとして今なお屹立している。（石川）

11 Channel Orange
Frank Ocean
2012
Def Jam / Island

初めて恋に落ちた19歳の時、すべてがオレンジ色に見えた経験にちなんだタイトルを冠している。サイケ、エレクトロ、ロック、ファンク、ジャズをシームレスに横断し、これまでのR&Bの定石であった派手なサビを作るのではなく、余白で物語を綴るサウンド・デザインはオルタナティヴR&Bの潮流を決定づけた。いくつもの楽曲や映画の引用もちりばめられた革新的なサウンドに乗せたのは、初恋相手の男性への恋心と同性愛者であることの苦悩、富裕層への批判、薬物依存の恐ろしさ、黒人女性の抑圧、性的欲求…つまり、オーシャン個人及び社会が抱えるリアルな問題が機微のある筆致で描かれ、物語性の高い曲順も後押しし、ひとつの映画を見ているかのような作品に。アルバムというアートフォームの価値を再認識させた。リリース直前に初恋のことをカミングアウトし、広く勇気を与えたことも大きい。本作による革命は枚挙にいとまがないだろう。（小松）

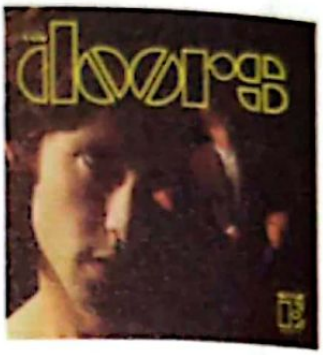
CamScannerでスキャン

12 The Doors

The Doors

1967

Elektra



ジム・モリソンのカリスマ性ばかり語られるようになってしまった感があるが、バンドとしてのザ・ドアーズの多彩さや懐の深さはもっと認知されていいし、語られるべきだ。66年8月下旬にLAのサンセット・サウンド・スタジオでわずか1週間ほどで録られたアルバムは、ミックスなど手を加えて翌67年1月にリリースされ、シングル「ライト・マイ・ファイア」の大ヒットでアルバムにも火が付いた。

この初作の「ジ・エンド」の、詞とパフォーマンスが究極的な緊張感を維持しながら描き出した世界は、確かにジムの名を上げるにふさわしい作品だ。しかしデビュー・シングル「プレイク・オン・スルー」の、向こう側に突き抜けろというメッセージは時代性を考えると訴求力は特別なものであったし、ブレヒト／ワイルの「アラバマ・ソング」とウィリー・ディクソンの「バック・ドア・マン」が自然に並ぶバンドなんてのもこの時代、刺激的だった。（大鷹）

13 3 Feet High And Rising

De La Soul

1989／Tommy Boy

まず最初にあえて"ラップ・ミュージック"という限定的な言葉を使うが、このデ・ラ・ソウルのデビュー・アルバムは、真に画期的なラップのアルバムだった。

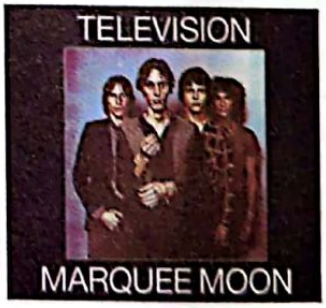
なにしろこのトリオ自体が、ニューヨーク州のロング・アイランド島の出身。NYの低所得者層中心どころか、生活水準が高い地域である。彼らはカジュアルなファッションに身を包み、意表を突くほど多彩でポップなサンプリングを駆使して、都市に住む若い黒人たちの日常生活を音像化。こんなデ・ラ・ソウルの登場は、ギラギラした金銀のアクセサリーを身に付け、俺が！俺が！と主張するマッチョイズムに根差した、それまでのラップのイメージを一転させた。しかも、アルバム全体の流れの中に自分たちのメッセージを込めていることや、グラフィティ&ポップ・アート的なパッケージのデザインを含めて、本作はトータリティに富んだ初の"ヒップホップ"のアルバムと言ってもいい。（亨）

14 Marquee Moon

Televison

1977

Elektra



19世紀の仏詩人、ヴェルレーヌ（Verlaine）の名を姓に冠したトム・ヴァーライン。ニューヨークでパティ・スミスと出会い、73年、高校の同級生だったリチャード・ヘルらとネオン・ボーイズを結成。翌年、テレヴィジョンと改名後、ライヴ・シーンで注目を浴びる。（ボツとなった）ブライアン・イーノとのデモ音源制作や、リチャード・ヘルの脱退などを経て、76年、エレクトラと契約。本盤で77年にデビュー。ヴァーラインとリチャード・ロイド、ふたりのギター奏者のプレイが交差するサイケデリック・ロックは、ドラッグを伴う酩酊とは一線を画した、ロマンティックな覚醒を促される。完全無欠な「マーキー・ムーン」へと昇りつめていくA面に対して、B面では自作『アドヴェンチャー』（78年）に繋がる黄昏た空気も漂っている。共同プロデューサーのアンディ・ジョーンズはグリン・ジョーンズの弟。スリーヴ写真はロバート・メイプルソープ。（安田）

CamScannerでスキャン

15 The Smiths

The Smiths

16 Selected Ambient Works 85-92

Aphex Twin

17 Elvis Presley

Elvis Presley

CamScannerでスキャン

18 Horses
Patti Smith
1975
Arista

このアルバムが発表された当時は多数あるガールズ・ロックの中のひとつに過ぎなかったが、今ではパティ・スミスの名前を聞くだけで、ロックに革命を起こそうとする意気込みが伝わってくるようだ。ヴァン・モリソンの名曲を、パティが自身の詩を大幅に加えて再構成し、サウンドもボーカルも初期衝動そのままに叩きつけた、オープニングの「グローリア」という概念を超越した凄まじいもの。共演のレニー・ケイ他、ニューヨークのアンダーグラウンド・シーンの面々による演奏もまた、ロックンロールやガレージ・パンクの枠を超えた、ジャズ的なアプローチすら感じさせるものだ。

ランボーに憧れ、ボブ・ディランの詩情と怒りに共鳴し、後にパンク・ムーヴメントの起点とされる本作を作り上げたパティだが、当時の"女性アーティスト"像から遠く離れた、むしろ男のような存在感は、女性だったことよりも、ロックの歴史にとって大きかったのではないだろうか。ジェンダーに対する意識よりも、ロックの歴史をまっすぐに見つめ、ロックに対する愛情と敬意を持ってロックをやっていたからこそ、ロックの歴史に大きなインパクトを残すことができたのだろう。アリ・アップは、パティのヴィジョンに大きなリスペクトを抱いていたと言われる。

（井川）

19 Specials
The Specials
1979
2 Tone

英国の経済がどん底だった1979年に、英国のロンドンとコベントリーで結成されたザ・スペシャルズ。ボブ・マーリーに衝撃を受けたというジェリー・ダマーズを中心に、ロックステディやパンクと融合したオルタナティヴなスカ・サウンドで注目を集めた。2トーンレコードの看板バンドとなった彼らは、その2トーンの象徴的存在でもあった、白人と黒人混成バンドだ。

本作はダンディ・リヴィングストンのベースラインで幕を開け、ブリンスバスターやトゥーツ&ザ・メイタルズなどのカヴァーも含む全曲にヒットした曲のカヴァー、そしてオリジナル曲から成る。プロデューサーは、約2年前にデビューしたエルヴィス・コステロだ。このオリジナルのスペシャルズはアルバムを1枚発表した後の1981年に解散するが、彼らの登場をきっかけに世界各地にスカやスカコア・バンドが誕生した。

（井）

Unknown Pleasures
Joy Division
1979
Factory

パンクの熱狂から脱却し、内省的で無機質なサウンドへと転換したポスト・パンクの傑作。ベースが高音でメロディを弾き、ドラムが機械的にリズムを刻み、ギターはノイズで空間を埋める。バンド楽器の役割分担を解体して生まれた"歪み"を活かしたアンサンブルは、プロデューサーのマーティン・ハネットがデジタル・ディレイ等の機材を駆使し、各音を極限まで分離させたプロダクションと相まって、録音芸術の新たな地平を提示。スタジオ空間そのものを楽器として扱うかのようなモダンな音響設計は、ロックのみならずテクノやアンビエントの先駆的な作品となった。そこに、都市の疎外感や精神的な苦悩を淡々と歌い上げるイアン・カーティスのダークな詩世界が重なり、冷徹で凍てついた音楽表現がそびえ立つ。ピーター・サヴィルが手がけたパルサー波形のジャケットと共に、ロックの語彙を根底から書き換え、今なお広範なカルチャーへ影響を与え続けている。

CamScannerでスキャン

Dummy 21

Portishead

1994
Go! Beat

いわゆるトリップ・ホップ（当事者はこの呼称を嫌うが）またはブリストル・サウンドの決定版として発表直後から絶賛された傑作。ヒップホップのビート感覚とスパイ映画～ソウル的な旋律美を融合、ベス・ギボンズの蠱惑的なヴォーカル（ビー・ホリデイの情念を保ったままやかにした趣も）で包み込んだサンドは、ダンス・ミュージックとしても最高に魅力的、同時代や後続のアーティストに大な影響を与えた。ダブやソウルの滋味を現代音楽に浸したような音像は、ブラック・サバスに連なるドゥーム・メタルの系譜にも通ずる（ジェフ・バーロウは自身のインヴァダ・レコードからそちら方面の作品を多数リリースしている）。その意味で、様々な文脈が交錯する結節点とレコード単体ではなく永遠にした。（和田）

Ramones 22

Ramones

1976
Sire

全14曲で29分4秒。30分を切る短さで世界を変えた。いや、もっと言えば、アルバム1曲目「Blitzkrieg Bop」冒頭の"Hey! Ho! Let's go!"だけで変えた。シャ・ナ・ナのように革ジャンとポマードで固めたエンタメ・オールディーズではなく、ロック的なラグジャリーを極限まで削ぎ落とすミニマルさで彼らはパンクした。各メンバーの複雑なバックグラウンドも全員同姓のラモーンにすることで霧散。ラモーンズという匿名のバンド人格とサウンドのスピードを追求した彼らの方法論は、ある意味で早すぎるテクノ的だったし、デビュー前のディーヴォに影響を与えたのもよくわかる。唯一誤算があったとしたら、ジョーイやディー・ディーが名曲を作れるロマンチストだったこと。でもそのロマンが彼らを異端ではなく永遠にした。（松永）

Neu! 23

Neu!

1972
Brain /
Metronome

いわゆるモータリック・ビートを確立してみせた歴史的名盤。冒頭曲「ハロガロ」で10分に亘って刻まれ続けるこのグルーヴは、ロックンロールの勢いと現代音楽のミニマル感覚を絶妙に融合したもので、単調さと艶やかさを至適なバランスで両立している。これは70年代ドイツの実験的なロック・シーンで同時多発的に生み出されたものだが、演奏・音響の凄みやコンセプトの明確さも鑑みれば、本曲を嚆矢とすべきだろう。後のポスト・パンクやレディオヘッドなど、広範囲に絶大な影響を与えた名曲だ。他曲も興味深く、後期ジミヘンや電化マイルスに通ずる叙情が良い味を出している。なお、「ネガティヴランド」のギターは90年代のブラック・メタルみたいにも聴けるが、影響関係は実際あるかもしれない。全編充実した作品だ。（和田）

Chega De Saudade 24

João Gilberto

1959
Odeon

1959年、ジョアンが27歳の時の録音。彼のギターと歌の独創的なコンビネーションが初めて盤に刻まれた。アントニオ・カルロス・ジョビンのプロデュースだが、ジョビン作品は3曲だけ。その3曲はジョビンの編曲含めた世界観の提示だが、ジョアンが何を創出したかを明確に示すのは控えめなリズムを加えただけの曲だろう。それはボサノヴァの成立に決定的な影響を与えたし、カエターノ・ヴェローゾらのMPBの表現手法の基礎にもなった。しかし、ジョアンのギターと歌はどこにも属さずに、宙に浮いたまま、そこにあるようにも感じる。演奏陣がラフなコーラスを付ける4曲目、かすかなハーモニー・ヴォーカルが聞こえる（ジョビンが歌っている？）2曲目が、その後のジョアンの録音にないものを感じさせて好き。（高橋）

CamScannerでスキャン

25 When We All Fall Asleep, Where Do We Go?

Billie Eilish

2019
Darkroom / Interscope

シャウトからウィスパー、ラウドからクワイエット、マキシマムからミニマム。劇的に変動するポップ・ミュージックの相貌を直近10年で最もシンボリックに表出した作品といえば、真っ先にこの不気味なアルバム・ジャケットが思い浮かぶ。当時17歳のビリー・アイリッシュが兄のフィアニスと共に全曲を書き上げ、鈍重なサブベースとASMRの領域にも近接するほど繊細な囁きを両立させてしまった本作。今となっては、ジェイムス・ブレイクの登場によって再定義されたソングライティングの在り方に、同じ地平から別解を示したようにも聞こえる。リリース直後のコーチェラでの熱狂や社会問題へと積極的にリーチするスタンスなど、結果的に彼女自身がムーヴメントとなった。疑うべくもない、新世代の声の登場だ。（風間）

26 Cut

The Slits

1979
Island

ザ・シャグスという前例はあるが、ザ・スリッツはほぼ世界初の女性だけの自覚／自立したバンドであり、ロックにおける男性優位主義に異を唱え、ジェンダー観が更新されるきっかけとなった最重要バンドである。結成して間もない彼女たちのあまりのヘタさに呆れたザ・クラッシュの連中が楽器を教えてやると申し出たら拒絶された、という痛快なエピソードもあるが、そうした社会的な意義だけではなく、ザ・ポップ・グループも手がけたデニス・ボーヴェルとの共同作業によって作られた創意工夫に満ちたプロダクション、プリミティヴな衝動とメタリックで人工的なダブワイズが交錯するサウンドは、いまだ新鮮な刺激とイマジネーションを掻き立ててくれる。ジャケット・デザインも含め、強く正しく美しい名盤。（小野島）

27 Straight Outta Comtpon

N.W.A.

1989
Ruthless / Priority

冷酷で好戦的、そして手加減なし。ロサンゼルス郊外コンプトンに集った黒人青年たちは、デビュー作で「警察なんてクソ食らえ！」と全米に向けて叫んだ。本作はまさに、怒りと鬱憤の爆発なのである。自らの出自を写実的にラップする歌詞は、レーガン政権によって取り残された貧困地域の現実を映し出し、ストリートに巣食う人種差別と警察による暴力を炙り出した。本作は後に続くギャングスタ・ラップやGファンク作品の羅針盤となり、FBIをも巻き込む反抗的なアティテュードは、今日のヒップホップの精神性に深く刻まれている。本作発表から約2年半後にロドニー・キング事件が勃発、そしてロサンゼルス暴動に時代は繋がっていく。真の〝ギャングスタ〟は誰なのかを問う、今でも聞く者に警鐘を鳴らす歴史的作品。（島岡）

28 Endtroducing.....

DJ Shadow

1996
Mo Wax

レコードとターンテーブルとサンプラー、マルチ録音のADATだけで作られた、DJシャドウの〝Endtroducing.....〟は、サンプリング・アートとしてのヒップホップを音楽フォームとして完成させて、インストゥルメンタル・ヒップホップの代表作となった。DJ、ビートメイカーとしてラッパーとも活動をしていたシャドウのスクラッチやブレイクの使い方はヒップホップに則っているが、サンプリングは音楽ジャンルを横断し、インタヴュー音源や映画のシークエンスも使われた。ダブル・ディー&スタインスキーのメガミックスからミュージック・コンクレートまで彷彿させる自由奔放なコラージュを映画音楽のような流れのあるアルバムとして仕上げた。DJクラッシュと共に後の世代に与えた影響は大きい。（原）

CamScannerでスキャン

29 Curtis
Curtis Mayfield

1970
Curtom

アルバム冒頭に響く、低いベースの音と女性のナレーション、男性たちの会話。そこに続くバーカッションとカーティスのヴォーカルなどが生みだす緊張感からして、完璧なソロ・デビュー・アルバムである。時代性と鋭く向かい合ったソウルであり、ニュー・ソウルの扉を開いた。ストリングスやホーン・セクションも多用したこのアルバムは、ファンクの要素も渦を巻き、一方ではメロウな楽曲も。ハープの音にも導かれていくコンセプチュアルな構成にして、緩急の変化は非常に激しく、ソロとなったカーティスならではの大胆な筆致を感じさせる。強烈な高揚感とスリルをもたらす「ムーヴ・オン・アップ」では、1曲の中でもめまぐるしいほどの展開を聴かせ、このアルバムを代表する楽曲と呼ぶにふさわしい。（荻原）

30 Psychocandy
The Jesus And Mary Chain

1985
Blanco Y Negro

"シューゲイザー"の源流に位置するノイズ・ポップの原点。60年代のガールズ・グループやビーチ・ボーイズ流の甘美なメロディを、鼓膜をつんざくフィードバック・ノイズで覆い隠す倒錯したアプローチ。フアズ・エフェクターによる徹底した音の飽和状態は、マイ・ブラッディ・ヴァレンタインらを通じてオルタナティヴ・ロックにおけるテンプレート的な制作手法へと発展・共有された。彼らの過激な個性が最も純度高く刻まれた本作こそがキャリア最大の重要作。洗練されたシンセ・ポップ全盛期の当時、初期ロックンロールの原始的な3コードの構造を白雑音で再構築した衝撃は極めて大きい。美しい旋律をあえて不快な音響で汚すアプローチは、ノイズの価値基準を根本から転換し、新たな音響的表現を提示してみせた。（天井）

31 Freak Out!
Frank Zappa & Mothers Of Invention

1966
Verve

フランク・ザッパが体内に蓄積した憤怒や鬱屈や嫌悪を、種々の音楽要素＝ドゥーワップ、ブルース、ジャズ、映画音楽、ヴァレーズやストラヴィンスキーの諸作品、ロックンロールなどで、笑いとともに料理した自伝的大作。古典的構造を即興演奏を活用して脱構築している。プロデューサー＝トム・ウィルソン（ヴェルヴェット・アンダーグラウンドを同時期に手がけた）は、この得体の知れない集団に2万ドル余の制作費を確保、20人以上の編成による交響楽を実現した。100人余の雑然たる奇人を集め諸々の客演もあった。「自由を制限する思考や旧態依然たる作法をかなぐり捨てて、社会構造全体と自らの関係を創造的に表現すること」がフリーク・アウトだ、とザッパを記している。本作はエセ反抗分子が快哉もなしている。（湯浅）

32 Oil Of Every Pearl's Un-Insides
Sophie

2018
Trans gressive

It's Okay To Cry、のMVを初めて観た日を、私ははっきりと思い出すことができる。そこにあったのは、それまで天才的なプロデューサーとして謎めいた存在感を放っていたソフィーの現実の姿と、おそらく歴史上最も美しく、優しい歌だった。「隠すものなんて何もないっておぼえておいて」。そして始まるこのアルバムは、あらゆるマイノリティが自分らしさを表現することの頌歌であると同時に、加工された声を、ノイズを、ビートが不可解にねじ曲がる瞬間を鮮やかに捉えることで、ポップ・ミュージックに宿った無限の寛容さを伝えるものだ。ソフィーがいなければ、ハイパーポップも、ブラット・サマーも存在しなかった。もしソフィーが今も生きていたら、きっとAIを、複雑さと率直さを持って使いこなしていただろう。（高久）

CamScannerでスキャン

33 Debut
Björk

1993
One Little Indian

ビョークは、77年に本名名義によるカヴァー主体のアルバムをアイスランド国内で発表している。が、顕名が示している通り、シュガーキューブス解散後にリリースされた本作が正式なデビュー・アルバムだ。元ソウルIIソウルのネリー・フーパーが、大半の曲を共同制作。ビョーク自身も関与したハウスをはじめとするプログラミングやサンプリングによるエレクトロニック・サウンドと、オリヴァー・レイクやコーキー・ヘイル、タルヴィン・シンなど脇役陣の生演奏を取り入れた大胆な音作り。そしてあどけなさを残した天真爛漫で自由奔放なヴォーカルが織り成す先鋭的にしてポップな音絵巻だ。本作が、後の北欧を中心とする世界中のエレクトロニカ系や女性アーティストなどに与えた影響力の大きさは計り知れない。（空）

34 Licensed To Ill
Beastie Boys

1986
Def Jam / Columbia

NYのパンク畑から飛び出した白人の悪童トリオがヒップホップ!?ランDMCの「ウォーク・ディス・ウェイ」が脚光を浴びる中で投下された本作に、ヒップホップに無縁だった私なんかも飛びついた（今にして思えば、第七リック・ルービンの術中にハマっただけかとも思うが）。果たしてこの悪童どもは、80年代という時代やマチズモを皮肉りおちゃらけて人を食うアンチ・ヒーローよろしく、本作をヒップホップ初の全米ナンバー1に送り込んだ。ケリー・キング（スレイヤー）のヘヴィなギターが炸裂する8曲目をはじめ、打ち込みを駆使したサウンド・コラージュ、3人のストリート感覚を噴出させた生々しい掛け合いと硬質なギターのミックスに、新時代のパンク・ロック登場を感じたのは私だけではあるまい。（赤尾）

35 Song Cycle
Van Dyke Parks

1967
Warner

ビーチ・ボーイズ"Smile"やバーズ"5D（Fifth Dimension）"への貢献によって、次代を担う天才とみなされたパークスが、ワーナー・ブラザーズ史上最高額の予算と、7カ月の歳月をかけて創り上げたのは、最先端のロックではなく、自身が子役として活動したハリウッド黄金時代、そしてさらには19世紀まで遡るアメリカ探しの壮大なインナー・トリップだった。発表当時はワーナーが自虐広告を打つほど売れなかった本作だが、アメリカーナな歌詞世界、濁ったオーケストレーション、変調しまくったミックス処理は、ジム・オルークやジョアンナ・ニューサムら90年代以降のアーティストに絶大な影響を及ぼした。タイタニック沈没事故をモチーフにした"Van Dyke Parks"は、生存者の孫である細野晴臣との邂逅を予言。（長谷川）

36 The Stone Roses
The Stone Roses

1989
Silvertone

今作の最大の魅力は、一点の曇りもない肯定の力で満たされていることだろう。「過去はあなたのものだけど、未来は僕のもの。あなたは完全に時代遅れ」「僕が待ち望んでいたのはこれなんだ」。そんな不遜なまでの自信に満ちた言葉が、清流のように濁りのない演奏に乗せて届けられる。全編を貫くダンス・グルーヴは、自分たちの生を祝福するかのようだ。発表は89年。ベルリンの壁が崩壊し、天安門事件が起こり、東欧諸国の民主化が進んだ年。英国はサッチャー退陣まであと少し。西側諸国の視点で、これから世界はもっと良くなっていくと思えた時代の前向きな空気と、今作は完全に共振していた。無論このアルバムはマッドチェスターの火付け役。そしてここに漲る肯定の力は、同郷の後輩オアシスへと引き継がれていく。（小林）

CamScannerでスキャン

Black Sabbath 37

Black Sabbath

1970
Vertigo

ポップ音楽史において〝重さ〟という価値を決定的に打ち立てた作品。第一に凄いのは、低音ギターや遅いテンポ、不協和音を用いたサウンドによってヘヴィネスを快楽として提示し、ハード・ロック以降の重い音楽の原型を示した点。同時に、悪魔や破滅といった恐怖的／暗黒的モチーフを主題に据え、ロックの表現領域を拡張した点も。また、工業都市バーミンガム出身という背景から、労働者階級の現実や荒廃した都市感覚を音楽に反映させたのも重要だ。さらには、コード進行よりもギター・リフを中心に楽曲を構築する方法を確立し、後のメタルやハードコアの基礎となった。すべてのヘヴィ・ミュージックやダークな音楽の出発点となったからこそ、いつまでも終わってもかっこいいままの、重すぎる一枚。（ウエノ）

IIImatic 38

Nas

1994
Columbia

黒人音楽における〝ニューヨーク・サウンド〟として、80年代の流れを決定づけたのがルーサー・ヴァンドロスのソロ・デビュー作〝Never Too Much〟（81年）なら、90年代はナズの本作だったと思う。映画『ワイルド・スタイル』挿入曲のサンプリングで開幕し、ジャズやソウルのサンプルを用いたビートに乗って、ラキムを継承する若きリリシストが地元クイーンズ・ブリッジの殺伐とした日常を理知的かつ詩的に活写する。DJプレミアら気鋭のプロデューサー陣による東海岸ヒップホップ特有の硬派なアングラ感をオーヴァーグラウンドに押し上げた功績は大きく、マイク一本で路上から這い上がるような姿は、R&Bで言えばメアリー・J・ブライジ〝What's the 411?〟（92年）を彷彿させた。（ヤ）

Is This It 39

The Strokes

2001
Rough Trade

ポップ・ミュージックにおいて最も重要なのはアクチュアリティ――その時代を鳴らすことだ。実際、本作の音楽的要素は歴代NYロックンロールの語彙でほぼ説明可能だ。それまで存在しなかった〝新しい音〟ではない。しかし、その無駄を削ぎ落としたアンサンブルは肥大化したロック・シーンを強制リセットし、過去の音を〝今の音〟として再配置することによって、ポストモダン的な時代の到来を見事に呼び起こした。そんな彼らを〝ハイプ〟と嘲笑う声もあったが、その後のポスト・パンク／ガレージ・リヴァイヴァルを見れば、本作がオーディエンスの感覚を変えたことは明らかだ。新しさとはゼロから生まれるのではなく、時代と音楽の再接続から切り拓かれる――本作はそのことを証明した、21世紀型ロックの起点である。（ヤ）

The Stooges 40

The Stooges

1969
Elektra

やっぱりこのアルバムこそパンクの第1号じゃないだろうか。イギー・ポップ（vo）を中心にロン（g）とスコット（ds）のアシュトン兄弟、デイヴ・アレクサンダー（b）が創り上げたシンプルで妥協なしの攻撃的なサウンドはロックの原点でもある。イギーの破滅的なパフォーマンスがデトロイト周辺で話題となってエレクトラ・レコードのジャック・ホルツマンがそれを気に入り、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドを辞めたばかりのジョン・ケイルをプロデューサーに抜擢して録音されたもので、「1969」「アイ・ワナ・ビー・ユア・ドッグ」「ノー・ファン」など、どれも歴史に残る曲ばかりだが、アルバム全体、まったく古臭さが感じられることなく展開するところは時代を超え、今もある世代、年代には強烈に刺さる名盤だ。（大鷹）

CamScannerでスキャン

41 More Than A New Discovery

Laura Nyro

1967
Verve Folkways

1967年1月発表。録音は前年で、ローラは10代だが、ソングライターとしてもシンガーとしても、別の時代からやってきたかのよう。最初から恐るべき高みに達している。レーベルは彼女の音楽に対応しきれず、彼らができる範囲内の仕事をした。ローラにはピアノを弾かせず、オケを作った。が、僕はその窮屈さも含めて本作が好きだ。「ビリーズ・ブルーズ」のような丁寧な歌い込みは後のローラには見られない。若い頃に曲順の違う再発盤で聴き込んでしまったが、今はモノラルのハイレゾをオリジナル曲順で聴けるのが幸せ。ベルサウンド・スタジオの陰りあるアンビエンスも最高だ。（高橋）

42 My Aim Is True

Elvis Costello

1977
Stiff

パンクやパブ・ロックの文脈で語られることも多いコステロだが、このデビュー作を聴く限り、ただ単に好きなロックンロールを歌いたかったのだろう。ブレスリーからの名前の引用もバディ・ホリーのようなルックスもまるでコスプレだが、一歩間違えば色モノになるところを絶妙なセンスとエモーションで疾走感溢れる傑作に仕上げた。とにかく楽曲のクオリティが高く、「(The Angels Wanna Wear My) Red Shoes」のようなキャッチーな楽曲に魅了される。そして何より名曲「Alison」。この愁いのあるメロディを書いたことが、単なるロックンローラーで終わらなかった理由だ。（栗本）

43 Y

The Pop Group

1979
Radar

パンクはロックをリセットすることで、ロックの歴史の大きな分岐点になった。でも、それだけでは語り足らない革命分子、ポップ・グループがパンクな精神でロックを徹底的に解体したのが本作だ。ここではパンクを特徴づける激しいギターさえ切り刻まれ、パンクの直線的なビートにかわってファンクやジャズの強靭なグルーヴが渦巻いている。そして、何より衝撃的だったのはダブからインスパイアされた立体的な空間設計だ。サイケやプログレでさえ平面的に感じられるほど、空間をコラージュするような斬新な手法と混沌としたサウンドは、後のオルタナティヴなロックの源流となった。（村尾）

44 Definitely Maybe

Oasis

1994
Creation

「ロックンロール・スター」の陶酔のギター・リフ、分厚くパワフルなバンド・アンサンブル、リアム・ギャラガーのからっとした全能感溢れる歌声が鳴り響いた瞬間、内省的で陰鬱なグランジの時代が終わり、ブリットポップの熱狂が燃え上がった。ビートルズやザ・フーといったUKロックの伝統を継承しながらも、労働者階級出身のギャラガー兄弟による「俺たちは最高なんだ」という単純明快な宣言は、ユースを中心に、誰もが世界を変えられるという希望を与えた。そのサウンドとメッセージがいかに強力かは、2024年からの再結成の盛り上がりを見れば一目瞭然だろう。（小松）

45 Q: Are We Not Men? A: We Are Devo!

Devo

1978
Warner

ロックをめぐる暗黙の約束事すべてを疑い、意図的に解体・解剖してみせた快作だ。バンド名は退化を意味する"devolution"を短縮したもの。アルバム名はH・G・ウェルズ『モロー博士の島』を映画化した『獣人島』に登場する台詞。"我々は人間ではないのか？"のもじり。人間っぽさを拒絶して機械的に刻まれるビート、ノイズとしてうねるギター、感情移入を誘わない平坦な歌声。にもかかわらず人間が演奏しなければこうはならないというアンビヴァレンス。感情を爆発させるのではなく凍結させることで躍動を生み出す。とんでもない離れ業を成し遂げたデビュー作だった。（萩原）

CamScannerでスキャン

Yo! Bum Rush The Show 46

Public Enemy

1987
Def Jam / Columbia

黒人運動を明確に意識したジャケットの写真がこれまでのヒップホップとの違いをはっきり示していた。ストリートの喧騒のようにラップとビートが持続する。ドラムとスクラッチは重く、サイレンや銃声のように上モノが鳴り響き続ける上でぶっきらぼうなラップが矢継ぎ早に畳み掛けられ、チャック・Dはイライジャ・ムハンマドのメッセージを引用する。ヴァーノン・リードが弾くギターのリフくらいしかメロディアスな要素はないが、リアルな表現はラップに関心のなかった層にも波及した。影響力という点ではセカンド・アルバムが優るが、本作のインパクトがすべての始まりだった。（原）

Suicide 47

Suicide

1977
Red Star

ギターや生ドラムを排し、ロックの〝前提〟を根底から解体した過激なデビュー作。チープなリズム・マシンと不穏なシンセ、そこに重なるプレスリー風のロカビリー唱法。〝二人組＋電子楽器〟という最小編成は、後のシンセ・ポップからインダストリアル、現代のベッドルーム・ミュージックにまで直結する先駆的な雛形となった。ブルース進行に頼らない反復ビートの導入と電子的ミニマリズムの極致として揺るぎない地位にある。無機質なシーケンスに生々しい感情＝肉声のノイズを介入させる手法、その機械と人間性の相剋は、後のテクノへと繋がる新たな表現モデルを提示した。（大井）

Burial 48

Burial

2006
Hyperdub

90～00年代初頭のUKアンダーグラウンド・シーンは、ジャングルやガラージ／2ステップ、グライムを生んだ。だが、そういったサウンドが響く祝祭的なレイヴやパーティーは、その発展に伴い産業化、衰退へと向かう。そして、その終焉を見事に描写したのがブリアルだった。彼が鳴らすクラックル・ノイズやダブの海でレイヴの残滓を集めるような哀愁的なビートは、レイヴが描いた夢はすでに奪われてしまい、決して戻ってはこないことを示唆していた。亡霊たちが蠢くそのディストピア・サウンドは、10年代に入り復興しつつあったインダストリアル・テクノへと接続していく。（坂本）

Original Pirate Material 49

The Streets

2002
679 / Locked On

2ステップ、UKガレージ、ヒップホップを換骨奪胎した独自のマナーで、バーミンガム出身のマイク・スキナーは英国の街角に潜む日常を鮮烈に活写した。ダブの残響とチープなビートが編み出す詩情は、かつてのザ・スペシャルズから受け継いだものであり、エミネムへの英国からの返答でもあった。従来のラップ像を根底から覆し、不器用なシンガロングに宿るパンク性と、ストリートの熱狂を冷ややかな電子音で包む手際がみごと。その後のグライムのあり方も決定づけた。労働者階級の退屈な日常や、ケバブ屋の喧噪を鮮やかな短編小説へと昇華した、00年代英国の空気を密封した1枚。（油納）

Run-D.M.C. 50

Run-D.M.C.

1984
Profile

歴史が一巡したとでもいうべきか、このミニマルで優雅なビートは、今またやたらに尖って聞こえる…のだとしたら、当時はどれほど先鋭的に響いたことか。それまでのパーティ・ラップの親しげな笑顔を排し、極端に削ぎ落とされたビートとともに、鋭い社会批評を織り交ぜながらメッセージを吐き出す様は、後に続くラップ・ミュージックの歴史の扉を大きく開け放つことになった。「ロック・ボックス」に代表されるように、ロックとヒップホップの間に存在した（と多くの者に信じられていた）境界を破壊してみせたことの重要性も、今なお、いくら指摘してもし過ぎということはない。（柴崎）

CamScannerでスキャン

51 Homework
Daft Punk

1997
Virgin

92年にレイヴを初体験したダフト・パンクは、セカンド・サマー・オブ・ラヴには間に合わなかった世代。クラブ文化がメジャー化してから触れたからこそ、彼らはハウスやテクノをよりポップでわかりやすく、メインストリームでも通用する形へと変換することに屈託がなかった。ヒップホップやロックの影響も感じさせる、強いフィルターをかけたハウス・ミュージック。どの曲も圧倒的にキャッチーでわかりやすい。今作がフレンチ・タッチの代表作なのはもちろん、00年代のエレクトロ、10年代のEDMといった巨大化するダンス音楽の発火点にもなったのは、改めて言うまでもない。（小林）

52 Murmur
R.E.M.

1983
I.R.S.

5曲入りEP『クロニック・タウン』の翌年に発表されたフル・デビュー作は、インディながら全米36位を記録。当時、大学生を中心にした若者たちが〝何か新しいもの／違うもの〟を求めていた証拠だろう。落ち着きを見せないリズム、リッケンバッカーの煌めき揺れるアルペジオ、清涼感すら感じさせる美しいメロディに、聞き取れない歌と謎めいた歌詞。60年代フォーク・ロックとパンクの出会いは、かくも甘美で神秘的かつスリリングであり、さらなる可能性を感じさせる。また、知的な彼らの登場は、それまでのアメリカ南部のイメージを描き替えるものでもあったはずだ。（赤尾）

53 xx
The xx

2009
Young

ロミーとオリヴァーのささやくような男女ツイン・ヴォーカル。そしてジェイミーによる、抑制の利いた静謐なビート。ポスト・パンクとR&Bが溶け合った、ヤング・マーブル・ジャイアンツを彷彿させる響き。それは過剰な音を削ぎ落とした引き算の美学の極みを見せつける。深夜の寝室で鳴っているかのような親密さと、内省的な若者の脆さを密封した夜想曲的ムード。3人のケミストリーが生む情緒はインディとポップの垣根を軽やかに越境した。マーキュリー賞受賞も納得の、00年代を締め括る1枚。その後も彼らは作品のたびに自分たちに課せられたハードルを鮮やかに飛び越えていく。（油納）

54 Rage Against The Machine
Rage Against The Machine

1992
Epic Associated

果たして何年後、何十年後、あるいは何百年後になるだろうか。あらゆる戦争、人道危機、格差、その他すべての問題が解決し、人類が真の平和の下に暮らすことができる世の中になった時のことを想像する。そんな世界においてもなお、このアルバムは効力を失わないだろう。ザック・デ・ラ・ロチャの鋭利なラップが、トム・モレロの独創性に富んだギター・プレイが、そしてリズム隊二人の強靭極まりないグルーヴが、人類の苦闘の歴史を語り伝え、すべての権力を見張り続けるだろう。片時も欠かすことなく。そしてそんな世界が来るまでは、本作が〝歴史を変えた〟なんて言えないのである。（伊賀）

55 High Land, Hard Rain
Aztec Camera

1983
Rough Trade

ヴォーカル／ギターのロディ・フレイムは10代の頃、70年代後半のパンク・ロックに影響を受けながらも、その音楽的な単調さを反面教師とし、豊穣な本作をつくりあげた。繊細で蒼さの残る歌声、瑞々しくエヴァーグリーンなメロディは鮮烈極まりない。スパニッシュ・スケールを駆使したギター・ソロやササン・ソウル的なリフ、カントリー調のアルペジオなど、ジャンゴ・ラインハルトを敬愛するロディのギタリストとしての腕前も光る。ジャズやボサノヴァ、AOR、ロカビリーまで、様々な音楽のエッセンスが凝縮されているのも特徴だ。リリースは名門ラフ・トレードから。（土佐）

CamScannerでスキャン

This Heat 56
This Heat

1979
Piano

テープ・ループと即興演奏を同期させながら作曲し、大胆なエディットを施したり、スタジオを楽器として捉えたりと、先駆的な実験を繰り返して産み落とされた異形の音世界。ヒリヒリしたストロングなビートの曲、ダーク・アンビエント的な音響重視の曲、不気味なドローン、トランス的高揚感の曲など、エグいアイデアがどんどん出てくる。そして全体を貫くラジカルで不敵なムードがたまらない。それらに通底しているのは、カテゴライズを拒み、既存のロックとは異なるものを構築しようとする強靭な意志だ。そうした在り方が、世界のハミダシ者たちにどれだけの勇気を与えたことか。（小山）

The College Dropout 57
Kanye West

2004
Roc-A-Fella

00年代初頭、まだ90年代のギャングスタ・ラップが色濃く影響を残していたタイミングで、シカゴの中産階級出身で本作のタイトル通り大学を中退したカニエ・ウェストがプロデューサーとしての成功のみでは飽き足らず、本作でラッパーとしても大きな成功を掴み取ったことは、後進のラッパーたちにとって大きな起点となっただろう。ソウル・ミュージックを早回しにしたサンプリング主体のサウンドの心地好さと、皮肉の効いた歌詞は今聴いても魅力的だ。それに音楽だけでなく、現在のファッション、およびエンタメ業界全体も彼の存在なしには語れまい。様々な意味で画期的なデビュー作。（高久）

Please Please Please 58
James Brown & His Famous Flames

1958
King

筆者もかつては、圧倒的個性ゆえに「普通のR&B集」程度の認識だった。だが1950年代後半の、即効性とその後の音楽への永続的な影響がある。表題曲などの泣き崩れるシャウトとゴスペル的フェイクは、当時のブルース／R&Bにない〝過剰な感情〟を押し出し、ソウル・ヴォーカルの雛形となった。さらにビートよりシャウトとリズム感に重心を置く歌い方が、後のファンク的「リズムの上に声が乗る」スタイルへ連なる。シングル集でありながらライヴの熱量を封じ込めた点も画期的で、ここ数十年で再評価が進むファンクの核心を、デビュー作の形で提示したJBはやはり偉大だ。（早坂）

Finally Rich 59
Chief Keef

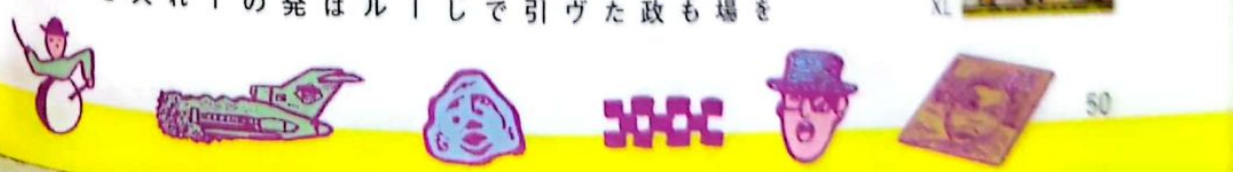
2012
Glory Boyz / Interscope

2010年代以降のすべてのストリート・ラップはチーフ・キーフの影響下にある。そう断言できる。ヤング・チョップが主に制作した硬質で冷徹なドリル・サウンドの上で、当時まだ17歳だったチーフ・キーフは、〝Chiraq〟とも言われた地元シカゴのストリートの話を飄々と繰り広げる。マッチョ一辺倒ではないところもミソで、その影響の火の手はエモ・ラップ勢にまで広がる。手持ちのカメラで撮ったようなラフなスタイルのMVや、メジャーに頼らずDIYな活動を続ける（メジャーは本作1枚のみ）点など、バイオニアではないポイントを見つけるのが難しいほどの特異点的存在だ。（伊賀）

Arular 60
M.I.A.

2005
XL

ネットが世界の音楽地図を変えた00年代、M.I.A.の登場は時代を象徴する出来事でもあった。ある種の土着性や政治性をカラフルに表現した〝Galang〟、オリジナル・サヴァンナ・バンドの同名曲を引用した〝Sunshower〟などで期待が高まるなか、満を持して発売されたのがこのファーストである。各地のローカル音楽を吸収したトラックにはディプロら制作陣の手腕が発揮されており、M.I.A.本人のパフォーマンスにもデビュー作ならではの瑞々しさが溢れている。その後、M.I.A.本人としては本作のインパクトを越えるものを作れておらず、近年は陰謀論にもハマりつつある模様。（大石）



CamScannerでスキャン

61 Philosophy Of The World

The Shaggs

1969
Third World

調和とは何か？と改めて考えさせられる人もいるか。無意識の和につらぬかれた、この3姉妹の演奏が全人類のしがらみを解く、と俺は初めて聴いた1980年のある日からずっと思っている。曲づくりと制作監督は彼女らの父親。較べるものなきコード感とリズム。メロディにアバラチアン・マウンテン音楽を連想する者はいるか？ NRBQ関連の尽力で再発されたおかげで広く聴かれることになった。元は彼女らの地元で売られた。しかも地元集会所では収録曲群で皆踊っていたという。『まずたしからしさの世界を捨てろ』（多木浩二／中平卓馬共編、田畑書店刊／70年）を想起させる盤。（湯浅）

62 Ctrl

SZA

2017
Top Dawg / RCA

2017年以降のR&B／ポップ・ミュージックを俯瞰すれば、'Ctrl'はもはや参照点のひとつになっている、と言っても過言ではないだろう。若者が強く共感する現代的な恋愛、移り変わっていく人生ステージの狭間に生じる不安と混乱、そして女性性の解放を、シザはその鋭いペンで見事に書き上げた。ミニマルなトラップ・ビートと彼女の趣味であるインディ要素が交わったサウンド含め、当時顕著な動きを見せていたオルタナティヴR&Bにおいて今作は重要な布石となり、その後のアーティストの語り口やサウンドの質感にまで波及。まさにミレニアル世代のサウンドトラック的1枚だ。（島岡）

63 The Miseducation Of Lauryn Hill

Lauryn Hill

1998
Ruffhouse

フージーズのメンバーとして傑作を生み出した約2年半後、ローリン・ヒルは新たな重要作品をソロで発表。レゲエ／ソウル／ヒップホップを軽やかに横断しながら、自己愛やブラック・プライドについて女性視点で綴られた音楽は、のちのR&B／ヒップホップを決定づける重要な参照点となった。'Doo Wop (That Thing)'等のヒット曲はもちろんのこと、ディアンジェロが参加する'Nothing Even Matters'には聴き惚れる艶感がある。黒人女性アーティストとして初のグラミー最優秀アルバム賞受賞という歴史的な瞬間を刻み、一夜で5冠を達成した世紀のレコード。（島岡）

64 El Maro

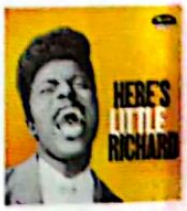
Willie Colón

1967
Fania

今年2月に逝去したニューヨリカン、ウィリー・コロンが16歳の時にレコーディングした本作ほど、'初期衝動'という言葉が似合うラテン・アルバムはないはず。軋みをあげるようなリズムと、唸る2本のトロンボーンによって浮かび上がる光景は、プエルトリコのサトウキビ畑ではなく、サウス・ブロンクスの荒涼としたストリートだ。まるでガレージ・パンクのような荒々しいブーガルー'Willie Baby'から、盟友エクトル・ラボーの美声が響き渡る正調キューバンな'Oyonqui'まで、ヴァラエティに富んだ音楽性は70年代に確立する汎中南米音楽'サルサ'の青写真のひとつとなった。（長谷川）

65 Here's Little Richard

Little Richard



1957
Specialty

リトル・リチャードが後世に残した影響は計り知れないが、ヒット・シングルを収めた本作には何より原初的なエネルギーが詰まっている。リビドーを激しいシャウトとして放出する'Tutti Frutti'を筆頭に、とにかくアップリフティングでエンターテイニング。それはアウトサイダーが抱えていた行き場のない熱の解放であり、だからこそビートルズもボブ・ディランも夢中になった。本作がロックンロールを定義づける一枚となったのは、ピアノの連打によるダンサブルなサウンドもさることながら、規範を大胆かつ陽気にはみ出してみせたからだ。クィア文化の古典としてもきわめて重要。（木津）

CamScannerでスキャン

66 Domingo

Gal Costa And Caetano Veloso

1967
Philips

90年代のカフェ・ブームの象徴として奉られた作品だが、オシャレな印象の裏にどこか退廃的な雰囲気が充満した不思議なアルバム。ブラジルの軍政時代という世相もあるだろうが、ジョアン・ジルベルトをはじめとするボサノヴァの影響を受けながら、そのボサノヴァに対する醒めた視点も同時に感じられる。静かでダウナーな世界観の中に、トロピカリアのような前衛に向かうカエターノの本質的な作家性がチラチラと垣間見られるのが興味深い。カエターノもガルもこの後、本作と似たようなアルバムを生み出していないのは謎だが、この時代だからこそ作り得た傑作と言えるだろう。（渡辺）

67 The Chronic

Dr. Dre

1992
Death Row / Interscope

N.W.A.の一員としてギャングスタ・ラップを大衆に認知させた西海岸の奇才が、今度はソロとしてGファンクをシーンに根付かせた。シュグ・ナイトと設立したデス・ロウ発の初作としても記念すべき1枚だが、後に東西抗争へと発展する歴史や女性蔑視的なリリックを思うと苦い感情も湧く。とはいえ、不穏さの漂うレイドバックしたファンクは東海岸優勢だったヒップホップのシーンに風穴を開け、"西"へ意識を向けさせた。象徴的な一曲"Nuttin' But A "G" Thang"でマイクを握ったスヌープ・ドギー・ドッグがここで名を上げ、ソロ・デビュー作"Doggystyle"へと期待が膨らむ重要作。（林）

68 Monster Movie

Can

1970
Liberty

現代音楽の巨匠、シュトックハウゼンの元で学んだホルガー・シューカイとイルミン・シュミットを中心に結成されたカン。アウトサイダーの眼差しでロックを見つめることで、黒人音楽に根ざした英米のロックとは違ったものを発明したのが本作だった。即興を出発点にした、シンプルに研ぎ澄まされた楽曲。反復しながら高揚感を生み出していくビート。そこに黒人シンガー、マルコム・ムーニーの泣き叫ぶような歌声が乗る。マッド・サイエンティスト的な実験精神でロックが持つプリミティヴなエネルギーを引き出した本作は、後にクラウトロックと呼ばれる異形のサウンドを生み出した。（村尾）

69 Iron Maiden

Iron Maiden

1980
EMI

パンクからポスト・パンクの時代へと移り変わりつつあった78年、演奏場所の確保に苦労していたアイアン・メイデンは4曲入りのデモ・テープを制作。それを手にしたロンドンのヘヴィ・メタル・クラブ＝バンドワゴンのDJ、ニール・ケイがブッシュしたことにより、パンク時代に肩身が狭い思いをしてきたメタル・ファンたちから彼らは熱烈な支持を集めることになった。本作はNWOBHM（New Wave Of British Heavy Metal）と呼ばれるシーンの熱気を伝える傑作だ。何と言っても疾走感溢れる冒頭曲"Prowler"。ポール・ディアノの男臭くて荒々しい歌唱も実にいい。（大石）

70 Songs Of Leonard Cohen

Leonard Cohen

1968
Columbia

50年代からすでに詩人として注目されていたレナード・コーエンだが、ニューヨークのフォーク・シーンとの関わりのなかで、思索と問いに満ちたこの音楽作品を産み落とした。多くは男女関係を描きながら、それはときに宗教的なモチーフと重ねられ、人間性にまつわる探求にまでたどり着いていく。コーエンの落ち着いた歌声は聴き入るほどに染みこむようで、演奏とアレンジはあくまで彼の言葉を美しく引き立てる。内省そのものの深遠さを体現するような本作は、のちの世代のシンガー・ソングライターやリリシストに発掘され続けており、いまでも聴く者を愛と絶望の果てに連れていく。（木津）

CamScannerでスキャン

71 To Hell With It

PinkPantheress

2021
Parlophone

線の細いUKガレージにゆるく軽くハミングする冒頭の10数秒で、彼女の世界観は完了してしまった。Y2Kカルチャーのスターのひとりであり、後のそこそこ売れるやに通じるガーリーな20'sポップスの水先案内人でもある彼女。本作ではその流動的なイマジネーションがベッドルームというファンシーな無菌室で培養されている。TikTokでスニペットを公開しながら制作するという手法もクール。（風間）

72 My Generation

The Who

1965
Brunswick

ピート・タウンゼントは10代のアンセムの名手だ。「老いぼれる前に死にたい」「うだつの上がらない毎日でもキッズは大丈夫」。彼の率直な言語表現は、平和を享受する戦後生まれの若者の刹那な衝動と無邪気な楽天性、親世代との断絶を的確に捉えていた。ロック史上最高峰の凶暴な演奏と甘酸っぱいコーラスは、そんな若者讃歌の最高のサウンドトラック。戦後生まれという表現が有効な限り、今作は古びない。（小林）

73 Pink Flag

Wire

1977
Harvest

英ロンドン出身のパンク・バンド、ワイアーによるハーヴェストからのデビュー・アルバム。セックス・ピストルズ『勝手にしやがれ！』の1か月後、77年11月に発売された本盤は、すでにパンクの衝動を方法論として表現に転換した、いわばポスト・パンク、あるいはオルタナティヴ・ロックの特性が確立している。と書いていて、日本の突然段ボールのことも考えている。思いついたら、即、演奏。（安田）

74 Tidal

Fiona Apple

1996
Clean Slate / Work

重要なのは、フィオナが20歳を迎える前に明るさに貫かれた本作をリリースしたことではない。まだ若い女性がこの世界に蔓延る古びた男尊女卑を指摘しなければならなかった事実を世界に提示した点である。この怒りに満ちた声が力を失う日は来るのか。昨年公開の恋愛ドラマ『10 THINGS』の若い女性の主人公が最初に買ったアルバムとして本作を挙げているように、その力は悲しいことに現在も有効なのだ。（高久）

75 Enter The Wu-Tang (36 Chambers)

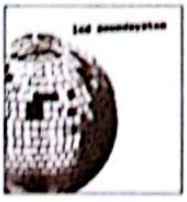
Wu-Tang Clan

1993
Wu-Tang / RCA

ヒップホップ不毛の地スタッテン・アイランドから現れただけでも驚きなのに、メンバーがやたらと多いくせにヤバいラッパーばかりだし（本作に参加した9人全員が後にソロ・デビュー）、香港アクション映画から引用したリリックはぶっ飛びまくっているし、リーダーのRZAによる泥臭いトラックは不穏極まりないしと、本作にはあらゆる意味で未知の音楽が渦巻いていた。その破壊力は今なお衰えていない。（長谷川）

76 LCD Soundsystem

LCD Soundsystem



2005
DFA / Capitol / EMI

しがないパンク・バンドのドラマーだったジェームズ・マーフィーは、アーサー・ラッセルやカン、ブライアン・イーノなどの偉大なるアウトサイダーを参照し、ディスコやパンクにビートルズ風のサイケデリアを織り交ぜ、クロス化するポップ・シーンに殴り込みをかけた。時代とジャンルを軽やかに往還する彼の自由な精神は、ザ・ナショナルやスプーンといったバンドにとっても一つの道標になったと思う。（坂本）

CamScannerでスキャン

Five Leaves Left

Nick Drake

1969
Island

80

変則チューニングを多用したアコースティック・ギターに、憂いを帯びたバリトン・ヴォイス。現代のシンガー・ソングライターを、ニック・ドレイクの影響抜きに語るのは難しい。極度に内向的だったという彼は「残り5枚」と題されたこのデビュー作から5年後に精神病の過剰投与でこの世を去ったが、傷つけられた彼は決して癒されることなく、ホセ・ゴンザレスやサム・アミドンなど、多くの歌手たちが彼の楽曲をカバーしている。（清水）

&&&&&

Arca

2013
Hippos in Tanks

77

ヘヴィなベースが唸りをあげ、ヒップホップやグライムなどから切り取ったビートが自由連想のように伸縮する、チョップ・スクリューされたヴォーカルが震き、ドビュッシーを仕掛ける転調、倒錯を生み動きにした官能的な旋律が実験音を聴かせる。種々な音楽の断片を断続的に織り合わせ、モザイク状に引き伸ばしたそのサウンドが、現在テクノストラクテッド・クラブとして知られるジャンルを定義したのだ。（坂本）

#1 Record

Big Star

1972
Ardent

81

13歳のアレックス・チルトンが「エド・サリヴァン・ショー」に出演したビートルズを見なければ、名曲「Thirteen」は生まれなかったかもしれないが、ビッグ・スターがいなければ、リプレイスメンツもREMも生まれなかっただろう。メンフィスのアーデント・スタジオで録音され、本作後リで脱退するクリス・ベルとチルトンが交互に歌った本作は、多くのパワー・ポップ・バンドにとっての北極星となった。（清水）

Waveform Transmission Vol.1

Jeff Mills

1993
Tresor

78

再生した瞬間、全身の血が沸騰するかのような興奮が今もなお続く。デトロイト・テクノを体現するこのアルバムの衝撃は、30年以上を経てもなお色あせない。ハードかつミニマル、そして有機的であり、最初から最後まで激しく鳴き続けていく。そして、美しいピアノリフと強烈なドラムが拮抗し、音の歪みすらも飲みこんだ"Counterpoint Of Life"は、後年の活動へと続くミルズの才能が凝縮されているかのようだ。（宗像）

John Lennon / Plastic Ono Band

John Lennon/
Plastic Ono Band

1970
Apple

82

自身の内面に深く潜り込み、簡素なサウンドとともにむき出しで歌うという本作の在り方が、シンガー・ソングライターにとってひとつの指標になった。母へのトラウマを悲痛な叫びで表した「マザー」や、ソロとしての決意表明といえる「ゴッド」など、自身をさらけ出して純化した表現に至ったからこその強い説得力が圧巻。"ファースト・ソロ・アルバム"のあるべき姿として今も後進に影響を与え続けている。（小山）

Since I Left You

The Avalanches

2000
Modular

79

数千ものレコードの断片を縫い合わせ、コラージュそのものを音楽の骨格に据えた革命的な1枚。サンプリングを"引用"にとどめず、独立した表現として成立させた創造性は、以降のエレクトロニック・ミュージックの作法を塗り替えた。一方、その自由さは膨大な権利処理問題を招き、社会に著作権意識の転換を迫ることになる。本作が鳴らしたのは祝祭の音楽であると同時に、ひとつの時代の終鐘でもあった。（裕也）

CamScannerでスキャン

Van Halen

Van Halen

1978
Warner

86

ギター界に革命をもたらしたエドワード・ヴァン・ヘイレンの〝ライト・ハンド奏法〟お披露目作品。本作の歴史的意義がそこにあるのは間違いないが、同時に優れたハード・ロック・アルバムとしても極めて価値が高い。ロックンロールのヤバさ、パンクにも通じる先鋭性、メインストリームでも勝負できるポップ性、随所に漂うエンターテインメント性。ロックの魅力がすべて詰まった実に贅沢なデビュー作である。（石川）

Operation: Doomsday

MF Doom

1999
Fondle 'Em

83

厳密にはデビュー作ではないわけだが、MFドゥーム名義で再出発を切るまでのストーリーを考えれば、これほど意義のある〝デビュー作〟もないだろう。失ったものを取り戻すために立ち上がった一人の男（ヴィラン）。先達によって蒔かれた種もあるが、アンダーグラウンド・ヒップホップというものはこの仮面のMCとともに産声を上げたと、そんな筋書きを後世には伝えたい。それがたとえ、フィクションだとしても。（伊賀）

Appetite For Destruction

Guns N' Roses

1987
Geffen

87

都会のデンジャラスでいかがわしいストリートを舞台に、大志を抱き田舎から出てきた若者の怒りや焦燥、絶望にまみれたロックンロールが渦を巻く。一服の清涼剤たる9曲目の名バラードにすら、愛を信じることへの躊躇いが覗く。楽曲の完成度は高く、W・アクセル・ローズの歌声は唯一無二。本作とビースティ・ボーイズの初作は、パンクに間に合わなかった私世代にとってのパンク体験だった、と今でも思う。（赤尾）

The Return Of The Durutti Column

The Durutti Column

1980
Factory

84

英マンチェスターでパンク・バンドをやっていたヴィニ・ライリーが、商業主義に飲み込まれるシーンに嫌気がさしていたところ、プロデューサーのマーティン・ハネットに連れられてスタジオにいた時にふと鳥の鳴き声が流れ出したのをきっかけに、リズム・ボックスとエレキ・ギターのみで生み出された、美しくもヒリヒリした孤独を印象づけるアルバム。現在まで連綿と続く〝密室音楽〟の水源とも言える。（久保）

Club Classics Vol.1

Soul II Soul

1989
Virgin

88

UKのカリブ系移民によるサウンド・システムに由来するクラブ・ユニットの初作はグラウンド・ビートのブームを牽引。〝Keep On Movin'〟に代表される、地を這うようなビートは総帥であるジャジー・Bの代名詞となったが、実質的にはプログラミングを担当した屋敷豪太（ds）が発案したとされる。ここで歌っていたキャロン・ウィーラーが本作のコンセプトを受け継いだ初ソロ作〝CX Blow〟も革命的だった。（林）

Kick Out The Jams

MC5

1969
Elektra

85

デトロイトの俗称、モーター・シティ（MC）をバンド名に冠したMC5、69年のデビュー・アルバムはライヴ録音。もともとは、ジャム演奏に痴れる地元バンドたちへの「タラタラしてんじゃねーよ」という激声が、アルバート・アイラーにも共鳴するガレージ・ロッカーの命がけのパフォーマンスによってとてつもなく大きな権力への反抗へと昇華。ガソリン・スタンドで火祭りするような一触即発のロック。（安田）

CamScannerでスキャン

House Of Balloons

The Weeknd

2011
XO

92

10年代がネットを介して国境や人種、ジャンルを越えたクロスオーヴァーの時代になることを、いち早く我々に予感させたのが、このミックステープだった。泣き濡れたマイケル・ジャクソンのような痛切な歌声で、マイナー・キーの仄暗いR&Bを歌ったかと思えば、スージー・アンド・ザ・バンシーズによるポスト・パンクの名曲をサンプリングして祝祭的な高揚感を生む。その越境性は新たな

Something Else!!!!

Ornette Coleman

1958
Contemporary

89

後のオーネット・コールマンと比べるとストレートなジャズを演奏している。ラテンのテーマやビバップのようなコード進行も聴かれる。それでもコールマンの吹くプラスチック製のサックスが不協和音を奏でる瞬間に決定的な変化が起こる。ドン・チェリーのトランペットとの完璧なユニゾンも、まるでフリー・ジャズの始まりである"The Shape Of Jazz To Come"の序章のようにスリリングだ。（原）

Kraftwerk

Kraftwerk

1970
Philips

93

テクノの原点というより、ロック・バンドが電子処理とミニマル・ビートへ移行するプロトタイプ。生ドラムの反復ビートに電子処理フルート／オルガンを重ね、〝機械的グルーヴ〟の設計図を提示。後の活躍は言うまでもないが、イーノやボウイ、ニュー・オーダー、レディオヘッド、エイフェックス・ツインからダフト・パンクまで、この時期に形作られたミニマルなビート感と機械的な反復の

Baduizm

Erykah Badu

1997
Kedar / Universal

90

伝えター・システム時の凄としたスター像を刷新。個の力を見事に落とし込んだデビュー作。ヒップホップの風はR&Bからジャズまでを横切る、ネオ・ソウルと呼ばれた新たなメインストリームを生んだが、本作はバドゥがその中央にいるのを知らしめた。ザ・ルーツ関連者＋αが関与。その中心者は後のソウルクエリアンズとなり、ディアンジェロ、コモンらの名盤も導いたが、それはまさに時代の音だった。（佐藤）

Night Time, My Time

Sky Ferreira

2013
Capitol

94

カート・コバーンのような虚ろな眼差しと、80年代のマドンナを思わせる顔立ちを併せ持つスカイ・フェレイラは、一時、間違いなく気鋭のポップ・スターだった。2012年に発表したEPを基盤にグロッシーなポップとグランジを掛け合わせ、この物憂げで退廃的なムードは、2010年代のTumblr美学を構築した。発表後、音楽制作を停止していたことが、このアルバムにある種の希少性を与えたことも確かだ。（岡田）

NewJeans

NewJeans

2022
ADOR

91

K-POPの頂点にまでのぼりつめたガールズグループ。洗練されるが、彼女たちはZ世代そのものであり、憧れないガールクラッシュでありつつ、日本文化を含むさまざまなY2Kカルチャーのオマージュ、2000年代制作陣による先鋭的なサウンドメイキング、5人の儚げなイメージ。後のゴタゴタがあったぶん、デビュー時の鮮烈なイメージがより鮮やかに感じられる。〝Attention〟と〝ETA〟は、やはり名曲である。（大石）

CamScannerでスキャン

95 Supa Dupa Fly

Missy "Misdemeanor" Elliott

1997
The Goldmind / East West / Elektra

ティンバランドによる陰鬱の多いチキチキ・ビートと奇則的なリズムからなる宇宙的で実験的なサウンド・デザイン。セクシーさではなく、ユーモラスで奇抜な魅力を持つフィメール・ラッパー。「Sock It 2 Me」のMVでの膨張スーツを着用したサイバーパンクな出で立ち。いくつもの衝撃を与え、それまでのR&B／ヒップホップ観もフィメール・ラッパー観もヴィジュアル観もアップデートしてしまったアルバムだ。（小松）

96 After School Session

Chuck Berry

1957
Chess

8ビートの曲はひとつもない。2ビート、4ビート、シャッフル、ブルース、さらにラテン。すべてがチャック・ベリー流に料理されている。広い聴き手へのアピール、変容の才、下心満々な油断のならない音楽性こそがこの人の魅力。ブルースとウェスタン・スウィングとルンバの合体、そしてその先をエレクトリック・ギターと、日常を活写することで示した快作。ヒット曲？そいつはシングルで、という時代の作。（湯浅）

97 Music Has The Right To Children

Boards Of Canada

1998
Warp / Skam / music70 / Matador

スコットランドのデュオによるこの初作は、電子音楽としての革新性よりもむしろ架空のノスタルジアを刺激するような音響効果として作られ、どこか不穏だが強烈に陶酔的な感覚を立ちあげる。のちのポスト・インターネット時代に参照されてヒプナゴジックと形容される感性の源流のひとつとなったが、いまでも本作のサイケデリアは神秘的なものとして屹立し続けている。時間の概念が融解するような音楽だ。（木津）

98 17

XXXTentacion

2017
Bad Vibes Forever / Empire

おそらく現代最後の反権威的なムーヴメントとなったエモ・ラップを牽引したのがXXXテンタシオンだった。彼が本作に select したのはヒット曲“ロックスター”に向けた媚びではなく、自動的に削られた時、極めて感情的な独白だった。そこには時代と分断と格差が激化した時代を生きる若者の抱えた孤独と痛みがたしかに息をしている。歴史の終わりの先で終了宣言の一部を映し出した傑作。（柴崎）

99 Swoon

Prefab Sprout

1984
Kitchenware

英国の新興レーベル、キッチンウェアから発売された本作には、バディ・マクアルーンのソングライターとしての才能の開花が見てとれる。早くもスティーリー・ダン的な洗練されたコードをものにし、カントリーやファンクの要素も散見される。次作に較べると若書きの感は否めないが、様々な可能性が感じられた初作であることは間違いないだろう。デヴィッド・プリョーイズとの共同プロデュース。（土佐）

100 Paid In Full

Eric B. & Rakim

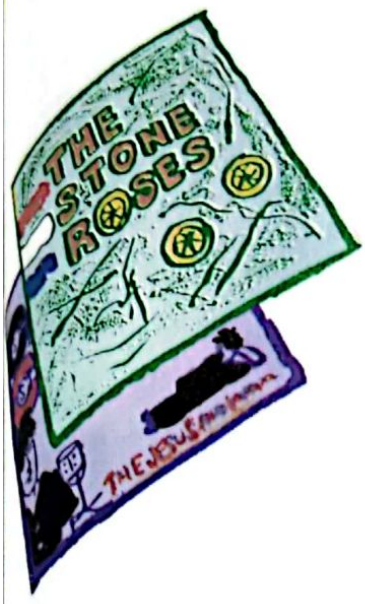
1987
4th & B'way / Island

サンプリング・マシーンをD-50で再構築されたブロック・パーティの定番曲に乗った、名曲でストイックなラップ。R'n'B出身のデュオが本作で確立したフォーマットによって、ヒップホップはディスコの変種でも新しいロックでもないことが証明された。エリック・Bのテクニック、制御は英国に飛び火してレア・グルーヴ・ブームを引き起こし、ラキムは米国に史上最高のMCのひとりとみなされている。（長谷川）

CamScannerでスキャン

個人リストと選評

ランキングに参加していただいた
38名のみなさんが選んだ
25枚のリストと、
今回のランキングや
デビュー・アルバムについてなど、
自由にお書きいただきました。



赤尾美香

① Appetite For Destruction / Guns N' Roses ② Ten / Pearl Jam ③ Murmur / R.E.M. ④ The Smiths / The Smiths ⑤ Licensed To Ill / Beastie Boys ⑥ Van Halen / Van Halen ⑦ Pablo Honey / Radiohead ⑧ When We All Fall Asleep, Where Do We Go? / Billie Eilish ⑨ No Depression / Uncle Tupelo ⑩ Duran Duran / Duran Duran ⑪ Rage Against The Machine / Rage Against The Machine ⑫ The Stone Roses / The Stone Roses ⑬ Boy / U2 ⑭ House Of Balloons / The Weeknd ⑮ Punch / Punch Brothers ⑯ The White Stripes / The White Stripes ⑰ Taylor Swift / Taylor Swift ⑱ The Record / Boygenius ⑲ For Emma, Forever Ago / Bon Iver ⑳ The Fame / Lady Gaga ㉑ 19 / Adele ㉒ Frank / Amy Winehouse ㉓ Roman Candle / Elliott Smith ㉔ Pretty Hate Machine / Nine Inch Nails ㉕ Damaged / Black Flag

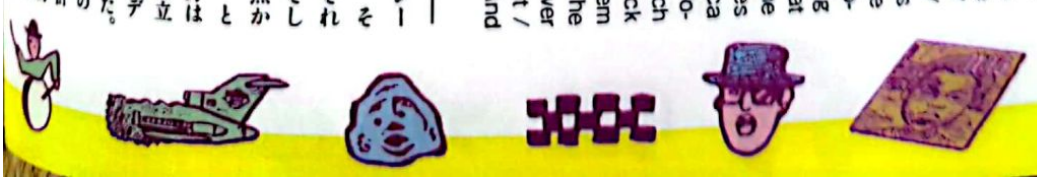
自分が〝リアルタイムで聴いたデビュー作〟を基準に選んだ。当時食らったインパクトを思い出しながら。私の歴史は大々的に変えたけど、音楽史を変えたか？と言われるとちょっと悩むのでブラック・クロウズは入れなかったけど、入れても良かったかな。90年代初頭にあんなことしているバンド、そうそういなかったし。

「デビューまでの蓄積があるからデビュー作は充実する」とよく言われるが、結局、デビュー作だけで消えてしまったような人はなかなかランク・インしないわけで、デビュー作の良し悪しを決めるには、多少売れりそれも、ポピュラリティの高さが重要なのかもしれない。

天井潤之介

① The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ② Unknown Pleasures / Joy Division ③ In The Court Of The Crimson King / King Crimson ④ Dummy / Portishead ⑤ Slanted And Enchanted / Pavement ⑥ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ⑦ Suicide / Suicide ⑧ The Doors / The Doors ⑨ Black Sabbath / Black Sabbath ⑩ Music From Big Pink / The Band ⑪ This Heat / This Heat ⑫ Cut / The Slits ⑬ Debut / Björk ⑭ The Madcap Laughs / Syd Barrett ⑮ James Blake / James Blake ⑯ &&&& / Arca ⑰ Oil Of Every Pearl's Un-Insides / Sophie ⑱ Pretty Hate Machine / Nine Inch Nails ⑲ Blue Lines / Massive Attack ⑳ LCD Soundsystem / LCD Soundsystem ㉑ The Smiths / The Smiths ㉒ xx / The xx ㉓ Is This It / The Strokes ㉔ Whatever People Say I Am,That's What I'm Not / Arctic Monkeys ㉕ Reading, Writing And Arithmetic / The Sundays

選考基準としたのは、その後の音楽シーンに〝ロールモデル〟を提示し得たか。そのアーティストの最重要作、あるいはそれに匹敵する評価と内容を併せ持つか。そして、当時の衝撃はもちろん、現在の視点から見ても歴史的に重要な作品であるか、という3点。その上で、門外漢である分野は潔く他の方々に委ね、あくまで〝自分の立ち位置〟に正直に、今の気分（ザ・サンデイズ）も少しだけ混ぜて選ばせてもらった。ただ、客観的に見てもペイヴメントの〝Slanted And Enchanted〟が全体の集計で選外となったのは意外だったが、最終的なベストーの選出結果には誰もが驚く納得



石川真男

① In The Court Of The Crimson King / King Crimson ② Led Zeppelin I / Led Zeppelin ③ Van Halen / Van Halen ④ The Smiths / The Smiths ⑤ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑥ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑦ The Return Of The Durutti Column / The Durutti Column ⑧ Entertainment! / Gang Of Four ⑨ Hatfield And The North / Hatfield And The North ⑩ Iron Maiden / Iron Maiden ⑪ When We All Fall Asleep, Where Do We Go? / Billie Eilish ⑫ Tubular Bells / Mike Oldfield ⑬ Q: Are We Not Men? A: We Are Devo! / Devo ⑭ The Stone Roses / The Stone Roses ⑮ Definitely Maybe / Oasis ⑯ Dummy / Portishead ⑰ The Doors / The Doors ⑱ Roxy Music / Roxy Music ⑲ Brown Sugar / D'Angelo ⑳ Appetite For Destruction / Guns N' Roses ㉑ Blizzard Of Ozz / Ozzy Osbourne ㉒ High Land, Hard Rain / Aztec Camera ㉓ Swoon / Prefab Sprout ㉔ Schlagenheim / Black Midi ㉕ Immunity / Clairo

〝デビュー・アルバム〟であれば結構絞り込めるかなと思ったが、いざ選盤に取り掛かると次々と候補が出てきてしまい、収拾がつかなくなったので、泣く泣く英語圏ロックに絞り込んだ。結果、70～80年代のものが多くなり…やはりあの頃の〝未知のもの〟に触れる感覚は何物にも代え難い。もちろんサブスク時代の利便性を大いに享受しているが、〝アーティスト写真1枚とメンバー名〟ぐらいしか情報がない中（動くレッド・ツェッペリンを観る機会を得るまで相当時間がかかったものだ）、あれこれと想像を膨らませるのは至福の時間だった。そして、それらが時代を超えた名盤となるのをこうして見届けるのも感慨深い。

大石始

① Clandestino / Manu Chao ② 2NE1 / 2NE1 ③ Arular / M.I.A. ④ Amen / Rich Brian ⑤ Iron Maiden / Iron Maiden ⑥ NewJeans / NewJeans ⑦ Duma / Duma ⑧ James Blake / James Blake ⑨ Yo! Taiji! / Seo Taiji And Boys ⑩ Skream! / Skream ⑪ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑫ Music From Big Pink / The Band ⑬ Blue Lines / Massive Attack ⑭ Feed Me Weird Things / Squarepusher ⑮ Savage / aespa ⑯ Endtroducing..... / DJ Shadow ⑰ Appetite For Destruction / Guns N' Roses ⑱ El Maro / Willie Colón ⑲ Ramones / Ramones ⑳ Hear Nothing See Nothing Say Nothing / Discharge ㉑ House Of Balloons / The Weeknd ㉒ La Voz / Hector Lavoe ㉓ The Story Begins / Twice ㉔ 20 / Hyukoh ㉕ Silence Is Loud / Nia Archives

その作品が出た瞬間、シーンの流れが突然変わってしまうことがある。ニュージーンズのレヴューではそうした存在のことを〝ゲームチェンジャー〟と評したが、選んだ25枚はいずれも〝ゲーム〟の流れを変えた作品ばかりだ。それまでマノ・ネグラでパンク的な表現を試みていたマヌ・チャオは〝Clandestino〟で脱力ラテン路線に舵を切り、以降、世界中にフォロワーを生み出した。2NE1が〝Fire〟でデビューを飾って以降、ガールクラッシュ的な後続グループが次々に登場した。鮮烈なデビューを飾ったぶん、そのインパクトを超えられず、後に苦しむケースもあるだろう。25枚は順不同。個人的な思い入れで順位づけした。

大鷹俊一

① Please Please Me / The Beatles ② In The Court Of The Crimson King / King Crimson ③ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ④ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑤ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ⑥ The Doors / The Doors ⑦ The Stooges / The Stooges ⑧ My Generation / The Who ⑨ John Lennon / Plastic Ono Band / John Lennon/Plastic Ono Band ⑩ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑪ Unknown Pleasures / Joy Division ⑫ Horses / Patti Smith ⑬ The Smiths / The Smiths ⑭ My Aim Is True / Elvis Costello ⑮ Y / The Pop Group ⑯ Specials / The Specials ⑰ Freak Out! / Frank Zappa & Mothers Of Invention ⑱ Black Sabbath / Black Sabbath ⑲ Kick Out The Jams / MC5 ⑳ Truth / Jeff Beck ㉑ Music From Big Pink / The Band ㉒ Definitely Maybe / Oasis ㉓ Down By The Jetty / Dr.Feelgood ㉔ Marquee Moon / Televison ㉕ The Clash / The Clash

悩ましくも楽しい企画だった。もちろん迷いに迷ったのだがどれも生涯のベスト・ランキングに入ってくるものばかり。とくにグッド・タイミングだったのが、『クリムゾン・キングの宮殿』をオーディオのハイエンド・モデルを使って、ボーキュパイン・ツリーのスティーヴィン・ウィルソンが行なったドルビー・アトモス・ミックス（〝The Complete 1969 Recordings〟に収録）を体験したばかりで、その凄まじい立体音響の世界は、このアルバムの中にいる怪物がいまだに新たな生命を吹き込まれ、生きているのを示してくれた。こんなスリリングなことはそう簡単に体験できるわけではないが、別種の期待は高まった。

小野島大

① Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ② The Doors / The Doors ③ Yo! Bum Rush The Show / Public Enemy ④ Blue Lines / Massive Attack ⑤ Burial / Burial ⑥ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑦ Cut / The Slits ⑧ Hear Nothing See Nothing Say Nothing / Discharge ⑨ Brown Sugar / D'Angelo ⑩ James Blake / James Blake ⑪ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ⑫ Specials / The Specials ⑬ Atomizer / Big Black ⑭ Selected Ambient Works 85-92 / Aphex Twin ⑮ Channel Orange / Frank Ocean ⑯ The Stooges / The Stooges ⑰ Unknown Pleasures / Joy Division ⑱ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ⑲ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑳ The Second Annual Report / Throbbing Gristle ㉑ Waveform Transmission Vol.1 / Jeff Mills ㉒ In The Court Of The Crimson King / King Crimson ㉓ Down By The Jetty / Dr.Feelgood ㉔ 3 Feet High And Rising / De La Soul ㉕ The College Dropout / Kanye West

選出にあたっては意識して各年代ごと（60年代～2000年代以降）にばらけるようにした。〝歴史を変えた〟という限りは既に歴史的評価が定まったもの中心になるから、そのまま選ぶと古いものばかりになってしまいそうだが、流行り廃りが激しいポップ・ミュージックでは2000年代初頭であっても既に歴史の一部である。この中で一番新しいものは2012年のフランク・オーシャンだが、当然2020年代以降の作品でも〝歴史を変える〟あるいは〝変えた〟作品はあるだろう。だがその判定はもう少し待ちたい。また〝歴史〟を〝私個人の歴史〟と読み替えることもできるだろう。選出にはそこも加味した。

CamScannerでスキャン

風間一慶

① Schlagenheim / Black Midi ② When We All Fall Asleep, Where Do We Go? / Billie Eilish ③ Essentials / Erika De Casier ④ Dopesl / Fontaines D.C. ⑤ Immunity / Clairo ⑥ Die Lit / Playboi Carti ⑦ Geography / Tom Misch ⑧ To Hell With It / PinkPantheress ⑨ Collected In Sunbeams / Arlo Parks ⑩ Sim Sim Sim / Bala Desejo ⑪ Caroline / Caroline ⑫ Bright Green Field / Squid ⑬ Return / Deathcrush ⑭ Kenopsia / Quannnic ⑮ Ctrl / SZA ⑯ Projector / Geese ⑰ Vou Ficar Neste Quadrado / Ana Lua Caiano ⑱ Visions Of Modern Performance / Horsegirl ⑲ Where We've Been, Where We Go from Here / Friko ⑳ No Reino Dos Afetos / Bruno Berle ㉑ Lush / Snail Mail ㉒ 1000 gecs / 100 gecs ㉓ Not Tight / Domi & JD Beck ㉔ Space1.8 / NalaSinephro ㉕ NewJeans / NewJeans

今ここで、なんか、化物を見た。総毛立って困惑している、だけどスピーカーの前から逃れられない。そういう体験をリアルタイムでもえられるのがデビュー・アルバムの特権なのでは？　以上のようなことを考えながらリストを選んだら、見事に2010年代以降の作品しか残らなかった。上位5枚に至ってはすべて2019年の作品だ。1位をブラック・ミディに据えたことについては、漏れ出る行間と競派性を読み取ってほしい。当時のサウス・ロンドンからは何月のように素晴らしいプロジェクトがポンポンでてきていた。NYから彼らに反

木津毅

① Songs Of Leonard Cohen / Leonard Cohen ② Murmur / R.E.M. ③ Selected Ambient Works 85-92 / Aphex Twin ④ Here's Little Richard / Little Richard ⑤ Oil Of Every Pearl's Un-Insides / Sophie ⑥ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑦ The Album / Mantronix ⑧ For Emma, Forever Ago / Bon Iver ⑨ Channel Orange / Frank Ocean ⑩ Burial / Burial ⑪ John Prine / John Prine ⑫ Music Has The Right To Children / Boards Of Canada ⑬ Psychedelic Sounds Of 13th Floor Elevators / 13th Floor Elevators ⑭ Blue Lines / Massive Attack ⑮ Tidal / Fiona Apple ⑯ Original Pirate Material / The Streets ⑰ Music From Big Pink / The Band ⑱ James Blake / James Blake ⑲ Randy Newman / Randy Newman ⑳ 3 Feet High And Rising / De La Soul ㉑ Greetings From Asbury Park, N.J. / Bruce Springsteen ㉒ Neu! / Neu! ㉓ Grace / Jeff Buckley ㉔ Tracy Chapman / Tracy Chapman ㉕ Slanted And Enchanted / Pavement

企画に誘っていただき参加したものの、リストを作る段階で、自分は3〜4作目ぐらいで開花するタイプのミュージシャンやバンドが好きだったことに気づいて焦ってしまった。デビュー作にはそのとき出せるものを全部出す、という姿勢が往々にして宿っており、それはそれで魅力的であるものの、のちに方向性を定め、表現を深めていく過程にこそ自分はスリルを感じるほうだったのである。とはいえ今回は“歴史を変えた”というテーマがあったので、自分なりに後世への影響のレンジが広いもの、

栗本斉

① The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ② Led Zeppelin I / Led Zeppelin ③ My Aim Is True / Elvis Costello ④ Music From Big Pink / The Band ⑤ Domingo / Gal Costa And Caetano Veloso ⑥ Down By The Jetty / Dr. Feelgood ⑦ In The Court Of The Crimson King / King Crimson ⑧ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑨ 3 Feet High And Rising / De La Soul ⑩ Chega De Saudade / João Gilberto ⑪ Debut / Björk ⑫ World Clique / Deee-Lite ⑬ Come Away With Me / Norah Jones ⑭ Whitney Houston / Whitney Houston ⑮ Herb Alpert Presents Sergio Mendes & Brasil '66 / Sergio Mendes & Brasil '66 ⑯ Ticket to Ride / Carpenters ⑰ The Doors / The Doors ⑱ Travessia / Milton Nascimento ⑲ Can't Buy A Thrill / Steely Dan ⑳ Chicago I / Chicago ㉑ Tubular Bells / Mike Oldfield ㉒ Licensed To Ill / Beastie Boys ㉓ Procol Harum / Procol Harum ㉔ Blue Lines / Massive Attack ㉕ Marisa Monte / Marisa Monte

最初にこの企画を聞いた時はさ〜っとセレクトできると思ったが、意外と思い入れのあるデビュー・アルバムを選ぶのに苦労した。デビュー作だと思っていたら2作目だったなんてことも。そんななか、圧倒的に聴いた回数が多いのは上位に選んだ5枚。いずれも歴史的名盤であり、ランキングにも入っている。ランキング外だとドクター・フィールグッド“Down By The Jetty”は学生時代に愛聴していた一作。後にミッシェル・ガン・エレファントが登場した時には、自分の耳は間違ってなかったと感動したものだ。リアルタイムで衝撃を受けたのはディー・ライト「90年にNYへ行った

小林祥晴

① The Stone Roses / The Stone Roses ② Is This It / The Strokes ③ Homework / Daft Punk ④ My Generation / The Who ⑤ The Velvet Underground / The Velvet Underground & Nico ⑥ Please Please Please Me / The Beatles ⑦ Neu! / Neu! ⑧ Specials / The Specials ⑨ Horses / Patti Smith ⑩ Definitely Maybe / Oasis ⑪ Up The Bracket / The Libertines ⑫ Unknown Pleasures / Joy Division ⑬ LCD Soundsystem / LCD Soundsystem ⑭ House Of Balloons / The Weeknd ⑮ Kick Out The Jams / MC5 ⑯ Endtroducing..... / DJ Shadow ⑰ To Hell With It / PinkPantheress ⑱ Dummy / Portishead ⑲ When We All Fall Asleep, Where Do We Go? / Billie Eilish ⑳ Vampire Weekend / Vampire Weekend ㉑ Elvis Presley / Elvis Presley ㉒ Channel Orange / Frank Ocean ㉓ The Smiths / The Smiths ㉔ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ㉕ Whatever People Say I Am,That's What I'm Not / Arctic Monkeys

客観性を基に時代やジャンルのバランスを取りながら作品を選出し、その歴史的重要性の大小に配慮して順位をつける…ということをやりだすと、とてもじゃないが1カ月の準備期間があっても全然時間が足りない。なので今回は、最低限の客観性は担保しつつ、自分がいちリスナーとして受けた影響の大きさを一番の基準としてランキングを作った（歴史的重要性から順位を変えた作品もある）。トップ3は10代〜20代前半に自分の音楽観を形成したアルバムなので、今後も順位が変わることはないと思いつつ、これは入らないだろうなと思いつつ推したビンカンサンスが、ちゃんとランク

CamScannerでスキャン

小松香里

① Channel Orange / Frank Ocean ② Born To Die / Lana Del Rey ③ James Blake / James Blake ④ Licensed To Ill / Beastie Boys ⑤ When We All Fall Asleep, Where Do We Go? / Billie Eilish ⑥ Is This It / The Strokes ⑦ Definitely Maybe / Oasis ⑧ Blue Lines / Massive Attack ⑨ xx / The xx ⑩ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑪ Rage Against The Machine / Rage Against The Machine ⑫ Supa Dupa Fly / Missy "Misdemeanor" Elliott ⑬ Ctrl / SZA ⑭ NewJeans / NewJeans ⑮ Brown Sugar / D'Angelo ⑯ Mura Masa / Mura Masa ⑰ Emergency On Planet Earth / Jamiroquai ⑱ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ⑲ Endtroducing..... / DJ Shadow ⑳ 3 Feet High And Rising / De La Soul ㉑ Baduizm / Erykah Badu ㉒ Homework / Daft Punk ㉓ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ㉔ Weezer / Weezer ㉕ Gorillaz / Gorillaz

人の好みや軸やスタイルはそうそう大きくは変わらない。となると、デビュー・アルバムでそのアーティストの核が全開となっている可能性は高く、だからこそどのアルバムが一番影響力があるかというと、デビュー・アルバムである確率は必然的に高くなる。25枚選ぶのはかなり迷ったが、影響力の高さに加えて、今でも愛聴しているアルバムを中心に選んだ。どのアルバムもいつ聴いても震えるほどの名盤であることを再確認しつつも、出会った頃と比べ、「これがなかったら●●も○○もいなかったんだろうな」という重みを感じることで、よりそのアルバムのことが尊く感じられ、とても楽しい時間だった。

小山守

① The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ② Faust / Faust ③ This Heat / This Heat ④ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑤ Selected Ambient Works 85-92 / Aphex Twin ⑥ James Blake / James Blake ⑦ John Lennon/Plastic Ono Band / John Lennon/Plastic Ono Band ⑧ Since I Left You / The Avalanches ⑨ Philosophy Of The World / The Shaggs ⑩ Neu! / Neu! ⑪ Dummy / Portishead ⑫ Songs Of Pain / Daniel Johnston ⑬ BCD / Basic Channel ⑭ Monster Movie / Can ⑮ The Madcap Laughs / Syd Barrett ⑯ Music Has The Right To Children / Boards Of Canada ⑰ Blue Lines / Massive Attack ⑱ Y / The Pop Group ⑲ Vincebus Eruptum / Blue Cheer ⑳ Suicide / Suicide ㉑ Sort Of / Slapp Happy ㉒ Silver Apples / Silver Apples ㉓ The Flying Lizards / The Flying Lizards ㉔ Psychedelic Sounds Of 13th Floor Elevators / 13th Floor Elevators ㉕ I Hear A New World / Joe Meek

ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのレコードを買った3万人全員がバンドを始めた、という有名な逸話に代表されるような、マイノリティ的な、あるいははみ出してしまった、狭い意味での〝世界〟というところを念頭に置いてセレクトした。対象が少数であったとしても、強烈な衝撃を確実に与えうる音楽ということだ。自己の頭の中に渦巻く得体の知れないナニモノかをどうにかして吐き出さなければならない、という異端者たちを救ったのは、既存の形態に頼ることなく果敢な実験精神と冒険心によって、新たな手法を生み出していった先達だろう。その連鎖が今も続いているからこそ、音楽はおもしろいのだと思う。

坂本哲哉

① Burial / Burial ② &&&&& / Arca ③ Selected Ambient Works 85-92 / Aphex Twin ④ Neu! / Neu! ⑤ xx / The xx ⑥ Oil Of Every Pearl's Un-Insides / Sophie ⑦ Vakio / Pan Sonic ⑧ Waveform Transmission Vol.1 / Jeff Mills ⑨ Blue Lines / Massive Attack ⑩ LCD Soundsystem / LCD Soundsystem ⑪ Pink Flag / Wire ⑫ Silver Apples Of The Moon / Morton Subotnick ⑬ Vernal Equinox / Jon Hassell ⑭ Cut / The Slits ⑮ Music Has The Right To Children / Boards Of Canada ⑯ Original Pirate Material / The Streets ⑰ Since I Left You / The Avalanches ⑱ F# A# ∞ / Godspeed You! Black Emperor ⑲ Channel Orange / Frank Ocean ⑳ Mirrored / Battles ㉑ Arular / M.I.A. ㉒ Suicide / Suicide ㉓ The Album / Mantronix ㉔ Liaisons Dangereuses / Liaisons Dangereuses ㉕ 1000 gecs / 100 gecs

優れたデビュー・アルバムは、時代の変化の気運を捉えたものであるという勝手な定義付けのもと、エレクトロニック・ミュージックを中心に、できるだけその時代の潮流からはみ出ている作品を選びました。リアルタイムで体験したものは思い出に引きずられて客観視できそうにないので極力避けましたが、それでもブリアルやアルカのデビュー作は時代の分岐点となる作品だと思います。アークティック・モンキーズは入ってくると思い、あえて外しましたが、入ってなかったのが少し意外でした。選者の方が挙げられたものを時代順に並び替えると、名盤を時代順に並べたものとは違うものが見えてくるような気がします。

佐藤英輔

① Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ② Please Please Me / The Beatles ③ Fishbone / Fishbone ④ Music From Big Pink / The Band ⑤ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑥ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ⑦ Club Classics Vol.1 / Soul II Soul ⑧ Come Away With Me / Norah Jones ⑨ Blue Lines / Massive Attack ⑩ Baduizm / Erykah Badu ⑪ Run-D.M.C. / Run-D.M.C. ⑫ Debut / Björk ⑬ Vivid / Living Colour ⑭ 3 Years, 5 Months And 2 Days In The Life Of... / Arrested Development ⑮ 3 Feet High And Rising / De La Soul ⑯ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑰ Déjà Vu / Crosby, Stills, Nash & Young ⑱ Timeless / Goldie ⑲ Channel Orange / Frank Ocean ⑳ The Doors / The Doors ㉑ Horses / Patti Smith ㉒ Diamond Life / Sade ㉓ Brown Sugar / D'Angelo ㉔ Bleach / Nirvana ㉕ In The Court Of The Crimson King / King Crimson

デビュー・アルバム、甘美な響きを持つな。溜め込んでいたものを、一気に押し出す。その後の華々しいキャリアの出発点であり、一度だけの門。そこには経験の浅さからくる戸惑いもあったかもしれないし、開き直った唯我独尊ぶりが投射されたかもしれない。なんにせよ、過去とは一線を画す芽が埋め込まれ、シーンに新たな概念を与えたなら最高すぎる。なんてことを思いつつ、頭に浮かんできたデビュー作をリスト・アップした。結局のところ、デビュー盤の存在を借りた音楽愛好歴の開陳となるか。スタートだからこそのマジック…それを意識し、幸せを感じた。1作だけで消えてしまった人を入れたかったが、思いつかず。

CamScannerでスキャン

佐藤幸江

① Fiona Apple / Fetch The Bolt Cutters ② Perfume Genius / Put Your Back N 2 It ③ The Beatles / Revolver ④ Nirvana / Nevermind ⑤ Arthur Russell / The Last Possession ⑥ Blur / 13 ⑦ Daft Punk / Discovery ⑧ Radiohead / OK Computer ⑨ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground & Nico ⑩ Pink Floyd / The Dark Side Of The Moon ⑪ The Beach Boys / Pet Sounds ⑫ The Rolling Stones / Exile On Main St. ⑬ Neil Young / Harvest ⑭ Joni Mitchell / Blue ⑮ Bob Dylan / Blood On The Tracks ⑯ Nina Simone / Pastel Blues ⑰ Aretha Franklin / I Never Loved A Man The Way I Love You ⑱ Marvin Gaye / What's Going On ⑲ Stevie Wonder / Songs In The Key Of Life ⑳ Prince / Sign O' The Times

島田奈央

① Cher / SZA ② Night Time, My Time / Sky Ferreira ③ Charli Cheese / Charli XCX ④ Frank Ocean / Blonde ⑤ Thank Me Later / Drake ⑥ Arular / M.I.A. ⑦ Straight Outta Compton / N.W.A. ⑧ Unknown Memory / Yung Lean ⑨ Pure Heroine / Lorde ⑩ Enter The Wu-Tang (36 Chambers) / Wu-Tang Clan ⑪ The Miseducation Of Lauryn Hill / Lauryn Hill ⑫ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑬ Finally Rich / Chief Keef ⑭ Die Lit / Playboi Carti ⑮ Illmatic / Nas ⑯ The Fame / Lady Gaga ⑰ Rage Against The Machine / Rage Against The Machine ⑱ The College Dropout / Kanye West ⑲ James Blake / James Blake ⑳ Long Live AAP / AAP Rocky ㉑ Tyla / Tyla ㉒ Dangerously In Love / Beyoncé ㉓ Causers Of This / Toro Y Moi ㉔ Section 8.0 / Kendrick Lamar ㉕ Greatest Hits / Sheck Wes ㉖ Rodeo / Travis Scott

清水祐也

① Jaako Sill / Jaako Sill ② #1 Record / Big Star ③ Five Leaves Left / Nick Drake ④ Music From Big Pink / The Band ⑤ Marquee Moon / Television ⑥ Curtis / Curtis Mayfield ⑦ If I Could Only Remember My Name / David Crosby ⑧ L'Enfant Assassin Des Mouches / Jean Claude Vannier ⑨ Arthur Verocai / Arthur Verocai ⑩ Mateo Solo Bien Se Lame / Eduardo Mateo ⑪ Suicide / Suicide ⑫ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ⑬ Jane Birkin / Serge Gainsbourg / Serge Gainsbourg & Jane Birkin ⑭ Os Mutantes / Os Mutantes ⑮ Funkadelic / Funkadelic ⑯ Emmit Rhodes / Emmit Rhodes ⑰ More Than A New Discovery / Laura Nyro ⑱ Begin / Millenium ⑲ One Year / Colin Blunstone ⑳ The Soft Machine / Soft Machine ㉑ Fifth Avenue Band / Fifth Avenue Band ㉒ Parallelograms / Linda Perhacs ㉓ Oar / Alexander Spence ㉔ Dr Buzzard's Original Savannah Band / Dr. Buzzard's Original Savannah Band ㉕ Buy / James Chance & The Contortions

高久大輝

① Brown Sugar / D'Angelo ② Cut / The Slits ③ Straight Outta Compton / N.W.A. ④ Of Of Every Pearl's Un Insides / Sophie ⑤ Illmatic / Nas ⑥ Tidal / Fiona Apple ⑦ Operation: Doomsday / MF Doom ⑧ Unknown Pleasures / Joy Division ⑨ 17 / XXXTentacion ⑩ Boy In Da Corner / Dizzee Rascal ⑪ Endtroducing..... / DJ Shadow ⑫ Finally Rich / Chief Keef ⑬ Timeless / Goldie ⑭ James Blake / James Blake ⑮ The College Dropout / Kanye West ⑯ LP1 / FKA Twigs ⑰ Funcrusher Plus / Company Flow ⑱ The Clash / The Clash ⑲ The Miseducation Of Lauryn Hill / Lauryn Hill ⑳ Incunabula / Autechre ㉑ Two Star & The Dream Police / Mk.gee ㉒ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ㉓ Channel Orange / Frank Ocean ㉔ Enter The Wu-Tang (36 Chambers) / Wu-Tang Clan ㉕ Third Eye Blind / Third Eye Blind

---

ラップ/ヒップホップの作品が多くランクされたのは、デビュー・アルバム、という形式、メディアのあり方自体が、終わりもなく特定の歴史性に規定されないダイナミックな存在だったのかもしれない、ということだ。現在の総括クリエイター/発信者時代において、デビュー、なる概念の絶対性は崩れつつあるし、デビュー、なる概念が剥ぎ出ているのは、承知の通りだ。そうしたことを認識した上で"歴史を変えたデビュー・アルバム"を選ぼうとするならば、やはり20世紀後半の視聴覚メディアを中心とした歴史観の枠組みを必要としているからなのか、それとも従来作を超える質に達しているからなのか。結果的に唯一作となったデビュー・アルバムは、特別な神話性を帯びているようにも感じた。

個人的な芯選では背伸びをせずにピックしようと望んだ結果、必然的に2010年代の作品が上位に集中した。2位のスカイ・フェレイラについては思い切った判断だったけれど、やはりTumblr美学を定義づけた作品だと思ったので選抜。Tumblr美学を形成した音楽についてはまだまだ議論の余地があるように思う。2020年以降に発表されたデビュー・アルバムで格別に印象を残す作品はまだ少なかった。それは単に時間の経過を必要としているからなのか、それとも従来作を超える質に達していないだけなのか。結果的に唯一作となったデビュー・アルバムは、特別な神話性を帯びているようにも感じた。

リアルタイムで衝撃を受けた作品に絞って選んだら面白味のないものになってしまったので、発売当時のセールスや評価とは関係なく、現代のアーティストに影響を与えていると思われる、(時間をかけて)歴史を変えた作品を選んでみました。リストの提出まで4日間しかなく、後で思い出して後悔した作品も多数。集計結果には概ね納得しつつも、それって単に「人気アーティストのデビュー作」なのでは？という作品もチラホラ。自分は音楽に歴史を変えることを必ずしも望んでいないし、デビュー作で歴史を変えてしまうようなアルバムをリリースすることは、アーティストにとってはむしろ不幸なのかもしれません。

今回、ソフィーの作品の原稿を書く前にA・G・クックがソフィーに宛てた素晴らしい追悼文を読み返していたところ、「表現の達人でありながら、心から後退を楽しむダフト・パンクに対する複雑な不満を共有した」という一文が目につきました。これは往々にして目新しいものと古めかしいものが混じり合うポップ・ミュージックをどう評価するべきかという点で、極めて重要な視点だと思います。何事もそうですが、0から1が生まれることはない。その上で進歩とは何か、後退とは何かを考えなければならないということかもしれません。特にデビュー作というのは、その姿勢も含めて試される場ではないでしょうか。

CamScannerでスキャン

高橋健太郎

① Music From Big Pink / The Band ② More Than A New Discovery / Laura Nyro ③ Chega de Saudade / João Gilberto ④ Curtis / Curtis Mayfield ⑤ Marquee Moon / Television ⑥ Specials / The Specials ⑦ Song Cycle / Van Dyke Parks ⑧ Greetings From Asbury Park, N.J. / Bruce Springsteen ⑨ Murmur / R.E.M. ⑩ Rickie Lee Jones / Rickie Lee Jones ⑪ Travessia / Milton Nascimento ⑫ Old Time Lady / Maria Muldaur ⑬ Horses / Patti Smith ⑭ The Modern Lovers / The Modern Lovers ⑮ Y / The Pop Group ⑯ My Aim Is True / Elvis Costello ⑰ James Blake / James Blake ⑱ World Clique / Deee-Lite ⑲ El Mario / Willie Colon ⑳ Club Classics Vol.1 / Soul II Soul ㉑ Antonio Loureiro / Antonio Loureiro ㉒ Blue Lines / Massive Attack ㉓ Debut / Björk ㉔ Room 25 / Noname ㉕ Love Affair / Mame Pierre

新しい音楽を聴くのが好きなので、必然的にデビュー・アルバムが好きである。しかし、今回選んだアルバムの多くは、新人のデビュー作としてリアルタイムで聴いたわけではなかった。そのアーティストに興味を持って、遡って聴いたものの方が多い。それでも、発表時の衝撃力が感じられるアルバム。そこで提示された新しい世界観が、その後のポピュラー音楽史を動かしたと思えるアルバムを選んだ。そういうアルバムは時を超えて、新しい音楽の響きを保ち続けているように感じられる。最後のマリー・ピエールなどはヒット作でもないし、彼女はこの1枚しか残さなかったが、そう感じられるのだよ、何十年も聴き続けて。

つやちゃん

① The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ② Black Sabbath / Black Sabbath ③ Kraftwerk / Kraftwerk ④ Straight Outta Compton / N.W.A. ⑤ Elvis Presley / Elvis Presley ⑥ After School Session / Chuck Berry ⑦ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑧ The Chronic / Dr. Dre ⑨ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑩ Ramones / Ramones ⑪ The 2 Live Crew Is What We Are / 2 Live Crew ⑫ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ⑬ Surfer Rosa / Pixies ⑭ Oil Of Every Pearl's Un-Insides / Sophie ⑮ James Blake / James Blake ⑯ Finally Rich / Chief Keef ⑰ Brown Sugar / D'Angelo ⑱ Debut / Björk ⑲ Dummy / Portishead ⑳ Slipknot / Slipknot ㉑ Bob Dylan / Bob Dylan ㉒ Homework / Daft Punk ㉓ Unknown Pleasures / Joy Division ㉔ The Rolling Stones / The Rolling Stones ㉕ Iron Maiden / Iron Maiden

普段、デビュー作という切り口で音楽史を考えることがないため、良い機会になった。デビュー作で歴史を変えるというのは狙ってできることではないし、ほとんどの場合は感性の勝利と言ってよいのだろう。ただ、「歴史を変えた」という語義をそのまま受け取ってセレクトするとどうしても過去の作品で埋まってしまうため、できるだけ近い時代のものも選出。同じことを考えた選者が多かったのか、意外にも21世紀リリースの作品が多数ランク・インしていて驚いた。自身の選盤では、ロック史というよりもどちらかというとポップ史を捉えて選んだがゆえ、2ライヴ・クルーやチーフ・キーフをねじ込んでいるのがポイント。

土佐有明

① Swoon / Prefab Sprout ② Song To A Seagull / Joni Mitchell ③ The Smiths / The Smiths ④ Monster Movie / Can ⑤ High Land, Hard Rain / Aztec Camera ⑥ A.M. / Wilco ⑦ Cheap Trick / Cheap Trick ⑧ Freak Out! / Frank Zappa & Mothers Of Invention ⑨ Feelin' Groovy / Harpers Bizarre ⑩ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ⑪ This Heat / This Heat ⑫ Selected Ambient Works 85-92 / Aphex Twin ⑬ Blue Lines / Massive Attack ⑭ Killing Time / Massacre ⑮ White Music / XTC ⑯ McCartney / Paul McCartney ⑰ Weezer / Weezer ⑱ Safe As Milk / Captain Beefheart And His Magic Band ⑲ The Clash / The Clash ⑳ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ㉑ Dinosaur / Dinosaur Jr. ㉒ 3 Feet High And Rising / De La Soul ㉓ Licensed To Ill / Beastie Boys ㉔ Ramones / Ramones ㉕ The Madcap Laughs / Syd Barrett

印象的なデビュー・アルバム、といってまっさきに思いついたのはヴェルヴェット・アンダーグラウンドで、おそらくこれが1位になるだろうなと思いました。結果は予測通り。ビートルズやザ・バンド、ディアンジェロも順当なところで、自分はあえてひとひねりしたランキングをつくりました。ただ、同作のように既に1枚目で完成されているのは珍しい例でしょう。僕が上位にあげたアズテック・カメラも同様。個人的には、まだ未完成だが才能の萌芽が端々から感じられるのがファースト・アルバムの典型的な作風かなと思います。その意味では、自分が選出したウィルコのファーストがそれにあたるかも。

萩原健太

① Music From Big Pink / The Band ② Elvis Presley / Elvis Presley ③ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ④ Q: Are We Not Men? A: We Are Devo! / Devo ⑤ Please Please Me / The Beatles ⑥ The Doors / The Doors ⑦ Ramones / Ramones ⑧ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑨ The Gilded Palace Of Sin / The Flying Burrito Brothers ⑩ Licensed To Ill / Beastie Boys ⑪ Eagles / Eagles ⑫ Songs Of Leonard Cohen / Leonard Cohen ⑬ Weezer / Weezer ⑭ Grace / Jeff Buckley ⑮ When We All Fall Asleep, Where Do We Go? / Billie Eilish ⑯ My Aim Is True / Elvis Costello ⑰ Beauty And The Beat / The Go-Go's ⑱ The B-52's / The B-52's ⑲ #1 Record / Big Star ⑳ Horses / Patti Smith ㉑ Brown Sugar / D'Angelo ㉒ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ㉓ Marquee Moon / Television ㉔ Tidal / Fiona Apple ㉕ The Pretenders / The Pretenders

この種のアルバム選に参加させてもらうたびに思う。ポップ・シーンがアルバム中心になったのは66〜67年ごろ以降で。それ以前のアルバムというのは基本的にはシングル・ヒットの寄せ集め。曲数が足りない場合は何かカヴァーで適当に埋めるとか。その種のベスト盤的なものが多かった。今回ベスト100入りしたリトル・リチャードとかチャック・ベリーとかもそんな感じ。今思うような表現メディアではなかった。とともに、ストリーミング中心へと完全シフトした最近は最近でまた従来のアルバムという〝器〟の意味がなくなっているみたいだし。アルバムで音楽を語れる時代って、今やずいぶん限られてしまったのかも。

CamScannerでスキャン

長谷川町蔵

① Enter The Wu-Tang (36 Chambers) / Wu-Tang Clan ② Specials / The Specials ③ Song Cycle / Van Dyke Parks ④ El Maro / Willie Colon ⑤ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑥ Run-D.M.C. / Run-D.M.C. ⑦ Eden / Everything But The Girl ⑧ Paid In Full / Eric B. & Rakim ⑨ Curtis / Curtis Mayfield ⑩ The Smiths / The Smiths ⑪ Songs To Remember / Scritti Politti ⑫ Cypress Hill / Cypress Hill ⑬ For You / Prince ⑭ Maxwell's Urban Hang Suite / Maxwell ⑮ Illmatic / Nas ⑯ In The City / The Jam ⑰ Rufus Wainwright / Rufus Wainwright ⑱ Channel Orange / Frank Ocean ⑲ Brilliant Trees / David Sylvian ⑳ Dr Buzzard's Original Savannah Band / Dr. Buzzard's Original Savannah Band ㉑ Blue Lines / Massive Attack ㉒ Ready To Die / The Notorious B.I.G. ㉓ Man On The Moon: The End Of Day / Kid Cudi ㉔ Ctrl / SZA ㉕ Vampire Weekend / Vampire Weekend

ポップ・ミュージック史上の価値以上に、リアルタイムで聴いた時のインパクト重視のセレクト。このため後追いで聴いたアルバムは9枚に抑えた。エヴリンシング・パット・ザ・ガールは、コンビを組んだらいきなり大人になったことが、逆にパンクに感じられたものだった。サイプレス・ヒルはロサンゼルスのヒスパニック・カルチャーを教えてくれた恩義から、マックスウエルはワン・ナイト・ラヴ・アフェアーがテーマのコンセプト作だと思ったら、ラストでプロポーズしてしまうという超絶展開に、ブロムに行けなかった男の哀愁を見出して

早坂英貴

① Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ② Please Please Please / James Brown & His Famous Flames ③ Elvis Presley / Elvis Presley ④ Straight Outta Compton / N.W.A. ⑤ Please Please Me / The Beatles ⑥ Chega De Saudade / João Gilberto ⑦ Something Else!!!! / Ornette Coleman ⑧ A Whole New Thing / Sly And The Family Stone ⑨ Selected Ambient Works 85-92 / Aphex Twin ⑩ Kraftwerk / Kraftwerk ⑪ Music From Big Pink / The Band ⑫ The Allman Brothers Band / The Allman Brothers Band ⑬ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑭ Fela Ransome Kuti & His Koola Lobitos / Fela Ransome Kuti & His Koola Lobitos ⑮ Unknown Pleasures / Joy Division ⑯ In The Court Of The Crimson King / King Crimson ⑰ The Meters / The Meters ⑱ Black Sabbath / Black Sabbath ⑲ The Stooges / The Stooges ⑳ Miriam Makeba / Miriam Makeba ㉑ Paid In Full / Eric B. & Rakim ㉒ Brown Sugar / D'Angelo ㉓ Cluster / Cluster ㉔ Vincebus Eruptum / Blue Cheer ㉕ Silver Apples / Silver Apples

「デビュー作がいかに既存ジャンルの前提を塗り替えたか」という一点において選出しました。単なるキャリアの最初の1枚ではなく、ジェームス・ブラウンやジミ・ヘンドリックス、あるいはクラフトワーク（2026年現在だと最もメインストリームへのインパクトが大きいように感じます）のように、その後半世紀にわたる音楽の〝物差し〟を決定づけてしまった作品を優先した結果です。セールスや作品としての完成度以上に、「演奏技法」「サウンド設計」「ビートの解釈」「ヴォーカルの感情表現」「スタジオの活用法」といった、音楽の〝やり方そのもの〟を根底から変えたア

林剛

① What's The 411? / Mary J. Blige ② Brown Sugar / D'Angelo ③ Never Too Much / Luther Vandross ④ Illmatic / Nas ⑤ The Chronic / Dr. Dre ⑥ Whitney Houston / Whitney Houston ⑦ Guy / Guy ⑧ Everything Is Everything / Donny Hathaway ⑨ 3 Feet High And Rising / De La Soul ⑩ Freudian / Daniel Caesar ⑪ Club Classics Vol.1 / Soul II Soul ⑫ The Stylistics / The Stylistics ⑬ The Miseducation Of Lauryn Hill / Lauryn Hill ⑭ Emergency On Planet Earth / Jamiroquai ⑮ Kirk Franklin And The Family / Kirk Franklin And The Family ⑯ Please Please Please / The Beatles ⑰ Songs In A Minor / Alicia Keys ⑱ Green Onions / Booker T. & The M.G.s ⑲ Diana Ross Presents The Jackson 5 / The Jackson 5 ⑳ The College Dropout / Kanye West ㉑ Just As I Am / Bill Withers ㉒ Supa Dupa Fly / Missy "Misdemeanor" Elliott ㉓ In My Own Words / Ne-Yo ㉔ The Fame / Lady Gaga ㉕ Diamond Life / Sade

ロック専門誌かと思った。個人ランキングの集計結果とはいえ、元祖ニュー・ジャック・スウィングのガイ、ヒップホップ・ソウルの扉を開いたメアリー・J・ブライジ、アシッド・ジャズの象徴だったジャミロクワイのデビュー作も入選しないとは。ホイットニーもアウトキャストも…。それなのにディアンジェロやフランク・オーシャンが上位なのが、わかりやすくロック的。歴史の改竄とまでは言わないが、初作の革新性よりアーティストの功績に力点が置かれた印象。もっともこんな結果も予想していたので、自分はほぼR&B／ヒップホップに絞り、各ザブジャンルでエポックとなるか作品を選んだ。もはや故郷の外ですが。

原雅明

① Brown Sugar / D'Angelo ② Dummy / Portishead ③ Yo! Bum Rush The Show / Public Enemy ④ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑤ Something Else!!!! / Ornette Coleman ⑥ Endtroducing..... / DJ Shadow ⑦ Supa Dupa Fly / Missy "Misdemeanor" Elliott ⑧ Just As I Am / Bill Withers ⑨ Blue Lines / Massive Attack ⑩ The Pretenders / The Pretenders ⑪ 3 Feet High And Rising / De La Soul ⑫ Illmatic / Nas ⑬ Curtis / Curtis Mayfield ⑭ Freak Out! / Frank Zappa & Mothers Of Invention ⑮ Suicide / Suicide ⑯ Channel Orange / Frank Ocean ⑰ Bizarre Ride II The Pharcyde / Pharcyde ⑱ Songs Of Leonard Cohen / Leonard Cohen ⑲ The Madcap Laughs / Syd Barrett ⑳ Baduizm / Erykah Badu ㉑ Paid In Full / Eric B. & Rakim ㉒ The Lounge Lizards / The Lounge Lizards ㉓ This Heat / This Heat ㉔ The Modern Lovers / The Modern Lovers ㉕ The College Dropout / Kanye West

デビュー・アルバムの衝撃というものが、ジャズだとあまりないことに気がついた。それが個人的には今回の収穫だったのかもしれない。ジャズは学んだ道筋を辿った成果として録音の機会に恵まれていたが、一方で持たざる者たちが発明した音楽は録音そのものが表現であり、その衝撃は大きかった（そこの違いは今ではだいぶなくなってきたとも思うが）。その意味で、ディアンジェロの『Brown Sugar』は宅録のオタク性と伝統を踏まえたジャズ的とも言えるスタンスが融合を果たした稀有なアルバムだったのかもしれない。今回はデビュー・アルバムという枠であれこれ考える良いきっかけをもらった。

CamScannerでスキャン

鈴木啓介

① The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ② Music From Big Pink / The Band ③ Marquee Moon / Television ④ Fifth Avenue Band / Fifth Avenue Band ⑤ More Than A New Discovery / Laura Nyro ⑥ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ⑦ The Smiths / The Smiths ⑧ The Modern Lovers / The Modern Lovers ⑨ Please Please Me / The Beatles ⑩ Philosophy Of The World / The Shaggs ⑪ The Piper At The Gates Of Dawn / Pink Floyd ⑫ #1 Record / Big Star ⑬ Horses / Patti Smith ⑭ When We All Fall Asleep, Where Do We Go? / Billie Eilish ⑮ Unknown Pleasures / Joy Division ⑯ Suicide / Suicide ⑰ Song Cycle / Van Dyke Parks ⑱ Young Marble Giants / Young Marble Giants ⑲ Cut / The Slits ⑳ Sort Of / Slapp Happy ㉑ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ㉒ Neu! / Neu! ㉓ Q: Are We Not Men? A: We Are Devo! / Devo ㉔ Licensed To Ill / Beastie Boys

デビュー作の〝衝撃〟については、リアルタイムのそれと後追いが混合するのはもはや普通。なので、そのアルバムを聴いて自分の音楽をやりたくなったか？という基準で。あと、少し前までは、海外の感覚とズレてる日本の洋楽受容を気にして、日本的感覚に寄りすぎないほうがいいと考えてたところもあったけど、今回はむしろ日本特有の事情に触れたくなって、あえてティラス・アヴェニュー・バンドを入れた。彼らがいなければやシュガー・ベイブもなかったし。お手本みたいなランキングになるより、日本はこういう感じ、が見えたほうが海外からは面白がってもらえるかもねと思ったけど、結果はランク外！　残念！

新保昭祥

① Brian Wilson / Brian Wilson ② Curtis / Curtis Mayfield ③ Waveform Transmission Vol 1 / Jeff Mills ④ Soro / Salif Keita ⑤ Please Please Me / The Beatles ⑥ Bel Mono / David Byrne ⑦ Shopping / 3 Mustaphas 3 ⑧ Surfin' Safari / The Beach Boys ⑨ Caetano Veloso / Caetano Veloso ⑩ Song Cycle / Van Dyke Parks ⑪ 3 Feet High And Rising / De La Soul ⑫ 3 Years, 5 Months And 2 Days In The Life Of... / Arrested Development ⑬ Miah / Les Negresses Vertes ⑭ Barbes / Rachid Taha ⑮ Randy Newman / Randy Newman ⑯ The End Of An Ear / Robert Wyatt ⑰ Definitely Maybe / Oasis ⑱ The New Sounds / Miles Davis ⑲ Talking Heads: 77 / Talking Heads ⑳ White Music / XTC ㉑ Gris-Gris / Dr.John ㉒ For You / Prince ㉓ Peter Gabriel / Peter Gabriel ㉔ My Aim Is True / Elvis Costello ㉕ Swoon / Prefab Sprout

本誌でワールド・ミュージック関連の記事を書くことが多い立場としては、アフリカ、南米、アラブのアーティストは、〝デビュー・アルバム〟に当たるものが何かを規定するのが困難なこともあり、今回の悔いとして残った。欧米のアーティストについては、デビュー・アルバムは特に好きじゃないかも……という身も蓋もない所感も。自分の場合は、何作か発表して脂の乗った時期が好みのようだ。それでも「これは！」と1位に挙げたブライアン・ウィルソンがベスト100にランク・インしていない……というか、そもそもビーチ・ボーイズの名前すらない事実に唖然として、何度も文字列を検索してしまった。マジか。

花尾栄一

① The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ② Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ③ Neu! / Neu! ④ Y / The Pop Group ⑤ The Stooges / The Stooges ⑥ Monster Movie / Can ⑦ Isn't Anything / My Bloody Valentine ⑧ In The Court Of The Crimson King / King Crimson ⑨ The Doors / The Doors ⑩ Horses / Patti Smith ⑪ The Piper At The Gates Of Dawn / Pink Floyd ⑫ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ⑬ Music From Big Pink / The Band ⑭ Definitely Maybe / Oasis ⑮ Licensed To Ill / Beastie Boys ⑯ Q: Are We Not Men? A: We Are Devo! / Devo ⑰ Kick Out The Jams / MC5 ⑱ My Generation / The Who ⑲ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ⑳ Marquee Moon / Televison ㉑ Cut / The Slits ㉒ Dummy / Portishead ㉓ Freak Out! / Frank Zappa & Mothers Of Invention ㉔ Debut / Björk ㉕ Slanted And Enchanted / Pavement

デビュー・アルバムは初期衝動の塊だ。テクニックは未熟でも、とにかくやりたいことは全部やりたいという自分勝手さ。誇大妄想気味のアイデアや現状に対する怒りに突き動かされて、世界に斬り込んでいこうとする決意。そういったエネルギーの痕跡が残っているアルバムに惹かれる。とはいえ、歴史を変えたアルバムなんてざらにあるもんじゃないし、それがデビュー・アルバムであればなおさら少ない。あれこれ選びながら、結局これは自分の意識を変えたアルバムなんだと思った。そこにデビュー・アルバムより陽が当たることが少ない2作目を並べてみると、違った角度でバンドの個性が浮かび上がってくるのも面白い。

牧田謙一

① Marquee Moon / Television ② Please Please Me / The Beatles ③ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ④ Q: Are We Not Men? A: We Are Devo! / Devo ⑤ 3 Feet High And Rising / De La Soul ⑥ Freak Out! / Frank Zappa & Mothers Of Invention ⑦ Talking Heads: 77 / Talking Heads ⑧ Violent Femmes / Violent Femmes ⑨ Crazy Rhythms / The Feelies ⑩ Kick Out The Jams / MC5 ⑪ Vincebus Eruptum / Blue Cheer ⑫ My Aim Is True / Elvis Costello ⑬ Pink Flag / Wire ⑭ Cut / The Slits ⑮ Specials / The Specials ⑯ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑰ Jesus Of Cool / Nick Lowe ⑱ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑲ Ramones / Ramones ⑳ Fishbone / Fishbone ㉑ Damned Damned Damned / Damned ㉒ Suicide / Suicide ㉓ McCartney / Paul McCartney ㉔ Kinks / Kinks ㉕ Song Cycle / Van Dyke Parks

『イエスの世界』みたいに、ジャケにバンド名のロゴだけが描かれているやつ、とか。あるいは、オールマン・ブラザーズ・バンドみたいに、メンバー全員が映ってるやつ、とか。はたまた、『エルヴィス・プレスリー登場』とか、『野獣生誕』とか『警告!!THE EP5の来襲』みたいに、ファースト・アルバムならではの邦題がついてるやつ、とか。そんなチョイスをしてもよかったんですが、今回は、頭に思い浮かんだ順に並べてみました。どうしても、リアルタイムで出逢った盤が多いです。あ、ヤング・マーブル・ジャイアンツ、入れ忘れた！　そういえば、1枚だけしか出てない、というテーマもありでした。

湯浅湾岸

① Philosophy Of The World / The Shaggs ② Freak Out / Frank Zappa & Mothers Of Invention ③ Please Please Me / The Beatles ④ Meet The Residents / The Residents ⑤ Ramones / Ramones ⑥ The Stooges / The Stooges ⑦ Pink Flag / Wire ⑧ Elvis Presley / Elvis Presley ⑨ At Her School Session / Chuck Berry ⑩ Here's Little Richard / Little Richard ⑪ Bo Diddley / Bo Diddley ⑫ The Coasters / The Coasters ⑬ The Parable Of Arable Land / Red Krayola ⑭ Y / The Pop Group ⑮ Cut / The Slits ⑯ The Raincoats / The Raincoats ⑰ Run-D.M.C. / Run-D.M.C. ⑱ Yo! Bum Rush The Show / Public Enemy ⑲ Gris-Gris / Dr.John ⑳ Song Cycle / Van Dyke Parks ㉑ Small Faces / Small Faces ㉒ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ㉓ Unknown Pleasures / Joy Division ㉔ GI / Gang Of Four ㉕ Systems ㉖ Marquee Moon / Television

ビートルズのファーストといえば日本盤『ビートルズ！』と答える身ではあるが、本で最初に出たのが編集盤だったり実はカンドだったりするのが珍しくなかった代に音楽に目覚めたことを、この企画で認識させられた。青き、勢い、向こうみな相暴さは、しかし、古びない。むしろ慮の行き届いたもののほうが経年劣化したりする。いつの世にも世間知らずはいる。いびつな感性はある。バランス感覚の持ち主の苦言はしばしばつまらないものだ。人の意見を無視したからこそ生まれた作品、世に出られた人、生き残った歌の数々は、人の顔色うかがってるヒマがあるなら自分のやりたいことを貫け、といっている。

湯浅湾岸

① The Stone Roses / The Stone Roses ② Blue Lines / Massive Attack ③ Original Pirate Material / The Streets ④ Ramones / Ramones ⑤ xx / The xx ⑥ High Land, Hard Rain / Aztec Camera ⑦ Unknown Pleasures / Joy Division ⑧ Psychodrama / Dave ⑨ The Smiths / The Smiths ⑩ Endtroducing..... / DJ Shadow ⑪ Cake Trash Can Sinatras ⑫ Eden / Everything But The Girl ⑬ New Forms / Roni Size & Reprazent ⑭ Channel Orange / Frank Ocean ⑮ Psychocandy / The Jesus And Mary Chain ⑯ Germfree Adolescents / X-Ray Spex ⑰ The Miseducation Of Lauryn Hill / Lauryn Hill ⑱ Whatever People Say I Am,That's What I'm Not / Arctic Monkeys ⑲ 3 Feet High And Rising / De La Soul ⑳ Please / Pet Shop Boys ㉑ Boy In Da Corner / Dizzee Rascal ㉒ Crooks & Lovers / Mount Kimbie ㉓ James Blake / James Blake ㉔ Settle / Disclosure ㉕ The Clash / The Clash

リスナーとして直感的に衝撃を受けたことを第1条件とし、次に現在の自分の耳で聴いて今も心が躍る作品であることを確認して選んだ25枚。聴き込んで理解していったのではなく、ファースト・コンタクトで有無も言わさずに押し切られたという点で、まさに個人的な嗜好が露わになっている。音楽を聴いてきた年数が増えるにつれての既知感の高まりや、新たなジャンルやスタイルが生まれにくくなってきた状況下なので、まっさらな感性で音楽と接していた10代の頃のような頻繁な出会いは少なくなったが、今でも年に数度は心を奪われるデビュー作に出会っている。だからこそ、今も音楽を聴くことをやめられないのだろう。

和田信一郎

① Music From Big Pink / The Band ② Scum / Napalm Death ③ Heat / Heat ④ Brown Sugar / D'Angelo ⑤ James Blake / James Blake ⑥ Killing Time / Massacre ⑦ Dummy / Portishead ⑧ Mr. Bungle / Mr. Bungle ⑨ In The Court Of The Crimson King / King Crimson ⑩ Focus / Cynic ⑪ BCD / Basic Channel ⑫ Marquee Moon / Television ⑬ Selected Ambient Works 85-92 / Aphex Twin ⑭ Bad Brains / Bad Brains ⑮ LP1 / FKA Twigs ⑯ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑰ Heart Of The Congos / Congos ⑱ 1000 gecs / 100 gecs ⑲ Bergtatt: Et Eventyr I 5 Capitler / Ulver ⑳ Freak Out! / Frank Zappa & Mothers Of Invention ㉑ The Feeding Of The 5000 / Crass ㉒ This Heat / This Heat ㉓ Trend And Other Diseases / Mats / Morgan ㉔ Calculating Infinity / The Dillinger Escape Plan ㉕ Jaco Pastorius / Jaco Pastorius

「後に名声を得たアーティストのデビュー作」よりも「内容が優れていて影響力も大きい作品」を選んだ。結果を拝見すると、それ自体が歴史を変えたわけではないアルバムも多い気がする。選外となった作品について補記すると、ナパーム・デスの初作は、80年代の地下シーンで培われた音楽語彙を集約し90年代ロック／前衛音楽の豊穣（各メンバーは多彩なサブジャンルの創始者）に繋げた記念碑的名盤であり、メタルやハードコア云々に留まらない超重要作だ。ミスター・バングルなどにも言えることだが、従来の常識（ジャンル認識に偏りがある）では不当に軽視されてきた越境的傑作が多い。今後も再評価を進めていきたい。

瀬川昌久

① Debut / Björk ② More Than A New Discovery / Laura Nyro ③ 3 Feet High And Rising / De La Soul ④ Five Leaves Left / Nick Drake ⑤ Domingo / Gal Costa ⑥ And Caetano Veloso / The Nightfly / Donald Fagen ⑦ Brown Sugar / D'Angelo ⑧ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ⑨ Specials / The Specials ⑩ Blue Lines / Massive Attack ⑪ Music From Big Pink / The Band ⑫ Grace / Jeff Buckley ⑬ Dummy / Portishead ⑭ Tidal / Fiona Apple ⑮ Please Please Me / The Beatles ⑯ Baduizm / Erykah Badu ⑰ Horses / Patti Smith ⑱ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑲ Song Cycle / Van Dyke Parks ⑳ The Doors / The Doors ㉑ Marquee Moon / Television ㉒ My Aim Is True / Elvis Costello ㉓ First Take / Roberta Flack ㉔ Songs Of Leonard Cohen / Leonard Cohen ㉕ Cut / The Slits

僕は、よく言われる〝「プリーズ・プリーズ・ミー」を初めて聞いたとき、体中に電流が走った〟ところか、ビートルズの解散時から洋楽を真剣に聞き始めた世代だ。よって60年代のデビュー・アルバムはすべて後聞きで、リアルタイムで最初に衝撃を覚えたのは、70年代後半のパンク～ニュー・ウェイヴ系のものになる。今回参加させてもらって、長いキャリアを誇るアーティストほど、デビュー・アルバムが最高傑作というケースが少ないことを再認識。その意味で、デ・ラ・ソウルの『スリー・フィート・ハイ・アンド・ライジング』は、少なくとも現時点において、革新性と時代を超えた普遍性を併せ持つ傑作だと思う。

CamScannerでスキャン

伊賀文晃（本誌編集部）

① Operation: Doomsday / MF Doom ② Black Sabbath / Black Sabbath ③ Brown Sugar / D'Angelo ④ Rage Against The Machine / Rage Against The Machine ⑤ Southernplayalisticadillacmuzik / Outkast ⑥ Finally Rich / Chief Keef ⑦ Endtroducing..... / DJ Shadow ⑧ 17 / XXXTentacion ⑨ Slipknot / Slipknot ⑩ The Chronic / Dr. Dre ⑪ No More Mr. Nice Guy / Gang Starr ⑫ Iron Maiden / Iron Maiden ⑬ Os Mutantes / Os Mutantes ⑭ Lord Willin' / Clipse ⑮ Boy In Da Corner / Dizzee Rascal ⑯ The College Dropout / Kanye West ⑰ Welcome To Hell / Venom ⑱ Homework / Daft Punk ⑲ Is This It / The Strokes ⑳ Hybrid Theory / Linkin Park ㉑ Paid In Full / Eric B. & Rakim ㉒ Oil Of Every Pearl's Un-Insides / Sophie ㉓ Begin / Millenium ㉔ Enter The Wu-Tang (36 Chambers) / Wu-Tang Clan ㉕ Ready To Die / The Notorious B.I.G.

〝好きなアーティスト・ランキング〟ではないんだぞ…と何度も自分に言い聞かせながら、あくまで初作のインパクトの大きさで選ぶようにしましたが、やはり25枚に絞る上ではそうも言ってられませんでした。1位は現在のアンダーグラウンド／オルタナティヴ・ヒップホップ・シーンの充実を鑑みて。マジで当たり前の話で笑っちゃうくらいなんですが、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドがまだいなかった時にヴェルヴェット・アンダーグラウンドをやる、ってガチでやばくないですか。今回選ばれた100枚は全部「○○がいない時に○○をやった」作品なわけで、考えれば考えるほどありえなくて、笑いが止まりません。

久保太郎（本誌編集部）

① The Return Of The Durutti Column / The Durutti Column ② 25 Years Later / Blaze ③ Café Bleu / The Style Council ④ Kinks / Kinks ⑤ Cartola / Cartola ⑥ An Evening With Silk Sonic / Silk Sonic ⑦ North Marine Drive / Ben Watt ⑧ El Maro / Willie Colón ⑨ New Forms / Roni Size / Reprazent ⑩ High Land, Hard Rain / Aztec Camera ⑪ The Hurting / Tears For Fears ⑫ Specials / The Specials ⑬ Marquee Moon / Television ⑭ The Kick Inside / Kate Bush ⑮ A Jackson In Your House / The Art Ensemble Of Chicago ⑯ Greetings From Asbury Park, N.J. / Bruce Springsteen ⑰ Chega De Saudade / João Gilberto ⑱ John Lennon / Plastic Ono Band / John Lennon/Plastic Ono Band ⑲ Soro / Salif Keita ⑳ Closing Time / Tom Waits ㉑ Ctrl / SZA ㉒ Swoon / Prefab Sprout ㉓ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ㉔ The Doors / The Doors ㉕ Music From Big Pink / The Band

まず素直に自分が愛聴してきたデビュー・アルバムをざっと選んだところ軽く40作は超えたので〝歴史を変えた〟を条件に絞り込んだんですが…あれ？　あまりベスト100に入っていませんでした。米黒人解放運動をハウスで一大絵巻にしたブレイズとか、サンバ復興の象徴であるカルトーラとか、黒光りするフリー・ジャズの元祖アート・アンサンブル・オブ・シカゴとか、ワールド・ミュージックの嚆矢であるサリフ・ケイタとか…。そんななか、訃報が飛び込んできたウィリー・コローンが選出されたのは、バッド・バニーのスーパーボウル・ハーフタイム・ショーで燃えた流れもありひと安心。カッコいいですよ！

矢川俊介（本誌編集部）

① Please Please Me / The Beatles ② Dust Bowl Ballads / Woody Guthrie ③ The Velvet Underground & Nico / The Velvet Underground ④ Never Mind The Bollocks, Here's The Sex Pistols / The Sex Pistols ⑤ Please Please Please / James Brown & His Famous Flames ⑥ Chega De Saudade / João Gilberto ⑦ Music From Big Pink / The Band ⑧ Horses / Patti Smith ⑨ Elvis Presley / Elvis Presley ⑩ Brown Sugar / D'Angelo ⑪ Led Zeppelin I / Led Zeppelin ⑫ In The Court Of The Crimson King / King Crimson ⑬ Domingo / Gal Costa And Caetano Veloso ⑭ Are You Experienced? / The Jimi Hendrix Experience ⑮ Diana Ross Presents The Jackson 5 / The Jackson 5 ⑯ Straight Outta Comtpon / N.W.A. ⑰ Just Another Diamond Day / Vashti Bunyan ⑱ Licensed To Ill / Beastie Boys ⑲ Channel Orange / Frank Ocean ⑳ The Stone Roses / The Stone Roses ㉑ Song Cycle / Van Dyke Parks ㉒ Songs Of Pain / Daniel Johnston ㉓ Roger Nichols & The Small Circle Of Friends / Roger Nichols & The Small Circle Of Friends ㉔ Baduizm / Erykah Badu ㉕ James Blake / James Blake

1940年にSP盤6枚組で発表された『ウディ・ガスリー『ダスト・ボウル・バラッズ』』は今回の100枚よりずっと古い〝デビュー・アルバム〟だ。それまで民衆のささやかな娯楽でしかなかったフォーク・ミュージックを、苦境に生きる民衆が主体となって社会を批評する手段に変えた作品であり、その後のアメリカ音楽の可能性を完全に塗り替えた。これがなければボブ・ディランもブルース・スプリングスティーンもなかったし、そのアティテュードは後のパンク、ヒップホップにも連なるものだ。…と改めて考えると、また音楽の聞こえ方が変わる。そして今日もまだ知らぬ誰かが、デビュー・アルバムを制作している。

渡辺裕也（本誌編集部）

① Is This It / The Strokes ② Channel Orange / Frank Ocean ③ Original Pirate Material / The Streets ④ To Hell With It / PinkPantheress ⑤ The College Dropout / Kanye West ⑥ Homework / Daft Punk ⑦ Since I Left You / The Avalanches ⑧ Up The Bracket / The Libertines ⑨ Here's Little Richard / Little Richard ⑩ Whatever People Say I Am,That's What I'm Not / Arctic Monkeys ⑪ The Doors / The Doors ⑫ Night Time, My Time / Sky Ferreira ⑬ The Velvet Underground / The Velvet Underground ⑭ &&&& / Arca ⑮ LCD Soundsystem / LCD Soundsystem ⑯ House Of Balloons / The Weeknd ⑰ Debut / Björk ⑱ Arular / M.I.A. ⑲ Horses / Patti Smith ⑳ NewJeans / NewJeans ㉑ Burial / Burial ㉒ Oil Of Every Pearl's Un-Insides / Sophie ㉓ Tyla / Tyla ㉔ In Search Of... / N.E.R.D. ㉕ The ArchAndroid / Janelle Monáe

名盤とされるアルバムを試しに聴いたら、その歴史的な意義はなんとなく理解できるんだけど、どうしてもピンとこなかった、みたいな経験が誰にでもあると思う。さて、ここに選ばれた100枚はどうだろう。まわりの空気を読まず、トレンドに追従したわけでもなく、むしろその流れに抗った若者たちが残した、たった1枚のデビュー作。リリース当時はその突飛さや斬新な発想で評価された作品も、あとになって聴くと、その斬新さと引き換えの粗さや捻さの方が、何者にも代え難い魅力として響いてくることがある。未整理な部分にこそ魂は宿るのだなと。やっぱり勢いは大事だ。俺も遠慮してちゃダメだなと再確認した思いです。

CamScannerでスキャン

ニュー・スタンダード 2020s

New Standards 2020s

いま注目されるシーンに至る歴史的な流れを現在の視点から辿るディスク・ガイド

第74回

テキサスのシンガー・ソングライター

選＝山口智男

アメリカのテキサスを代表するシンガー・ソングライター、ジョー・イーリーが昨年12月15日に亡くなった。パーキンソン病とレビー小体型認知症と闘いながら、24年8月に'Driven To Drive'、25年2月に'Love+Freedom'という、それまで彼が発表してきた20枚を超えるアルバム・ディスコグラフィーの中でもトップ5に入るんじゃないかという傑作を立て続けにリリースしたことに加え、さらなる新作にも取り組んでいたことを考えると、その死は早すぎたと言わざるを得ない。

生まれは47年。15歳の頃、テキサス北西部の町、ラボックでセミプロのロックンロール・バンドのフロントマンとして歌い始めたという。77年のソロ・デビューはカントリー・シンガーとしてだった。しかし、その後、ザ・クラッシュとアメリカとイギリスをツアーするなど、常にカントリーとロックの交差点で活動しつづけてきたことや、72年にジミー・デイル・ギルモア、ブッチ・ハンコックとともに結成したフラットランダーズが唯一残したアルバム'All American Music'（73年）が再評価され、90年代、ジョーはオルタナ・カントリーの先駆者と謳われるようになった。後にウィルコとサン・ヴォルトに分裂したオルタナ・カントリーを代表するバンド＝アンクル・テュペロによる、ウェイロン・

ジョー・イーリー（写真＝Barbara FG）

CamScannerでスキャン

[illegible] のカウボーイに、ジョーがヴォーカリストとして加わることは、もっと知られていない。

享年72歳。スキャンダルとは無縁のジョーの人生は、自由を求める放浪と音楽と芸術に捧げられたものだった。お互いの作品やライヴに客演しあったブルース・スプリングスティーンをはじめ、多くのミュージシャンがジョーの死を悼んだが、地元のテキサスでは、ジミー・ディル・ギルモア、ブッチ・ハンコック、テリー・アレンら、ラボック・マフィアと謳われた30年来の盟友達からレオン・ラッシスまで、世代を超えたミュージシャン達がジョーを追悼した。その顔ぶれがジョーの人柄を物語る。

SXSW開催中のオースティンで一度、ジョーにあったことがある。その時のオーミングな笑顔はいまだに忘れられない。出会った全員がジョーの友達になった。誰かが言った通りジョーはお節やキャリアの差なんて気にしなかったに違いない。自分のバンドのギタリスト、ジェシー・テイラーが怪我をしたとき、ジョーが当時20歳のオースティン・セクストンをピンチヒッターに起用したエピソードはよく知られているが、その後、ブロー・ディスとしてデビューしたオースティンは現在、セッション・プレイヤーとして[illegible]

[illegible] ことは、テキサス・シーンに[illegible] 言葉といえるのは、ジョーにアップアップされなかったおかげに、その後のキャリアを切り拓いていったミュージシャンは少なくない。

そんなジョーのコネクションを改めて辿っているうちに、それぞれに個性は違うものの、同じ傾向を持つシンガー・ソングライターがテキサスには多いことに気づいた。テキサスならではなんて言ってみたい、その傾向に輪郭を与えるとしたら、二つのことが言えると思う。一つはカントリー、ブルース、ジャズ、ウエスタン・スウィング、テックス・メックスなど、ルーツ・ミュージックが根差している土地柄ゆえ、一つのジャンルに特化したミュージシャンも多数いるものの、ここシンガー・ソングライターについて言えば、複数のジャンルをバックグラウンドに持ち、カントリーとか、ブルースとか、一言では言い表せない曲を作る個性派が多いことだ。

ジョーがまさにそうだった。カントリー・シンガーとしてデビューしながら、いち早くテックス・メックスを取り入れていたジョーはその後もバンドに共鳴したロックンロール、エレポップ、アヴァンコアなど、さまざまな音楽にアプローチしつづけてきた。そんなミクスチャー感覚が現在も多くのシンガー・ソングライターに受け継がれていることは、ジョーのコネクションをはるかに超えたデ[illegible]

[illegible] そして、もう一つ、テキサスならではと言えるのは、頑なまでに反骨のような独立精神を持っていることだ。もっとも、それは州民の多くが共有している、血を流しながら独立を自ら勝ち取ってきたという歴史を背景にしたテキサスの国柄かもしれない。アウトロー・カントリーのパイオニア、ウィリー・ネルソンをはじめ、ナッシュヴィルやロサンゼルスといった音楽産業の中心地に活動の拠点を移しながら、アーティストを管理したがる業界に反発して、テキサスに戻ってきてしまうシンガー・ソングライター達は少なくない。ニューヨークからテキサスに戻ってきたベン・クウェラーはかつてジョークでテキサス共和国の出身と言っていたが、もしかしたらテキサンの誇りの表明という意味では半ば本気だったのかもしれない。

アルバム・ガイドでは、何にも縛られずに自由でありたいと思うあまり、生き方が破滅的になってしまったシンガー・ソングライター達の作品も、またテキサスならではの傾向としてとり上げたが、これからは自然にこうした傾向に加え、そうしたサウンドを持つシンガー・ソングライターが増えるかもしれないという気がしている。ともあれ、これからも個性派のシンガー・ソングライター達が続々と現れることに期待したい。（山口）

CamScannerでスキャン

Townes Van Zandt
Our Mother The Mountain

1969
Poppy

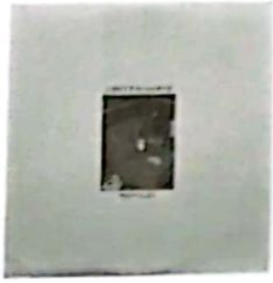
あなたにとって音楽がかけがいのないものであるならば、数あるシンガー・ソングライターのアルバムからこれを選ぶことは大正解と言える。理知に溢れたその少し甘い声は工事に行き届くが、表現は甘くない。言葉と発音はとても綺麗で心に染み入ってくるが、安易な優しさとは明らかに一線を画す。変な言い方だが、孤高の匿名性を感じる。どの曲もただただ歌っているだけで、伴奏はリフレインが多い。母なる山の代弁者か。LAとナッシュヴィル勢の演奏は過不足ない安定で、その日の仕事の一つだろうが、逆にそれが凄みに貢献している。私はユパンキ、ピクトル・パラと並べている。（桜井）

Doug Sahm And Band
Doug Sahm And Band

1973
Atlantic

テキサスの竜巻男、ダグ・サームの1stアルバム。彼にとってはにぎやかなテックス・メックス回帰宣言なのだが、録音はニューヨーク。ボブ・ディラン、ドクター・ジョン、デヴィッド・ブロムバーグら、非テキサスなゲストが参加。テキサス・オリジンではあるけど、友人たちを引き連れてのニューヨーク進出からのテキサス凱旋で、常に先に進むべクトルを示すことが自身の矜持だったのかな。チャーリー・プライドのカントリー大ヒット曲 'Is Anybody Goin' To San Antone' を、現地のカーニヴァルであるフィエスタ・サンアントニオの行進曲に換骨奪胎し、陽気に殴り込み。（松永）

Terry Allen
Lubbock (On Everything)



1979
Fate

ヴィジュアル・アートの世界でも名を知られるラボック出身のシンガー・ソングライターによる2作目。アウトロー・カントリーの系譜に位置しながら、故郷の様々な風景／人物を俯瞰的に捉え、詩的に描写することでコンテンポラリー・アートの文脈からも評価可能な独自の世界を作り出した。ジョー・イーリー人脈のバック・ミュージシャンの演奏もクリシェに陥ることなく抑制的で実直。だが、ところどころに類型から逸脱するアレンジが施されており、後のオルタナ・カントリーの始祖としての評価にも頷ける。アメリカン・サブカルチャーの奥深さ、肥沃さが具象化されたような傑作。（柴崎）

Blaze Foley
Blaze Foley

1984
Vital

苦節10年、オースティンからアラバマに赴き、サザン・ソウル界隈のミュージシャン達とレコーディングしたこの1stアルバムは、穏やかな作風の中に悲哀が滲むスワンプ・ロックの傑作となった。しかし、ほとんど流通することはなかったという。その5年後、あらゆるツキに見放されたフォーリーの人生は、ケンカの仲裁中に撃ち殺されるという非業の死で幕を下ろす。享年39歳。ウィリー・ネルソンをはじめ、これまで多くのアーティストが彼の歌を取り上げてきたが、シカゴのインディ・バンド、ホイットニーが02年に本作のバラード 'Rainbows And Ridges' をカヴァーしている。（山口）

CamScannerでスキャン

Steve Earle
Guitar Town

1986
MCA

タイトル曲に"Jap Guitar"という歌詞がある。日本製の安価なギターと簡単に解釈するが、ドラムのラウドさに対抗できる、いわゆるエレ・アコを開発したのが、日本のタカミネ。正直、この時期のアメリカン・ロックをあまり聴かなかったのは、他に欲する音楽が多かっただけでなく、派手な楽器の鳴りとリヴァーブの所為もある。だが歌詞を少し理解して、車を走らせながらセットすると、音作りもエンジン音に紛れ、アクセルも踏む。自分の20代前半も色々噛み締める。私がアールを知るのは90年代後半からだが、ここに若気の至りが刻まれていたのは微笑ましいではないか。（桜井）

Jimmie Dale Gilmore
Fair & Square

1988
Hightone

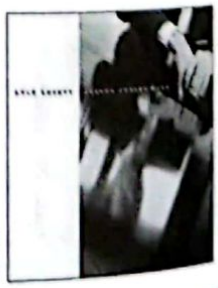
代表作ならグラミーにノミネートされた"Spinning Around The Sun"（93年）か"Braver Newer World"（96年）かも。今回はフラットランダーズ時代の盟友、ジョー・イーリーがプロデュースした1stアルバムを。音楽業界を離れていたジミーにとってレコーディングは10余年ぶり。気心知れたジョーの存在は頼もしかったはず。ホンキー・トンク・サウンドにブルース、ロカビリー、バラードも落とし込んだ全10曲。ルーツを物語るタウンズ・ヴァン・ザントやエルヴィス・プレスリーのカヴァーに加え、かつての盟友二人の曲も歌っている。鼻にかかった甲高い歌声は唯一無二だ。（山口）

Rich Minus
Collection

1991
New Rose

テキサス・トーネイドスがカヴァーした名曲「ラレード・ローズ」の作者として知られ、"テキサス・ソングライターの殿堂"の初代メンバーでもあるリッチ・マイナスによる遅すぎたデビュー作。オーギー・マイヤーズ、チャーリー・セクストン、カルヴィン・ラッセルら錚々たる地元出身ミュージシャンたちに支えられ、歌い綴るその内容は、お世辞にも流麗とは言い難い枯淡の味わい。しかし、パンク～ガレージ系レーベルとして出発したニュー・ローズがデビューを演出しただけあり、奥底には鋭い反抗の美学が流れる。まさに旧きテキサス者以外にしかなし得ない表現が端々に。（柴崎）

Lyle Lovett
Joshua Judges Ruth



1992
Curb / MCA

テキサス西部のクレインで育ったライル・ラヴェットは、皮肉屋にして、実に哀感あふれる曲を歌う。本作には、テキサスの先輩ウィルス・アラン・ラムゼイと共作した「ノース・ダコタ」があり、ウィルスは同曲を含む2曲にハーモニー・ヴォーカルで参加している。ただし、本作はロサンゼルス録音で、リッキー・リー・ジョーンズとのデュエットも含む。もともとライルの音楽は、カントリーやジャズ、ブルース、ゴスペルなどの要素がブレンドされたアメリカーナ。本作はラス・カンケルやリー・スクラーなどLAの敏腕プレイヤーたちの貢献もあって、さらに洗練度を増した秀作だ。（渡辺）

CamScannerでスキャン

Robert Earl Keen
A Bigger Piece Of Sky

1993
Sugar Hill

ヒューストン出身、84年にデビューしたキーンの3作目。緩やかなオープニングの背景に見えるのは、乾いたテキサスの大地、まっすぐに伸びるハイウェイと、タイトル通りの〝もっと広い空〟だ。そこに生きる放浪者や、失意に沈んだり都会から逃げてきたりした人々の姿を鮮やかに描き出す12の物語の始まりには最高だと思っていたが、本人はこの曲順が気に入らないと再発時に変更し、1曲目には軽快なテリー・アレンのカヴァー曲を配した。様々なスタイルを行き来する捨て曲なしの秀逸な楽曲群に、郷愁を誘うアレンジ、そしてキーンの繊細で穏やかな語り口が沁みる。（赤尾）

Butch Hancock
Eats Away The Night

1994
Glitterhouse

盟友ジョー・イーリー、ジミー・デイル・ギルモアとともにザ・フラットランダーズを組んでいたことでも知られるブッチ・ハンコックが94年に発表した名盤だ。ボブ・ディラン直系の膨大な語彙数ゆえか、ともすれば難解だと捉えられがちだったりもする人だが、本作はぐっとメロディアスな仕上がり。ハンコック未体験の方が最初に接する1枚として絶好だろう。テキサスの乾いた空気感と、ディランゆずりの〝言葉の奔流〟が絶妙に融合。全編にわたって的確に音像を包み込むライリー・オズボーンのB3オルガンが印象的だ。チャーリー・セクストンも2曲でごきげんなギターを披露。（萩原）

Kimmie Rhodes
West Texas Heaven

1994
Jackalope

トリーシャ・イヤウッドら人気シンガーに曲が取り上げられ、注目された彼女が7年ぶりにリリースした4thアルバム。ウィリー・ネルソン、ウェイロン・ジェニングス、タウンズ・ヴァン・ザントがデュエットのパートナーとして5曲に参加していることも話題だろう。タウンズの"I'm Gonna Fly"は生前最後のレコーディングと言われている。フォークともカントリーとも言えるバラードが大半を占める中、時折、ホンキー・トンキンだったり、ジャジーだったり、コケティッシュな歌声にタフな魅力が滲んだりも。ジョー・イーリーは彼女のことを妹のように思っていたそうだ。（山口）

Charlie Sexton Sextet
Under The Wishing Tree

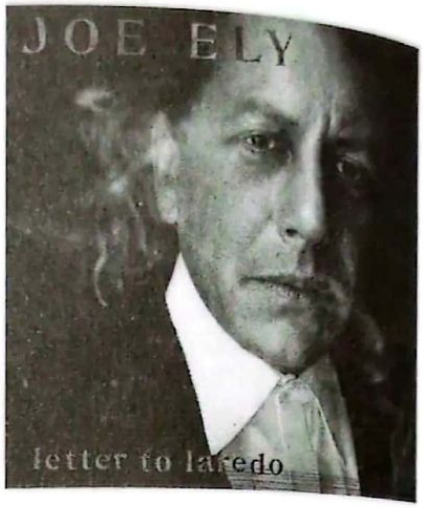
1995
MCA

テキサス州オースティンで育ったチャーリー・セクストンを、今世紀に入ってから知った人なら、01年の『ラヴ・アンド・セフト』前後のボブ・ディランのバンドのギタリストという認識が強いだろう。が、85年にデビューした時、当時17歳の彼は、日本ではアイドル的に騒がれた。このセクステット名義の唯一の本作では、歌とギター、作曲に加えて、チェロやヴァイオリンなども演奏。内容は野趣に富んだアメリカン・ロック集だが、マルコム・バーンとの共同制作。よってアンビエンスを重視した音作りは、マルコムが関わったボブ・ディランの『オー・マーシー』（89年）にも通じている。（渡辺）

CamScannerでスキャン

Joe Ely
Letter To Laredo

1995
MCA



昨年12月に78歳で亡くなったジョー・イーリーは、テキサス北西部のアマリロ出身。72年に結成されたザ・フラットランダーズのメンバーを経て、77年にソロ・デビュー。以後、カントリーを軸とした自己の活動に加えて、78年の英国ツアーをきっかけにザ・クラッシュと親交を結ぶ。ジョー・イーリーと彼のバンドは、80年に発表されたクラッシュの『サンディニスタ!』に収録されている「もしも音楽が語ることができるなら」の詞の中で賞賛され、ジョー個人は『コンバット・ロック』(82年)にバッキング・ヴォーカルで参加。また、本作にはブルース・スプリングスティーンが2曲にヴォーカルヴで共演している。こうしたこともあって、ジョーは、保守的でポップ志向のナッシュヴィル産カントリーとは一線を画した〝プログレッシヴ・カントリー〟のシンガー・ソングライターと呼ばれた。

表題曲は、メキシコとの国境に接しているテキサス州のラレドに住む、元恋人に手紙を届けてくれという内容の曲。3曲目はフラメンコ・ギターで始まる。このように本作には、スペインにルーツを持つフラメンコやメキシコ音楽の要素、地名などが織り込まれており、この点がひとつの特徴と言える。各曲はアコースティックなアンサンブルを生かしたもので、苦みを含んだジョーの歌も、聞きごたえがある。(渡辺)

Roky Erickson
All That May Do My Rhyme

1995
Trance

13thフロア・エレベーターズのフロントマンが、平素のアウトサイダー調のガレージ路線を離れ、フォーク・ロック調のアレンジで自作曲を歌った傑作。エレベーターズ時代からの宝刀である卓越したメロディ・センスをシンプルな伴奏と共に味わえる実に芳醇な作品で、コアなファンからの評価が一際高いのも頷ける。端的に言って、めちゃくちゃ泣けるのだ。全編名曲だらけだが、ルー・アン・バートンをデュエット相手に迎えた「スターリー・アイズ」が特に素晴らしい。苦難の多い人生を送った鬼才アーティストが、これほどまで純心に満ちた作品を残したという事実に、胸が熱くなる。(柴崎)

Jack Ingram
Livin' Or Dyin'

1997
Rising Tide

ヒューストン生まれのシンガー・ソングライターによるメジャー第1弾。スティーヴ・アールとレイ・ケネディ(70年代にデビューしたシンガーとは同名異人)のプロデュースを得て、ナッシュヴィルで録音された作品だが、当時の主流カントリー・ポップのサウンドにおもねることは一切せず、テキサス流の豪放かつ滋味深い演奏/歌唱を聴かせる。ジョージ・ジョーンズ、ガイ・クラーク、ジミー・デイル・ギルモアといった同郷の偉人たちのカヴァーを粋に決める辺り、なんとも信頼に足る。片や、伝統志向一辺倒というわけではなく、オルタナ・カントリーとも共鳴。バランスが良い。(柴崎)

Beaver Nelson
The Last Hurrah

1998
Freedom

なんと言ってもこの声だ。少し鼻にかかったハイ・トーンは、やさぐれて情熱的であたたかい。ヒューストン出身、オースティンを拠点にする彼が、2度のデビュー棚上げを食らってようやくリリースしたデビュー作。朋友スクラッピー〝ジャド〟ニューコムのプロデュースの下、アコースティックを基調にしたフォーキーなサウンドを主体に、フォーク、カントリー、ホンキー・トンキーなロックンロールなどを瑞々しく鳴らす。行き詰まった人生で孤独や敗北感を感じながら、それでも前に進まなければ、という意志と意地が胸に迫る。昔も今もジュールス・シアーとの共作曲が好き過ぎる。（赤尾）

Terri Hendrix
Wilory Farm

1998
Wilory

20年前にオースティンでライヴを観て一発で大ファンに。隣町サンマルコスを本拠に、フォーク、カントリー、ブルーズ、ウェスタン・スウィング、ジャズ、スペイン語で歌うテックス・メックスなど、地元の豊饒な音楽をペロリと消化したご機嫌な音楽を四半世紀ずっとインディで作り続けてきた〝テキサスのDIY女王〟とも呼ばれるシンガー・ソングライター。長年の相棒は元ジョー・イーリー・バンドのスティール・ギター奏者で、娘ナタリーのいるデイクシー・チックスのアルバムでグラミー賞にも輝いた名プロデューサーでもあるロイド・メインズだから、作品の質は折り紙付き。（五十嵐）

Alejandro Escovedo
A Man Under The Influence

2001
Bloodshot

アレハンドロは一般的な知名度こそ今ひとつだが、実は米ロック界の隠れた大物。有名なエスコベード家の一員で、元サンタナの打楽器奏者ピート&コークの弟、シーラ・Eの叔父にあたる。80年代にランク&ファイルやトゥルー・ビリーヴァーズで活躍し、90年代以降は移住したオースティンの重鎮的存在に。パンクから、オルタナ・カントリー、デヴィッド・ボウイなどのUKロック、メキシコ音楽まで幅広い音楽性の独特の混合で知られる。クリス・ステイミー制作の今作はチェンバー・フォーク的なサウンドと洗練されたソングライティングを結びつけたルーツ・ロックの傑作だ。（五十嵐）

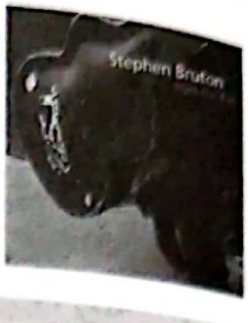
Jeff Klein
Everybody Loves A Winner

2003
One Little Indian

ニューヨーク生まれ。バークリー音楽大学にも通ったインディ・フォーク系シンガー・ソングライターだ。99年にオースティンへ移り、翌年アルバム・デビュー。その後、ビョークでおなじみ〝ワン・リトル・インディアン〟レーベルと契約してリリースしたセカンドが本作だ。マシュー・ライアンのプロデュースの下、曲によってチェロを効果的に使用したり、インディ・ロックのダイナミズムを導入したりしながらアルバム表題とは裏腹に敗者の美学、都会の孤独、壊れゆく関係性などを淡々と綴っていく。パティ・グリフィンも客演。近年はマイ・エルサレムの一員としても活動中だ。（萩原）

CamScannerでスキャン

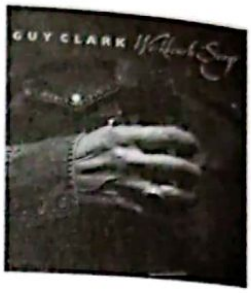
Stephen Bruton
From The Five



2005
New West

クリス・クリストファーソンと長年共演を重ね、様々なアーティストのバッキング／プロデュースも務めてきた要人による6枚目のソロ作。様々なサウンドに対応する職人的音楽家としても知られる人物だけあって、ソロ作もなかなかに幅広い内容を持つものが多いが、本作ではリトル・フィートのビル・ペインらを迎え、スワンプ・ロック～リズム&ブルース的な要素も織り交ぜた躍動的な演奏を聴かせる。一方で、優れたメロディー、ハーモニー構築を聴かせる曲も多く、ソングライター～サウンド・プロデューサーとしての優れた手腕が覗く。ギターも実に巧い。ダンディズムを感じる。（柴崎）

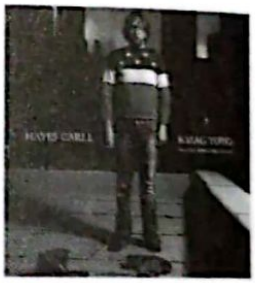
Guy Clark
Workbench Songs



2006
Dualtone

私にとってのガイ・クラークは70年代中期のデビュー作とその後の2作目だった。それらが青春時の自分には特別な声として残っているのだ。グラミー賞にもノミネートされた2006年の今作、出だしのアコースティック・ギターの音像や録音から惹き込まれ、その後に重なるリズム隊にマンドリン、この30秒ほどのイントロでサウンド・プロダクションに確信を得る。あれから30年経た彼の歌は果たして予想以上の深みを携え響く。一瞬で虜になる。演奏はオーソドックスながらも冒険心も置き去りにしないし、クラークへの敬意も満ち溢れている。とにかく生々しい傑作なのだ。（桜井）

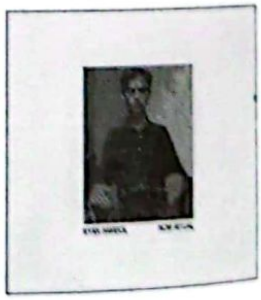
Hayes Carll
Kmag Yoyo (& Other American Stories)



2011
Lost Highway

テキサスの伝統の一つと言える酔いどれカントリーは、ロック色濃いサウンドを纏い、ヘイズ・カールはガイ・クラークやレイ・ワイリー・ハバードのフォロワーから抜け出すことに成功した。〝すべてのロック・ファンが所有すべき50枚のカントリー・アルバム〟の1枚に選んだ米『ローリング・ストーン』誌をはじめ、多くのメディアから歓迎され、この4thアルバムは彼の出世作に。リー・アン・ウーマックがカヴァーした'Chances Are'、ゴスペル調の'Hide Me'などのバラードも聴き逃せない。スティーヴ・アールと別れたアリソン・ムーラーと19年に結婚した時はびっくりした。（山口）

Ryan Sambol
Now Ritual



2015
Punctum

ダラス～オースティンを本拠に活動していたガレージ・ロック・バンド、ストレンジ・ボーイズのフロントマンが、バンド解散後リリースしたソロ作だ。録音自体は解散直後の12年、サンフランシスコで当地のガレージ系人脈とともに行われたが、あまりにもプライヴェートな仕上がりゆえいったんはお蔵入り。3年後、周囲の強い勧めでリリースが実現した。ブルース、ジャズ、R&B、フォークなどを独自のフィルターで再構築した世界観が魅力的。狂乱の季節を駆け抜けたひとりの吟遊詩人が、過剰な装飾を削ぎ落としながら揺らめく内省を静謐に綴った独白のような1枚という感じか。（萩原）

CamScannerでスキャン

Ryan Bingham
American Love Song

2019
Axster Bingham /
Thirty Tigers

ニュー・メキシコ出身、テキサスに長く暮らし現在は西海岸を拠点にするライアンの6作目。映画『クレイジー・ハート』の主題歌（アカデミー賞受賞）を担当、TVドラマの俳優もこなす彼だが、チャーリー・セクストンを共同プロデューサーに迎えた本作では、既発作同様、自身の内面と対峙しつつ、銃規制問題などを抱えたアメリカ社会や世の中にも目を向けている。ブルージーで粗くガサついた感触のルーツ・ロック・サウンドとソウルフルな歌唱が、そんな彼の切迫感を生々しく伝える。"America"で自国の理想と現実のギャップに悩み憂いた彼は、いま何を思っているだろう。（赤尾）

Amanda Shires
Take It Like A Man

2022
ATO

テキサス北西部のラボックで育ったアマンダ・シャイアスは、フィドル奏者でシンガー・ソングライター。4人の女性カントリー・ミュージシャンから成るスーパー・グループ、ザ・ハイウィメンの一人として、19年にアルバムを発表してもいる。このナッシュヴィル録音の通算8作目には、13年から連れ添いながら昨年離婚した元パートナーのジェイソン・イズベルも、作曲とギターで参加。カントリーを基盤に、インディー・ロックや60年代のバート・バカラック風要素、管弦楽器の演奏などを交えつつ、オリジナル曲を歌っている。その歌声は、エミルー・ハリスを掠れさせたようでもある。（渡辺）

Calder Allen
Dreamers Drifters And Hiders

2024
Calder Allen

フライ・フィッシングのガイドになるつもりだったという。しかし、祖父テリーを長とする音楽一家に生まれ育った血は争えない。パンデミック中の時間潰しに曲を書き始めると、これこそが天職だと気づいた。早くも2枚目のアルバムである。プロデュースは前作に続き、祖父のバンドのメンバーでもあるチャーリー・セクストンが担当。前作のカントリー路線を改め、エレクトリック・ギターのソリッドな音色とともに20代前半とは思えないハードボイルドな歌にロックとしての強度を加えている。4月にはアレン一家総出で作った"Blood Sucking Maniacs"のリリースが控えている。（山口）

Carson Mchone
Pentimento

2025
Merge

ビール醸造業の父親のコネを使って、10代の頃からオースティンのクラブで歌っていた。その頃、女キース・リチャーズな歌声を探していたアウトロー・カントリーの大御所、レイ・ワイリー・ハバードに乞われ、彼のアルバムで歌ったことも。地元で作った最初の2枚のアルバムはカントリーだったが、カナダの鬼才アーティスト、ダニエル・ロマノと出会い、活動を共にするようになると、脱カントリーとともに音楽性は一気に自由度を増していった。インディ・フォークにプログレ・サイケなロック感覚が入り混じるこの4thアルバムでは、唯一無二と言える神秘的な世界観を確立している。（山口）

CamScannerでスキャン

Lukas Nelson
American Romance

2025
6 Ace / Sony

ウィリー・ネルソンの息子で、ずっと父の右腕も務め、あの独特の節回しを受け継ぐ歌手である一方、自分のバンド＝プロミス・オブ・ザ・リアルでニール・ヤングのバックを務めたロック・ギタリストで、親しいレディ・ガガと映画『スター誕生』のために共作したソングライター、と父の名に負けぬ多才な男だ。昨年発表の本作はキャリア17年にしてのソロ・デビュー・アルバム。父の親友ウェイロン・ジェニングスの息子シューターがプロデュースを担当。主にアコースティックでギターの腕前を披露した70年代のカリフォルニア風サウンドで、様々な人間関係の物語を歌った作品だ。（五十嵐）

Pug Johnson
El Cabron

2025
Break Maiden / Thirty Tigers

スペイン語でろくでなしを意味するタイトルの2ndアルバム。ホンキー・トンクにケイジャン、テックス・メックス、ソウル、ラグタイムなどが入り混じるアプローチに加え、人間の愚かさを、自らの半生と重ね合わせながら、ユーモラスかつシニカルに歌うストーリーテリングが歓迎され、パグ・ジョンソンは一躍、要注目のアーティストになった。テリー・アレンのコンセプト・アルバム『Juarez』（75年）やラリー・マクマートリーの小説『ロンサム・ダブ』（85年）がインスピレーションになったそうだ。彼は現在、サンアントニオで妻とともにキャンピング・カー暮らしをしている。（山口）

West Texas Exiles
8000 Days

2025
Floating Mesa

それぞれに活動歴のあるメンバー達が22年に結成したオースティンの5人組。マルコ・グティエレス、コリン・ギルモア、ダニエル・デイヴィスという3人のシンガー・ソングライターを擁する編成は、コリンの父、ジミー・デイルが72年にジョー・イーリー、ブッチ・ハンコックと組んだフラットランダーズの再来なんて言えそうだ。彼らがいるならとフラットランダーズは敢えてこのディスク・ガイドに入れなかったが、フラットランダーズ結成の地をバンド名に冠したのは、その自覚があるからじゃないのか。因みにコリンは父ではなく、ジョーに憧れ、自分もミュージシャンになりたいと思ったのだという。また、万引きで捕まった中学生のコリンを警察署に迎えにきたのも父ではなくジョーだったそうだ。

それはさておき、23年のEPに続くこの1stアルバムにはフォーキーな曲を得意としているマルコ、オースティンのニック・ロウと謳われるコリンのパワー・ポップ、ダニエルが滲ませるメランコリーというそれぞれの個性が、3人の美しいハーモニーとともに一つに溶け合った全10曲が収録されている。中でもラグタイム風のピアノが転がるように鳴るロカビリー「Cards」、ケリー・ウィリスとマルコがデュエットしたカントリー・バラード「Division」、エキゾチックなムードが国境の向こうを夢想させる「Dark Desire」の3曲が素晴らしい。（山口）

CamScannerでスキャン

ALBUM PICKUP

アルバム・ピックアップ

B
Baby Keem→149
Black Petrol→157
Blackpink→152
James Blake→139
butaji→157

C
Campanella→159
Charli XCX→138
J. Cole→149
Joshua Chuquimia Crampton→144
Cut Worms→132

F
Foukers→135
Mike Finnigan→133

G
Gateballers→156
Beverly Glenn-Copeland→137
GLIM SPANKY→156
Gogol Bordello→141
Gorillaz→142

H
HANA→154
Danny L Harle→143
HEATWAVE→160
Benjamin Herman→145
Hoon→158

J
Jane-B→160
Joji→131

K
Kronos Quartet→148

L
Antonio Loureiro→150

M
Ella Mai→147
Maria BC→136
Bruno Mars→130
Ego Ella May→147
Buck Meek→132
Tom Misch→139
Mitski→134
Moonchild→146
More Eaze→137
Mumford & Sons→143

N
Nightmares On Wax X Adrian Sherwood→144
No.MEN→154

O
orlik→158

P
Bruno Pernadas→150
ポニーのヒサミツ→159
Poppy→131

R
Rawayana→152

S
Jill Scott→146
Mama Sissoco→151
Snail Mail→134
Dave Stapleton→145

T
Tedeschi Trucks Band→133
Thundercat→148
Tinariwen→151

U
U2→141
魚住英里奈→155

V
valknee→153

W
Asher White→135

Y
妖艶金魚→153
吉澤嘉代子→155

various artists
『ヘルプ(2)』→140
"Naive Melodies" →136

イラストレイション＝シマ・シンヤ

●掲載作品は品番の後にDVD、LPなどと記した場合を除きすべてCDです。価格は税抜き定価。なお、筆者には主に試聴用のCD-R、DVD-R等で評を依頼しています。

CamScannerでスキャン

runo Mars
ザ・ロマンティック』
ルーノ・マーズ
ランティック(ワーナー)
CR18808
000／2・27発売
JR10069(LP)
000／2・27発売
題"The Romantic")

ラテン要素がアルバム最大の特色の文句なし、と太鼓判を押したい作品

ソロ名義としては4枚目のアルバム。前作『24マジック』(16年)からの10年の間にも、アンダーソン・パークとのシルク・ソニック、来日公演を含むワールド・ツアー、さらにカーディ・Bとの「プリーズ・ミー」、レディ・ガガとの「ダイ・ウィズ・ア・スマイル」、ロゼとの「APT.」などコラボ曲のヒット、そしてドン・キホーテのCMなど話題を欠かすことはなかった。

アルバムは甘美なボレーロ「リスク・イット・オール」で幕を開ける。マリアッチのブラス・バンドも登場するクリップは、画に描いたようなテレノベラの世界だ。続く「チャ・チャ・チャ」は表題通りチャ・チャ・チャのビートを活かしたラテン・ソウル。終盤、〝(ダンスフロアから)月まで飛ぼう〟とけしかけると、流麗なディスコ・アレンジに〝倍テン〟するのがたまらない。

すかさず「アイ・ジャスト・マイト」へ。先のグラミー賞授賞式でも披露した曲だ。キャッチーでバブルガムなイントロから徐々に高みに上り詰めていく。

「ウノ、ドス、トレス…オトラ・ベス(もういっぺん)」の掛け声ではじまる「ゴッド・ワズ・ショウイング・オフ」は「ソウルフル・ストラット」に似たゆったりしたグルーヴが心地よい。いずれの曲もマーズのほか、フィリップ・ローレンス、ブロディ・ブラウン、ジェイムス・フォントルロイ、ダーンスト・エミール2世らが共作者としてクレジットされているが、この曲ではエル・マイケルズ・アフェアのレオン・マイケルズも名を連ねている。

「ホワイ・ユー・ワナ・ファイト」はフィリー・ソウル風バラード。カーティス・メイフィールド「ムーヴ・オン・アップ」を彷彿させるアッパーなダンス曲「オン・マイ・ソウル」の昂ぶりはアルバムのハイライトだ。その熱気をブガルー／ラテン・ソウル「サムシング・シリアス」で持続させる。

「ナッシング・レフト」はパワー・バラード。曲の作りに一切、雑なところがない。ギター・ソロではし夢見るようなロッカ・バラード「ダンス・ウィズ・ミー」でパーティは幕となる。

ローライダー好みのチープなスリーヴ画をはじめ、要所、要所にちりばめられたラテン要素がアルバム最大の特色といえるだろう。その土台は70年代ソウルの美味しいところばかりで構成されている。ヴィンテージ・ミュージックへの思い切りのいいアプローチは、シルク・ソニックの成功で得た自信の賜物だろう。音楽への愛情という言葉も時には危ういが、それをここまで表現できる人となると限られてくる。

一聴しただけで、文句なし、と太鼓判を押したくなるアルバムだ。9曲31分ちょいというサイズもあって、繰り返し、貪るように聴いている。一切、政治的なニュアンスを含まない音楽なのに、聴けば聴くほどドナルド・トランプの愚行に対する憤りと惨めな感情が行き来する。

ちょうど半世紀ほど前のドラマ「冬の運動会」の再放送を観ていて思った。ブルーノ・マーズは根津甚

CamScannerでスキャン

Poppy

"Empty Hands"

Sumerian [US]

ニューメタル色が強まりつつ現代ポップの手法が前景化

ポピーのキャリアを振り返ると、転機となったのは2020年の「ニ[illegible]だろう。インターネット文化と結びついた人工的なポップ像から一歩踏み出し、メタルコア的サウンドへと舵を切った作品だ。今作ではその路線がさらに深められた。これまでの作品の中でもっともヘヴィな音像を備えながら、ニュアンシングやミー・ザ・ホライズンのジョーダン・フィッシュのプロダクションによって音像はなめらかに。重心は低くなり、ニューメタル色が強まった。

とはいえ、本作のヘヴィネスは90年代ニューメタルの身体的重さとは明らかに性質が異なる。ヒップホップの影響を受けたダウン・チューニング・ギターや、バンド演奏のグルーヴによって成立していた元祖ニューメタルに対し、EDMや現代ポップの手法が前景化。もともとハイパーポップ的嗜好を備えていたポピーだけに、ヘヴィネスの解釈が巡むにつれ、デジタルな視点の導入も自然なものとなってきた。「The Worst」はその傾向がもっとも鮮明に表れた曲だ。サビは、デビュー当時のエヴァネッセンスを現代的感覚で読み替えたような仕上がりで、ポピーの美意識が際立つ。

つやちゃん

Joji

"Piss In The Wind"

Palace Creek / Virgin [US]

メランコリックな空気に包まれる時代との共振を強く感じさせる作品

YouTube活動を経て、現在はミュージシャンとして活躍する、大阪生まれのシンガー・ソングライター。ジョージの22年の「グリンプス・オブ・アス」は、ビルボード・ホット100でトップ10入りを果たし、日本人アーティストとしては坂本九に続く二人目の快挙となった。

そして、このニュー・アルバムで驚いたのは、強い高揚感をもたらすようなアッパーな楽曲が少ないことだ。ギターがシューゲイザーのように鳴る楽曲もあるが、トーンはかなり抑えており、歪んだエレクトロニクスや揺らぐかのようなリズムも含めて、全体としてはメランコリックな空気に包まれている。激しいビートが鳴る楽曲もあるが、それは沈鬱への導火線のように機能する。

こうした雰囲気をアルバムとして成立させているのは、ジョージのヴォーカルにほかならない。内向性も漂わせる端正で甘い歌声を聴かせるのだ。重ねられたコーラスも主旋律を柔らかく包みこむ。

そのキャリアの華々しいイメージとは、まるで異なるアーティスト像がここにはある。同時に、時代との共振を強く感じさせるアルバムなのだ。

宗像明将

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Buck Meek

"The Mirror"

4AD [US]
2・27発売

ギターがこれまで以上にアグレッシヴに鳴るソロ4作目

早くも4作目となるビッグ・シーフのギタリストによるソロ・アルバム。この10年、ビッグ・シーフも含めると、ほぼ毎年、アルバムをリリースしていることになる。旺盛な創作意欲に脱帽。今回は前作で試した電子音の導入をさらに進めるというテーマがあったらしく、そっちの音に強いビッグ・シーフのドラマー、ジェームズ・クリヴチェニアにプロデュースを頼んでいる。

1曲目と2曲目で鳴る手数の多い性急なドラムやアップ・テンポの16ビートは、電子音楽的な発想なのかもしれない。その2曲は大きなグルーヴを持つミーク節とは明らかに違う印象があって、居心地のいいところから抜け出そうとしているようにも思える。ドラムが跳ねる7曲目、パーカッションがラテン風に鳴る11曲目も同じことが言えるだろう。それ以外はミーク節を持つ穏やかなフォーク・ロックの曲が並んでいるが、9曲目の歪ませたリフをはじめ、ギターがこれまで以上にアグレッシヴ、あるいはフリーキーに鳴っていることにも注目したい。太い音色で鳴る6曲目のアコギの爪弾きやスライドで弾いた8曲目のソロは、本作のもう一つの聴きどころだ。 **山口智男**

Rock [US]

Cut Worms

『トランスミッター』

カット・ワームス

ジャグジャグウォー〔ビッグ・ナッシング〕
JAG489JCD
¥2500／3・18発売
(原題 "Transmitter")
●問合せ先＝www.bignothing.net
(ビッグ・ナッシング)

メロウでポップな作風は健在だがそこはかとなく憂鬱な4作目

"Windows On The World"のMVでは、中年男4人バンドがニューヨークのマンハッタンをバックに演奏。フロントマンはスーツにネクタイ、キャップには"New York"の文字がラメで施され、リッケンバッカーを抱えて「アメリカン・ドリームは僕が見つけたと思っていたものと違う」と、平熱の歌を聴かせる。これが、思いのほか深く刺さった。

米オハイオ生まれ、NYブルックリンを拠点にするマックス・クラークによるユニットの4作目は、ウィルコのスタジオ＝ロフトで録音され、ジェフ・トゥイーディがプロデュースを担当。マックスのメロディ・メイカーとしての力量は既発作でも確認できていたが、メロウでポップな作風は変わらず、60年代ポップス愛好者には避けて通れぬ曲が並ぶ。ジャングリーなギターも健在だ。

が、そこはかとなく憂鬱。アルバム全体がメランコリアに覆われ、サウンド的にはドリーミー成分が減少、バンド・サウンドの凛とした質感を活かした印象で、それがまた今の気分にはフィットする。タイトルが『送信機』であるのは、「音楽が世界を繋ぐ」というような単純な理由ではないはずだ。 **赤尾美香**

CamScannerでスキャン

Rock [US]

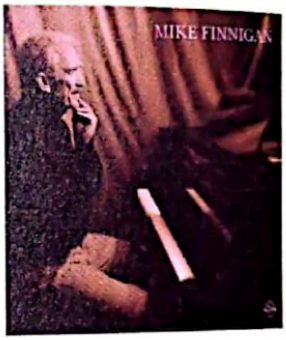
Tedeschi Trucks Band
『フューチャー・ソウル』
テデスキ・トラックス・バンド
ファンタジー（ユニバーサル） UCCO1248
(SHM-CD)
¥3000／3・20発売
(原題 "Future Soul")

自然体で心地好く音を鳴らし歌心溢れる楽曲へと仕上げた新作

スタジオ作としては約4年振り。ドクター・ドレーやエミネムなどで名を上げたプロデューサー、マイク・エリゾンドを迎えた意欲作だ。とはいえエリゾンドは、フィオナ・アップルやブラザーズ・オズボーンなどポップやオルタナからアーシーなものまで幅広く手掛けてきており、ルーツやアイデンティティを維持しながらも新たな血を導入するには最適の人選だと言えるだろう。

引き摺るようなグルーヴの上でゴスペル調の歌唱が響き渡るオープナー「クレイジー・クライン」。レイドバックした語り口からしばしば漏れ出てくる抒情性が味わい深い「フー・アム・アイ」。ヘヴィなリフが印象的なタイトル曲。音楽性が一変したわけではないが、これまでにない〝ヌケ〟のようなものが全編を通してサウンドや語り口に感じられ、それが本作にある種の親しみやすさをもたらしている。壮大なコンセプト作やいにしえの名盤再現など〝企画モノ〟が続いたが、ここではバンドが自然体で心地好く音を鳴らしている様が窺える。と同時に、それらをただ垂れ流すのではなく、歌心溢れる楽曲へと仕上げているのが本作の大きな魅力である。 **石川真男**

Rock [US]



Mike Finnigan
『マイク・フィニガン』
マイク・フィニガン
BSMF BSMF2926
¥2700／3・20発売
(原題 "Mike Finnigan")
●問合せ先＝072・637・6718
(BSMF)

没後5年を経て完成したハモンド・オルガンの名手のソロ作

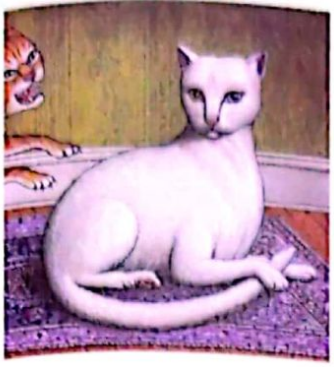
マイク・フィニガンの名前を覚えているだろうか。ハモンド・オルガンの名手で、数多くのセッションに参加してきた。なかでも忘れがたいのが、デイヴ・メイスンのバンドに加わった『ライヴ〜情念』での熱い演奏だ。いや、それ以上に、76年に発表したソロ・アルバムで聴かせたスワンプ風の滋味あふれるヴォーカルが強烈に印象に残っている。

フィニガンは、2021年に惜しまれつつこの世を去ったが、彼が制作途中であった最後のソロ・アルバムが、没後5年を経て完成した。プロデュースは長年の盟友であったJ・J・ブレア。ブルースやソウルを基調とした内容で、あの渋みに溢れた歌声を再び味わうことができる。

ヴォーカルが未完のまま残されていたトラックが2曲あるが、そこにはゲストが迎えられており、その顔ぶれが豪華で、スモーキー・ロビンソンとスティーヴン・スティルスである。これもフィニガンの生前の人徳ゆえだろう。スティルスは息子クリスとともに参加。さらに別の曲では、フィニガンの子息でシンガー・ソングライターのケリー・フィニガンも加わっている。歌声は世代を超えて受け継がれていく。 **小川真一**

CamScannerでスキャン

Rock [US]



Mitski

『ナッシングス・アバウト・トゥ・ハプン・トゥ・ミー』

ミツキ

デッド・オーシャンズ（ビッグ・ナッシング）
DOC450JCD
¥2500／2・27発売
DOC450JLP-C5（LP）
¥6400／2・27発売
（原題 "Nothing's About To Happen To Me"）
●問合せ先＝www.bignothing.net
（ビッグ・ナッシング）

華やかでアレンジもカラフルなローレル・キャニオンの香りの新作

90年代半ばから70年代初頭、LAのローレル・キャニオンがロックやフォークの聖地だったことがあるが、本作は、同地出身の音楽家たちの名盤と同じ香りがする。特に影響を感じたのはジョニ・ミッチェル。もちろん、単なる焼き直しではなく、モダンな感覚を備えた上で、である。NYを拠点とする日系人シンガー・ソングライターの8作目。ややロウファイ気味で内省的だった前作も素晴らしかったが、本作は華やかでアレンジもカラフル。フォークやカントリーが根底にあるが、エレクトロニクスも巧みに挿み、アンビエント調のゆらめきを湛えた曲もある。

前作のツアーに参加したミュージシャンが起用されているものの、演奏の質感はより朗らかで明瞭。過度に主張するプレイではないが、重心の低いドラムが核になっている。また、ヴォーカルはのびやかでナチュラルそのもの。力みやけれん味は微塵もない。それこそ、ジョニの初期作を想わせる瞬間もたびたびだ。歌声に多少リヴァーブがかかっているものの、それもあくまで薄化粧。決して素の良さを殺してはいない。個人的にはこれまでの彼女の作品でいちばん好きだな。

土佐有明

Rock [US]

Snail Mail

『リコシェ』

スネイル・メイル

マタドール（ビート） OLE2209CDJP
¥2800／3・27発売
（原題 "Ricochet"）
●問合せ先＝03・5768・1227
（ビート）

90年代オルタナティヴへの接近をこれまで以上に打ち出した3作目

昨年日本公開された『テレビの中に入りたい』は、90年代アメリカ郊外を舞台に、少女向け番組に心を奪われる少年を描いた青春映画だった。主人公は、番組のヒロインに強く共鳴しながらも、何に由来するのかを言語化できない、性的な揺らぎをほのめかしつつも決定的な一歩を踏み出さないまま、物語は幕を閉じる。その劇中で、スマッシング・パンプキンズの「Tonight, Tonight」を演奏していたのが、スネイル・メイルことリンジー・ジョーダンだ。

5年ぶりとなるサード・アルバムで、ジョーダンは90年代オルタナティヴ～インディー・ロックへの接近をよりこれまで以上に打ち出している。当時は反商業主義的な姿勢ばかり取り沙汰されたものだが、簡潔で力強いメロディがポップ・ミュージックとしての骨格を支えていた音楽でもあった。本作においてジョーダンは、まずピアノやギターで旋律と構造を固め、その後に歌詞を書く手法を採用したという。その成果は、ギター・ノイズの中に郊外の青春時代を描いたリード曲「Dead End」に端的に表れている。甘さと苦味が拮抗する感触は、映画の余韻ともどこかで呼応している。

長谷川町蔵

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Asher White

"Jessica Pratt"

Joyful Noise [US]
2・4発売

敬愛するアーティストの傑作を構築的なサウンドで丸々カヴァー

00年代に世（の一部）をざわつかせたフリー・フォークなるムーヴメントを懐かしく思い出す読者は少なくないはず。2月号の特集「2026年はこれを聴け！」で書いたこととともやや関連するが、ここへきてそのフリー・フォークが復権するかも？などと個人的に妄想していたところ、その兆しの具体例（？）となりうるような作品がリリースされた。

表題にピンと来た方々が推察する通り、このアルバムは、米イリノイ州出身のマルチ奏者／プロデューサー＝アッシャー・ホワイトが、自身の敬愛するジェシカ・ブラットの同名傑作（12年）を丸々カヴァーした作品だ。シンプルな弾き語り形式であった元作とは異なり、様々な楽器／電子楽器が重ねられた構築的な内容となっているが、旧来のフォーク・ロックやインディー・フォークの構造と比べるとはるかに音要素の輻輳度合いが高く、こう言ってよければポスト・ハイパーポップ的だ。これを逆側から述べればつまり、ポスト・ジャンル的な美的感覚を経由した〝フリー〟なフォーク形式への回帰とも評しうるのではないか。また新たな過去の復権が進行しているということなのかもしれぬ。**柴崎祐二**

Rock [US]

Fcukers

『オー』

ファッカーズ

ニンジャ・チューン〔ビート〕 BRC811
¥2800／3・27発売
（原題"Ö"）
●問合せ先＝03・5768・1227
（ビート）

参照するジャンルやスタイルが多彩なインディ・ダンス的バンド

24年のEP『Baggyes』が話題になっていたニューヨークのデュオによるデビュー・アルバム。もともとスバッド・キャノンというインディ・ロック・バンド出身のメンバーがクラブ寄りのサウンドを目指したところから始まっており、そんな経緯もあって四半世紀ほど前のエレクトロクラッシュやディスコ・パンクを彷彿させるものになっている。LCDサウンドシステムのライヴのサポートに抜擢されたのも納得だ。

バンキッシュな感覚のある歌ものダンス・サウンドという意味では20年前頃のインディ・ダンス的な文脈と繋がるものがあるが、参照するジャンルやスタイルの多彩さがいまっぽい。ベース・ミュージックやトラップのワイルドさを抜き出し、ダブやダンスホールにも目配せしつつ、100ゲックスのディラン・ブレイディのプロダクションでの参加に象徴されるように、ハイパーポップ以降のマキシマリズム的な感性も入っていると言えるかもしれない。それをほとんど3分足らずのトラックに落としこむのも、初作としての潔さを感じる。このデザイン能力によって、さらにトレンディな存在になっていく可能性は高いだろう。**木津毅**

CamScannerでスキャン

Rock [US]

“Naive Melodies”

Miguel Atwood-Ferguson, Rogê, Leon Jean-Marie ほか

BBE [UK]
1・23発売

国境横断的なアンテナを発揮したトーキング・ヘッズのカヴァー集

デヴィッド・バーンの度を超した個性によってハードルが上がっているとはいえ、今トーキング・ヘッズのカヴァーに取り組むのは、わりと難問だろう。そんなコンピレーションのキュレーターを務めるドリュー・マクファーデンは21年に、クルアンビンやセッサ、ミシェル・ンデゲオチェロらが参加したデヴィッド・ボウイの意欲的なカヴァー集“Modern Love”を手がけた人物。今回もその国境横断的なアンテナを十二分に発揮している。

ミゲル・アトウッド・ファーガソンにより室内楽化された“Heaven”での静かなオープニング。アルバムがリズミカルにうねり出すのは、ケニー・ドーブによる“Born Under Punches”あたりから。エル・マイケルズ・アフェアー参加組ではホジェーは“Road To Nowhere”、フローレンス・アドーニは“Crosseyed And Painless”と、発注先も外してない。去年モッキーと来日した日系シンガー、ヴィッキー・フェアウェルによる“And She Was”もいい。レオン・ジーン・マリエの“This Must Be The Place”はアルバムを締めるにふさわしい、まさに“ナイーヴなメロディ”だ。**松永良平**

Rock [US]

Maria BC

『マラソン』

マリアBC

セイクリッド・ボーンズ
〔ビッグ・ナッシング〕 SBR378JCD
¥2500／3・4発売
（原題“Marathon”）
●問合せ先＝www.bignothing.net
（ビッグ・ナッシング）

温かみのある旋律と鋭利なノイズが交差する西海岸拠点の自作自演歌手

米オハイオ州出身で、現在はオークランドを拠点に活動するシンガー・ソングライター。クラシック声楽や教会音楽の素養を生かし、澄んだメゾソプラノの歌声を幾重にも重ねるスタイルで注目を集め、グルーパーやジュリアナ・バーウィックを引き合いに高い評価を受けてきた。本作は、近年再び話題作が続くセイクリッド・ボーンズからの通算3作目。

自宅などで密室的に録音された過去作から一転、西海岸各地を移動しながら制作された本作。フォークやアンビエント、シューゲイザーが入り混じる美しく夢幻的な音楽性はそのままに、全編が連続した組曲のようだった前作とは対照的に各楽曲が独立した個性を放っているのが特徴だ。空間に響き渡るアコースティック・ギターを基盤にしつつ、不穏な空気を醸し出すグリッチ音や変則的なバーカッションに加え、ブラスやシタールのような弦楽器の響きまでも大胆に導入。繊細な歌声の裏でフアズ・ギターが激しく歪むタイトル曲などを筆頭に、温かみのある旋律と鋭利なノイズが交差する、立体的で生々しい音響が構築されている。よりダイナミックで力強い表現を手に入れた飛躍の一作だ。**天井潤之介**

CamScannerでスキャン

Beverly Glenn-Copeland
"Laughter In Summer"

Transgressive [US]
2・6発売

歌が生まれた瞬間を捉えたようなスピリチュアルな高揚感

1970年にデビューしたトランスジェンダーのシンガー・ソングライター、ビヴァリー・グレン・コープランド。長らく無名だった彼女が再評価されたのは、86年に自主制作したシンセ作品"Keyboard Fantasies"が2017年に再発されたから。そこに収録された曲をブラッド・オレンジやボン・イヴェールがリミックス。デヴェンドラ・バンハートとはコラボレートするなど、様々なアーティストからリスペクトされてきたビヴァリーの新作は、アルツハイマー病を発症するなかで、ミュージシャンで妻のエリザベス・コープランドに支えられて作り上げられた。

子供の頃に聴いていたクラシックや黒人霊歌、フォークなどを昇華した優美なメロディー。ピアノの弾き語りで天に向かって伸びていくヴィブラートがかかった中性的な歌声は、同じくトランスジェンダーのアノーニを彷彿させたりもする。ほとんどの曲が一発録りのファースト・テイクで、まるで歌が生まれた瞬間を捉えたようなみずみずしさ。子供達の合唱やエリザベスの歌声を交えながら、スピリチュアルな高揚感に貫かれた本作は、世界やエリザベスへの無垢な愛に満ちている。 **村尾泰郎**

More Eaze
『センテンス・ストラクチャー・イン・ザ・カントリー』

モア・イーズ

スリル・ジョッキー〔ヘッズ〕 HEADZ276
¥2200／3・20発売
（原題 "Sentence Structure In The Country"）
●問合せ先＝faderbyheadz.com（ヘッズ）

地元テキサスで研鑽を積んだ経験にデジタル化を経て〝回帰〟が顕在

クレア・ラウジーとのコラボレーションでも知られるNYブルックリン拠点の作曲家／マルチ奏者による最新ソロ作。これまでに発表してきた作品の多くは、レフトフィールド志向の強いインストゥルメンタル作品が主であったが、今回は全10曲中8曲で自身のヴォーカルを聴かせるなど、もっとも〝歌もの〟色の濃い内容となっている。

中でも、スクリッティ・ポリッティやハイ・ラマズ、シー・アンド・ケイクなど、彼女が長年敬愛してきたアーティストからの影響が反映されているという先行シングル曲「ヒーリング・アテンプト」は、そうした背景情報が示唆する通り、〝ポップ〟とすらいえる曲構成も持つもので、明らかな新機軸を感じさせる。同曲でも観察できるが、バンジョーやフィドル、スティール・ギター等、フォーク～カントリー・ミュージック風の音色／語法が時おり顔を出すのも興味を引かれる部分だ。これは、彼女自身が元々地元テキサスのシーンで研鑽を積んだ経験によるものでもあるだろうし、デジタル化／多メディア化の趨勢を経た上でそうした〝回帰〟が顕在化する現況とも鋭く響き合っているといえる。 **柴崎祐二**

CamScannerでスキャン

Charli XCX
『嵐が丘』
チャーリーXCX

アトランティック(ワーナー)
WPCR18815
¥3300／2・25発売
(原題 "Wuthering Heights")

単独のゴシック・ポップ作として疑いなく成立しているサントラ

マーゴット・ロビーとジェイコブ・エロルディが主演するエミリー・ブロンテの小説『嵐が丘』を原作とする映画のサントラ。デビュー作の『プロミシング・ヤング・ウーマン』がアカデミー賞で作品賞、監督賞、脚本賞にノミネートされ、一躍脚光を浴びたエメラルド・フェネルが監督を務める。そのサントラをチャーリーXCXが手がけた。

前作『プラット』の刹那的なクラブ・サウンドから一転、荒涼たる英国ヨークシャーの荒野を舞台にしたゴシックな音響空間へ。もとはフェネル監督から1曲だけ書いてほしいという依頼だったが、脚本を読んだチャーリーは即座にインスピレーションを受けて、ツアーの合間を縫ってコラボレーターのフィン・キーンと共に全12曲のアルバム・サイズへと拡張させた。

サントラの指針としたのはジョン・ケイルによる"エレガントで残酷"という言葉。チャーリーはヴェルヴェット・アンダーグラウンドのドキュメンタリーでこの言葉に触れ、ケイルの老いた声による朗読を1曲目に据えて、映画の世界観へ導く役割を与えた。不協和音のストリングスやインダストリアルなドラムが映画のゴシック・ロマンを客観的に構築。オートチューンで加工された声は、ゴシックな音楽の荒野において、むしろ人間臭い感情の焦点として機能している。チャーリーは自身のサブスタックで「私の名前がクレジットされているが、自分のアルバムかどうかは気にしない」と発言しており、ミュージシャン、シンガーとしてよりもサントラを含めた音楽監督としての意識が根底にあったことを物語っている。

一方で、構築された冷徹なサウンドスケープの中で、彼女本来のポップネスが特異な輝きを放っている。スカイ・フェレイラを迎えた「アイズ・オブ・ザ・ワールド」ではウルフ・アリスの「ドント・デリート・ザ・キッシズ」をサンプリングし、過剰なまでの感情の起伏とドラマチックな高揚感を生み出している。また、80年代の壮大なバラードや自身のデビュー作『トゥルー・ロマンス』期を彷彿させるシンセ・ポップ「チェインズ・オブ・ラヴ」では、逃れられない愛の束縛を甘美なメロディで歌い上げていく。

サントラという制約のもと、純粋に映画に奉仕するという客観的なアプローチをとったことで、結果的に彼女の内なるメランコリーや情念がかつてなく生々しく引き出されているのは非常に興味深い。映画の伴奏音楽としての役割をまっとうしつつも、単独のゴシック・ポップ・アルバムとして疑いようなく成立しており、時代錯誤にならない普遍的なポップと現在形のダークな音響を違和感なく同居させている。

映画自体は俳優の起用や原作との乖離で批判を浴びているが、フェネル監督やチャーリーに文芸映画という意識はまったく念頭になかったことはスクリーンから伝わってくる。そして、ケイト・ブッシュの「嵐が丘」でもない。私たちの時代の『嵐が丘』とはこうです、ということをふたりは映像と音楽で提示してみせたということだ。今を切り拓く彼女たちの姿がここにある。 **油納将志**

CamScannerでスキャン

Haruomi Hosono

シンプルでありながら基本は不動たが幻想的なサウンド性を感じさせる作品

Tomo Mioch

往年のシンガー・ソングライターを想起させるような物もの作品

“Help (2)”

『ヘルプ (2)』

Arctic Monkeys,
Beth Gibbons,
Olivia Rodrigo ほか

ウォー・チャイルド〔ビート〕
WARCHILD16CDJP
¥2800／3・6発売
●問合せ先＝03・5768・1227
(ビート)

音楽を愛する仲間が詰め込んだ紛争地域の子供への深い思い

いまこの原稿を書いてる時点でも新たな戦争が始まり、イランの女子小学校で100人以上が亡くなったニュースが伝えられるなか、本誌先月号の特集『No War』でも紹介された、世界各地の紛争地域で子供たちが置かれる危険な状況に支援活動をしているNGO団体ウォー・チャイルドの呼びかけに応じ、多くのアーティストが集った作品がこれだ。

95年にブライアン・イーノが提唱し、ポール・マッカートニーやオアシス、ブラーら人気バンドたちが参加、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争で被害にあった子供たちの支援目的に作られたアルバム『ヘルプ』の精神を受け継ぐもので、25年11月にアビー・ロード・スタジオにアーティストが集まり、約1週間で作り上げた。元ラスト・シャドウ・パペッツのジェームス・フォードが音楽面をディレクションし、映画『関心領域』のジョナサン・グレイザー監督が8人の子供にカメラを渡し、自由に様子を撮らせるなどして多面的にプロジェクトの様子をまとめている。

前作はわずか1日でレコーディング、6日後には店頭発売という伝説が残っているが、今回はそこまでの慌ただしさはないものの、このメンツにしては驚異的なスピード感とテンションで行われ、それだけの熱量にふさわしい仕上がりとなっている。先行発売されたアークティック・モンキーズの4年ぶりの新曲「オープニング・ナイト」に始まり豪華なメンツ、コラボが揃ったが、個々の思いが伝わる力作ぞろいでこのスペースでどれかをピックアップするのも迷うばかりなので、まず話題になりそうなカヴァーものに触れておこう。

ベス・ギボンズは今月の特集、歴史を変えたデビュー・アルバム・ベスト100、の1位に輝いた『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ』の冒頭を飾った名曲「日曜の朝」をストレートに聞かせるが、驚いたのはデペッシュ・モードで、60年代に活躍した先住民族出身の女性シンガー、バフィ・セント・メリー作でドノヴァンのヴァージョンでも知られる「ユニヴァーサル・ソルジャー」という意表をついた選曲だがみごとに彼ら流のものにしている。ビーバドゥービーはエリオット・スミスの人気曲「セイ・イエス」、フォンテインズDCはシネイド・オコナーが83年に起きた警察による黒人青年の射殺事件をもとに書いたプロテスト・ソング「ブラック・ボーイズ・オン・モペッズ」を歌いこんでいたり、オリヴィア・ロドリゴによる90年代のインディ界で活躍したザ・マグネティック・フィールズの「ザ・ブック・オブ・ラヴ」も本作の趣旨に沿った素晴らしい選曲だった。

他にもザ・ラスト・ディナー・パーティー「レッツ・ドゥ・イット・アゲイン!」やパルプ「ベギング・フォー・チェンジ」、ウェット・レグの「オーヴィアス」、またバキスタン出身のアルージ・アフタブがベックとジェフ・バックリーで知られる「ライラック・ワイン」など、どれもとても良かったし、最後にオレたちも忘れるなとオアシスが昨年の再結成ライヴから「アクイース」を提供するなど、アーティストたちの音楽を愛する仲間としての子供への深い思いが詰まっている。**大鷹俊一**

CamScannerでスキャン

Rock [Europe]

U2
"Days Of Ash"

Island [UK]
2・18発売

ヴィなテーマの曲が中心ながら撃的な健やかさと瑞々しさ

緊急配信リリースされた6曲入りP。ヴォーカルのボノは、「これは、世に出るのを待ってはいられない衝動から生まれた」と言う。確かに、"American Obituary"は、今年1月7日にアメリカで関税執行局(ICE)の職員が、レネー・ニコル・グッドを射殺した事件が題材で、発表までの早さに驚かされる。他に"Song Of The Future"は、"女性・命・自由(Woman, Life, Freedom)"運動で街頭に立ち、22年に16歳で命を奪われたイラン人女性のサリナ・エスマイルザデ、"One Life At A Time"はドキュメント映画"No Other Land"の制作に関わり、25年にイスラエル人入植者に射殺されたパレスチナ人のアウダ・ハサリーンといった具合に、実在した人物を描いたヘヴィなテーマの曲が中心だ。

こうした前提からは重苦しさを連想しがちだが、本作のサウンドと歌は、むしろ嫌なニュースが続くご時世に荒みがちな心を清めてくれるかのように美しい。その健やかさと瑞々しさは衝撃的ですらある。

しかも今年後半にリリース予定のアルバム収録曲とは雰囲気もテーマも大きく異なるとアナウンスされているのも気になるところ。**志田歩**

Rock [Europe]

Gogol Bordello
『ウィ・ミーン・イット、マン!』

ゴーゴル・ボルデロ

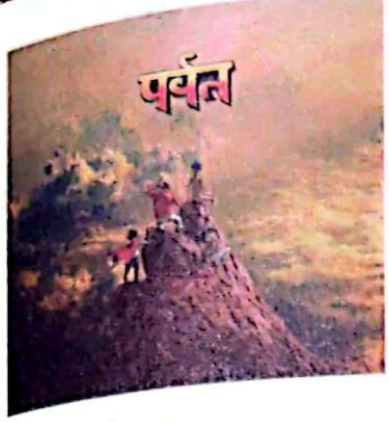
カーサ・ゴーゴル(ビッグ・ナッシング)
GBCD01J
¥3100/2・18発売
(原題"We Mean It, Man!")
●問合せ先=www.bignothing.net
(ビッグ・ナッシング)

4年経っても終わらないウクライナへの侵略戦争に抗う姿勢

ゴーゴル・ボルデロは、ウクライナ出身で母方の祖母がジプシーであるユージン・ハッツ(vo、g)が、90年、18歳のとき母国を脱出して、ヨーロッパを転々とした後、移住先のアメリカで結成した多国籍のメンバーによるジプシー・パンクのバンドだ。08年にフジロック、09年にサマーソニックで来日し、ぼくは09年に彼らを撮影するためにウクライナまで追いかけていった。22年2月24日にロシア/プーチンによるウクライナへの全面侵略戦争が始まり、前作"Solidaritine"(22年)は、侵略戦争に対する強い怒りが反映されたアルバムになっていた。

本作は、4年経っても終わらない侵略戦争によってもたらされた苦しみと怒りが蓄積されつつも抗う姿勢を明確に打ち出している。プロデュースは、ニック・ケイヴらを手掛けたニック・ローネイとアダム・"アトム"グリーンスパンが担当。オリジナル・メンバーはユージンとロシア出身のセルゲイ・リャブツェフ(vln)だけで多くのメンバーが入れ替わり、弦楽四重奏をフィーチャーした曲などもあるが、ジプシー・パンクで疾走していく音楽性はまさにゴーゴル・ボルデロだ。**石田昌隆**

CamScannerでスキャン



Rock [UK]

Gorillaz
"The Mountain"

Kong [UK]
2・27発売

オープニングからラストまで シームレスで丹念な音世界

ブラーのデーモン・アルバーンと漫画家／イラストレーターのジェイミー・ヒューレットがゴリラズというヴァーチャル・バンドを結成したのは、98年のこと。当時はそのコンセプトが珍しく思えたものの、AI俳優ティリー・ノーウッドといったヴァーチャルな存在が乱立する現在においては、目を引くほどの特徴ではないだろう。

そうなることを予見していたかのように、ゴリラズは作品を重ねるごとにアルバーンとヒューレットの人間性が色濃くなっていく。10年の『プラスティック・ビーチ』では海洋汚染をはじめとした環境問題が取りあげられ、17年の『ヒューマンズ』は世界情勢から影響を受けた作品に仕上がるなど、現実の出来事に対する二人の反応が前面に出ることも少なくない。

最新作『ザ・マウンテン』は、そうした歩みと地続きのアルバムだ。ほぼ同時期に父親を亡くした二人の哀しみ、インド滞在中に出逢った人々や風景といったものが影響源になっている。ゆえに死や来世に焦点をあてた歌詞が頻出し、これまでのゴリラズ作品では見られなかったスピリチュアルな側面が目立つ。共に現在57歳と若くない年齢だからか、その側面には確実に迫りつつある自身の死というリアリティーがちらつく。生と死の循環がテーマの8曲めはそれが特に明確だ。そういう意味では、若い頃の二人には決して生みだせない達観した表現と滋味が滲む作品と評せる。

ゴリラズといえば、多数のゲストと一緒に作品を作りあげることで知られている。本作でもスパークス、アイドルズ、さらにはアマーン・アリ・バンガッシュやアジェイ・プラサンナといったインドのミュージシャンなど、多様な人選が際立つ。興味深いのは、そこに故人も含まれていることだ。アルバムのクレジットにはデニス・ホッパー、トニー・アレン、ザ・フォールのマーク・E・スミスなどが並んでいる。これらの現世とあの世のコラボは、以前のレコーディング・セッションで収録した未使用のテイクを用いて実現させたという。物故者が遺した言葉と、いまを生きる者の言葉が交わる本作の構成は、生者が死者と交信しているかのような雰囲気を醸す。

死や喪失がコンセプトになると、暗い空気が強くなりがちだ。だが、本作は暗さが薄い。シタールの旋律が響きわたるディスコ・ソングである2曲め、牧歌的香りを漂わせる口笛やシンセが聞こえる5曲めなど、明るさを見いだせるサウンドが随所で飛びだす。そうした前向きな心に至ったのは、遺してくれた想い出や表現を通して、亡き人たちと触れあえるという気づきを二人が得たからかもしれない。その気づきが本作を感動的な作品に押しあげている。

『ザ・マウンテン』は、高齢者への扉をノックする時が着実に近づいている二人が、死との向きあい方を見つけるまでの道のりが刻まれた作品だ。物語性が強く、オープニングからラストまでシームレスにサウンドが鳴らされる。早送りかスクロールをして次の曲へ移ることはせず、じっくり聴きたいと思わせる丹念な音世界と想いが輝かしい。**近藤真弥**

CamScannerでスキャン

Danny L Harle
"Cerulean"

ダンス・ポップの真ん中を打ち抜く覚悟が感じられるプロデューサー

A・G・クックとともにPC ミュージックを設立したことで、ハイパーポップの旗人として注目されてきたダニー・L・ハールは、お年おもにデュア・リパ、キャロライン・ポラチェック、オーケールーといったポップ・アクトの楽曲への参加でプロデューサーとしての活躍を見せていた。メジャからのリリースとなるこのフル・アルバムはその流のベクトルというか、ピンクパンサレスはじめ彼が関わってきたポップ・シンガーがゲストを多く参加しており、そして何より、これぞポスト・ハイパーポップといった趣のせわしないジャンルの横断が繰り広げられる。

ユーロ・トランスやJポップをふんだんに盛りこんだ大仰なエレクトロニック・サウンドはまさしく彼の持ち味だが、このマキシマムさにも耳が慣れてきたというか、素直にキャッチーな歌ものポップスとしても楽しめるものに仕上がっている。あるいはオーケールーとユノニケ（UNEEK）を迎えた「Sad Girl」のように（ハールとしては）ストレートなハウス・トラックもあり、かなりリーチの広い1枚と言える。ダンス・ポップの真ん中を打ち抜く覚悟が感じられるのだ。木津毅

Mumford & Sons
『プライズファイター』
マムフォード&サンズ
ユニバーサル（2021）
◆ダンス・ポップ
（原題 "Prizefighter"）

コンテンポラリーで風通しが良いアーロン・デスナーを起用した新作

シンプルだが力強い。湯りもブレもない。全英1位を獲得した前作からわずか11か月でリリースされた本作は、フォークやカントリーやブルーグラスなど、いつも通りのルーツ・ミュージック路線。その音楽的姿勢はいささかも揺らいでいない。一本気といえば一本気だし、実直で誠実なルーツ信仰が根底にあるように思える。ただ、サウンド・メイクは過去作よりもコンテンポラリーで風通しが良い。これが本作の最大のポイントだろう。

その要因として、テイラー・スウィフト、エド・シーラン等との仕事で知られるアーロン・デスナーがプロデュースを手掛けたことが挙げられる。一歩間違えれば保守的になりそうなサウンドに、ボン・イヴェールの最新作にも通じる立体感と重層性が付加されている。あるいは、バンチ・ブラザーズと比べて聴いても違和感がない発刺さを感じる。とでもいえばいいか。前々作から前作が7年空いていたことを勘案すると、現在の彼らの音楽的な好調さと充実ぶりが分かろうというもの。ともかく、アーロンをプロデューサーに迎えたのはナイス解。このクックでもう1枚聴いてみたい。木津毅有明

Electronic Music

Nightmares On Wax X Adrian Sherwood

『イン・ア・スペース・アウタ・ダブ』

ナイトメアズ・オン・ワックス X エイドリアン・シャーウッド

ワープ(ビート) BRC814
¥2800／4・3発売
(原題 "In A Space Outta Dub")
●問合せ先＝03・5768・1227
(ビート)

穏やかなリワークが施された96年作のアニヴァーサリー企画

ワープ・レコード最古参アクトであるナイトメアズ・オン・ワックス(NOW)が1996年に発表したデビュー作"In A Space Outta Dub"のアニヴァーサリー企画として、エイドリアン・シャーウッドにリワークを託したのが本作である。リゾート・クラブの聖地イビサを拠点に、チルアウト／ダウンテンポを更新してきたNOWと、ポストパンク以降のアングラ・サウンド・シーンで過激な音響実験を重ねてきたシャーウッドは、一見するとミュージシャンとしての立ち位置が全く異なるように思える。しかし両者には共通点もある。楽曲を"演奏"というより"ミックス"によって構築していく発想だ。その背景にはダブがある。

こうした共通点をシャーウッドも認識したのか、配下のサイラス・リチャードやダグ・ウィンビッシュらの手を借りて新たな息吹を加えてはいるものの、原曲を解体するまでは至っていない。親切な指導教官が、生徒渾身のレポートに赤ペンを入れるような穏やかな介入が行なわれているのだ。結果として、シャーウッド作品としては驚くほど人懐っこいサウンドに仕上がっているのが、本作の面白さだろう。

長谷川町蔵

Electronic Music

Joshua Chuquimia Crampton

"Anata"

Joshua Chuquimia Crampton [US]
2・4発売

ロス・ツゥサナカのメンバーによるノイジーなドローン・サウンド

米カリフォルニアを拠点とするボリビア出身のギタリストで、2020年以降は4枚のソロ・アルバムのほか、チュキママニ＝コンドリとのデュオ＝ロス・ツゥサナカでもアルバムをリリースしている。J-POP好きで、宇多田ヒカルのリミックスを私家版として発表したりしている。本作はソロとしては1年7カ月ぶりの5作目だ。タイトルは日本語の「あなた」ではなく、アンデス地方の祭りの名で、「雨期の前にパチャママ(母なる大地)を称え、豊作への感謝を捧げるアンデスの儀式"Anata"に捧げられた」と説明される。

再生すると、いきなり通常よりもはるかに大きな音と重低音のアタックに驚かされる。ドゥルッティ・コラムを彷彿させるカラフルでサイケデリックなギター・インストを得意としていたジョシュアが、本作ではソニック・ユースばりのヘヴィでノイジーなドローン・サウンドに変化。エレキ・ギターのほかアンデスの伝統楽器などが重層的なノイズの壁となって迫ってくるが、暴力的というより、どこか温かみのある人間的な手触りとなっているのがユニークな佳作だ。

小野島大

CamScannerでスキャン

Dave Stapleton
『クワイエット・ファイア』
デイヴ・スティプルトン

エディション（ビッグ・ナッシング）
EDN1230
¥3300／3・4発売
●問合せ先＝www.bignothing.net
（ビッグ・ナッシング）

音の世界観とアンビエンスがメインとなるピアニストのソロ

英国のジャズ・ピアニストで、エディション・レコードのレーベル・オーナーでもあるデイヴ・スティプルトンの、ソロとしては12年ぶりの新作。13年以降はスロウリー・ローリング・カメラというピアノ・トリオ編成のグループを結成し、ジャズとダウンテンポを合体させたようなサウンドを作ってきた。

今回のソロ作品もグループで作ってきたサウンドの延長線上にあるものだ。ただし、楽曲の世界観はかなり違う。スティプルトンが弾くローズ・ピアノとエレクトロニカのサウンドを中心に、プレイを聴かせるというよりも音の世界観とアンビエンスがメインの曲が多く、ドラムスはブレイクビーツやドラムンベース的な細かいパターンのものが目立つ。リズムの作り方や音の出し入れなどがかなり自由なのはソロ作品ならではだ。コア・メンバーに、スロウリー…で共に活動するドラムスのエリオット・ベネットとベースのジョン・グッドを据え、ゲストにはトランペットのニルス・ペッター・モルヴェル、サックスのオルガ・アメルチェンコ、シネマティック・オーケストラのギタリスト、スチュアート・マッカラムが参加。

池上尚志

Benjamin Herman
『ザ・トーキョー・セッションズ』

Pヴァイン　PCD25525
¥2500／3・27発売
●問合せ先＝03・5784・1253
（Pヴァイン）

日本音楽への情熱が結実したオランダのサックス奏者による作品

オランダを代表するアルト・サックス奏者。クラブ・ジャズ系のニュー・クール・コレクティヴやパンク・ジャズのバグハウスなど活動は多岐に亘り、キャリア30年を超えても新しい音への探求は止むことがない。

87年の初来日以来、彼が強い関心を寄せてきたのが日本のアンダーグラウンドなカルチャーや音楽シーン。ジャズの即興演奏において西洋が日本から受けた影響に興味を抱いており、サロン音楽や50～70年代の映画音楽、80～90年代のアニメ音楽等もリサーチ。24～25年の来日時は高円

今作では自身が率いるトリオのゲストとして、かねてから交流のある大友良英（g）、類家心平（tp）、馬場智明（ts）ら日本ジャズ・シーンの精鋭達、さらに和楽器の石川高（笙）、小濱明人（尺八）とのセッションが実現。祝祭的グルーヴとパワフルなサックスが共存するオープニングから、ノイジーなフィードバック・ギターが唸りを上げる2曲目、尺八と笙が幽玄な空間を描き出す3曲目など、各プレイヤーの個性が炸裂する全15曲。長年に亘るハーマンの日本

CamScannerでスキャン

R&B/Soul

Jill Scott

"To Whom This May Concern"

Blues Babe [US]
2・13発売

存在を形作ってきた歴史や伝統、文化の総体がすべて音楽の中に表現

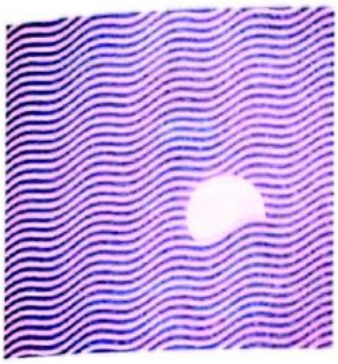
素晴らしい傑作である。10年7カ月ぶりの5作目。アンドレ・ハリス、アダム・ブラックストーン、キャンバー、DJプレミア、トロンボーン・ショーティらがプロデュースを担当している。

本作の素晴らしさは、全く衰えを見せぬ見事な歌唱力や、オーソドックスでオールドスクールなスタイルながら緻密で厚みがあり、熱とエネルギーに溢れた演奏だけではない。1972年にフィラデルフィアに生まれ、もうすぐ54歳になる黒人女性を形作ってきた歴史や伝統、文化の総体がすべて音楽の中に表現されていることだ。彼女の発する声や、バックアップする演奏すべてに、そうした文化や伝統の厚みのようなものが凝縮されている。彼女個人の経験や心情を歌っていても、そこには個人の感慨を越えた、彼女が生きてきた時代や歴史の精粋が見事に屹立している。本作から受ける感動は、それが言語や文化の差異を乗り越えて生々しく伝わってくるからだ。

最近公開されたタイニー・デスク・コンサートも素晴らしかった。来日を激しく期待。

小野島大

R&B/Soul



Moonchild

『ウェイヴス』

ムーンチャイルド

トゥルー・ソーツ(ビート) BRTRU476
¥1900／4・3発売
(原題 "Waves")
●問合せ先＝03・5768・1227
(ビート)

曲ごとに歌やラップを披露する多彩なゲストが参加した新作

このロサンゼルス出身の、サックス奏者二人とトランペット奏者から成る男女トリオの新作には、クリス・デイヴが4曲に参加。外部から著名なドラマーを迎えたのは初めてのことで、他にもエレクトロニクスによってリズムやビートを生み出す二人のミュージシャンが参加している。また、キーボード奏者のロバート・グラスパーが2曲、サックス奏者のディナ・スティーヴンスとフルート奏者のエレーナ・ピンダーヒューズがそれぞれ1曲ずつ参加と、ジャズの演奏家を起用。そして22年の『スターフルーツ』にも参加していたレイラ・ハサウェイとラプソディーに加えて、ジル・スコット、グレッチェン・パーラト、アスティン・ターナー、エリン・ベントレイジなどが曲ごとに歌やラップを披露する。

もっとも、ムーンチャイルドのジャジーなR&B志向に大きな変化はない。シンガーのアンバー・ナヴランも、ウィスパー気味のヴォーカルで、ひたすらメロウな世界を追求している。ただし、彼女と男性のPJモートンが、スローなエレクトロ・ファンク調の曲をデュエットしている。この点も含めて、たしかにこれまでの趣向とは多少違う。

渡辺亨

CamScannerでスキャン

Ella Mai
"Do You Still Love Me"
10 Summers / Interscope [UK]
2・6発売

アメリカ仕様がグンと板に付いた英国ネオ・ソウル・シンガーの新作

ディアンジェロが亡き後の〝ネオ・ソウルのその先〟はここから始まった、と。そうなっても不思議ではないアルバムに聞こえる。しかも、主人公はイギリス人。LA出身のマスタードを今回もプロデューサーに迎えて、シャーデーのデビュー時のようなUKソウルではない、完全アメリカ仕様が今までよりもグンと板に付いている。

先行シングル「100」のロマンティックな空気にメロメロになっていたのだが、アルバムすべてを聴いても、親密でオーガニックな14曲に弛緩するところはない。エラ・メイにとっては結婚と出産を経ての3作目だが、そうした経験がポジティヴな向きにのみ作用したような、フェミニンでしなやかな楽曲に魅了される。オトナの余裕もあるし、愛情の表現がナチュラルなせいか、艶っぽさと清々しさのバランスが実に感じ良く収まっている。終盤には赤ちゃんの笑い声も聞こえてきたりして。

イギリスっぽさを感じるとしたら、私が私が、な押しつけがましさを見せないところだろうか。94年のミスティ・オールドランドを思い出す慎ましい雰囲気に包まれていて、そこも相当に好き。

宮子和眞

Rock [UK]

Ego Ella May
"Good Intentions"
Believe [UK]
3・20発売

ビートが立ち、メロディーは優美なナイジェリア系イギリス人シンガー

20年のデビュー作〝Honey For Wounds〟が英MOBOアワード最優秀ジャズ・アクト賞を受賞するなど、注目を集めているナイジェリア系イギリス人シンガー。このセカンド作も、ジャズを基礎とした流麗なサウンドと、少しアンニュイなヴォーカルで夢心地な世界へといざなってくれる好盤となっている。

冒頭の〝Hold On〟からして音数少ない美しいサウンドながら、ドラムのグルーヴ渦巻く曲となっていて、ぐっと心を掴まれる。その後も上品な曲が並ぶが、ドラムンベース的なビートがアクセントとなっている〝Footwork〟、ハイハットが刻まれたビートの上で艶やかに歌い上げる〝Don't Take My Lover Away〟、コンガのような音が印象的な〝What You Waiting For〟など、ビートが立っている曲が多く、その小気味よいリズムに身を委ねてしまうこと必至だ。一方、メロディーはどの曲も柔らかく優美。サウンド、メロディー、歌声、そのどれもが存在感を放っていて、本作を唯一無二なものに仕立て上げている。アルファ・ミスト、テイヴ(Tave)ことスティーヴ・オクターヴといったプロデューサー陣の手腕も光る一枚だ。

川口真紀

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Thundercat

『ディストラクテッド』

サンダーキャット

ブレインフィーダー（ビート） BRC810
¥2800／4・3発売
（原題 "Distracted"）
●問合せ先＝03・5768・1227
（ビート）

心地好いグルーヴが持続している 憂鬱と背中合わせの陽気さ

まるでメガ・ミックスのようなアルバムだ。ジャンルの折衷はサンダーキャットの音楽の肝であるが、本作はその極みと言える。音楽オタクとしてのこだわりも徹底されていて、異なる要素が違和感なく繋がっていく。忙しなく曲調が変化するので、少しでも気を抜くと置いていかれるような感覚すら覚える。〝注意散漫〟というタイトルそのものだが、それでも心地好いグルーヴが持続しているので、アルバム全体を通して聴かせてしまう。

その陽気さは憂鬱と背中合わせの現でもある。デビュー作 "The Golden Age Of Apocalypse" にはオースティン・ペラルタの、前作 "Is What Is" にはマック・ミラーの死が背景にあったように、本作にも不安定な何かが蠢いている。自分自身に向かう負の感情も表現へと転化して振る舞えるのはポップ・スターそのものなのだが、そうなる一歩手前で留まっている音楽でもある。突き抜けるようでいて、突き抜けようとはしない。それは "Drunk" の時点から変わっていない表現スタイルであって、そこに面白さを感じるが、アルバムとして聴くにはもう一つ何かが欲しいと思う。

原雅明

Rock [US]

Kronos Quartet

『輝けるマヘリア』

クロノス・クァルテット

ライス（オフィス・サンビーニャ）
FLR33031
¥3300／4・5発売
FLR4315（LP）
¥4300／4・5発売
（原題 "Glorious Mahalia"）
●問合せ先＝048・814・0830
（オフィス・サンビーニャ）

黒人の自由と独立を熱望する シンガーへのトリビュート盤

3曲目の冒頭、"Are you being treated right? How do you fare in America because you're black?"。マヘリア・ジャクソン自身の声が聞こえてくる。そしてリピートされる中でクロノス・クァルテットのシャープな演奏が重なっていき…まるでその場の会話の緊張感が表現されているようだ。

これは1963年に彼女の友人でもあった歴史家のスタッズ・ターケルによるインタヴューの一部で、当時シカゴのラジオ番組でオンエアされた発言。本作はその時のいくつかの肉声や同時期のライヴ音源などを元にしたトリビュート盤で、クラシック系作曲家、ステイシー・ギャロップによる現代音楽的な第1楽章と、アフリカン・アメリカンの作曲家、ザカリー・ジェームズ・ワトキンス作曲によるドローン・スタイルの第2楽章を合わせた内容だ。黒人の自由と独立を熱望するマヘリアの気骨ある横顔が強く刻まれていることに奮い立たされる一方、新たなアレンジでマヘリアのレパートリーの一つ "God Shall Wipe All Tears Away"（インスト）が二つの章を繋ぐ中間に収められている、作品としての構成力にも脱帽する。

岡村詩野

CamScannerでスキャン

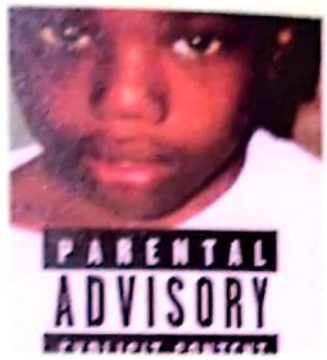
J. Cole
"The Fall-Off"
Cole World / Interscope [US]
2・4発売

成功と呼ばれる世界に対して疑問符を投げかけている〝最終作〟

ケンドリック・ラマーとドレイクによる今世紀最大のビーフの火種の一つを用意していながら、J・コールは早々に自ら撤退を選んだ。その選択は、主に商業的な意味合いで極めて不可解ではあったが、彼の7作めにして最終作となるかもしれない本作を聴くとどこか納得がいく。

10年かけて最高傑作を目指して制作され、2枚組、全24曲で100分超えという長大なヴォリュームで届けられた本作は、ディスク1が29歳で故郷に帰ったコールの物語で、ディスク2が33歳のときに再度故郷を訪れたときの物語、という構成で描かれた自伝的な作品と言えるだろう（なお、コールは現在41歳）。注目すべきは、彼の声が金や名声を手にすることが成功と呼ばれる世界に対して疑問符を投げかけている点で、エリカ・バドゥを招いて「金で幸せが買えるなら、安らぎのない金持ち野郎どもを説明してみろよ」など連中は神を買えなかった？」とラップする「The Climb」には感動と哀愁が滲む。コモンのヒット曲「I Used To Love H.E.R.」への明確なオマージュをはじめ、ヒップホップの歴史へのトリビュートもふんだんにちりばめた重厚な一作だ。

高久大輝



Baby Keem
"Calino"
Ugarp / Columbia [US]
2・26発売

激しい生い立ちを詳らかにする引き出し全開の5年ぶり2作目

善用に切り替えるフローと声色を楽しむ。ベイビー・キームの跳ねどころはこれに尽きる。ただし、奇は衒わずレイドバックしてダウナーだ。約5年ぶりの2作目、ビーグラング（兄貴分）所属、いとこのケンドリック・ラマーとの関係ばかり話題になるが、10代でプロデューサー・デビューをして以来、独自路線を貫いている。激しい生い立ちを、今まで以上に詳らかにする本作。タイトルの『カジノ』は、ギャンブル依存症だった母とラスヴェガスに引っ越し、施設に預けられた苦労続きの少年時代の話が多いから。

ヘヴィーな内容とバランスを取るためか、トゥー・ショートとの7曲目はハイフィー、チェ・エクリュとの10曲目は浮くほどポップ。ケンドリックの『GNX』を思わせるトラックはあるし、'Good Times'ではケンドリックがコモンを引用、次の曲もデンゼル・カリーと再登場して存在感はある。だが、25歳のいとこの輝きは衰わない。キームは6曲目「俺はリリシストではない」の最後でアンドレ3000のまねを、終盤には歌とラップの中間のスタイルを披露して、引き出し全開だ。くせになる怪作。

池城美菜子

CamScannerでスキャン

Rock [Europe]

Bruno Pernadas

『アンライクリー、メイビー』

ブルーノ・ペルナーダス

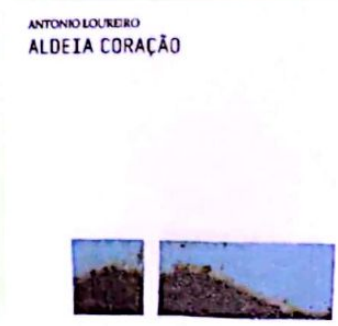
ユニミュージック（ディスクユニオン）
UNCD113
¥3000／3・18発売
（原題 "Unlikely, Maybe"）
●問合せ先＝03・3511・9944
（ディスクユニオン）

女性ヴォーカルやコーラスを起用し よりすっきりと洗練された作品

ブルーノ・ペルナーダスのデビュー作（14年）からずっと参加してきて、23年にはブルーノがプロデュースした初のソロ・アルバムも発表しているマルガリーダ・カンペーロ。彼女は、本作でもシンセサイザーに加えて、全9曲にコーラスで参加。また、部分的にラップ調になる2曲目には、初参加のマヤ・ブランディの歌をフィーチャー。7曲目では同じく初参加のレオノール・アルナウトの清楚な歌声、8曲目ではレオノールとマルガリーダによるコーラスを聞くことができる。

彼女たちはブルーノ同様ポルトガル人。が、4曲目で突刺としたリード・ヴォーカルを披露しているリヴィア・ネストロフスキは、米国で生まれたブラジル人だ。主役のブルーノはギターやベース、キーボードなどの演奏、そしてヴォーカルも取る。ただし、先に触れたように、今回は女性のヴォーカルやコーラスが目につく。また、21年に発表された前作と比較すると、怪しげなアジア的要素は少ないものの、レス・バクスターからクルアンビンまでに通じるエキゾチカ風味、変拍子を含む凝った曲作りは健在。ただし、各曲はよりすっきりと洗練されている。**渡辺亨**

Brazil



Antonio Loureiro

『アルデイア・コラソン』

アントニオ・ロウレイロ

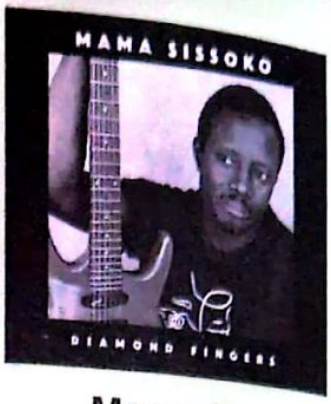
シンク！（ディスクユニオン） THCD667
¥2727／3・4発売
（原題 "Aldeia Coração"）
●問合せ先＝03・3511・9944
（ディスクユニオン）

"ミナスの抒情性"が今の時代にも ヴィヴィッドに響く7年振りのソロ

ミナス新世代の最重要人物アントニオ・ロウレイロの新作。コラボ作品をいくつかリリースしていたゆえにそれほど待たされた感はないが、ソロとしては約7年振りとなる。

これまでの作品同様、多くの楽器を自らが奏でながら、曲ごとにゲストを迎えることで楽曲の色彩をさらに鮮やかにしている。ルアナ・サッジオーロが繊細な歌声を添える「Roda Dos Amantes」。ハファエル・マルチニ編曲の弦楽四重奏を背景に、ヘナート・ブラスがシコ・ブアルキのような清澄な歌声を響かせる「Será」。マリーナ・マルキの歌と、すべての楽器を演奏するロウレイロが対峙する「Cristais」。米国のサックス奏者デヴィッド・ビニーをフィーチャーした「Kali Ora」。多様な仲間たちと音楽を作り上げていく感覚は『クルビ・ダ・エスキーナ』に通じるものがあるが、ここでのサウンドは、そこから大きく進化した高度にプログレッシヴでファンタジックでダイナミックな、最新版ミナス・サウンド、というべきもの。決して懐古的な模倣に陥っていないからこそ、あの"ミナスの抒情性"が今の時代にもよりいっそうヴィヴィッドに響いてくる。**石川真男**

CamScannerでスキャン



マリの鬼才による味わい深い歌声と奔放なギター・ソロ

Mama Sissoco

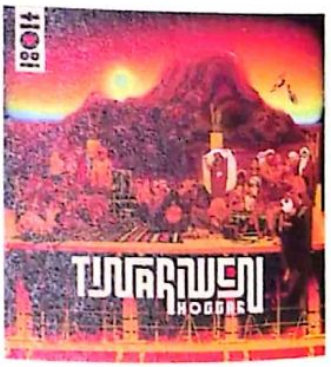
『ダイアモンド・フィンガーズ』

ママ・シソコ

ライス（オフィス・サンビーニャ）
INR37008
¥3700／3・15発売
（原題 "Diamond Fingers"）
●問合せ先＝048・814・0830
（オフィス・サンビーニャ）

70年代から80年代にかけてレイル・バンドらと並んでマリ音楽界を牽引した名門シュベール・ビトン・ド・セグーのギタリストを務め、宇宙を飛び交うような独創性に溢れたプレイで鬼才ぶりを発揮したママ・シソコ。ソロに転じた後は、90年代後半に2枚のソロ作を残しただけの寡作な人だが、一昨年に98年のパリ公演を収めたライヴ盤が発表されたのに続き、配信のみだった近作を除くとかなり久々の録音が届けられた。ただ、レーベル側の説明によれば、本作も録音は10年前に行われたモノのようだが、スタジオ・ライヴをそのまま録音したようなラフな雰囲気の中でギタリストとしての凄みを存分に発揮した、生々しく忘れ難いインパクトを放つ作品となっている。

曲によってシンセの音がうまく拾えてなかったりと万全ではないが、ルーツ・レゲエ的なノリを得意とすると思われるシンプルなリズム隊を伴奏に、荒っぽいが味わい深い歌声と奔放なギター・ソロで引っ張っていくテイクの数々は、彼ならではの飛翔感と閃きに満ちたもの。終盤はフラメンコやアフロ・キューバン調も聴かせ、最後まで目が離せぬドキュメンタリー映画のよう。**吉本秀純**



紛争による移動の強制と世代間の連帯を体現する10作目

Tinariwen

『ホガー』

ティナリウェン

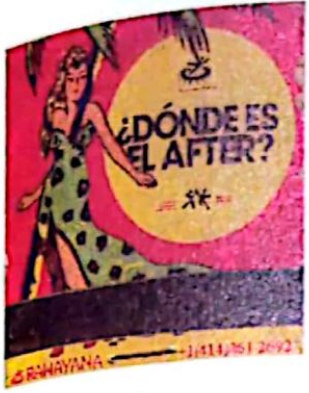
ウェッジ（ビート） BRWE0226
¥2500／3・13発売
（原題 "Hoggar"）
●問合せ先＝03・5768・1227
（ビート）

現在、マリ北部の紛争激化でティナリウェンのメンバーの多くがアルジェリアや欧州に拠点を移しているという。だが、それでも活動を続け、アルバムも本作で10作目となった。もともとティナリウェンはトゥアレグの歴史的苦難と抵抗の象徴という側面もあるが、本作はこれまでの作品の中でも特に直接的、具体的な叫びが形になっている。

アルバム・タイトルのホガールはアルジェリア南部の高地の名前で、紛争時に多くのトゥアレグ人が逃れる場所としても知られた場所。彼らはその中心地であるタマンラセットで若い世代のミュージシャンたちと本作を録音したという。結果として、紛争による移動の強制と世代間の連帯を体現することとなり、部族間の分裂が紛争を悪化させる現実を歌った3曲目、ロシアの傭兵集団のマリ北部への介入と残虐性を糾弾した11曲目などこれまで以上に強い主張を持つ曲が揃った。とはいえ、例えばホセ・ゴンザレスをフィーチャーした2曲目を筆頭に、滑らかな響きのギターを軸にある種の瞑想性、平穏さでそれらを表現。苦難に耐えながらも希望を捨てない彼らの強さが浮き彫りになっている。**岡村詩野**

CamScannerでスキャン

Latin



Rawayana

"¿Dónde Es El After?"

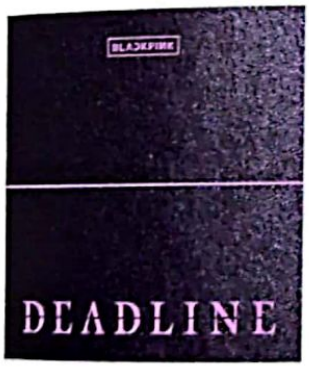
Brocoli [Venezuela]
1・1発売

ベネズエラの反体制的なグループのトロピカル・ラテン・ポップ絵巻

07年にベネズエラで結成され、昨年にはグラミー賞の最優秀ラテン・ロック／オルタナティヴ・アルバム部門を制しているラワヤナ。音楽的には、同郷のロス・アミーゴス・インビシブレスにレゲトン～ラテン・トラップ以降の新世代らしい感覚を加味したような軽快なものながら、24年に発表したヒット曲"Veneza"はマドゥロ前大統領から直接批判を受けて国内ツアー中止を余儀なくされるなど、反体制的なスタンスを一貫して打ち出してきた。この元旦にリリースされた通算6枚目のアルバムも"新年おめでとう"あのクソ野郎どもが、今度こそ出て行ってくれますように"と歌った短い楽曲から幕を開け、その直後に起こった米軍侵攻によるマドゥロ拘束を予言していたようだとして物議を醸した。

とはいえ、エレナ・ローズらの客演も多数迎えつつ全23曲1時間強をカラフルに駆け抜ける"満漢全席"なトロピカル・ラテン・ポップ絵巻は、日本では知名度が低い彼らの実力の高さを楽しく知るに最適。ディスコ／ハウス的な四つ打ちとレゲトンのビートを軸に、ジャジーな展開やベネズエラらしい打楽器も柔軟に盛り込み、聴き応え抜群！吉本秀純

East Asia



Blackpink

"Deadline"

YG [Korea]
2・27発売

ステージ・パフォーマンスを意識した楽曲が並ぶ5曲入りEP

もはや"Kポップの"という冠が必要ないほどに世界的なスーパースターとなったブラックピンク。近年は各メンバーともにソロ活動が盛んで、ビッグ・ヒットだけでなく"踊ってみた"動画のネタとしても定番で、昨年7月から今年1月まで行われ大盛況に終わった"デッドライン・ワールド・ツアー"からも、SNSのショート動画に客席から撮ったものが頻繁に流れてくる。その割にはグループとしての新作がリリースされなかったが、ここに来てようやくのお目見えとなった。

前作から3年半ぶりとなるアルバム（EP）のタイトルは、先のツアーと同じ『デッドライン』。昨年リリースされ、現在までにスポティファイで5億回を遥かに超えて再生されているシングル曲「ジャンプ」を筆頭に5曲を収録。新しいシングルとなる「ゴー」は、EDM的なダンス・ポップの感覚で振り付けありきのミディアム・チューン。ほか、ヒップホップ、ニュー・ウェイヴ風のロックなど、ステージ・パフォーマンスを意識した楽曲が並ぶ。あくまでも視覚的なイメージを大事にした分かりやすい楽曲であるところに活動のスタンスが見える。池上尚志

CamScannerでスキャン

valknee

『Gear』

バルニー（配信）
2・11発売

鋭さを失わないままに魅力化してしまうポップネス

NUUSHIが全曲をプロデュース、二人三脚でサウンド深化を追求した2作目。彼の持つベース・ミュージック由来の変態いサウンドがいっそう際立ち、そこに特有のザラついた感と隙のギャル語が乗ることで、変幻自在の魅力が立ち上がる。低音の処理と抜きの詰まりの甘さの絡みが絶妙。どうしても歌ものになってしまう人間臭さを、現代的なプロダクトのフォーマットへと落とし込む力。彼女の真のポップネスとは、その人間性を隠し、鋭さを失わないままに魅力化してしまうポップネスではなく、むしろ鋭さを失わないままに魅力化してしまうポップネスにあるのだろう。

本人はしばしば“ポップを目指している”と語るが、本作ではむしろ本質的なところで魔界化しているようにも思う。ただしそれは低野な無邪気として放置されているわけではなく、ミックスの完成度はぐんと高まり、ヴィジュアル表現も現代的な感覚へとますます更新されている。どうしても歌ものになってしまう人間臭さを、現代的なプロダクトのフォーマットへと落とし込む力。彼女の真のポップネスとは、その人間性を隠し

妖艶金魚

『Echoes & Horizons』

ポリドール（ユニバーサル）（配信）
3・25発売

つぶやくように発声する女性二人組の泰然としたラップ

20年から活動している女性二人組ヒップホップ・ユニットのファースト・アルバム。ブルージーで粘りのあるは世主なのラップと、もう一方はのびやかなハイ・トーンが持ち味、という対照に興味ある声質を持っていて、その二人が曲ごとにどちらかがメインになったり、絡み合ったりと、有機的に絡んでいるのが最大の武器だろう。ともすれば暗くなるラップをチルな感じにしたり、わかりやすくなるくく、さらりとくるような世界観を作り出すことに成功している。

る。自然体の艶、というべきか。トラックの方もおもしろい。ブルース的アコギやフルートをループに使ったり。サックスやピアノ入りのジャズ的アプローチがあったり、レゲエを取り入れていたりと、アイデア豊富。中でも「cat eyes」は、昔やり尽くされたような純米路をフィーチャーしたポップなサウンドと、二人のつぶやくようなラップが絶妙にかみ合い、新鮮さすら感じさせる。

CamScannerでスキャン

J-Pop

HANA

『HANA』

ノー・レーベル（ソニー）
SRCL13613
¥3364／2・25発売
SRCL13610〜2（CD+ブルーレイ）
¥8091／2・25発売

ティーン世代に刺さるのは当然な オーディションから誕生した7人組

ちゃんみなと、SKY-HI率いるBMSGが組んだオーディション"ZOZOSUN"から誕生した7人組ガールズ・グループの初アルバム。夢を追う中で"NO"を突きつけられた経験を持つ女性たちが、自己否定を乗り越えながら成長する姿を追ったオーディションは大きな共感を呼び、25年の結成以降はヒットを連発、今や同世代を象徴する存在となった。

グループの魅力は、ちゃんみなの卓越したプロデュース力と、その期待に全力で応える7人の気迫。それぞれが歌／ラップ／ダンスといった得意分野で責任を担い、楽曲ごとに新たな表現を切り拓いていく。ヒップホップを軸にロックやポップスを織り交ぜた音楽性は、ちゃんみなの系譜を継ぎつつ、グループならではのシスターフッドや青春感も強く打ち出している。自分の人生のハンドルを自分で握るという意志が核にあり、強気で攻めることを恐れず、ユーモアも忘れない。その姿がティーン世代に刺さるのは当然だろう。互いに支え合って強くなろうとする7人の姿は、今まさに"NO"を食らっている人たちが、自分も変われると心の目を開くきっかけとなり、希望そのものになっている。**廿楽玲子**

Rock [Japan]

No.MEN

『BAA, AS THE SHADOWS LOOM』

ヴィレッジアゲイン　ZLCP0446
¥2500／3・18発売
●問合せ先＝v-again.co.jp
（ヴィレッジアゲインアソシエイション）

うら若き女性だけで作り上げたとは 思えない強靭な意志と世界観

ミクスチャー・ロック、なんていう簡単な言葉でカテゴライズしたくないニューカマーの登場。女性4人組、しかも4年前に高校生だったというメンバーが中心で、さらにドラマーは14歳だという。年齢や性別で音楽を判断するつもりはないのだが、彼女たちのサウンドを聴いただけでは、まさかうら若き女性だけで作り上げているとは思えない強靭な意志と世界観を感じさせられる。

特筆したいのはバンドならではの圧倒的なグルーヴ。スラップ・ベースが主体のリズム・セクションはおそらくレッチリあたりの影響だろうが、エッジーなだけでなくメロウなブレイクを使い分けており押し引きのバランスが上手い。そして、そのビートの上に乗るファンキーでエモーショナルなカッティング・ギターからは思わずハバナエキゾチカを思い出した。ヴォーカルはヒップホップ世代ならではのセンスとリズム感があり、いわゆる洋楽と邦楽という区分けさえナンセンスなボーダレスな印象が強い。シンセによる空間構築はPファンクのような瞬間もあるし、かと思えば「斜陽」のように切ないミディアム・バラードもこなす。ブレイクも時間の問題だろう。**栗本斉**

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

魚住英里奈

『永遠なんて』

魚住造船 UZZ001
¥2700／3・25発売

語り物の伝統に繋がるような熊本出身のシンガー・ソングライター

熊本出身のシンガー・ソングライター、魚住英里奈。ソロのフル・アルバムとしては『ISO1600の花嫁』以来4半年ぶりの新作が届けられた。基本的にはガット・ギターと歌だけで構成された、極めてシンプルな弾き語り作品である。魚住の声は常に震えていて、すぐにでも崩れ落ちてしまいそうなほど繊細な一方、何者にも揺さぶられない力強さもある。そうした絶妙なバランスが全曲で貫かれていて、彼女独自の魅力となっている。今日的なシンガー・ソングライターというよりも、説教節など古来からの語り物の伝統に繋がるような、ある種のおどろおどろしい気配もある。前情報としてこれまで灰野敬二や割礼と共演してきたと聞いていたが、確かに彼らと響き合う世界観の持ち主である。

1曲目「放っとく風に身を任せてる」は中盤から深いリヴァーブが全体を覆い、幽玄なムードをまとっていく。この曲を象徴として、いずれの楽曲もシンプルだが深い奥行きを持つ。〝簡単に幸せになるなよ／簡単に幸せにするなよ〟と繰り返される「終電」など、印象的なフレーズも各曲にちりばめられていて、詩人としての非凡さも際立つ。 **大石始**

J-POP

吉澤嘉代子

『幽霊家族』

ビクター
VICL66130
¥3200／3・18発売
VIZL2514（CD+ブルーレイ）
¥12000／3・18発売

これまで以上に深遠な仕上がりで非凡な才能を存分に発揮

アルバムごとにテーマを掲げ、妄想や幻想が入り混じるファンタジックな楽曲を持ち味とするシンガー・ソングライターで、6枚目のアルバムとなる今回は〝家族〟と〝記憶〟がテーマ。家、弟、犬、幼少の思い出などをモチーフに、彼女らしく寓話的なトーンで綴っていて、そこから家族の幻のようなはかなさ、記憶の不確かさと尊さ、思い出のせつなさ、といったものを表わしてみせる。彼女の言葉のセンスは今回も絶妙で、〝夏休みが終わったら大人になっていた〟〝今更に地獄が恋しいよ〟など、引きの強い表現が頻発する。

サウンド的にはゴンドウトモヒコ、野村陽一郎、梅井美咲などが参加し、オルタナ的ロックからエレクトロニカ、ストリングス・サウンドまで多彩な音作り。中盤のヤマ場となる佐藤優介とROTH BART BARONによる2曲が白眉で、どちらもウォール・オブ・サウンド的な壮大な音像を築き、アルバムの主題といえる楽曲を見事に彩っている。なによりも彼女の、演じるかのように縦横無尽に躍動していく歌唱が圧巻だ。これまで以上に深遠な仕上がりで、非凡な才能を存分に発揮していて、間違いなく最高傑作だろう。 **小山守**

CamScannerでスキャン

曲をたたみかけるような印象の トガッた8枚目のアルバム

GLIM SPANKY

『Éclore』

キャピトル／ヴァージン［ユニバーサル］
TYCT60261
¥3300／3・25発売
TYCT69352（CD＋ブルーレイ）
¥7500／3・25発売

昨年の後半、松尾レミ（vo、g）が体調を崩して、しばらくライヴ活動を休んだ時は心配したが、いつの間にかこんなにトガったアルバムを作っていたとは。ラブサイケデリコとの共作曲も含むベスト盤を挟んで2年4カ月ぶりにリリースする8thアルバム。オーセンティックでアンセミックなロックを、これまで通りモダンなサウンド・プロダクションに落とし込みながら、さらに一歩進んで、J-POPにおける曲作りの方法論を自家薬籠中の物にした印象も。中でも「春色ベイビーブルー」はドラマの主題歌として書き下ろしたせいか、ヴォーカルのキーの高さも含め、ここまでキャッチーな曲はなかったという意味で、巧みな転調と大胆な歌詞が耳に残る「大天使」とともに一番の成果と言えそうだ。

シンセを鳴らしてアトモスフェリックな音像を作った「麗らかな国」や、大きな愛を歌った「わたしはあなた」といったバラードも交えながら、曲をたたみかけるような印象があるのは、1曲1曲に勢いがあるからだろう。亀本寛貴のギターもアルバムの最後を飾るフォーキーな「エクロール」を含め、全曲でアグレッシヴに鳴っている。

山口智男

カムバックと新たな幕開けを 示唆する6年ぶりのフル・アルバム

Gateballers

『Gateballers』

ルーフトップ RTGB0001
¥3000／2・11発売
●問合せ先＝www.rooftop.tokyo（ルーフトップ）

ギター&ヴォーカルの濱野夏椰の怪我による療養期間を経てリリースされた6年ぶり、4枚目のフル・アルバムだ。

バイクのエンジン音を吹かすところから始まる「Get back」で幕を開ける。ビートルズを想起させるご機嫌にドライヴしてくバンド・サウンドと軽やかなコーラス。ノスタルジーをまき散らしながら、何度も"Get back to the morning"、"Get back to the song"とリピートし、カムバックを示唆する。

2曲目のカラフルでノイジーでファニーなバンド・アンサンブルに、"これまでは詠われなかった この世界の新しい名に 2人は気づいたよ"と乗せる「Spread Love」でも新たな幕開けを感じさせる。

「Tシャツvs雨」のオーケストラ・アレンジを手がけたのは、濱野と久富奈良（ds、コーラス）が共に敬愛する岸田繁。くるりの名曲「ジュビリー」を思わせるオーケストラル・ポップとGateballersらしいオルタナ・ギター・ロックをカオスに混在させたような新しさだ。

総じて、サイケデリックでロマンティックでスウィートでロックンロールなアルバムで嬉しい。

小松香里

CamScannerでスキャン

butaji

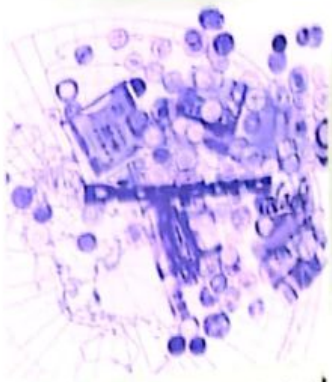
『Thoughts of You』

スペースシャワー（配信）
3・4発売
●問合せ先＝03・3585・3242
（スペースシャワーネットワーク）

不安感がそこはかとなく漂うも体温が宿った希望を感じさせる作品

ここ数年は楽曲提供や劇伴制作などの活動が目立っていたが、ソロとしては5年ぶりとなる4枚目。5年という月日には当然コロナ禍を通過した現在地を意識させられるわけだが、実際そのリリックにはありふれた風景が急に一変してしまうかもしれない不安感がそこはかとなく漂う。これは制作の過程で自身も幼少期に経験した震災の傷について向き合った結果でもあるのだろうが、こうしたムードは、日々の暮らしが決して社会の変動と無関係ではないことを暗に訴えてくるようだ。とはいえ、作品を通して綴られているのは、あなたとの過去・現在・未来には、それらを繊細に慈しむ眼差しと体温が宿っており、J-POPとも通じ合うメロディの立った甘やかな歌モノとしてのソングライティングも相まって、希望を感じさせる作品に。

うち2曲で岡田拓郎と、1曲で篠田ミルと共作。アンビエンスを効かせた音像には私的に閉じすぎない開けた空気感があり、土臭いストリングスから、ギター、打ち込み、ピアノ…と曲ごとにアレンジやサウンド・パレットの幅も多彩。艶さや弱さを導け出すようなヴォーカルもテーマを見事に体現している。**井草七海**



Black Petrol

『Diaspora』

ブラック・ペトロール（配信）
3・4発売

息をつかせぬまま駆け抜ける京都のジャズ・ヒップホップ・バンド

京都発の6人組ジャズ・ヒップホップ・バンドによる2ndアルバム。5年ぶりとなるが、サマーソニックやフジロック、北京やバンコク、台湾でのライブも経験し、自分たちのスタイルを確立したという自信をひしひしと感じる。

これまでど真ん中のヒップホップともミクスチャー・ロックとも取れない雑食性が持ち味だったが、現行イギリスのドリルやグライムを生演奏で咀嚼していくという軸がはっきりとした。またMCがSOMAOTA一人だけになったことで、リリックもよりストレートに聴かせる場面が多くなっている。Gingigamや Sakepnkをプロデューサーに迎えたり、「Diaspora」ではオーストラリアのシンガー＝バーシアによる妖艶なヴォーカルをフィーチャーするなど、ふり幅を見せつつ息をつかせぬまま駆け抜ける、全9曲で21分。とりわけ京都から出発した自らの歩みを振り返る「ここ」から、順番が回ってきたことを宣言するような「ここ」に至る、ラストの流れは痛快。追い風が来ている状況を、テンション高くもしたたかにキャプチャした、今の彼らしか生み出せない作品だ。**峯大貴**

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

んoon

「zoo」

フレンドシップ（配信）
4・1発売
●問合せ先＝hyenashop.jp
（フレンドシップ）

“掴めなさ”こそがバンドの本質であると確信を持った印象

結成10年目の初アルバムから約1年半で新作が完成。『N9』というタイトルになぞらえれば、かつてのん95は動物園では見かけないUMAのような存在で、編成にしろジャンルにしろカテゴライズからするりと抜け出していたが、現在はその“掴めなさ”こそがバンドの本質であると確信を持った印象を受ける。

だからこそ、本作も1曲ごとにスタイルを変え、ボサノヴァもドラムンベースもネオ・ソウルも、ん95流に鳴らすが、JCのスモーキーな歌声がそのすべてを繋ぎ止めている。スネアやシンバルを個別に配置したような、デザインされたビートと記名性の強いベース・ラインが絡む「HEBITORA」、スムースなジャジー・ヒップホップの前半から割れた音像に変化する「CACTUS」への流れは特に刺激的だ。「HEBITORA」のMVは盟友であるメディア・アーティストの谷口暁彦が生成AIをテーマに作っているが、“AIにわざと目隠しをさせる”というアイデアが非常にユニーク。ん95の音楽も一般的なバンド内のプロンプトでは生まれないからこそ、個の集合体としての未知の輝きを放っているのだと感じる。 金子厚武

Rock [Japan]

orlik

「New contemporary」

アポロ APLS2604
¥3000／3・11発売
●問合せ先＝03・5485・2301
（ウルトラ・ヴァイブ）

孤独感や閉塞感を抱えながらトランスして踊っていく弱冠20歳

2005年生まれ、弱冠20歳の中島輝智によるソロ・プロジェクト＝Qi氏のデビュー・アルバム。高校3年から大学1年という時期に書き溜めたデモ群から12曲を選び取ったという本作は、エレクトロニカ、ポストロック、ミニマル・ミュージック、オルタナティヴ・ロック、ジャズ、ヒップホップなど、その時々に中島が聴いていた音楽の影響が乱反射のように音像へと反映されている。いい意味でジャンルに囚われず、他ジャンルの要素が矢継ぎ早に変わっていくさまは、非常に現代的であるとともに、ここまで表面にアウトプットできる頭脳のなさが爽快に響く。

本作に通底しているのは2020年代の日本の都市に生きる若者が感じるリアルで鋭い感覚だ。多くの情報に囲まれながらも孤独感や閉塞感を抱え、それを突き詰めていった結果、トランスして踊っていく。その様は、現代東京から生まれたトリップ・ホップとも言える。華やかな東京の一面ではなく、そこで毎日を繰り返し生きているものが感じる陰鬱さ、その先に辿りつく思索が垣間見える。抜群な嗅覚の先に生まれた作品であり、この先どういう作品に繋がるかも楽しみだ。 西澤裕郎

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

ポニーのヒサミツ

『ウゴーの短編集』

テトラLLC（配信）
3・4発売
●問合せ先＝friendship.mu
（フレンドシップ）

寓話性を存分に言葉に落とし込める稀有な才能を発揮した質の高い作品

“化け猫”や“ろくろっ首”といったキーワードに思わず反応してしまう。いったいどういう音楽なのだろうか、と。はっぴいえんど、もしくは細野晴臣からの影響を多大に感じさせるシンガー・ソングライターが6作目のテーマに据えたのは“全作明らかなフィクションとする”歌詞である。たしかにどのタイトルも童話や小説を想起するものだし、実際の内容もユニークなものばかり。私小説的な歌詞を書くのが得意なアーティストは多数いるが、こういった寓話性を存分に言葉に落とし込める才能は稀有と言っていいだろう。

もちろん、音楽的な質が伴っているからこそ、詞世界の面白さが際立つ。ハンドメイド感たっぷりのフォーキーなサウンドから立ち上るのは、ポール・マッカートニーや大瀧詠一のソロ作品や、ザ・バンドやニール・ヤングを思わせるアーシーなロックンロール。もっと洗練されたサウンドに仕上げても良かったのではと思ったが、このどこかいなたい感覚があるからこそ歌詞の物語も生きてくるのだろう。カントリー・ロックやフォーク・ロックなどの要素を取り入れた日本語ロックとして、非常に質の高い作品である。

栗本斉

Rap/Hip Hop [Japan]

Campanella

『Celosia』

メイド・デイ・メイダー／AWDR/LR2（配信）
2・18発売
●問合せ先＝03・3585・3242
（スペースシャワーネットワーク）

圧倒的な数のステージを経てきた自信が迸しる約6年ぶりのアルバム

名古屋を拠点に活動するラッパー、Campanellaによる前作から約6年ぶりのアルバムとなる本作は、爆発的に拡大し続ける現在の国内ヒップホップ・シーンにおいて、彼の名が依然としてトップ・ティアに並んでいることを証明するものだ。

まず目を見張るのはそのラップ・スキルだ。無論、それはこれまでも彼がキャリアを通して実証してきた点ではあるが、音節やライミングの硬軟を巧みにコントロールし、バックDJとして全国各地を共に渡り歩くsobbieconsや、同郷のZeebra、『The Babystars』らによるエレクトロニカの影響の濃いビートに対してワード・プレイを重ねながら的確にアプローチしていく様は、はっきりと驚異的だ。そこには、ここに到るまでクラブやライヴハウスを問わず圧倒的な数のステージを経てきた彼の自信が迸っている。加えて、リリックも素晴らしい。仲間との日常から心象風景、地元、記憶、リスナーへの提言などリリックに現れるトピックは散らばっているようにも感じるが、複数のラインが絡み合い、次第に緩やかなアーチが浮かんでくる。本年の国内ラップ・アルバムにおいて現状ベスト。

高久大輝

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

HEATWAVE

『Mr.OUTSIDE』

ノー・リグレッツ　HWNR040
¥3636／4・8発売
●問合せ先＝v-again.co.jp
(ヴィレッジアゲインアソシエイション)

人間の生々しい物語が並んでいる抑制の中に熱を感じさせる新作

山口洋が率いる3人組による7年ぶりの新作。表題は山口が親しかった音楽評論家の故・長谷川博一のインタヴュー集と同じだ。〝外見だけの奴〟といった意味だが、それを逆説的に使っている。そこで己を削るように曲を書きライヴをやるという山口を長谷川は〝人間かつおぶし〟と評した。35年も前の発言だが、今の山口にも通じる言葉だろう。

土地や金に振り回される人間の生々しい物語が並んでいる。皮肉交じりのリアリティは金髪強欲オヤジを連想させたり、名もなき隣人の慎ましい人生を想像させる。人生訓を歌いたいわけではないだろうが、ボーダーラインを〝乗り越えるのではなくくぐり抜けていけ〟とは名言だ。後半はアイリッシュ風味が加わっていき、山口がアイリッシュのブズーキを弾く最後の曲はアイルランドからのアメリカ移民の歴史を振り返る。

現在のメンバーは細海魚(kbd)と池畑潤二(ds)。簡潔だが十分に練られた演奏で曲を聴かせていく。山口自身のミックスで、抑制の効いた音の中に熱を感じさせる仕上がりになっているのが面白い。音楽が喚起する感情や思想はノー・ボーダーだ。そう思わせる作品である。　**今井智子**

Rock [Japan]

Jane-B

『Things That Don't Quite Stay』

愚音堂(配信)
3・28発売
●問合せ先＝goondo.main.jp
(愚音堂)

キャリアの長いアーティストの初めての側面を知るヴォーカル作

官能的ですらある女性ヴォーカルを聴いて、ゴンドウトモヒコの別名義によるアルバムだと気づくのは、前知識なしには無理だろう。資料を見ても、ヴォーカルはAIやヴォーカロイドなのか、あるいはゴンドウの歌声を加工したものなのか、明言されていないのだ。

ゴンドウらしいエレクトロニックなサウンドや管弦楽器の響きもあり、それこそ彼がサポート・メンバーをしていた時代のYMOを連想する部分もある。しかし、このアルバムは歌モノで、前述のように女性ヴォーカルが歌う。さらに英詞で、日本語訳を読むと実にパーソナルな手触りであることにも驚いた。女性ヴォーカルが、ある種の照れ隠しに思えてくるほどだ。

弦楽器が響き、パーカッションが効果的に鳴る「DITA」も、ゴンドウならではのサウンド。しかも、「君」と「僕」の関係を描く歌詞で、ヴォーカルも含めると彼はこういうアーティストだったのか…と初めて知った感覚になる。キャリアの長いアーティストの作品を聴いていて、なかなかないことだ。次はぜひゴンドウ自身のそのままのヴォーカルで、と考えてしまうのである。　**宗像明将**

CamScannerでスキャン

クロス・レヴュー

CROSS REVIEWS

ジュリアナ・バーウィック&
メアリー・ラティモア
『トラジック・マジック』
ブランチャ　ARTP250

岡村詩野

収録曲の一つ、ヴァンゲリスが手がけた映画『ブレード・ランナー』のサントラからのカヴァーが大きな意味を持っている。ハープと天女の囁きのような声の融和は確かに美しいが、環境破壊を問題提起し、地球の危機を前に人類はどうやって再生していくのか？という主題を持っているので、実際はかなり社会性の強い作品だ。タイトルの〝悲劇的な魔法〟とは、現代社会への失望、喪失そのもの。9

森崎昌太

ヴォーカルとハープというミニマルな編成ながら、その音像は骨太。アンビエント、ポスト・クラシカル、エクスペリメンタルをめぐるサウンドと繊細なヴォーカルは、シガー・ロスやムームといった、北欧の良質なポスト・ロック、フォークトロニカを思わせる。作中屈指にエモーショナルなラスト曲は、良いエレクトロニカと没入感は切り離せないものなのだな、ということを思い出させてくれる。8

油納将志

パリの音楽博物館に眠る歴史的な楽器を借り、わずか9日間で録音されたという経緯が、この作品の奇妙な純度を説明しているかもしれない。バーウィックの声とラティモアのハープは、どちらかが主役という感じがなく、溶け合うというより同じ場所に棲んでいるようだ。悲劇の中にある魔法、とでも言うべきタイトルの通り、静謐の中に不思議な光がある。喪失と再生が静かに共存している。7

矢川俊介（本誌編集部）

この音楽を浴びながら頭のなかが空っぽになっていくのを感じる。ぜいたくな時間だ。たった3音のハープのリフレインが延々と続き、そこにフレーズや声が重ねられていくことで8分を超えて展開していく「Melted Moon」の美しさにすっかり虜になってしまった。どちらかが前に出るでもないこの二人の邂逅は、歩み寄ることで楽曲の輪郭を立たせた。叶うならライヴでたまに眠りながら浸りたい。7

CamScannerでスキャン

GEZAN
『I KNOW HOW NOW』

十二月（ウルトラ・ヴァイヴ） J
SGM065

マヒトゥ・ザ・ピーポーをメロディ・メイカーとしてちゃんと見ないといけない、とずっと思ってきたので、背後にどんなメッセージを持っていようと、彼自身が社会的な姿勢に強く根ざしていても、今回は特に人懐こくいい曲が揃ったポップ・アルバム、と言い切りたい。圧倒的にキャッチーなフレーズだらけであることこそが破壊力になっている。ドラムをやっていた高市はもう聴いただろうか。 9

日々生活していれば当然に発露する至極真っ当な社会的発言ばかりがフォーカスされがちだが、その話題を抜きにしても非常に優れたオルタナティヴ・ロック作品だ。パンク、ポスト・ロック、ノイズ、ダブ、民族音楽的アプローチまでサウンドは多彩だが、軸がありメロディアス。寄り添いすぎず、突き放すのでもない、けれど、言い切るところは言い切る歌詞との調和は素晴らしく美しい。 9

まず現在の社会状況と一旦切り離して、音楽だけに向き合って聴いてみた。少し前の南ロンドンのバンドのたちのブロッグなアプローチに通じるが、本作はその上で歌へのすがるような信頼が伝わってくる。なぜか80年代のバンド・ブームが思い出されるような瞬間もあっておもしろい。さらに混沌としてきた社会状況とリンクさせると、歌への信頼が限りない希望を伴って輝きを放つようになった。 8

GEZANは変化するバンドだ。だが今作のサウンドの方向性や楽曲の変化も、すべて必然的に導かれた進化であるように感じられる。だからこそ迷いなく響くのだ。同時に、実はシンプルに彼らには人懐っこいキャッチーな楽曲が粒ぞろいであるということも本作で再認識されるだろう。この曲たちが武道館でどう鳴らされるのか、ゾクゾクする。おそらく彼らの新しい変化はもう始まっている。 10

KERA & The Broken Flowers
『Road to psychedelic』

ナゴム NGN008

KERAの関わる作品の魅力は、軽薄と思われるものこそが人間の真性だと解釈するところだろう。（おそらく）思いつきで野坂昭如やゆら帝のカヴァーをやっちゃうところも、自分以外のメンバーが女性ばかりというのもチャラく思われがちで、絶対に損をしている。でも、世の中賢く思慮深く見られたがる人が多すぎてつまんねーよ。わかってねーなって声がここから聞こえてくるんだよね。 9

バンド結成から3年の年月を経てのデビュー音源で、ライヴ盤2枚組。スタジオである程度の加工を施したとはいえ、ライヴ録音でこのクオリティであることに驚嘆。各々のバンドでも活躍するメンバーが揃うが、見事なアンサンブルだ。ゆらゆら帝国、ルースターズのカヴァーも収録されているが、80'sのニュー・ウェイヴやパンクを、現代的に再構築したようなオリジナル曲が素晴らしい。 8

（今のところ）サブスクでの配信はなし、というところに矜持みたいなものを感じるが、この1作目をライヴ・アルバムにした意図も含まれているのだろう。AIも駆使して作り込むこともできるご時世に、最もアナログでプリミティヴな手法を選んだ点に、この新バンドの背骨がどこにあるかを見出すことができる。GEZANと続けて聴いたら、どこか地続きのような感じがして不思議だった。 7

全編にわたって田渕ひさ子の歪んだロック・ギターが冴えわたっている。鈴木慶一からサイケを教わったというKERAが、元来の・ロックへの批評性をここへきて一周させて、まっすぐギター・サウンドに向き合ったという捉え方もできるが、ゆらゆら帝国や野坂昭如のカヴァーも含めて、やはりすべてがどこか批評的に響くのがおもしろい。この次に待つスタジオ盤が楽しみでならない。 8

CamScannerでスキャン

Ani Lennox
"Medusa"

mizutono inu
『SONATINE』

岡村靖幸	椎名林檎	浅井健一	矢野顕子
一聴とても岡村靖幸とわかるほどではなく、むしろすさまじくルースなアルバムだと思う。本人の歌のタイム感からしたらつまらない。でも、まさかいい。この緩さは感じが好きよりいいなと思えるところ。ジャズやオーソドックスからの影響はもちろん強くて、エリカ・バドゥやジル・スコットの変もやっぱりそうつくりだが、実のところ全て踊って転がりながら聴きたいようなこのプレイフルなムードは今、実に珍しい。 [8]	ウィンドンのころ出身のR&Bシンガーによるちょい枯れのアルバム。今作は「ソウル・ナルバム」がコンセプトらしい。古く感じる曲からウォーカルは非常に感がある。最後のようにコンテンポラリーのR&Bに馴染みがあまりないリスナーでも、キャッチーな、ジョのミドルは、やブジュ・バントンが参加したレゲエ・ナンバー「Crazy for you」など、多彩なリズムを横断するため、飽くことなく最後まで聴ける。 [7]	今の時代は次年代のR&Bをウィンテージのように捉えているのかなという思いが残った。独特のざらっとした感触やちょっとした空気感はどもハイファイに録音していく、これもウィンテージ・ソウルのひとつのかたち。個人的には懐かしさよりも、時代を感じるが、受け入れられる素養があるのは理解できる。ブジュ・バントンをフィーチャーしたレゲエ調の曲が良いアクセントになっている。 [7]	変幻自在にくるくる変わるシンセ・ドローカーによるメロウなトランペットの調べに、すべてを包容したかのように包容されたリズムが加わる導入の時点でグッと引き込まれる。音数は最小限に、しかし最大限の効果を狙う。レトロのようで、こだわり抜かれた音の選択は非常に現代的だ。歌詞は官能的でありながら、同時にユーモアがちりばめられていることに感服する。ひとつの到達点を感じる。 [8]
混沌と爆発さが同時に爆発したようなグループだが、すマージョやモチーフが割合素直に聞えたり、それ以上の想像力が求められるのが面白い。1曲目「KUROSAWA」は『最後に笑う男』がモチーフのようだし、「Matrix」は『ハンター×ハンター』のメルエムなのかな、とも。でも、私は「KUROSAWA」を聴いて黒澤明作品の映像感や狂気をまず思った。聴く人も試したり当さける音楽。 [7]	冒頭11分11秒のめまぐるしく展開が変わる「KUROSAWA」で始まり、この曲が象徴するように全編を通して激情系ハードコア、スカム、轟音ポスト・ロックにオルタナ、ゲーム音楽、パワー・メタル、ラップまでを節操なく鳴らす。下手すればノイズになってしまいそうなものだが、1曲に作り込まれていて、メロディも抜群。ナードな歌詞も多いが、時おり垣間見せる言葉の選択は理知的。 [7]	Wasted Spiritsがミックスを手がけ、スマパンをサンプリングし、椿本伸行のマンガへの目配せもある。その情報量だけ聞くとごった煮になりそうなのに、聴いてみると不思議と一本芯が通っている。ヒップホップの引用が装飾として機能している瞬間が随所にあり、その知性とユーモアの同居ぶりが心地いい。20〜30年後、この時代のこうした音楽がどう捉えられるのだろうとも想像した。 [7]	1曲目「KUROSAWA」から、11分以上あるのに冒頭からめちゃくちゃに展開しまくるあまりの情報量に笑ってしまう。これは本人たちも笑ってるでしょう、絶対に。音楽性の幅を指摘するのも嫌になるくらい、あらゆる要素をぶち込みながら、しかしメロディそのものには意外にベタなフックがあるから伝わるのだろう。ブランキー・ジェット・シティ「悪いひとたち」の引用にもニヤリ。 [7]

CamScannerでスキャン

ブーマ・ブルー
『クローク・ドリーム』

P-IAS(ピッグ・ナッシング)
P-IASR1623CD

David Walters
"Ti Love"

Heavenly Sweetness

没入感がすごい。ボーティスヘッドやトリッキーを最初に聴いた時のようなダークネス。でも、一度死を知ってしまった後の強さのようなものが前作より遥かに前に出ていて、大胆で開放的になった印象もあって、深夜に漆黒の暗闇で踊りたくなる。ドロドロに眠りそうになりながらも覚醒している、みたいな。ところでブーマ・ブルーというネーミングがもう最高。蒼き失眠のミュージック。 [8]

ジャミロクワイみたいな曲もあるし、洒落たカフェ音楽のような側面もある。晴れやかなフォーク・ヴァイブがアフロ・カリビアンに溶け込んだ、明るくポジティヴな雰囲気のアルバムでとても聴きやすい。どことなく身近さが感じられるのは、アルバム・タイトルが〝小さな愛〟という意味だからなのか。主題で風呂敷を広げすぎず、心の奥底にある優しさや、静けさと慈愛が最終的に耳に残る。 [7]

予備知識ゼロで聴いた時にレディオヘッド、トム・ヨークのソロ作群に質感が似ていると感じた。実際にプロデューサーとしてトム・ヨークも参加。歌詞は内省的なものが多く、自らの死を予言する夢を見たとしたらどうなるか？といったことがテーマとなっている。ジャジーなバンド・サウンドからダブテクノ、ジャングル、アブストラクトなど、ジャンルは多彩で、硬質かつ重い。 [7]

フランスの海外県であるマルティニーク出身でマルセイユを拠点とするシンガー・ソングライターの3作目。ウェスト・インディーズ発祥のダンスホールであるシャッタを軸に、UKジャズ経由のアフロビートやレゲエ、ハイチのコンパなどもミックス。ディスコも取り入れ、アフロビーツとの親和性も高い。時おりにじませる哀愁はマラヴォワなどにも通じるが、良くも悪くも洗練されている印象。 [7]

ジャングル、クラウトロック、トリップ・ホップが溶け合う音響は、暗いというより夢の中の感触に近い。どのジャンルも再生産するには手垢がついたものだが、自分の死に方を予知する夢という作品への導入に必然を感じた。ボーティスヘッドを連想する瞬間もあるが、もっと個人的で壊れやすい何かがある。独白的だが、バンド形態でその夢を共有しながら音楽を形成しているのが興味深い。 [7]

カリブ系というルーツと、地中海を臨むマルセイユが拠点という背景が生み出すのは極上のバレアリック・サウンド。楽曲ごとに海辺の架空のクラブを想像して制作したならば西アフリカやマルティニークなどのクレオール音楽が押しつけがましくなく行き来し、こうした音楽になるのも納得。大きな歓声を上げるのではなく、夕陽の浜辺でそっと肩を寄せたくなるような豊かな感情をはらんだ一枚。 [8]

前作〝Soul Traffic〟は即アナログを購入して、今もDJする時によくかけている。トラックメイカーのキャプテン・プラネットを迎えてフロア仕様に仕上げたそれに比べると、今作はビートは少し抑えられているが、歌の言語を使い分け、カリブやアフリカの音楽を調合してグンサブルに、文化継承と越境の精神もまるごとすべてを徹底してクールに鳴らすセンスは、さらに磨かれている。 [8]

特に〝Dessin〟や〝Cosse Dessin〟における張り詰めた緊張感と作り込まれた構成が両立する多層的なアレンジに驚かされたが、バンドによる演奏をループさせ、そこに即興演奏を重ねて再構築していったと知って納得した。古くはテリー・ライリーや、近年の岡田拓郎が試していた手法にも重なるものだ。その音像の上に舞うような儚い歌声も、実は何重にも緻密にミックスされていることに唸る。 [9]

CamScannerでスキャン

アルバム・レヴュー

イラストレイション＝norahi

＊各アルバムを10点満点で評価しています。それぞれの評文についた□の数字が点数です。
＊筆者には主に試聴用のCD-R等で評を依頼しています。
＊Ⓟマークのついているものは今月の"アルバム・ピックアップ"（129ページから）で取り上げています。
＊アルバムやDVDのデータ部分にある略号および各メーカーへの問合せ先については181ページをご参照ください。

ロック

アメリカ／カナダ　渡辺亨

Ⓟ**"Naïve Melodies"** BBE

トーキング・ヘッズの曲を、18組のアーティストが再解釈。ミゲル・アットウッド・ファーガソンによるストリングスを中心としたインストで幕を開けるが、R&Bやジャズ、ラテン、ブラジル、アフリカ音楽系のアーティストなどが参加。つまり黒人音楽からの影響という観点でのカヴァーが多く、意義のあるトリビュート作だ。[8]

Ⓟ**サンダーキャット『ディストラクテッド』** ブレインフィーダー／bt BRC 810

この6年ぶりの新作には、故マック・ミラーとの未発表コラボレーションがあれば、リル・ヨッティやエイサップ・ロッキーなどをフィーチャーした曲がある。内容は多少とっちらかっているが、70年代後半から80年代にかけてのAOR風の曲調と、それに合ったシルキーなヴォーカル&コーラスの曲が、とりわけ良い。[8]

Ⓟ**Buck Meek "The Mirror"** 4AD

ギタリストでもあるシンガー・ソングライターの新作。ビッグ・シーフの同僚エイドリアン・レンカーをはじめ、ハープ奏者のメアリー・ラティモアや、ヨンシーとの活動で知られるキーボード奏者のアレックス・ソマーズなどが参加。力の抜けたヴォーカルとギターを軸としたフォーク調の曲に、女声のヴォーカルや電子音がさりげなく溶け込んでいる。[8]

Ⓟ**Beverly Glenn-Copeland "Laughter In Summer"** Transgressive

ピアノのシンプルな伴奏に、曲によってクラリネットやコーラスが付く。全9曲中、4曲にビヴァリー・グレン・コープランドの長年のパートナーであるエリザベスのヴォーカルをフィーチャー。現在ビヴァリーはアルツハイマー病の一種を患っているが、そんな彼にエリザベスが寄り添っている姿がおのずと目に浮かび、感動を誘う。[8]

Ⓟ**Asher White "Jessica Pratt"** Joyful Noise

シカゴを拠点に活動しているトランスジェンダーのシンガー・ソングライターの新作。12年に発表されたジェシカ・プラットのデビュー・アルバムをまるごとカヴァー。シンプルなオリジナル曲に対して、単独でギターやエレクトロニクスなどを演奏。ヴォーカルは女性的だが、ただしジェシカほど特異な歌声の持ち主ではない。[7]

Ⓟ**マイク・フィニガン『マイク・フィニ**

CamScannerでスキャン

ガン『BSMF』BSMF 29226

主にオルガン奏者としても活躍したオハイオ州出身のシンガー・ソングライターが、18年に録音していた未発表音源集。リトル・フィートのカヴァーを含む全11曲を収録。マイク・フィニガンのヴォーカルが入っていなかった2曲は、スモーキー・ロビンソンとスティーヴン・スティルスの歌を入れて完成。陽の目を見て心から良かったと思える未発表音源集だ。 [8]

Ⓟテデスキ・トラックス・バンド『フューチャー・ソウル』ファンタジー／UCCO1248

このスタジオ録音盤としては4年ぶりの新作は、マイク・エリゾンドとの初の共同制作。もともとヒップホップ畑で名を上げた人物だが、音作りは12人編成のバンドのアンサンブルを生かしたもの。また、バンドの複数のメンバーの曲も録音されており、これまでの路線が踏襲されている。 [8]

Ⓟファッカーズ『オー』ニンジャ・チューン／bt BRCD811

ニューヨーク出身の男女デュオのデビュー・アルバム。全編が2～3分前後の短い曲だが、基本的にはハウスやレゲエなどの要素を含むエレクトロニック・ダンス・ミュージック系ポップだ。ケニー・ビーツことケネス・ブルームのプロデュースで、ウィスパー系の女性ヴォーカルなので、部分的にはFKAツィッグスにも通じている。 [7]

Ⓟクロノス・クァルテット『輝けるマヘリア』ライス／os FLR33031

ゴスペルの女王マヘリア・ジャクソンのインタヴュー音源などを生かしつつ、現代のクラシックの作曲家たちが作曲、または彼女が歌うゴスペルを編曲。それらの全11曲を、弦楽四重奏団が演奏してトリビュート。マヘリアの言動が、公民権運動に与えた影響も浮かび上がらせている。 [8]

Ⓟカット・ワームス『トランスミッター』ジャグジャグウォー／bg JAG489JCD

ニューヨーク州を活動拠点とするマックス・クラークのプロジェクトの通算4作目。ウィルコのジェフ・トゥイーディーの制作によるシカゴ録音で、彼は演奏でも貢献。大半の曲調はフォーク・ロック調ということもあって、ジェフの存在が見え隠れしている。 [7]

◆ブリジット・コールズ・ミー・ベイビー『イリヴァーシブル』ATO／bg ATO0703CDJ

シカゴを活動拠点とする5人組のセカンド。ギター・サウンドは80年代のロックに通じているが、曲によって朗々としたヴォーカルは往時のロイ・オービソンやエルヴィス・プレスリー風。全体的にはザ・スミスの影響を感じさせ、その点でも、ある種のロマンチシズムにあふれている。 [7]

Ⓟモア・イーズ『センテンス・ストラクチャー・イン・ザ・カントリー』スリル・ジョッキー／hz HEADZ276

クレア・ラウジーとのコラボレーションでも知られるニューヨーク州在住のマルチ楽器奏者のニュー・アルバム。全10曲中、8曲に一部は加工されているものの、彼女自身の優しげなヴォーカルがフィーチャーされている。曲自体もフォークやカントリー的風味がまぶされていて、予想以上にポップな仕上がり。 [7]

Ⓟスネイル・メイル『リコシェ』マクドナルド／bt CLE22660CDJP

リンジー・ジョーダンのソロ・プロジェクトの約4年半ぶりの通算3作目。この間に彼女はニューヨークからノースカロライナ州に活動拠点を移し、また、20代後半を迎えた。そのせいか、ストリングス入りのバラードもあり、曲調はこれまでより幅広く、ビートは緩急に富んでいる。 [8]

ⓅマリアBC『マラソン』セイクリッド・ボーンズ／bg SBR378JCD

カリフォルニアのオークランドを拠点に活動しているマルチ楽器奏者でシンガー・ソングライターのプロジェクト。この通算3作目のアルバムは、ほぼ全曲が彼女単独の歌と演奏による。ノイジーなギター・サウンドが耳をつんざく曲やバーカッシヴな電子音が鳴り響くものまで、音作りはわりと多彩だ。 [7]

Ⓟミツキ『ナッシングス・アバウト・トゥ・ハプン・トゥ・ミー』デッド・オーシャンズ／bg DOC450JCD

この通算8作目のスタジオ録音盤は、近作と同じく、エンジニアでもあるパトリック・ハイランドのプロデュース。バンドによる生演奏を基本に、管弦楽器も含む。以前より流れるようなヴォーカルと曲調のオリジナル曲に、進歩の跡が見受けられる。 [8]

サンダーキャット『ディストラクテッド』

ブリジット・コールズ・ミー・ベイビー『イリヴァーシブル』

スネイル・メイル『リコシェ』

CamScannerでスキャン

ロック
イギリス／オーストラリア　油納将志

Ⓟ『ヘルプ(2)』 ウォー・チャイルド／M. WARCHILD16CDJP 35

戦場の子どもたちを支援する英国の支援団体が、95年の1作目から31年ぶりに放つコンピの第2弾。世代を超えた豪華陣がアビー・ロードに集結し、1週間で録音された本作は、アークティック・モンキーズ4年ぶりの新曲を筆頭に、デーモン・アルバーンとグリアン・チャッテンが参加したバルブの新曲やオリヴィア・ロドリゴによるザ・マグネティック・フィールズのカヴァーなど、聴きどころに事欠かない。残念ながら本作が必要とされる緊急性が一層高まる中、慈善コンピの枠を超えた真の輝きを放っている。 [9]

Ⓟジェイムス・ブレイク『トライング・タイムス』 VMG／u UICB10

自身のレーベルから放つ7作目のアルバム。前作のクラブ志向を経て、今作では極めてパーソナルな不安に立ち返っており、底から這い上がるような重低音と幽玄に広がるシンセに乗せたあの唯一無二の声は健在で、ラッパーのデイヴを迎えた曲では互いの境界が溶け合うようなコラボが実現。世界的な不確実性と私的な脆さが交差する現在地を、装飾を排して誠実に刻んだ静謐な傑作。 [9]

Ⓟ Gorillaz "The Mountain" Kong

バンド結成25周年の第9作。デーモン・アルバーンとジェイミー・ヒューレットが父親を相次いで喪った経験から生まれた本作は、インド哲学の死生観を軸に15のコラボレーションを連ねている。アヌーシュカ・シャンカールらインドの奏者が縦横に絡み、デニス・ホッパーやトニー・アレン、マーク・E・スミスらの音源を召喚したことで、時空を超えた対話が出現。死を断絶ではなく通過点として捉える眼差しは、ゴリラズというヴァーチャル・バンドの本質とも響き合っている。 [8]

Ⓟトム・ミッシュ『フル・サークル』 ビヨンド・ザ・グルーヴ／bt BRC809

デビュー作の成功後に燃え尽き、休息の3年間を経ての復帰作。ヒップホップ影響下のファンキーなエレキ・ギターから一転、ジョニ・ミッチェルやJ・J・ケイルを参照した70年代的なシンガー・ソングライター・サウンドへと大きく舵を切った。ベッドルーム制作を脱してフル・バンド・サウンドを纏ったことで音の温もりと奥行きが増し、老い、家族、脆さをテーマにした歌詞も心に染みる。 [8]

Ⓟ Danny L Harle "Cerulean" XL

PCミュージックの旗手がチャーリーXCXやキャロライン・ポラチェックのプロデュースで培った美学を結実させたデビュー作。タルコフスキー映画に着想を得たという世界観のもと、重低音とトランス・シンセ、クラシカルなハーモニーが恍惚と哀愁の間を行き来する。ピンクパンサレス、デュア・リパ、ポラチェックらゲスト陣とのコラボもみごと。 [8]

Ⓟ Ego Ella May "Good Intentions" Believe

デビュー作から6年ぶりとなる南ロンドンのシンガー・ソングライターによる2作目。アルファ・ミスト、ウー・ルーらと組みながらセルフ・プロデュースを主導し、ウォームなジャズ・テクスチャーとブロークン・ビートを骨格に、コミュニティ、解放、脆さを詩的に紡ぎ、過剰に華美にならない冷静な自信が全編を貫く。 [7]

Ⓟマムフォード&サンズ『プライズファイター』 ユニバーサル UICI-1166

ザ・ナショナルのアーロン・デスナーをプロデューサーに迎えた6作目。ボン・イヴェール、ホージア、クリス・ステイプルトン、フィニアスら豪華ゲストを擁し、バンジョーとアコースティック・ギターを軸にザ・ナショナル的な抑制の美学へと接近した。ヴォーカル&ハーモニーの美しさは折り紙つきだが、洗練されるほどに野性味が薄れるというジレンマも孕む。既存ファンには申し分ない仕上がりだと思うが、新たな地平を切り拓く意欲には乏しく感じる。 [7]

Ⓟ U2 "Days Of Ash" Island

ウクライナ侵攻4周年の直前、灰の水曜日にサプライズ投下された新曲5曲と詩の朗読1篇を収録したEP。ジャックナイフ・リーとの即興的な制作姿勢が奏功し、近年の硬直気味の作風から解き放たれた衝動を感じるが、急場で仕上げられた感も拭えない。 [7]

『ヘルプ(2)』

ジェイムス・ブレイク『トライング・タイムス』

トム・ミッシュ『フル・サークル』

CamScannerでスキャン

ロック
ヨーロッパほか　村尾泰郎

◆**ザ・ノーツイスト『ニュース・フロム・プラネット・ゾンビ』**モール／ipAMIP0391

ラリ・プナや13&ゴッドなど様々なユニットを立ち上げてきたマーカス・アーチャーを中心にしたドイツのインディー・ロック・バンド。5年ぶりの新作は久しぶりにバンド・サウンドを前面に押し出していて、スタジオでアレンジを考えてライヴ・レコーディングされた。ホーンやシンセを加えたヴォリューム感たっぷりのバンド・サウンドは、パンキッシュな荒々しさのなかに遊び心に満ちたポップ・センスやアイデアがちりばめられていて、その中心には温かな歌がある。9

Ⓟ**ゴーゴル・ボルデロ『ウィ・ミーン・イット、マン!』**カーサ・ゴーゴル／bs BGCD01J

ウクライナ出身のユージン・ハッツを中心に、各国籍のメンバーによって結成されたパンク・バンド。ロマ音楽とパンクを融合させつつ、そこにエレクトロニックな要素も加えて分厚くて硬質なサウンドに仕上げている。歌詞にはロシアのウクライナ侵略に対するメッセージも込められていて、アルバム全編からパンクなアティテュードが伝わってくる。7

Ⓟ**ブルーノ・ペルナーダス『アンライクリー、メイビー』**ユニミュージック／dw UNCD113

ポルトガルの奇才による5年ぶりの新作。ジャズ、エレクトロ、ブラジル音楽など、様々な音楽をミックス。曲は複雑な構造を持っていながら心地よいグルーヴと爽やかなメロディーでポップに聞かせる。今回は女性ヴォーカルのゲストを複数迎えているのが特徴で、高度な技術と洗練が融合したサウンドは、近年再評価されているシティ・ポップやJフュージョンも視野に入れているように思えたりも。8

◆**ステリオス・ペトラキス『リリック』**サンビーニャ／os BDSI3110

ステリオス・ペトラキス『リリック』

アテネで生まれてクレタ島で育ったステリオス・ペトラキスは、子供の頃からギリシャの民族楽器、リラを学んで演奏者になった。新作ではリラを中心に、ユリアン・パイプス、ハープ、アコーディオンなど様々な楽器が加わって地中海音楽の真髄を聞かせる。メタリカのカヴァーという意外な選曲もハマるほど骨太で重厚なアルバム。7

ルイーザ・ブリグーリオ『トゥルヴァトゥーラ』

◆**ルイーザ・ブリグーリオ『トゥルヴァトゥーラ』**同 GLSI37010

シチリア生まれのシンガー・ソングライター。これまで南イタリアのルーツ音楽を受け継いだグループ、ポプルアルマで活動してきたが、本作はソロ・デビュー・アルバム。国境を超えてルーツ音楽を咀嚼しながら、曲ごとにアレンジには工夫があり、モダンな味付けも忘れない。そんななか、おおらかで情感豊かな声が、吟遊詩人のごとく語りかけるように歌う。8

リコ・フリーベ『ザ・ディザイア・バス／ザ・オープン・グレード』

◆**リコ・フリーベ『ザ・ディザイア・バス／ザ・オープン・グレード』**タイム・イン・ザ・スペシャル・プラクティス・オブ／d RTMCD1721

エレクトロニック・ミュージックのプロデューサーとして活動しながら、突然シンガー・ソングライターに転身したリコ・フリーベ。新作は2枚組という大作で、ディスクーはアコースティック・ギター、ディスク2はピアノがメインになっていて、どちらもミニマル・ミュージック的反復が内省的な空気を生み出している。8

◆**サム・クイーリー『ジョウブレイカー』**ミュージック&クラフト／d RTMCD1722

フランスのロック・バンド、ラ・ファムのフィーチャリング・シンガーとしてデビューした、オーストラリア出身のサム・クイーリー。ソロ2作目となる本作は、前作に続いてラ・ファムのマーリン・マニエがプロデュース。きらびやかなシンセとダンス・ビートに乗って、往年のマドンナのごとくセクシーに歌う。7

◆**ザ・ホーカム・シンジケイト『キープ・オン・ウォーキング』**BSMF BSMF2928

オランダのシンガー・ソングライター、ビッグ・ボーが結成したバンドのファースト・アルバム。ヴォードヴィル、ラグタイム、ジャグなど、アメリカのルーツ・ミュージックの源流とも言える音楽に対する知識と愛情がたっぷりと詰め込まれていて、バンドのリラックスした演奏とビッグ・ボーのぶっきらぼうな歌声も楽しい。7

CamScannerでスキャン

ロック

日本　岡村詩野／小山守

◆椎名林檎『逆輸入』EMI／u UPCH20076

三宅純が作編曲した、フランスのハイジュエリー・メゾン＝ブシュロンとのコラボ曲「至宝」に始まり、その三宅による「奉世」に終わる新作。自作曲ではなく、他アーティストへの客演や共作曲のみをとりあげたもので、向井秀徳、BIGYUKI、millennium parade らが曲ごとに関わり、それぞれの特性がうまく生かされていて、椎名の千両役者ぶりが見事に発揮されている。特に椎名とつきあいの長い向井の曲はいかにも…なポスト・パンク的面白さがあって最高。いつかは三宅と全編組んでほしい。

◆大森元貴『OITOMA』同　UNZ1-10889

Mrs. GREEN APPLEのフロントマンのファースト・ミニ・アルバム。映画の主題歌や絵本にまで発展した楽曲など様々なタイプの曲が並ぶ。バンドとは違い、コンパクトで室内的なアレンジの曲が新鮮で、ソングライターとしての資質が素直に楽しめる。音源自体は配信やサブスクで聴けるが、収録の6曲を収録したミュージック・カードとグッズ6種を同梱した特殊セットも販売。

◆Perfume『10th』ポニーキャニオン　PCCI-00032

2016年の結成から今年で10年を迎えた大阪出身の3人組バンド。K-POPや近年のインディー・ロックの影響が強く感じられるのが特徴で、バンド編成の中で壮大なダンス・ポップを目指しているような大枠がハッキリ見えるのがいい。とはいえ、普通にサビがちゃんとある親しみやすい曲の良さが際立っているのが強みか。いいプロデューサーがつけば一気にブレイクしそう。

◆リュックと添い寝ごはん『生きるは愛』オルタナティヴ・スタンダード・クラブ／v　VICL66120

東京を拠点とする4人組バンドによる4枚目のアルバム。70〜90年代の全米トップ40の平均的な楽曲を日本語にしてみたような、ある種の懐かしさを纏った曲が12曲。ディスコ、ロック、ソウルなどが混ざり合って最終的にポップスに落とし込んだような気の置けない良さがある。このままでも十分楽しめるが、あと一つピースが揃うといいのに。

◆GLIM SPANKY『Écloreエクロア』ヴァージン／u　TYCT60261

スピード感があって開放的ないくつかの先行曲からも想像できたが、この約2年4カ月ぶりのニュー・アルバムは、リスタートしたような勢いとフレッシュさが魅力だ。メジャー・デビューから10年を超え、ブルーズ系ロック・グループとして一定の安定感を得ている中で、レトロになりすぎないシャープな音像を前に出してリセットをかけた仕上がりに向かったのは大正解。似たような曲が多くなりがちではあるが、歌の表情で違いをつけているのもいい。

◆秋山黄色『Magic if』エピック／Sr　ESCL6223

「もし自分が別の人生を歩んでいたら」と自身に問いかけるように制作したという5作目。もともと、DTMで培った緻密な制作スタイルとギター・ロック的アグレッシヴなサウンドが持ち味だが、死や終焉を前提に、消失された後に何が残るか？ということをどの曲でも自問自答しているような切羽詰まった歌詞が面白い。

◆Mori Calliope『DISASTERPIECE』EMI／u　UPCH20715

ヴァーチャル・ユーチューバー／ラッパーによる3作目。不完全であることの美しさがテーマとのことで、音そのもので不完全さを出すことはなかなか至難だが、人間臭さやヒューマニズムを肯定するようなリリックが多く見られる。10-FEETをフィーチャーしたハードなミクスチャー・ロック曲が意外性あって面白い。

◆Maki『My favorite things』コロムビア　COCP42655

2015年に名古屋で結成の3ピース・バンドの6年ぶり2作目にしてメジャー・デビュー作。抒情的な歌詞と、腕力で熱く押し切るようなエモっぽいロック・サウンドが特徴で、今時の若い歌ものロックの中でもかなり頑固でストレート。日々の葛藤やもがきをそのまま形にした、無骨な岩のような良さがある。

◆ASTERISM『Kick Down the Wall』SME／sr　SECL3285〜6

〝マスメタル〟と独自に名乗る3ピース・バンドの4作目。ハードかつテクニカルなインストから挑発的なヴォーカル曲まで様々で、プログレっぽい展開の曲がこのバンドの奥行きを伝える。大人になることがテーマだそうだが、なるほど、子供の頃の苦悩のようなものが表現されている。アップル・ウォッチのCM曲「Blink of Ray」が頭抜けてカッコいい。

（以上、岡村詩野）

CamScannerでスキャン

●butaji『Thoughts of You』 スペースシャワー　番号なし

約4年半ぶり、4枚目のフル・アルバム。岡田拓郎をはじめ敏腕のミュージシャンが大挙参加し、ピアノのみから膨らみのあるバンド・サウンドまで変化に富んだ音作りや、全編で冴えわたるグッド・メロディーはもとより、本人の倍音たっぷりのふくよかなソウルフル・ヴォイスが素晴らしい。曲によってかなり熱を込めてパワフルに歌い、三浦透子との息びったりのデュエットも見事で、ヴォーカリストとしての非凡さを強く感じさせる。祈りを込めたような厳かなムードが全体を通底していて、完成度の高い力作。 [9]

●んoon『Zoo』 フレンドシップ　番号なし

ヴォーカルのJCをはじめとする4人組のセカンド・アルバム。ボサノヴァ、シンセ・ポップ、アブストラクトなヒップホップ、穏やかなバラードなど多様な要素が入り混じり、予測不能な展開もあり、彼らのラジカルなセンスを遺憾なく発揮。特にJCのソウルフルな歌声が、メロディーにとらわれず自在に躍動していて、吸引力がすごい。今の勢いを感じさせる。 [8]

◆和久井沙良『Gate』 アポロ／ユニバーサル　UCCJ-2003

これまでは鍵盤奏者としてインスト主体の作品を出してきたが、今回は自身がヴォーカルを取る歌もの。透き通っていてコケティッシュなヴォーカルが躍動し、曲のタイプも四つ打ちのダンス・チューンから浮遊感のあるシンセ・ポップ、静謐なアンビエント・ポップなど粒揃い。ラッパーのPecoriとの共演曲も秀逸で、彼女のポップ・センスが存分に発揮された会心作。 [8]

●ポニーのヒサミツ『ウゴーの短編集』 テトラ／フレンドシップ　番号なし

約2年ぶり、6枚目のアルバム。持ち味であるルーツ・ミュージック直系のアコースティック・サウンドと木訥としたヴォーカルを基本としつつ、いきなりファルセットの声から始まったり、ジャンクなロックンロールをやっていたり、ブルージーなインストがあったりと、ヒネリの利いたアイデアが頻発。Kiss the gambler とのデュエット「百鬼、夜を行け」が特に秀逸。 [8]

●HEATWAVE『Mr. OUTSIDE』 ノー・リグレッツ　HWNR040

山口洋率いる3人組による、約6年半ぶりのアルバム。ギター・リフが引っ張っていくロックンロールを中心に、腰の据わった重量感たっぷりな演奏とともに、巻き舌で言葉をたたみかける〝山口節〟のヴォーカルを聴かせていく。ボエトリー・リーディング風になったりささやくように歌ったり、アコーディオン入りのアコースティックな曲があったりと、変化にも富んでいる。蓄積が詰まったディープな良作。 [7]

◆sugar plant『one dream, one star』 キリキリヴィラ　KKV-192

昨年でデビュー30周年を迎えた二人組による、約8年ぶりの新作。ギターを中心に浮遊感あふれる雲上のような音像を作り、そこにエレガントではかない美声ヴォーカルが重なっていく、とてもデリケートなドリーム・ポップ～シンセ・ポップ。メロディーもサウンドもヴォーカルも、すべてが入念に磨き上げられたかのようで、どの曲も深く重厚な仕上がり。ずっと夢の中にいるような特異な幻想的感覚は、やはり長い蓄積があってこそだろう。 [9]

●Jane-B『Things That Don't Quite Stay』 鳴音堂　番号なし

プロデュースとソングライティングをゴンドウトモヒコが手がけ、アメリカ人と思しき謎の女性ヴォーカルが歌う二人組。ルーツ・ミュージック的な匂いのするヴォーカルを生かしたアーシーなサウンドの曲、シンセ・ポップっぽいファンタジックなアプローチ、それにジャズやトライバルな要素を取り入れた曲など、多様な試みをしている。ゴンドウのポップ・センスが有機的に表れた極上の仕上がり。 [7]

●魚住英里奈『永遠なんて』 魚住造船　UZZ001

熊本出身シンガー・ソングライター。アコギやエレキ・ギターだけの簡素なサウンドとともに、ドスの利いた低音ヴォイスだったりやけにキュートになったりハイ・トーンでのびやかに歌ったりと、曲ごとに唱法を変えた歌を聴かせていく。なによりも歌詞が圧巻で、達観や諦念を出発点としているような極めてシニカルでクールな言葉が並ぶ。他者への嫉妬しさや苛立ちや呪いといったものを物憂げなまでに綴りつつ、その一方で寂寞さも漂わせたりして、その支離滅裂なありようそのものが魅力かも。中でも、簡単にゆせにするなよ

唯名林檎「禁じ手」

大森元貴「OTOMA」

秋山黄色「Magic it」

と突き刺すように歌う「絶唱」がすごい。シンガー・ソングライターの新たな可能性を感じさせる男女だ。 9

◆神々のゴライコーズ『KO-GO-NO GORAIKO-Z』神々のゴライコーズ／フレンドシップ　番号なし

ヴォーカルのグレート橋本を中心とするトリオ・バンドのファーストで、制作に約3年を費やしたという全17曲の大作。ひしゃげた声で叫苦しいシャウトを繰り返すアクの強いヴォーカルと、ファンキーでラウドでサイケデリックで超絶ストロングな演奏が一体化して、アメーバの如く予測不能に展開していく。関西インディー系に近いダーティーでスカムな匂いが漂い、柔軟性と自在性に富んだ演奏力もすさまじい。キャプテン・ビーフハートとオシリペンベンズが合体して突然変異した感じ、といえるか。 9

Ⓟ Gateballers『Gateballers』ルーフトップ　RTGB0001

ヴォーカル&ギターとドラムスの二人組。オルタナ・ロックやサイケデリック・ロックなどをやっていて、そこに岸田繁アレンジ参加曲などでストリングスやコーラスを加え、後期ビートルズっぽい壮大な音作りを試みている。メロディーの良さも特筆もの。 8

Ⓟ No.MEN『BAA, AS THE SHADOWS LOOM』ヴィレッジアゲイン　ZLCP0446

平均年齢18歳という4人組ガールズ・バンドのファースト。ファンキーなダンス・チューン、シティ・ポップ的なグルーヴ曲、音響的アプローチ、オルタナ的ロックなど、曲ごとにかなり多様な試みをしている。なによりもヴォーカルの堂に入った風格たっぷりの歌声がすごい。まだまだ模索中のようだが、今後に期待大のバンド。 7

Ⓟ orlik『New contemporary』アポロ／ul　APLS2604

現在まだ20歳という中島輝智のソロ・プロジェクトで、数曲以外はすべて自身の手による宅録的作品。オルタナ・ロックから四つ打ちのテクノ、ドラムンベース、ヒップホップ、クラシックなどの要素が入り混じり、そこにコラージュ的手法のエディットを施している。きっちりまとめようとせず、整合性のないまま着地したような、混沌としたところに惹きつけられる。 8

◆Oh!Shareles『Oh!Shareles The First』アトミック／dw　ARDW2

女性3人組ドゥー・ワップ・グループで、ラップ&スターの出雲亮一など6人編成のバンドが参加。曲ごとにメイン・ヴォーカルが変わりつつ統制の取れたコーラス・ワークを聴かせ、泰然とした歌いっぷりが見事。スウィートなオールディーズ風をはじめ、モータウン風やアッパーなビートで攻める曲、リリカルなバラードなどが並び、ドリーミーなムードたっぷり。 7

Ⓟ Black petrol『Diaspora』ブラック・ペトロール　番号なし

京都の6人組のセカンド。高音でたたみかけていくラップと、オルタナ・ロックやグライム、ドラムンベースなど自由度の高いサウンドで一気に聴かせる。特にスピーディーに疾走する演奏と早口ラップが拮抗するタイトル曲が白眉。ラジカルなムードも魅力。 7

◆Foi『Rondo』K／フレンドシップ　番号なし

日本と中国をルーツに持つという女性シンガー・ソングライターのセカンド。ハイ・トーンのエレガントな歌声で、ラップを交えながら躍動するヴォーカルが最大の持ち味。それをR&B、ファンク、ヒップホップ、あるいはロック的な曲などで聴かせている。 7

◆österreich『胎教』ブックショップ　OSTR001

ギタリストの高橋國光によるソロ・プロジェクト。複雑な構成で変拍子も入るプログレ的サウンドが突っ走り、そこに曲ごとに替わる男女のヴォーカルがのっかる。屈折したいびつなロック、というスタイルがおもしろい。 7

◆メリクレット『1ヨクトの眠り姫』メリクレット　MLKRT001

ギタリストのレニアはボカロPでもあるという札幌出身の男女混合バンド。女性ヴォーカルのキュートで表情豊かな歌声を軸として、オルタナ的ロックやスピーディーにたたみかけていく曲、センチメンタルなバラードなど、アニソン的でポップな曲揃い。 7

◆DeNeel『BRAIN WASH』SDS　SDS1001

ノイジーでダンサブルなロックをやっている4人組バンド。なまめかしくエモーショナルなヴォーカルと勢いのあるバンド・サウンド、親しみやすいポップなメロディーで攻めている。 7

（以上、小山守）

和久井沙良『utas』

ボニーのヒサミツ『ウゴーの短編集』

神々のゴライコーズ『KO-GO-NO GORAI-KO-Z』

CamScannerでスキャン

ALBUM REVIEWS

Jポップ／歌謡曲
原田和典

●HANA『HANA』 ノー・レーベル／SI SRCL13613

音楽面でもファッション面でも熱烈な注目を集める7人組が遂に1stアルバムを発表。憂いのある曲調とタイトなビートのコンビネーション、および、腹の底から声が出ているというか、"身体がよく鳴っている"感じのヴォーカル・ワークに耳が引き寄せられた。採点は今後へのさらなる活動への期待も加味して。 9

◆MISAMO『PLAY』 ワーナー WPCL13721

TWICEの日本人メンバー3名によるサブ・ユニットの初フル・アルバム。いきなりのスウィング・ジャズ調に驚かされるが、曲のムードがどうあれ3人の滑らかな歌い口は変わらず、2～3分の楽曲がほとんどなのでサクサク聴き進めていけるのもいい。ハモリも含む歌唱、メロウな旋律、メリハリの利いたリズムが渦を巻く"Yes or Yes"を繰り返し聴いた。 8

◆Little Tree『Letters』 ポニーキャニオン

力を蓄えてきたというシンガー・ソングライター、約2年ぶりの3作目。1枚目『Green Light』を聴いたときの"すげえな"という衝撃がいまだに私の中に残っているのだが、メジャー・デビュー以降の、卓越したヴォーカル力を生かしつつも、より親しみやすい、人口に膾炙した方向性へと歩を進めているような姿勢もまた良し。アレンジャー陣ではTOSHIの活躍が光る。 8

◆原因は自分にある。『文藝解体新書』 ポリドール／u UPCH29296

男性アイドル界に新風を吹き込む7人組グループが"文学"をコンセプトにしたEPを発表。どこが文学なのか正直申し上げて判りかねたけれど、各自のソロ・パートのリレーは歯切れよく、ベースを強調したトラックづくりも聴きごたえがある。 7

◆TOOBOE『EVER GREEN』 コンセプト／SI SRCL13559

マルチな才能を持つ音楽クリエイターIllQによるソロ・プロジェクトのメジャー2ndアルバム。音作りはダンサブルで、歌回は声に出して読みたいほど魅力的。歌声も録音で耳に残る。短時間で味えるキャッチーさとインパクトが求められるアニソンの世界で引く手あまたというのも納得だ。 8

◆Saucy dog『Bibit』 エピック／SI

セカンドEPとのことだが内容はフル・アルバム級。約半数の曲にインストロがついておらず、ヴォーカルのミキシングも大きめなので、この気鋭シンガー・ソングライターの"歌声の圧"を浴びるには絶好の一枚という感じ。楽曲にさらなるヴァリエーションが加われば音楽自体の強度が増そう。 7

◆碧海祐人『情操の空き地』 碧海祐人 番号なし

4枚目のEPとのことだが、不勉強にしてこのシンガー・ソングライターの音世界に初めて接した。そして「聴くことができてよかった」と思った。「暗夜光路」冒頭のギター演奏から"ただ者ではない様子"がビンビンに漂ってきて、ロッカバラード調「金蔵」におけるねじれた音作り、やけにスウィートな歌声に引き込まれ、「紙の月」後半のひとりコーラスとベース・ラインの呼応にオヤと思わされ……。全編に取り組んでいるアマチュア・ミュージシャンたちにとっても、ひとつの光明になるのではないか。 8

◆Uru『TONE』 ソニー・ミュージックアソシエイテッド／SI AICL3466

3年ぶりの4枚目のアルバム。"歌を引き立てることに徹底的に専念"という、いわゆる歌ものポップスのお手本のようなアルバムだ。ロック・バンドのバックアップを受けながらも、歌詞の一語一句をかみしめるように歌い綴る。ゆったり目のテンポによる楽曲が多く、低音域の優しさ、丁寧なプレスが楽曲の中でしっかりと生かされている。 8

◆さとう。『感覚し、その目に触れて』 ベルウッド／k BVCS1257

中学生の頃にツイキャスでギターの弾き語り配信を始めたというシンガー・ソングライターがセカンド・アルバムを発表。6か月連続で行なわれた配信シリーズの楽曲はもちろん収録、歌声もギターの刻みも共に力強い。今後、歌詞の世界も曲想も、いっそう拡がっていくことだろうし、その意味ではこれからの活動がさらに楽しみだ。 7

◆富岡愛『愛が溶けないうちに』 ビクター 番号なし

22年デビューのシンガー・ソングライターが、1枚目『愛SCREAM』の増補改訂版を発表。十数年間オーストラリアで過ごしたからか、英語歌唱による"Dear Diary"が実に滑らかで聴きやすいし、日本語歌唱の歌詞も巧みに韻を踏んでいる。ここに、たとえばジョニ・ミッチェルばりの陰りあるロディ・ライン、華麗なオーケストレーションが加われば「実に華やかな

CamScannerでスキャン

◆**岡咲美保『MY GLEAM』**キング　KICS4245

気鋭声優の2ndミニ・アルバム。「きゅんきゅるかわいい」、セリフも素敵な「HAPPY LUCKY SMILE」など、ライヴ映えしそう、かつコミカルなアップ・テンポ楽曲での歌唱が特に生き生きしている。この歌声で、もっと多彩なレパートリーを聴いてみたい。7

◆**石原夏織『ASOVIVA!!!』**ポニーキャニオン　PCCG02497

18年にソロ声優アーティストとしてデビューした人気声優が2枚目のEPを発表。さまざまな声を使い分け、ブレスの取り方も難しそうな超アップ・テンポの曲を届けるあたり、さすがプロの声の使い手。だが、通して聴くといささかの落ち着きも欲しくなる。彼女のヴォーカルは、タメの利いたビートの楽曲にも合うのでは。6

◆**YU-KA『A.D.D.I.C.T.』**ショー・チック・ボーイ　番号なし

21年にTEMPURA KIDZから独立し、1stシングル「キシリトールガム」をリリース。本作は同曲のリミックスを含むEPで、流暢な歌声とチル風味たっぷりのR&B風味がごく自然に溶け合う。もうひとつサウンドに起伏があっても、とは思うが、「勘違い」でカリンバ（だろうか?）の音色が重要な役割を担うあたり、興味深い趣向であると感じた。7

◆**ぜったくん『宇宙ZINE』**ヴァージン／u　番号なし

〝巣ごもり系マイルドラッパー〟が、ZINE（同人誌）を編むような感覚で芦田菜名子 from 7co、ゆいにしお等の音楽仲間と作りあげた一作。コミカルな作風の中に四海同胞への思いをこめた（と私は感じた）1曲目「宇宙人」から、ゆるく楽しくかっこいい世界が続く。これでバンドル・ダウンロード価格1222円はお買い得だ。8

◆**沖聡次郎『GALLERY』**ユニバーサルシグマ／u　番号なし

Novelbrightでツイン・ギターの一翼を担ってきた沖聡次郎による、初のソロ・アルバム。インストゥルメンタルという形式をとって、ギタリスト、コンポーザーとしての面をしっかり打ち出している。哀感のこもったメロディと、大迫力の楽器アンサンブルの両方が楽しめる「Diner」が楽しい。7

Ⓟ**吉澤嘉代子『幽霊家族』**ビクター　VICL66130

5年ぶりのフル・アルバム。二つの短編「into the dream」と「Out of the dream」は、いわばギョーザの皮。その中に、味わい深い具、いや、楽曲がこれでもかと詰め込まれている。外国語がほぼ皆無な歌詞の数々は日本語の持つ陰影をしっかり再認させてくれるし、アコースティック楽器を中心とする伴奏もまた、実に歌声と合う。8

◆**m-flo『SUPERLIMINAL』**リズム・ゾーン／av　RZCD67453

98年始動のユニットが無期限活動停止を前に6年数か月ぶりのオリジナル・アルバムを発表（通算10枚目）。ELECTRONICOS FANTASTICOS!、RIP SLYME、chelmicoなどを次々とフィーチャーしながら色彩感豊かな音世界を繰り広げている。LISAのメリハリに富む歌唱（エフェクトも含めて）が光る「You Got This」を筆頭に、サウンドにもリリックにも、どこか〝やりつくした〟〝出し尽くした〟的なさわやかさを私は大いに覚えた。8

◆**ランチャーズ『LIVE 1969』**スーパー・フジ／dw　FJSP544

伝説的4人組バンドの初出音源。ディスク1はカヴァー曲中心で、カーナビーツが日本語で流行らせたゾンビーズの「I Love You」を英語で歌うのも印象深い。ディスク2は座談会の模様で、帰国間もない喜多嶋修が語る英国ロック・シーンの話が生々しい。8

◆**喜多嶋修『松岡計井子、ビートルズをうたう INSTRUMENTALS』**同　FJSP546

松岡計井子の盤に〝ジャック・アルマン〟とクレジットされていた人物は喜多嶋修だった。これは彼がビートルズへの溢れんばかりの愛とこだわりを胸に制作した伴奏トラック集で、こうした音群（本作はスタジオ・デモ・セッションだが）に後日、松岡が〝朝から晩まで犬のようにはたらく〟と歌を重ねたのかと思うと胸が熱くなる。8

◆**『スタジオジブリ トリビュートアルバム「ジブリをうたう その2」』**ビクター　VICL66103

武部聡志の全面プロデュース企画が2年ぶりに復活。薬師丸ひろ子のクラシカルな一面があらわれた「いつも何度でも」の次に、GLIM SPANKYのブルージーな「ひこうき雲」が来るあたりに曲順の妙を感じた。7

MISAMO『PLAY』

Furui Riho『Letters』

碧海祐人『情操の空き地』

CamScannerでスキャン

ジャズ
村井康司

◆**サム・グリーンフィールド『ワースト・オブ・サム・グリーンフィールド』**
Pヴァイン　PCD25522

グリーンフィールドはコリー・ウォンのバンドのメンバーとして知られるサックス奏者。これは彼が好きだという日本フュージョンへのオマージュで、カシオペアと高中正義をくっつけた「CASIONAKA」という曲まである。確かにカシオペア、T-SQUARE、高中、Dimensionあたりのサウンドが再現されていてびっくり。YouTubeにあるPVも最高なのでぜひ見てね。 7

Ⓟ**デイヴ・ステープルトン『クワイエット・ファイア』**エディション／bg　EDN12901J

エディション・レコーズの創設者ステープルトンのリーダー作。本人のロードとシンセ、切れのよいベースとドラムスが安定していて、ニルス・ペッター・モルヴェル(tp)、オルガ・アメルチェンコ(as)などのソロがフィーチャーされる。クールで心地よいサウンドだけど、やや単調かな。 7

Ⓟ**ヘンジャミン・ハーマン『ザ・トーキョー・セッションズ』**Pヴァイン　PCD25525

オランダのサックス奏者ハーマンは、1987年の初来日以来、日本の様々な音楽家と共演してきた。ここでは大友良英、類家心平、馬場智章、和楽器の小濱明人、石川高と共演し、ノイジーなインプロから和楽器とのセッション、『007』を思わせる曲までを自在に演奏。80年代のジョン・ゾーンを思わせる自由な空気が嬉しい。 8

◆**オーブリー・ジョンソン『ザ・ライヴリー・エアー』**コアポート　RPOZ10115

ライル・メイズの姪で、2020年にデビューした歌手の6年ぶりの新作。伸びやかな声とテクニカルなスキャットに磨きがかかり、オリジナル以外にメイズの代表曲「ショリーニョ」やジョニ・ミッチェル「ヘルプ・ミー」などをカヴァー。恐るべき才能を感じる逸材。もっと注目されてほしい。 9

◆**ブライアン・カルバートソン『デイ・トリップ』**インパートメント　IPM8149

ブライアン・カルバートソン『デイ・トリップ』

大西順子『American Classics』

ミカ・ストルツマン『クロッシング・ザ・バー』

スムース・ジャズ界の大物ピアニストの新作は、マーカス・ミラー、シーラ・E、マイク・スターン、ランディ・ブレッカー、エリック・マリエンサルなどの豪華ゲストを揃えたもの。80年代フュージョンを思わせるサウンドで、録音も含めて完成度は高い。 8

◆**大西順子『American Classics』**サムシン・クール／dw　SCOL1083

意外なことにソロ・ピアノ作はこれが初めて。アート・テイタムを思わせるテクニカルで華麗なスタンダード曲のアプローチも素晴らしいが、セシル・テイラーの曲を2トラック採り上げて、あえてフリーな音塊を使わずに、セシルの楽曲の美しさを際立たせる演奏が圧巻だ。ピアニストとしての圧倒的な力量を改めて認識させる傑作。 9

◆**杉山悟史『Monologues』**カンナビ／dw　KNRS1008

ドイツで幼少期を過ごし、ニューヨーク生活を経て関西で活動しているピアニストのピアノ・ソロ作。ビリー・ストレイホーン、コール・ポーター、カルロス・アギーレ、セロニアス・モンクなどの曲を、旋律を大事にしてじっくりと弾く。中でもアーリー・ジャズ時代の定番曲「アフター・ユーヴ・ゴーン」が優雅で心地よい。 8

◆**OKAZAKI BROTHERS『Blood But Blues』**ユニバーサル　UCCJ2254

小曽根真のビッグ・バンドなどで活躍する岡崎好朗(tp)・正典(ts)の兄弟による双頭リーダー作。50～60年代ハード・バップ～新主流派の香りが漂う二人のオリジナルを、小曽根をはじめとするリズム・セクションと共に端正かつ楽しそうに演奏。ギミックや衒いがまったくない、日本を代表する実力派5人による正統派ジャズだ。 8

◆**ミカ・ストルツマン『クロッシング・ザ・バー』**エイヴィー／東京エムプラス　AV2807

マリンバ奏者ミカ・ストルツマンの、キャリアの節目を総括したかのような力作。バッハ、ドビュッシー、ジョン・ゾーン、坂間美帆という異曲が攻めの姿勢を感じさせるが、ミカのマリンバは1音1音をとても丁寧に、じっくりと紡いでいく。特に坂間のコンチェルトが印象的で、ゲスト参加のエディ・コメスとスティーヴ・ガッドの緻密なリズム・ワークもいい。 遠

CamScannerでスキャン

ラップ／ヒップホップ

日本　二木信

Campanella『Cabasia』メイド・マイ・メーデー／EMOTION 番号なし

名古屋を拠点とする独創的なラッパーの5年ぶりのアルバムは、変わらず彼と仲間達が試みる、電子音楽としてのヒップホップとそこにいかにラップをユニークに絡ませるかという実験が唯一無二であることを示す。'2001年エイフェックス・ツイン、や宮沢のラッパー＝仙人掌の、'スティーヴ・ライヒ、'indopeepsychics'というリリック、電気グルーヴ「Shangri-La」を引用した「moyai」など。[9]

Watson『Soul Quake 3』ワトソン 番号なし

プロデューサー／ビートメーカーのKoshyとタッグを組み、Jin Dogg、C.O.S.A、ANARCHY、T-Pablow、Buca oshiなどの客演ラッパーを選び、曲のコンセプトを共有した上でラップのスキルとリリックの面白さでちゃんと競い合う。そうした点において本作は最近出た国内のラップ・アルバムにおいてかなり完成度の高い作品だ。僕が一曲選ぶとすれば、仙人掌とDaichi Yamamotoとの「スーパーレア」。[9]

Watson『Soul Quake 3』

SZK『Braving tape 1』

AOTO『Kiss My Life』

SZK『Braving tape 1』スザク 番号なし

16歳でこれだけラップできるとは。いや、今やラップの上手い若者はたくさんいる。「激闘！ラップ甲子園」や「ラップスタア2025」で注目された彼の妙に達観した人生観が反映された歌詞に唸る。尾崎麻「FEEL OR BEEF BADPOP IS DEAD」を彷彿させるドリルも。初期THA BLUE HERBを想起させる瞬間さえある。[8]

Jellyy『Forever』ジェリー 番号なし

'Sigo、Sakippaみたいな奴に挟まれてき／俺には才能がないのかって'（「Naked」）。こういうことを率直にラップできるのが、この大阪出身のラッパーの面白さ。自虐と力強い成り上がり志向のごった煮。それをかつてのワカ・フロッカ・フレイムのような派手なサウンドで捲し立てる。これも今の新しい世代の注目の重要作品だ。[7]

valknee『Gear』バルニー 番号なし

ベース・ミュージックもGファンク風のビートもフレンチ・エレクトロ風もロックも、NUUSHIによる音は太くて強度がある。ダンス・ミュージックを取り入れたラップの多くは音がペラペラで残念な結果が多い中、本作はまずそこが違う。ミーム的なキャッチーな単語を用いてリズムとテクスチャーの快楽を追求するvalkneeのラップも素晴らしい。[8]

AOTO『Kiss My Life』アオト／スペースシャワー

語感の気持ち良さから曲にハマるということはあって、この新進気鋭のラッパーのセカンド収録の「BIGMAN」はそういう曲。歌メロやフェイク、引っ掛かりを作る発声など彼の上手さや個性はそこにある。彼の、卑屈さや屈折を感じさせないスタイルや精神性が多くの支持者を今後、獲得していくことは容易に想像ができる。[7]

妖艶金魚『Echoes & Horizons』ユニバーサル 番号なし

『FRIDAY OF NIPPON』について、以前に「『野良猫ロック』とBガールの出会い」「現在の感性でヒップホップ・ソウルと・和モノ・を自然とミックス」と書いた。Nina Wasa（ニーナ・ワンリ）とRIH（リー）から成るデュオの本作はそれをさらに高い完成度で形に。レゲエ「BAD BOWY」、Taku Takahashiの「Whisky Soda」も。より人気が出るのは間違いない。[8]

Lex『Original (Deluxe)』アイデアル 番号なし

LEXが現在の日本のラップ・シーンを代表するスターの一人なのは間違いない。そして、彼ほど「成功と疎外」、もう少し強い言葉を使うと「メサイア・コンプレックス」的な思考とそこからくる孤独を歌うラッパーもいない。昨年のアルバムのデラックス版の「普通の人間だって言えないよ」「ALONE」「主人公」「億万長者」「ひとりぼっちの夜」という曲名がそのことを如実に示している。[7]

Sad Kid Yaz『Goodbye Sad Boy』サッド・キッド・ヤズ 番号なし

実質5枚目のアルバム収録の「昼はリーマン夜はラッパー」という直球のタイトルの曲とそのメッセージを、絶妙なチャラさと共に届けたことが、現在25歳で東京を拠点に活動するラッパーのキャリア・アップに繋がった。レゲトンのリズムを取り入れた3、13曲目の軽やかさも今の空気を伝える。[7]

CamScannerでスキャン

R&B／ソウル／ブルース

特集

●Jill Scott "To Whom This May Concern" (Sony Music / Human Re Sources / The Orchard)

10年半ぶりの新作。DJプレミアのビートでラップする地元賛歌、アフロビート寄りのファンク、ニューオーリンズ風ジャズ、ゴーゴー、ハウスなど、借り物ではないルーツの打ち出しとスケールの大きさに四半世紀のキャリアを実感する。温かい抱擁を思わせる包容力のある歌も含めてディープでスピリチュアル。限りなく満点に近い。[9]

●ムーンチャイルド『ウェイヴス』 トゥルー・ソース／BMG RATFILMS

ジル・スコットの客演曲で始まる4年ぶりの新作。アンバー・ナヴランの癒し声とジャジーかつアブストラクトなサウンドでネオ・ソウル的美学を継承するが基本線は不変だが、アンバーが参加したキャットバック的な現代的も、DJモートン、ロバート・グラスパー、レイラ・ハサウェイらのゲスト陣もトリオの世界観に説得力を加える。[8]

●Ella Mai "Do You Still Love Me?" (Universal / Interscope)

4年ぶり、2作目のフル・アルバムでもアカペラの導入から変わらずしかも今回は彼の単独制作曲が九割で、カーク・フランクリンのクワイアなどはゲストにも頼っていない。ピーター・リー・ジョンソンの美しい弦も交えつつ抜群した愛を歌う繊細で内省的なアルバム。地味だが滋味深い。[8]

●ティアナ・メジャーナイン『ノーヴェンバー・スコーピオ』 BSMF RECORDS

アースギャングとの共演で名を上げた英R&Bシンガーがモータウンを離れ、インディから出した新作。24年発表の切なくも美しいバラード"Alone"のほか、キーヨン・ハロルドやイエバとの共演も含み、規制を聴かせつつ情熱的に歌うムーディな曲は名前の由来となったメジャー9thコード特有の陶酔感を誘う。耳ブレイクの予感。[8]

●バーラー・グリーンズ『エメラルズ』 コールマイン／BS Cミュージック

フジロックでの初来日公演も記憶に新しい、名人揃いの現代オルガン・トリオ。24年に続くセカンドもアダム・スコーンのオルガンを軸にテナー奏者のブレイヴでファンキーもクールでディなソウル・ジャズを繰り広げ、初作と比較すると格段に洗練されたバンドアンサンブルや作曲に伸びしろを感じる。[8]

●リル・エドとザ・ブルース・インペリアルズ『スライドウェイズ』 BSMF RECORDS

アリゲーター一筋でアルバムを二十枚続けて40年。今回は16年のブランクが空いたが、リル・エドのスライド・ギターとヴォーカルを中心としたラフでタフなシカゴ・ブルース由来のロックンロールは相変わらず。思いまでに時代を超越したゴキゲンな音楽だ。[7]

●シュガー・レイ&ザ・ブルートーンズ『ブルース・フロム・シブクロー』 BSMF RECORDS

ブルース・ハープの名手率いるバンドがオランダの村、シブクローで行なったスタジオ・ライヴを加工なしでパッケージ。シュガー・レイの野太い歌を中心とした、豪快にして軽快な熱演に痺れたる。ただ、三曲ブルース選定のパフォーマンスは一本調子な感も。[6]

ラップ／ヒップホップ

海外 最新動向

●J.Cole "The Fall-Off" (Dreamville / Interscope)

前作同様、ラストを飾るアルバムに関する大作。本作もアルバムに関するものは別にしても総合的な

エレクトロニック・ミュージック

坂本英彦

●ナイトメアズ・オン・ワックス『ドリアン・シャーウッド・プレゼンツ・ナイトメアズ・オン・ワックス・アウト・オブ・スペース』 ワープ／ビート

リーダーの出自がナイトメアズ・オン・ワックスの名作を連想させるグライム解体。シャーウッドの実験性を生かしたグライム解体になって、メロウネスと実験性が融合している。ダブ・ウィンドウになるが

ース・ラインも存在感があり、シャーウッドを首領とするチーム＝オン・ユーで生み出したとも言える作品だ。[8]

Ⓟ Joshua Chuquimia Crampton "Anata" Joshua Chuquimia Crampton

昨年の年間ベストを賑わしたロス・スサナカの片割れの新作。アンプを破壊するような轟音ノイズに圧倒されるが、メタリック・ギターの洪水で水浸しになった陶酔的な旋律の断片や、チャランゴ、ロンロコといった弦楽器の甘美な響きに耳を傾けると、その幻覚性も相まって、一気にトランス感覚が増幅される。物憂げな感情も呼び起こす、パワー・アンビエントの傑作。[9]

◆アヴァロン・エマーソン&ザ・チャーム『リトウン・イントゥ・チェンジズ』
デッド・オーシャンズ／bg DOC369JCD

エマーソンは今作でビッグ・ビートやマッドチェスター、あるいはプリファブ・スプラウトへの憧憬をグルーヴィーなドリーム・ポップで見事に表現した。前作のオーセンティックなシンセ・ポップから一皮剥けた印象だ。[7]

◆セルヒオ・ディアス・デ・ロハス『プォーゴットン・フラグメンツ』 ネットワーク／ip RCIP0383

ペルー出身でドイツ拠点のピアニストの新作。ペダルを踏む音までもサウンドの一部とする生々しい演奏だが、ラテン音楽の気配を纏った情感的な旋律が何より美しい。ホリー・ケニフの幻想的なシンセも効果的。[7]

◆ネイサン・フェイク『エバポレーター』
アンフィニ／d RTMCD1723

彼が新章に入ったことを印象付ける、トランシーな2曲目が圧巻。全体的にアンビエント成分を含んだテクスチャと戯れているが、内省的になりすぎず、柔らかな光を持続させるようなサウンドとして昇華しているのが良い。[8]

ポップ
久保太郎

Ⓟ ブルーノ・マーズ『ザ・ロマンティック』
アトランティック／w WPCR18808

〝ラテン・フレイヴァーをたっぷり盛り込んだシルク・ソニック〟という感じだろうか。ボレーロ＋メキシカン・ブラスな曲で始まる、ソロ名義では約10年ぶりのアルバムは、コンガを導入したニュー・ソウルや、ブーガルーなどのラテン要素が混在した70年代の米国ソウルの多面性や豊かさをとてもうまく掬っている。なにをやっても本物っぽくはならない人だが、その特徴を思い切り活かした自由な音楽。[10]

Ⓟ チャーリーXCX『嵐が丘』 同 WPCR18815

先鋭的なエレクトロニック・ダンス・ポップで時代を象徴する作品となった〝Brat〟から2年。新作は同郷インディグランドのエミリー・ブロンテによる19世紀の小説『嵐が丘』の映画のサントラと聞いて驚いたが、なるほど前作の質感は残しつつも、ディス・モータル・コイルやケイト・ブッシュ、エンヤなどに通じるたおやかなエレクトロニック・サウンドに着地していて、その見事な展開に納得。[8]

Ⓟ Joji "Piss In The Wind" Palace Creek / Virgin

大阪生まれ、日本とオーストラリアのミックスの元ユーチューバーで、22年のアルバムは全米8位にまで到達したシンガー／ラッパーの新作。アルバム・タイトルにはちょっと品が感じられないが、アルバム自体はくぐもった音像によるメランコリックなダンス・ポップになっていて、ギヴィオンやドン・トリヴァーといった人気者をフィーチャーしつつ、本人も時にダンディなヴォーカルを聴かせる。[7]

Ⓟ Poppy "Empty Hands" Sumerian

米ボストン出身で、現在はメタル・サウンドを特徴とする女性シンガー。BABYMETALの最新作にも起用されていたが、音楽的にもメタな視点でメタルを使っているという意味でBABYMETALに近い印象で、インタールードはカラフルなポップになっている。が、本編は高音ヴォーカルとデス・ヴォイスが繰り返され、リズムは工夫されているものの、音色的にも若干の単調さを感じてしまう。[7]

ラテン
山本幸洋

Ⓟ Rawayana "¿Dónde Es El After?" Brocoli

2016年にカラカスで結成された自称トリッキー・カリビアン〜エレクトロ・ポップ・バンドの6作目。マドゥーロ大統領（当時）から批判されて24〜25年の国内ツアー中止に追い込まれ、本作はプエルト・リコとロサンゼルスでレコーディングされた。気負うことなく反骨精神をポップに昇華。[9]

◆NAOMI-TA『サンティアゴからの風』
プエンテ 番号なし

歌手ナオミータこと三浦直美のデビュー盤。サンティアーゴ・デ・クーバに乗り込み、現地のミュージシャンと組んだセステート編成によるソン〜トローバ名曲集。ツウ好みの古典的な選曲、伝統的色を保った編曲と伴奏は程

CamScannerでスキャン

よくポップで親しみやすい。心休まるアクースティックなサウンド。 7

ブラジル
栗本斉

◆ドレア『僕について何を知りたい？』ライス／os AJR3443
バイーア出身のシンガー・ソングライターによる2作目。ギター弾き語りをベースに、渋みのある声で朴訥な歌声を聴かせる。バンド・サウンドや室内楽的なアンサンブルもところどころに差し込むが、基本はシンプルで無駄がない歌世界をアピール。武骨でハンドメイドなところも好感度大。 7

Ⓟアントニオ・ロウレイロ『アルデイア・コラソン』シンク！／dw THCD 667
冒頭からエッジーな変拍子のリズムとエフェクトされた歌声で攻めてくる強烈な作品。ジャズやプログレの影響下にあるテクニカルなサウンドを披露すると同時にミナス一派らしいスケール感を醸し出す。ルアナ・サッジオーロやヘナート・プラスなどのゲストも交え、宇宙規模の音楽を提示。 8

◆小野リサ『ボサ・ノヴァ ～アントニオ・カルロス・ジョビンへのオマージュ』ユニバーサル UCCJ-2155
小野リサによるジョビン名曲集。またかと思うかもしれないが、今回は林正樹のピアノとのデュオ編成という新機軸で、想像以上に新鮮に聞こえる。バックがシンプルなだけに声と旋律が引き立ち、曲の良さがまっすぐに伝わるのが素晴らしい。渡辺貞夫が3曲でゲスト参加しているのも嬉しい。 8

ティアナ・メジャーナイン『ノーヴェンバー・スコーピオ』

ネイサン・フェイク『エバポレーター』

ラッサナ・ジャバテ『バラ』

ワールド・ミュージック
原田尊志

Ⓟティナリウェン『ホガール』ウェッジ／bt BRWE0226
3年ぶり、アルジェリア南部に拠点を移しての新作。イブラヒム曰く「若い頃、アスフ（郷愁）は叫んでいたが、今は唯、風の吹く音みたいに感じる」。アブダラー&ディアラという最初期のメンバーも参加、若手コーラスに囲まれ、枯れた歌声を聞かせる。通奏低音風、ベースの効いた奥行きある伴奏に吸い込まれていくように聴いた。 8

Ⓟママ・シソコ『ダイアモンド・フィンガーズ』ライス／os INR37008
70年代マリの人気バンドを遍歴したギタリストにして男性歌手、ワン・ワールド制作録音後10年を経て、やっと解禁された新譜（本人都合？）。ブルースやジャズのギター奏法をマンデ、ソンガイ、バンバラといったマリ諸族の音楽モードに導入した功労者であり、その硬質で正確自在な指使いは一度聴けば難忘的、歌がまたハギレ良し。 9

◆アリ・ケイタ・トリオ『バラフォン・エヴォリューション』同 INR37009
同ワン・ワールド制作、コート・ジヴォワール出身グリオ家系バラフォン奏者と、ドイツ人ジャズ系ドラムス&ベースのトリオ。マンディンカ音楽モードに沿ったアフロ・フュージョンを標榜？ ハギレ良さと展開の速さはOKだし、3者がグリオ風の歌をハモり出したあたりに枠を感じもしたが。 7

◆ラッサナ・ジャバテ『バラ』同 FLR33030
ギネア名門グリオ家系出身、サリフ・ケイタ、アミ・コイタ、トゥマニ・ジャバテ他多くの音楽家と共演、現トリオ・ダ・カリのリーダーにして、忘れられた伝統音楽の復活を目指すバラフォン奏者の21年作復刻。昨今この繊細なソロ演奏は得難いものと聞こえ、1音1音大切に演じる感じもイイ。 8

◆イライザ・マーシャル『エターナル・バース』同 INR37011
超有名な英フルート奏者で作曲家女性だそう。本作、欧州&アフリカの音楽家達と編み上げた〝生と死の循環〟を描いた一大音楽絵巻みたいなもの？自然界を統べる何ものかへ祈るような音楽と察し、聴き込んでみたが、挫折。人には向き不向きがあるんだろう。 7

東アジア
関谷元子

ⓅBlackpink『Deadline』YG
様々な記録を塗り替えている韓国女性グループの3年以上ぶりの新作5曲入り。久しぶりなのにEP、しかもリリースがツアー終了後かと不満のファンもいるようだが、トップ・アーティストらしい、贅く危なげない作りという印象。各曲もよくできていてますますと思うけど、これまでをアップデートした作りで大胆な変革はないかな。 7

CamScannerでスキャン

VIDEO REVIEWS

ヴィデオ・レヴュー 大鷹俊一
イラストレイション＝norahi

◆宮本浩次『俺と、友だち』 ユニバーサルシグマ／ｕ UMXK-138

宮本浩次による新プロジェクト“俺と、友だち”として昨年10月8日に下北沢シェルターでベーシストのキタダマキと二人で行なったライヴの模様。ごくごく小さいライヴハウスながらどんな大ステージともまったく変わりないテンションのパフォーマンスで、弾き語りでの「恋におちて -Fall in love-」や「ガストロンジャー」「今宵の月のように」といった誰もが聴きたいものをたっぷり聴けるのは贅沢そのもの。落ち着いた画像、編集もこの特別なシチュエイションにふさわしいものとなっている。 [9]

◆Sting “The Night Watch (Live At The Rijksmuseum)” YouTube

お馴染みARTEコンサートでスティングのパフォーマンスが公開された。3月5日にオランダにあるアムステルダム国立美術館でギターのドミニク・ミラーと二人でプレイしたもので、スティングが手にしている美しい装飾のギターは17世紀のものだという。こうしたヨーロッパの巨大美術館はエコー感も格別なので、歌声はもちろん1音1音が奥行き深い響きで「孤独のメッセージ」に始まるセットリストも文句なし。6月には“The Night Watch (Live At The Rijksmuseum)”のタイトルでライヴ盤としても出る。 [9]

◆Bad Bunny “Apple Music Super Bowl Halftime Show” YouTube

来日公演も話題をよんだプエルトリコ出身のラッパー、バッド・バニー、まさにいまが旬の彼が仕切った今年のハーフタイム・ショーはとてつもないものだった。スペイン語で通し、プエルトリコの街角風景からさまざまなカルチャーを次々と見せるイントロに始まり、多くのダンサーたちと絡んだり、弦楽団とやったかと思うとレゲトン、サルサと多彩な音楽とストーリー性も持ちつつ、メッセージのこもった素晴らしいショーだ。 [10]

◆“Full Performances: 2026 Grammys” YouTube

今年のグラミー賞での各種ライヴ・パフォーマンスが公開されている。ブルーノ・マーズに始まり、オリヴィア・ディーンやタイラー・ザ・クリエイターなどの人気者たちも出てくるのだが、一番印象にのこったのはポスト・マローンがスラッシュやアンドリュー・ワット、チャド・スミスをバックにブラック・サバスの「ウォー・ピッグス」をオジー・オズボーンに捧げたもの。全体のなかでは浮いてはいるが、気合の入ったプレイだ。 [8]

◆Lucinda Williams “Lu's Worldwide Listening Party” YouTube

カントリー・ロック系のヴェテラン・シンガー、ルシンダ・ウィリアムスが今年の2月に出した最新アルバム“World's Gone Wrong”をスタジオでバンドと共に聞かせる。レゲエ・タッチの曲もあったり、落ち着いた歌声と腕利き達による手堅い演奏が展開されはするが、映像的には面白みに欠け、編集も細かすぎて落ち着かない。 [7]

◆FLO “Tiny Desk Concert” YouTube

グラミー賞にも“Access All Areas”がノミネートされたロンドンの女性R&Bトリオ、FLOがタイニー・デスクに登場。同アルバムからのナンバーをコーラスの3人も含めて10人近くのバッキングと共にそれぞれのヴォーカルの個性を巧みに混ぜ合わせながら盛り上げ、狭い事務所空間を華やかに広げていき、みごと。 [8]

◆Geese “Tiny Desk Concert” YouTube

昨年のアルバムが大評価されているニューヨーク・ブルックリンの4人組ギースがタイニー・デスクに出た。キャメロン・ウィンターの脱力系のヴォーカルとミニマルなバンド・アンサンブル（キーボードのサポート付き）が不思議なほどこのシチュエイションには合っていて聞き込まされる。 [8]

◆Antibalas “Full Performance (Live On KEXP)” YouTube

90年代からニューヨーク・ブルックリンで活動するアフロビート・バンド、アンティバラスが昨年12月にKEXPでスタジオ・ライヴを披露。基本的にはフェラ・クティの大きな影響を受けてはいるものの全体にモダンなアレンジで軽快に聞かせてくれて、30分弱の演奏だがもっと聞きたくなる。 [8]

CamScannerでスキャン

萩原健太のコンパクトディスカヴァリー

ビーチ・ボーイズ、幻のアルバム『スマイル』が制作中止になった1967年以来、精神的な不安定さの下、ほぼ半隠遁状態に突入したブライアン・ウィルソン。グループとも付かず離れずの微妙な関係の中で中途半端な活動を続けていたが、そんなブライアンが10年ぶりにアルバム全編にわたり作曲／プロデュースを手がけたのが77年リリースの『ラヴ・ユー』だった。サンタモニカに新設されたブラザー・スタジオを拠点に、スタジオの設計／運営者であるスティーヴン・モフィットをはじめ、元スパークスのアール・マンキー、やがてニール・ヤングとタッグを組むことになるジョン・ハンロンら気鋭のエンジニアたちとともにブライアンが久々にフル回転。アープ、オーバーハイム、モーグなどアナログ・シンセサイザーをいち早く多用し、後のニュー・ウェイヴ、シンセ・ポップ、ペッドルーム・ポップの先駆けとも言うべき変種のビーチ・ボーイズ・サウンドを生み出してみせた。そんな『ラヴ・ユー』を軸に構成されたのが『ウィ・ガッタ・グルーヴ：ブラザー・スタジオ・イヤーズ』（キャピトル／ユニバーサル　UICY16375～7）だ。海外では3LP+3CDというセットでネット販売されているが、日本では独自に3CDのフォーマットで一般発売。海外のファンからも歓迎されている。

この時期、ビーチ・ボーイズは3作のアルバムを制作していて。ひとつがバンド結成15周年を祝って、オールディーズのカヴァーなども含む形で76年にリリースされて大ヒットした『偉大なる15年』、77年の『ラヴ・ユー』、そして未発表に終わった『アダルト／チャイルド』。この3作を振り返る3枚組だ。74～77年に録音された全73曲中、未発表トラック35曲、新ミックス22曲。内容に関する詳しいことは『レコード・コレクターズ』誌の3月号に書かせていただいたので、ぜひそちらを。ソロ・アーティストとしてのブライアンの持ち味が、かつての『ペット・サウンズ』のようなシンプルなシンセ・ポップ・サウンドとともに再び開花した『ラヴ・ユー』を今の耳で改めて再評価するために必須の音源集だ。ブライアンが敬愛するフォー・フレッシュメンのアレンジャーだったディック・レイノルズを迎え、フランク・シナトラへの提供を想定して作った作品などをフル・オーケストラをバックに録音した音源などで構成される予定だった『アダルト／チャイルド』は、まあ、ブートなどでおなじみの1枚ではあるけれど。そのあたりの音がオフィシャルな形でまとめられたのもうれしい。ブライアンがスタジオや自宅でカセットに吹き込んだ未発表デモ群に漂う天才性とどうしようもない孤独感にも圧倒される。LPサイズでデザインされたと思われるブックレットをCDサイズに縮小したためか、英文ライナーを読むのが老眼の身には超きついけど(笑)。日本語訳の字の大きさは普通で、ありがたいです。

こちらは本誌でも記事が用意されているようだけれど。〝生誕80年記念紙ジャケット・コレクション〟と銘打たれたドノヴァンのオリジナル・アルバム再発。いちばんの話題は『ライヴ・イン・ジャパン：スプリング・ツアー1973』（エピック／ソニー　SICX30261～2）か。シンプルなアコースティック弾き語りで行われた73年3月の大阪2公演から構成された日本独自リリースのラ

CamScannerでスキャン

イヴ盤。23年にドノヴァンの公式サイトで限定CD化されたことがあったけれど、一般市販されるCDとしてはこれが初。しかも限定復刻された際、DVDとして添えられた来日時のドキュメンタリー映像『イエロー・スター』も、今回ブルーレイ化されて付属している。ライヴの選曲的にはこの来日時の新作だった『コズミック・ホイールズ』や帰国後に制作された『ドノヴァン・エッセンス』『セヴンティーズ』からの曲をはじめ70年代ものが中心。このライヴでしか録音されなかった貴重曲もあり。60年代ものも入っているけれど「ハーディー・ガーディー・マン」以外はけっこうレア曲ぞろい。でも、弾き語りドノヴァンの魅力を堪能できる仕上がりです。

その他、シングルとして全米1位に輝いた表題曲や「魔女の季節」を含む66年の『サンシャイン・スーパーマン』(同 SICP3184 5)、サンシャイン・ポップの傑作である67年作品『メロー・イエロー』(同 SICP31846)、大人向けのエレクトリック・アルバムと、子供向けのアコースティック・アルバムを組み合わせた68年の2枚組『ドノヴァンの贈り物／夢の花園より』(同 SICP31847~8)、ビートルズのメンバー4人や、ビーチ・ボーイズのマイク・ラヴ、女優のミア・ファローらとともにインドのリシケシュへ赴き、マハリシ・マヘシ・ヨギの下、超越瞑想の修行を行なってきたころに制作された68年の『ハーディー・ガーディー・マン』(同 SICP31849)、ともにミッキー・モストのマネージメント／プロデュース下にあったジェフ・ベック・グループをゲストに迎えた表題曲が大いに話題を呼んだ69年の『バラバジャガ』(同 SICP31850)という5作のスタジオ・アルバムも出る。すべて26年最新リマスター。『ライヴ・イン・ジャパン…』と『ドノヴァンの贈り物…』はオリジナル日本盤LP、その他はUS盤LPを再現した初の紙ジャケ化。日本盤LP帯と内袋の復刻も。

あと今月はチェリー・レッドものが充実。ラヴィン・スプーンフルがカマストラ・レコードに残した全音源を収録したCD7枚組『ホワット・ア・デイ・フォー・ア・デイドリーム：ザ・コンプリート・レコーディングス1965~1969』(チェリー・レッド／ソリッド CDSOL72438)がいちばんの注目リリースかな。レオン・ラッセルが自身のレーベル、パラダイス・レコードで録音した音源をCD4枚に網羅した初コレクション、レオン・ラッセル&マリー・ラッセル名義の『ザ・パラダイス・イヤーズ1976~1981』(同 CDSOL72448)は、レオン&メアリーの夫婦デュオ盤2作や、レオンのソロ作、メアリーのソロ作、ニュー・グラス・リヴァイヴァルとの共演ライヴなど、ボーナス追加で集大成。ライヴ活動から離れてスタジオにこもるようになってからのビートルズに影響を与えた様々な音源を集めた3枚組『チェンジング・マイ・シーン：アート・ミュージック・アンド・ザ・ビートルズ~フロム・シュトックハウゼン・トゥ・ザ・グーンズ』(同 CDSOL72456)は、文字通りクラシックから現代音楽、ワールド・ミュージック、シュールなコメディに至るまで、ビートルズのインスピレーション源になった音が詰め込まれたコンピ。楽しい。

ビーチ・ボーイズ『ウィ・ガッタ・グルーヴ：ブラザー・スタジオ・イヤーズ』

ドノヴァン『ライヴ・イン・ジャパン：スプリング・ツアー1973』

ラヴィン・スプーンフル『ホワット・ア・デイ・フォー・ア・デイドリーム：ザ・コンプリート・レコーディングス1965~1969』

CamScannerでスキャン

INDEX

A Melissa Aldana→191
B Big K.R.I.T. & OG Ron C→194
Big Richard→189
John Butcher→192
C Bill Callahan→188
Liz Cooper→189
Crimeapple & Evidence→195
D DJ Ramon Sucesso→196
Lucas Dorado→197
F Brent Faiyaz→193
G Amilton Godoy & Gabriel Grossi→197
I Imarhan→198
L Storey Littleton→190
M Makam→196
Mammal Hands→192
Mx Lonely→189
N Veslemøy Narvesen→190
N.Y.P.D.（南洋派對）→199
O Weston Olencki→191
OM→196
Conan Osiris→191
Oum→199
P Placid Angles→195
R The Tomeka Reid Quartet→192
S Salty Chick（鹽燒雞）→199
Dexter Story→198
T TeeZandos→194
Tiana Major9→193
Don Toliver→194
V Vanzo→195
W Willow→193
Y Young Cister→197
various artists (v.a.)
"Peaky Blinders - The Immortal Man (Soundtrack From The Netflix Film)"→190
"The Blues Of The Indian Ocean"→198

輸入盤紹介

イラストレイション＝王川桜

Rock [US]

Bill Callahan

スタイルを超えた息吹が宿る自伝的で内省的な最新作

"My Days Of 58"
Drag City [US]

90年代から寡黙に活動してきた中で、これほど自伝的で内省的な作品もない。過去作と比べても、例えば癌を患った経験、父親として生きる覚悟などを曝け出した歌詞、読み聞かせのような歌い方が聴き進めるにつれゾクゾクさせる。ここ最近のビルは〝Coney Island Baby〟の頃のルー・リードが憑依したような作風が続いているが、ここでも気心知れたバンドによる、エッジーだがスロー・テンポで幹の太い演奏をバックに呟くように歌うだけ。ただそれだけなのに、アルバム・タイトル通り〝58歳の日々〟を赤裸々に綴ったリアリティがそうさせるのか、あるいは死生観の再定義、テクノロジーへの警鐘が今の彼の背中を押しているからか、「ジャムっぽい要素や予測不能な展開を残した仕上がり」というスタイルを超えた息吹が宿っている。かつてスモッグという名前で活動していたビル・キャラハン、今最も重要なシンガー・ソングライターはこの人。

岡村詩野

CamScannerでスキャン

Mx Lonely

Rock [US]

絶妙なバランス感が癖になるブルックリンのバンドの初作

"All Monsters"
Julia's War [US]

米ニューヨーク、ブルックリンでレイ・ハース(vo)がゲイブ・ガーマン(b)らと20年11月にコラボを開始し、22年にMXロンリーとなったグループが、フィラデルフィアのインディ・レーベル、ジュリアズ・ウォーから出したデビュー作。セルフ・プロデュースで、楽曲はレイとジェイク・ハームズ(g)によるもの。全体に〝ピクシーズ・ミーツ・シューゲイザー〟といった趣きが基本にあるが、ウィーザーあたりの親しみやすいメロディもタイトル曲の'All Monsters Go To Heaven'は底流にあって、表面上の激しいサウンドとの絶妙なバランス感が癖になる。人間が誰しも内に持つモンスターを描いたり、葛藤してみたりを音化する試みはニュー・ウェイヴ時代からよくあるし、やや大げさすぎるほどのエコーもシューゲイザー組のアプローチとしては古典的なものながら、こうして真正面から迫られるのも久しぶりな感じがして、アメリカでの反応が楽しみだ。

大鷹俊一

Liz Cooper

Rock [US]

多くを経た6年間を凝縮したセルフ・プロデュースの3作目

"New Day"
Sleepyhead [US]

米ボルチモア出身、ナッシュヴィルでの活動期を経て現在はヴァーモントを拠点にするシンガー・ソングライターの約6年ぶり3作目。彼女はこの6年を「ブルックリンに移住し、パンデミックが起こり、私を求めず手放すこともしない人に恋をし、カミングアウトをし、自分の心と頭とアートを守るために立ち上がり、そして私を愛してくれる人に恋をした」と振り返り、それらを本作に凝縮したのだと語る。

初めて自らプロデュースの主導権を握り、覚えたてのピアノを使う楽しさをここそこに滲ませながら、個人的かつ内省的な歌詞を寛容に包み込むような音作りをしている。'Loss Of Signal'や'IDFK'のようなバラード曲がスケールの大きさを感じさせるのはワクワクするし、セクシーなニュー・ウェイヴ風ポップ・チューン'Hey Tee'のような曲があるのも、おもしろい。それでもまだ時おり見え隠れする臆病いがちな表情を、抱きしめたくなる。

赤尾美香

Big Richard

Rock [US]

物議を醸すブルーグラス界の〝ライオット・ガール〟

"Pet"
Signature Sounds [US]

〝デカい×××〟を意味するバンド名と挑発的なライヴ・パフォーマンスが物議を醸しているブルーグラス界のライオット・ガール達。そもそもは女性の出演者が少なすぎる、とあるフェスに殴り込むため、それぞれに活動歴がある4人が新たにバンドを組んだところ、アヴェット・ブラザーズを擁するマネージメントの目に留まったのだそうだ。丁寧に作りすぎた前作'Girl Dinner'の反省から、ライヴ・レコーディングに挑んだ3rdアルバム。全員が歌いながらマンドリン、チェロ(!)、ウッド・ベース、フィドルが縦横無尽に交錯するアンサンブルの躍動感がエネルギッシュで、エモーショナルな作風に繋がった。バンドは物理的にパワー・アップした印象だ。バンドの地元である米国コロラドの大先輩、レフトオーヴァー・サーモンの'Red Tail Run'ほか、カヴァーも交えた全10曲。デヴィッド・オルニーの'Millionaire'では富を貪る者達に牙を剥いてみせる。

山口智男

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Storey Littleton

70年代の自作自演歌手を思わせる繊細で丁寧に作られた歌

"At A Diner"
Don Giovanni [US]

90年代にUSインディー・シーンで注目を集めたアイダは、フォーク、パンク、オルタナなど豊かな音楽性を土壌にして、美しい歌と見事なハーモニーを聴かせてくれるバンドだった。その中心メンバーで、夫婦でもあるダニエル・リトルトンとエリザベス・ミッチェルとの間に生まれたストーリー・リトルトンがデビュー・アルバムを完成させた。現在23歳の彼女は18歳の頃からアルバムを作り始め、両親の自宅スタジオで録音。彼女は全曲でギターを弾いて歌い、そこにハープ、フレンチ・ホルン、ペダル・スティールなど様々な楽器が色を添える。アルバム・タイトル曲はジュディ・シルからインスパイアされたそうだが、アルバム全篇にわたって70年代のシンガー・ソングライターを思わせる曲に柔らかなリヴァーブをかけて、ドリーミーなサウンドに仕上げている。そこに心の呟きを乗せる繊細な歌声。生音を大切にして丁寧に作られた歌にアイダの遺伝子を感じた。**村尾泰郎**

Rock [Ireland]

v.a. "Peaky Blinders - The Immortal Man (Soundtrack From The Netflix Film)"

英バーミンガムを舞台にしたギャング映画のサントラ

by Antony Genn, Martin Slattery, Fontaines D.C. and others
Sony [UK]

キリアン・マーフィ主演のネットフリックス映画『ピーキー・ブラインダーズ：不滅の男』のサントラ。スコアを担当するのはシーズン4から6も手がけてきたアントニー・ジェンとマーティン・スラタリーの元ザ・メスカレロスのふたり。ハリウッド式の壮大なオーケストラとは距離を置き、ダーティでグリッティな音像で貫かれている。全36曲のうち5曲が新録音で、フォンテインズDCのグリアン・チャッテンとエイミー・テイラーが新曲を提供。グリアンはマッシヴ・アタック「エンジェル」の、映画の世界観を投影したような暴力的なカヴァーを披露する。ピーキーの主題歌であり、原点たるニック・ケイヴの「レッド・ライト・ハンド」は新録ヴァージョンで収録。相当な音楽通であるマーフィもスコアや選曲にも密接に関わっており、彼のルーツであるアイルランドと、彼が演じる主人公トミーの出自であるロマの背景もしっかりと伝わってくる。**油納将志**

Rock [Europe]

Veslemøy Narvesen

精度が高くスケールも大きいノルウェーの音楽家の2作目

"Letting All Light Through"
Jazzland [Norway]

ヴェスレムイ・ナルヴェセンは1997年生まれのノルウェーのミュージシャンで、近年、ジャズ・ドラマーとして頭角を現してきた。一方で、彼女はシンガー・ソングライターでもあり、2作目のソロとなる本作では才気爆発。強靭なトータル・アルバムを成立させている。鍵盤楽器も弦楽器もすべて一人で演奏したアルバムだが、ベッドルーム的な感触はなく、極めて精度が高く、スケールも大きいサウンドだ。ミニマルなシーケンスから発展していく曲が多いが、メロディーはクラシックとフォークに根ざしたものを感じさせる。突然、ヘヴィなギターやドラムスが鳴り響いたりもするから、ロック志向も持つ人なのだろう。影響関係があるかどうかは分からないが、一時期のピーター・ゲイブリエルやケイト・ブッシュを思い起こす曲もあった。セッション活動も多い人なので、彼女周辺のオスロ・シーンの音楽にも急激に興味が湧いてきた。**高橋健太郎**

CamScannerでスキャン

Conan Osiris

Rock [Europe]

日本のアニメや音楽からの影響も感じるアヴァン・ポップ的作品

"Xenonexo"
Ao Sul Do Mundo [Portugal]

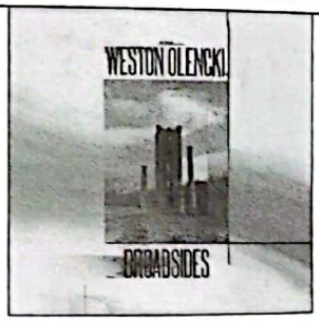
ポルトガルにおける20年代エレクトロ・ミュージックのターニング・ポイントとして再評価が進む名盤 "Adoro Bolos" から8年。コナン・オシリスが昨年末に突如ドロップした新作アルバム。リスボンのアフリカ系移民が多い地区で育ったコナンらしく、クドゥロやバティーダのリズムを取り入れたビートに、以前本誌インタヴューで「日本の音楽だとウインクが大好き」と語っていた通り、日本のアニメや音楽からの影響も感じられるアヴァン・ポップ的な内容。19年のユーロヴィジョン出場曲である14曲目 "Telemóveis" をはじめ、前作からの8年間には様々な浮き沈みがあったようで、歌詞を覆う表層的な現代社会へのシニカルな目線には倦怠感が漂うが、この世界を諦めきれない彼の善性を感じる。同時発表の "Mezcla MMXV" は過去にサウンドクラウドで公開されていたトラックを中心にまとめられたインスト作で、こちらも秀逸。

山口詩織

Weston Olencki

Rock [US]

米南部を巡る旅で出会った音が大きな流れを生み出す



"Broadsides"
Outside Time [US]

アメリカ出身で現在はドイツを拠点とする作曲家でマルチ演奏家が、2023年7月から始めた故郷サウス・カロライナからアメリカ南部を巡った旅を音響絵画化したようなアルバム。バーミングハム駅の巨大な環境音から、バンジョーの演奏が幾重にも広がっていく多重録音作、重量感を十二分にしみわたらせながら、各地で出会った楽器や工芸品、昆虫、雨、河の流れ、列車の駆動、モーターの振動など、様々な音が大きな流れを生み出している。ハーモニカ、カセットテープからの歪んだ再生音、人々の会話もドローンの中に溶け込んでいく。ブルーグラスやマウンテン・ミュージックの作法も顔をのぞかせる。古い時計が刻む針音が太いオートハープの弦の弓弾きや鐘の音と共鳴することで、歪みに音響的モアレが生じ、電子音のような波を作り出したりもしている。細部に耳を傾けたことで出会った音の色彩的拡張体験を丁寧にパート分けしたコンセプチュアルな力作。

湯浅学

Melissa Aldana

Jazz

チリ出身のサックス奏者が南米諸国の名曲をカヴァー

"Filin'"
Blue Note [US]
*LP

チリ出身のジャズ・サックス奏者、メリッサ・アルダナの新作は、1940年代後半から60年代にかけて盛り上がったキューバのフィーリンをはじめとする南米諸国の名曲をカヴァーしたもの。ゴンサロ・ルバルカバp、ピーター・ワシントンb、クッシュ・アバディdsを加えた編成による、フランク・ドミンゲスやセサル・ポルティージョ・デ・ラ・ルスなどフィーリンのインストを中心に、特別ゲストのセシル・マクロリン・サルヴァントがマルタ・バルデースの「もう言い争いはたくさん」とカルトーラの「沈黙のバラ」を歌う。また、メキシコのクラウディーオ・エスコラーダ、カルトーラと同じブラジルのエルメート・パスコアールの曲のインストもある。ゴンサロはキューバ出身、セシルはハイチ人の血を引いている。こんな5人によるカリブ～南米諸国のボレーロ系バラード集なので、おのずと艶やかなリリシズムがこぼれ落ちる。本作の企画に敬意を表したい。

渡辺亨

CamScannerでスキャン

Jazz

The Tomeka Reid Quartet

複雑な仕掛けも自然に聴かせる チェロ奏者率いるクァルテット

"Dance! Skip! Hop!"
Out Of Your Head [US]

昨年末に来日したチェロ奏者、トミーカ・リード率いるクァルテットの新譜。リズミカルで速い展開やアンサンブルの多彩さはライヴでも感じられたが、録音はそれらがより効果的に混じり合っている（ライヴではメアリー・ハルヴォーソンのギターがどうしても目立っていたが）。シカゴ出身のコルネット奏者ジョシュ・バーマンの"Dance And A Hop"と、人前でついスキップをしてしまうリードの癖からタイトルは採られたという。躍動感に満ちた曲が多く、これまでのリードの作品と比べても格段に聴きやすいアルバムに。とはいえ、決して単純な構成ではなく、ディストーションの掛かったハルヴォーソンのヘヴィーなギターが響き渡る局面もあれば、まるでプログレ・バンドのように目まぐるしくリズムが変わっていく複雑な仕掛けもある。それらをアルバム全体を通して自然に聴かせてしまう流れを生むバランス感覚に秀でているのもリードの特徴だろう。原雅明

Jazz

John Butcher

サックスの可能性を切り拓く 変幻自在のサウンド

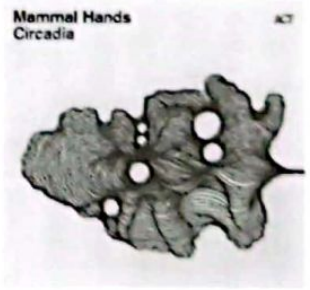
"Away, I Was"
Relative Pitch [US]

ジョン・ブッチャーはしばしばエヴァン・パーカーと比較される英国のサックス奏者。実際、パーカーの後継者と言ってもいいだろう。本作は無伴奏ソロで、オーヴァートーンやマルチフォニックス、ヴァリエーションに富むタンギングで変幻自在のサウンドを創出している。サックス1本でよくぞここまで多彩で多様な音が出せるものだと感心してしまう。曲によってはほとんどノイズ・ミュージックやエレクトロニカのようにも聞こえ、サックスという楽器の可能性を新たに切り拓いている印象だ。また、灰野敬二やデレク・ベイリー、ジョー・マクフィーの名前が曲名に含まれるなど、ブッチャーに前衛の血が流れていることがよく分かる。ハイライトはレスター・ヤングとエリアーヌ・ラディーグに捧げた6曲目。レスターはソフトなプレイを得意としたサックス奏者、エリアーヌはドローン音楽の大家だが、この両者のエッセンスを抽出し、ひとつに縫合されている。土佐有明

Jazz

Mammal Hands

クラシカルな重さと ポップさが両立する変則トリオ



"Circadia"
ACT [Germany]

ゴーゴー・ペンギンや、ポーティコ・カルテットらとともに、2010年代からイギリスのゴンドワナ・レコーズを拠点にUKジャズの新世代として活躍してきた、ピアノ、ドラム、サックスの変則トリオ、ママール・ハンズが欧州ジャズの名門レーベル＝アクトと契約して3年ぶりの新譜をリリース。24年にオリジナル・メンバーのドラムが脱退し、ゴーゴー・ペンギンのオリジナル・メンバーであったロブ・ターナーが加入するというニュースもあっての新作だ。エレクトロニカやアンビエントの影響を感じさせる、耽美な空気感は前作までよりもさらに洗練された印象。感じるのはこれまでも希薄だった〝ジャズ〟ということへのこだわりがより薄くなったこと。クラシカルな重さと、良い意味でキャッチーなポップさが両立するフレージングはやはり唯一無二。今作ではそこに、フューチャー・ファンクのような味わいも追加、硬質なビートにサックスのブロウが映える。花木洸

CamScannerでスキャン

R&B / Soul

Brent Faiyaz

オーセンティックなR&Bに回帰した3年半ぶりのアルバム

"Icon"
ISO Supremacy [US]

約3年半ぶりのオリジナル・アルバム。弦楽アンサンブルで始まり、エレクトロニクスも織った贅沢なサウンドとデリケートな歌い口で進行する今作は、90年代後期R&Bへオマージュを捧げた23年のミックステープ以上にオーセンティックなR&Bへの回帰を見せる。ラファエル・サディークが総指揮を務めた影響も大きそうだが、曲の制作陣はソンダーの同僚ディーバットなど馴染みの面々が中心だ。ピッチシフトしたヴォーカルが際立つ先行曲 "Have To." にはトミー・リッチマン、ファルセットを交えて歌う "Wasted In Vain" にはチャド・ヒューゴと、新旧ヴァージニア勢も関与。90年前後のブラコン的音像のスロウやベニー・ブランコが手掛けた爽快なディスコ・ポップも含め、全体のムードはジャスティン・ビーバー『Jusice』にも近い。当初は昨秋リリース予定で、その際にリード・シングルとなるはずだった2曲を加えたディレクターズ・カット版も登場。

林剛

R&B / Soul

Willow

曲作りも一人で手掛ける過小評価されている才能

"Petal Rock Black"
Willow / Three Six Zero [US]

ウィローは、ハリウッド・セレブであるウィル・スミスとジェダ・ピンケット・スミスの娘であるがゆえに、その才能を過小評価されていると思う。ロック・ネイションを離れてポップ・パンクからプログレッシヴR&Bに転向した前作『Empathogen』も素晴らしかったけど、2年ぶりの本作ではその路線をさらに深化させている。ジャズ・インプロ色をより強めた奔放なヴォーカルは、エリカ・バドゥやソランジュの作品を思いおこさせるけど、ウィローの画期的なところは、曲作りはもちろんトラック製作の実作業までほぼひとりで手がけていること。つまりプリンスの名曲のローファイなカヴァー "I Would Die 4 You" は、宅録ブラック・ミュージック界の神に捧げた賛美歌なのだ。前作から続投のジョン・パティステに加え、カマシ・ワシントン、ジョージ・クリントン、そしてチューン・ヤーズというゲストのチョイスに「おっ」と感じた方は是非。

長谷川町蔵

R&B / Soul

Tiana Major9

艶やかな歌声に惹き込まれる注目のUKシンガー新作

"November Scorpio"
1 [US]

ベイビーフェイスの "Girl Night Out" に抜擢されたり、一昨年リリースされたシングル "Alone" がR&Bファンの間で話題沸騰となるなど、ひときわ注目を集めているUKシンガーの新作。モータウンを離れ、インディ発となったが、そんなことは関係なし。"Alone" のイメージそのままに接してもなんら裏切られることのない、美しいアルバムに仕上がっている。

その "Alone" は美麗なバラードだが、本作にはタイトル通りワイキキ感のある(?)晴れやかなアップ "Waikiki"、モブ・ディープ "Shook One's Pt.II" 使いにビックリした "Shook One"、アコースティックな "Money" など、様々な曲を収録。しかしどの曲も上品な仕上がりとなっているし、流麗なメロディーの上を流れる彼女の艶やかな歌声に終始惹き込まれること必至だ。イエバ参加の哀愁ミディアム "Uneasy"、キーヨン・ハロルドのトランペットが鳴り響くスロウ "Heaven" も文句なし。

川口真紀

CamScannerでスキャン

Rap / Hip Hop

TeeZandos

確かなラップ・スキルで聴かせる英フィメールMCのデビュー作

"Still Odd"
GB [UK]

過去10年近く、高いヒールを履いて男性優位なUKドリル・シーンに力強く踏み込んできたホマートン出身のフィメール・ラッパー、ティーザンドスのデビュー・ミックステープがついに到着。タイトルは自身のヒット曲の一つ"Zed Focus"にある「普通なんてクソくらえ／一番の変わり者（odd）でいたいんだ」という印象的なラインから。冒頭からリスナーに降り注ぐのは、彼女がこれまで築き上げたスタイル――808のベースがグライドするダークで伝統的なUKドリル・ビートと、パワフルで歯切れの良いラップによる驚異的な銃撃戦である。そして、それが作中で貫かれているからこそ、彼女が過去に負った傷に声を与える瞬間や、軽やかなトラップ"Jail"、クランク風の"Yeah"などで聞ける多彩さが一層輝く。ストレートなUKドリルはやや古臭く聞こえる昨今でも、強固なスタンスと確かなスキルさえあれば、それはハリケーンになりうるのだ。

高久大輝

Rap / Hip Hop

Big K.R.I.T. & OG Ron C

テキサスらしさに溢れる昨年作のチョップド&スクリュード盤

"Dedicated To Cadalee Biarritz (Chopped Not Slopped)"
Multi Alumni [US]

以前'Learned From Texas'と題した曲を残している、米ミシシッピ出身のビッグ・クリット。キレのあるラップとゆるい歌はテキサスが生んだレジェンドのピンプ・Cとよく比較されており、生演奏も巧みに用いたソウルフルなサウンドもかなりテキサスっぽいものだ。本作はそんな彼による昨年のアルバムを、'Learned From Texas'でもネームドロップされていた同郷のDJのOG・ロン・Cがチョップド&スクリュード仕様に改変した一枚。レギュラー版の時点でテキサス風のメロウ&ファンキーな路線が充実していただけに、スクリューによるゆったりとした魅力の増幅も完璧に決まっている。なお、ここでのOG・ロン・Cは今年1月に惜しくも亡くなった名スクリュー職人のDJ・マイケル"5000"ワッツを思わせるチョップ多めのスタイルを随所で披露。故人から受け継いだものを示すような手捌きを聴かせている。

アボかど

Rap / Hip Hop

Don Toliver

音響設計の完成度が高いサイケデリックなトラップ作品

"Octane"
Cactus Jack / Donnway & Co / Atlantic [US]

トラヴィス・スコット率いるカクタス・ジャック軍団のラッパー／シンガー、ドン・トリヴァーによる5作目。イート、レマ、ティーゾ・タッチダウン、サーベイビー、トラヴィス・スコットが参加。本作の方向性や意図は掴みにくいが、高級車でキャンプへ向かい、星空を眺めるラグジュアリーなアウトドア体験を表現したコンセプト作品だという。マルコム・トッド'Chests Pain (I Love)'を再構築した'E85'、ジャスティン・ティンバーレイクをサンプリングした'Body'をはじめ、プロダクションに新鮮味や革新性は少ないものの、中毒性と没入感を兼ね備えた音響設計の完成度は高い。各曲はエネルギーに満ち、〝直感〟や〝楽しむこと〟を重視したサイケデリックなトラップ・アルバムとして、若いリスナーから支持を集めるのも頷ける。ただ、トラヴィスが生み出した波の延長線上にある印象も否めず、今後どのように独自の進化を遂げるのか注目したい。

上神彰子

CamScannerでスキャン

Crimeapple & Evidence

巧みな押韻と冷静沈着なビートが絡み合う重厚なタッグ作

"War Cash"
Bigger Picture [US]

Rap / Hip Hop

アメリカのアンダーグラウンド・ラッパーはとにかく多作な人が多いが、コロンビア生まれでニュージャージーを拠点とするクライムアップもその例に漏れず、これまでもDJマグズやプリザヴェーション、アポロ・ブラウンらと多くの作品をリリースしてきた。そんな彼のラップはライミングに重点を置いた超ヘヴィー級スタイル。その中に「両腕がなくたって俺の友達は数えられるが、俺が知っている売人を数えるには20の手が必要になる」「ギャングスタ（gangsta）のgとaを消し去り、やつらに不安（angst）をもたらす」などと、ユーモアと理知を感じさせるパンチラインを散り込んでくる。その背景となるのはダイレイティッド・ピープルズの一員でもあるレジェンド・プロデューサー、エヴィデンスの冷静沈着なビート。プルーとのしびれるライミング合戦 "time"、の、シンセとベース、ドラムのみの武骨でシンプルなトラックは戦慄を覚えるほど。

伊賀文晃

Vanzo

同世代のジャマイカ勢とはひと味違う新星シンガジェイ

"Fueled by Passion"
Greatest Trees / Evidence
[France / Switzerland]

Reggae

ジャマイカのシンガジェイ新星の2作目。スパニッシュ・タウンのゲットー出身、初作から欧州とコネクションを結ぶひと味違うアプロウチで、同世代の中でも確固たる存在感を示した。新作もパリのプロダクション集団＝インダス・トゥリーを起用、仏／スイス発の配給。その視野の広い独自の戦略は、セネガル・オリジンのリディオップ（ヴァースはウォロフ語）や、トリニダッド&トベイゴのスター、クウィーン・オメガとのコラボにも顕著だ。モダンなエレクトロ・ポップの手法をダンスホールにアダプトさせるなど、ジャマイカの先端プロダクションをしても出てこない発想のリディムを好み、そこに美声シンギング、快いこぶし回しからパンチーなディージェイイングまで繊細なヴォーカル・コントロールを聴かせる。スラックネスともディス・トラックともスキャンダルとも距離を置く職性でクリーンなキャラも好感度高い。世界規模でブレイクの予感。

鈴木孝弥

Placid Angles

カナダへの愛着を表現したゆったりと流れるタイム感

"Canada"
Oath [Turkey]

Electronic Music

米デトロイト・テクノのヴェテラン、ジョン・ベルトランのプロジェクト、プラシッド・アングルズの5年ぶり4作目。デトロイト・テクノのアンビエント的要素を強調した流麗で美しいエレクトロニック・ミュージックが身上だ。

本作はタイトル通りカナダへの愛着を表現した作品で、同地の広大な大地と無限に広がる自然をあらわしたような繊細で美しい音像は圧巻。アンビエント、ブレイクビーツ、ドラムンベースからブラジル音楽のリズムやコード感、サウダージな感覚なども取り入れつつ、ゆったりと流れるタイム感でじっくり聴かせる。どこか懐かしさを感じさせるエモーショナルなメロディも印象的だ。深く練られた音色は美しく、リズムも太く力強い。刺激的な音は避け、厚みのあるドローン的な低域とリバーブの効いた中高域で包み込んでいくような録音も効果的。カナダの歌手ソフィア・スチルが加わった曲がいい。雄大なタイトル曲は聴きもの。

小野島大

CamScannerでスキャン

Makam

Electronic Music

クリアながらダビーな音像が光るオランダの若きヴェテランDJ

"Tarp"
Dekmantel [Netherlands]

14歳にしてテクノのアルバムを体験して衝撃を受け、兄と金を出しあってすぐにターンテーブルを買ってDJを始めたという、オランダの若きヴェテラン、ガイ・ブランキン。この名義では、15年くらい前から一風変わったハウスをやって人気を博してきた。約10年ぶりの本作は、太くうねるベースに特徴的なサンプリングからの影響を、これまで培ってきたやや淡いミニマル・ハウスの文脈に落とし込んでいる。あからさまに踊らせようとするものではなく、ときにユーモアやかわいらしさを感じさせるサウンドながら、クリアな音像ながら、ダビーなのだ。生きた乳酸かれるベースとタイトなキックやパーカッションを乗せるだけの曲だが、ユニークな試みが多数。フロアが盛り上がるかどうかなど無関係な「聴ける」作品を目指したようだが、ドラマーの父に教えられたリズムの種かもしれないが、よりか踊にくいものも観ましい。

渡辺健吾

OM

Electronic Music

韓国の地下鉄網がテーマの二人のプロデューサーによる共作

"Miss M3tro"
OM [South Korea]

1970年代以降に整備され、現在では日本のそれに匹敵するほどの規模を誇る一大都市ネットワークへと発展した韓国の地下鉄網。Jeyjeck2Zinc2という二人のプロデューサーのコラボレーションによって誕生した本作が主題に置いたのは、そのレトロフューチャーじみた工業的律動だ。ヴェルサーチのコレクションにも登場するモデルとして活躍しながら「フィッティングDJタイム」が載っていたら真っ先にDJを選ぶ」と語るクラバー、Jeyjeck2、知る人ぞ知る音源制作ソフト（非推奨！）のサンプル名を冠したビートメイカー、V2incは8年来の友人。大阪剛のようにデトロー・テクノ・エレクトロ・ファンクのアイデアを出し合うことによって"Miss M3tro"という性急なコンセプト作を構築した。ユーロビートを交えながらリニアに進行する様は人を食ったように騒がしく、250が描く猥雑なボンチャック像ともどこか重なる。

黒岡一慶

DJ Ramon Sucesso

Electronic Music

"異端児"が新作で描くバイレ・ファンキの新たな未来

"Sexta Dos Crias 2.0"
Lugar Alto [Brazil]

細分化するファンキ・シーンを俯瞰するリオの異端児、ハモン・スセーソが強烈な新作を携えて帰ってきた。コントローラーのパッドを打楽器のように叩きながらサンプルを速射砲のように打ち込み、怒涛のような速さでミックスしていく手法が革新的なデビュー作の核になっていたことは間違いないが、今作で彼はその手法をアップデート。まずはラップ以外の言葉（ナレーションなど）を抑制し、ビートが奏く余白、つまりは我々が踊るダンスフロアという空間の自由度を拡張してみせる。そして、さにやっと潰れたようなキック・ドラムが生み出す、グリッドを無視した錯乱的なビートに、点描的とも言える不機嫌なラップの連続体を交錯させることで、二つのトラックのタイトルが示すように、「宇宙を歪め」て「時空を突破」しようとするのだ。そんな狂気スレスレの恍惚状態を追求する本作は、まさしくバイレ・ファンキの新たな未来を描いたレコードである。

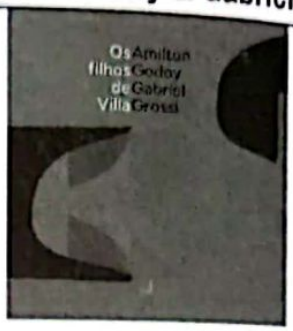
坂本哲哉

CamScannerでスキャン

Amilton Godoy & Gabriel Grossi

Brazil

ヴィラ＝ロボスの影響をあぶり出すデュオ作



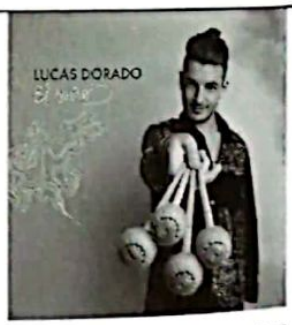
"Os Filhos De Villa"
DG [Brazil]

60年代から続くサンバ・ジャズ・トリオ、ジンボ・トリオのピアニストであり、音楽学校＝CLAMの創設者としてブラジルの音楽シーンに多大な貢献を果たしてきた教育者という顔を持つ大ヴェテランのアミルトン・ゴドイと、世界的にも屈指の実力を持つクロマチック・ハーモニカの名手、ガブリエル・グロッシのデュオ作。以前にもブラジル・クラシック大家のヴィラ＝ロボス曲集を発表した二人だが、その続編ともいえる本作は、別の作家の作曲によるヴィラ＝ロボスに影響を受けたであろう楽曲を取り上げたものだ。その代表格ともいえるジョビンをはじめ、エグベルト・ジスモンチ、ギンガ、ジョニー・アルフ、さらには二人のオリジナル曲まで、現代ブラジルにも息づくヴィラ＝ロボスの影響をあぶり出す。淀みのないゴドイのピアノも見事だが、グロッシのハーモニカによる多彩な表現が出色で、この編成におけるデュオとしては頂点ともいえる内容だ。 江利川侑介

Lucas Dorado

Latin

フォルクローレやタンゴのエッセンスも感じられる初ソロ作



"El Sueño"
L'Horizon Violet [France]

スイス生まれのヴァイブ奏者の初リーダー作。ヴァイブとギター類と女声ヴォーカルをフィーチャーしたクール・ジャズで、モチーフにはフォルクローレやタンゴも含まれている。元々、父＋息子二人でトリオ・ドラードというユニットを組んでいて、満を持してのソロ作である。父カルロスはブエノス・アイレス生まれで、1989年から活動の場をスイスに移した。本作に垣間見えるフォルクローレやタンゴのエッセンスは父譲りということだ。思わず唸ったのはフォルクローレ（サンバ）～ヌエバ・カンシオーンの名曲「バルデラーマ」。メルセーデス・ソーサの名唱が知られるが、ここではヴァイブとパーカッションの耽美な伴奏でモダンな仕上がり。タンゴ「ナーダ」はバンドネオン＋ヴァイブというミニマルな伴奏で、歌メロはバンドネオンとヴァイブで互いに担っている。後者では特長的なバンドネオンのスタッカートでタンゴのフィーリングで満たされている。 山本幸洋

Young Cister

Latin

ジャンルの越境性を深化させたチリのラテン・アーバン・シンガー

"La Ciudad Nunca Duerme*"
Sony [Chile]

ヤング・システルはチリのラテン・アーバン・シーンを代表するアーティストの一人だ。18年にリリースした2枚のアルバムはラテン・トラップ中心の内容だったが、その後、ポリマ・ウェストコーストとの共作などを経てジャンルの幅を広げていき、21年に発表された前作では、トラップ、レゲトンに加え、ドラムンベースやハウスなどを取り入れていた。それから約2年のスパンでリリースされた今作は、そうしたジャンルの越境性がさらに深化。R&B、ディスコ、シンセ・ポップ、アコースティックな楽曲までもがない交ぜになっているが、オートチューンを用いた特徴的かつメロディアスな歌声とメロウなトラックは、どれも夜の都市の雰囲気にフィットするものばかりで、統一感のあるアルバムになっている。ビットブルのダンスホール名曲「Dile」を引用しながらクラブ・バンガーに仕上げた7曲目、ノスタルジックなハウスの9曲目はとりわけ素晴らしい。 島晃一

CamScannerでスキャン

World Music [Africa]

Dexter Story

マルチ奏者／民族音楽学者による異色のアフリカ的音楽

"Inner"
MAI [US]

マルチ奏者／作曲家として多くの作品をリリースし、また米カリフォルニア大学の学長特別研究員として活動する民族音楽学者でもあるデクスター・ストーリー。本作は、過去作でみせたアフロ・ディアスポラ的な世界観から一歩踏み込み、自身の内面への旅として制作された実験的エレクトロ作だ。シンセの音色一つ一つに向き合っていくような演奏となっており、ビートの要素を後退させて浮遊感を得たサウンドはニュー・エイジやアンビエントのような音像で内省的かつ幻想的。その中でエチオ・ジャズなどの北東アフリカ音楽的なメロディが浮かび上がってくる。アフリカ〜アフロ・ディアスポラ的音楽としては異色ではあるが、メロディのミニマルさと美しさが強調され、むしろ本質的なサウンドにも聞こえるのが面白い。また、発掘作のような無垢さ／素朴さと現代の新譜らしいモダンでソリッドな感覚が共存する、懐かしさと新しさのバランスは流石だ。

高橋アフィ

World Music [Africa]

v.a. "The Blues Of The Indian Ocean"

インド洋の島々のコミュニティで培われた音楽の深い魅力

by Nouvellement
Tipic Agalega,
Group Tanbour Chagos,
Zeneration Cassambo
and others
Juju [UK]

インド洋のモーリシャスやロドリゲス島。さらに小さなアガレガ島やチャゴス諸島。それら島々の音楽＝セガの中でも、よりコミュニティに密着したスタイルをフィールド録音により編集したのが本作。これら島々の人々は、さとうきび栽培の労働力としてアフリカやアラブから奴隷として、さらにインドや中国から植民が行われ、ヨーロッパを含めて複雑な文化が融合・形成された。本来セガはアフリカ系奴隷を中心に演じられたが時代とともに変質し、ポップ音楽へと進展した。しかし抑圧からのカタルシスは現在も深く沈殿し、歴史的経緯もブルースと共通と捉えて、本作のタイトルに反映されている。

フレーム・ドラムのラヴァン、マラヴァンと呼ばれる長方形の振奏楽器にトライアングル、そしてヴォーカルとコーラスに手拍子と、どの曲もシンプルだが、説得力、存在感は圧倒的。荒削りな歌声、そこにコミュニティで鍛え磨かれた野性美、深い魅力がある。

深沢美樹

World Music [Africa]

Imarhan

〝砂漠のブルース〟を更新する気概に満ちた4作目

"Essam"
Wedge [France]

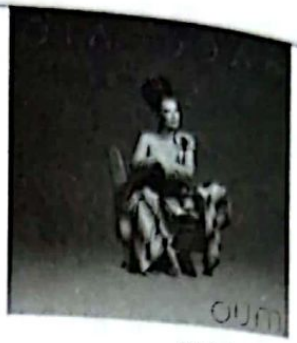
ティナリウェンの弟分的存在（年齢的には息子か？）として同じレーベルに所属し、彼らの近年の作品をレコーディング環境面でも大きく支えてきたアルジェリアの若手トゥアレグ人バンドによる4作目。これまでの作品では良くも悪くもティナリウェン直系という印象が強かったが、今作では彼らの録音エンジニアを務めてきたフランス人とその相棒のマルチ奏者が制作に大きく関わり、演奏をリアルタイムでモジュラー・シンセに取り込んで再加工した電子音響などの導入によって、新世代らしいサウンドを獲得することに成功している。拠点であるアルジェリア南部のタマンラセットに自分たちの録音スタジオを設立し、そこで様々な音楽的実験を試みることができる環境を整えたことが大きいのだろう。ティナリウェンの最新作も同じスタジオで制作されたことが功を奏しており、地に足を付けたスタンスで〝砂漠のブルース〟を更新していく気概に満ちた会心作だ。

吉本秀純

CamScannerでスキャン

Oum

モロッコの歌手が一人で演じた架空の〝モロッコ合成音楽〟



"Dialddar"
Ternaire [France]

World Music / Africa

モロッコ自作自演女声、ウムの新作。タイトルはモロッコで〝手作り〟を意味する言葉、転じて〝ホームメイド〟の意もあり、本作に集められた曲は、女達がいっしょに歌って過ごすための曲ばかりとのこと。モロッコ方言のアラビア語で歌うウムに、女声達が歌い返す応答形式の曲ばかりが並んでいる。それにしても、各曲でウムが辿る旋律にしても、多声的な合唱のあり方、あるいは、変拍子系の複合リズムにしても、モロッコのどんな音楽に由来するものか不明？ ベンディールはか、複数太鼓を打つ音も耳慣れないものばかりだし、女声コーラスのメンバー表記も見当たらず、全く煙に巻かれたような気持で一息ついて、初めて気づいた。すっかり騙されましたよ。合唱も作詞作曲も全てウムが単独で演じた多重録音作なんでしょう、きっと。打楽器ビートも生音と電子音の合成か。つまり、いかにもモロッコらしい繁雑の合成音楽？ 捨てない人だなあ、やっぱり。 藤田尊志

N.Y.P.D.（南洋派對）

自在に変容を続ける香港の要注目ユニット

"Don't Like"
Subtrop [Hong Kong]

East Asia

香港の大角咀を拠点とする5人組、N.Y.P.D（南洋派對）。彼らは活況を呈する中華圏インディー・シーンの中でも最注目アーティストのひとつといっていい。グラフィック・デザイナーやタトゥー・アーティストによって構成され、音楽スタイルはおろか、グループの形も自在に変容。一昨年のアルバム〝G.A.I.G.A.I.〟ではAIを駆使して制作した52曲が詰め込まれており、政治を皮肉った歌詞も含めてどこまで本気かわからないところがあったが、エレクトロクラッシュ〜インディー・ダンス系を中心に構成された本作は比較的、統一感ある作品となった。ただし、そのなかにはアシッド・ハウスあり、意味ありげなサンプリングありと、ひとところに落ち着くことはない。グループ名の由来は〝Drifters Of South Asia〟（南アジアの漂流者たち）から。ジャンルをゆらゆらと漂流するその音楽世界から、アイデンティティーさえも漂流するアジアの今が浮かび上がる。 大石始

Salty Chick（鹽焗雞）

率直な表現で共感を集める香港のシンガー・ソングライター

"∞∿…★∿✧ omg沒對焦 ✧∿★…∿∞"
Ciaopokfulam [Hong Kong]

East Asia

塩で包んだ鶏を1羽丸ごと蒸し焼きにする料理＝鹽焗雞をアーティスト名にした香港の女性シンガー・ソングライターの25年末の3曲入り。とはいえこの名前、鹽（塩）はスケベ、雞は風俗嬢の意味があるスラングで、歌詞には露骨な性の表現も出てくるそうだ。幼少時に性的虐待を受け、境界性パーソナリティ障害を患ったと過去のインタヴューで語っているが、このトラウマをはじめ自らの思いを音楽にぶつけていて、そのストレートな物言いは若者に共感されている。大きなフェスに出たりと注目度は上がっていて、非主流の中の主流といった存在か。本作では恋愛がテーマで、「ピントが合わない」→「すがる」といった意味の曲が続き、それにつながる今年1月発のシングルは「もう感じない」。音楽的にはメリハリあるキラキラしたエレクトロ・ポップに可愛い声、表現は率直。気っ風の良さもあって、こういう女性アーティストはとても好きです。 関谷元子

CamScannerでスキャン